

[授業科目名] 哲学へのいざない		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自ら問題を発見し、それを整理する方法と、出発点から結論までの筋道を正しく立てる方法を身につけると いうことを授業の到達目標とする。			
授業の概要 古代ギリシアでフィロソフィア（「知を愛すること」）と呼ばれた領域から、今日の哲学が発展した。学生に にとって必要な人間観・世界観などをともに考える。第1回から第5回までは、哲学への導入と学習・思考など の諸問題を基本的考察とし、第6回から第10回までは、我々の踏まえる文化的伝統について考察し、第11回 以降は、新たな文化を創造しつつ生きるための現代の哲学として構成する。 なお、初回授業時にこの科目に対する要望などを調査し、それによって新たな内容を以下の予定に付加する 場合がある。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みなど、授業への積極的参加（30%）と、学期末試験（70%）により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 哲学とは何か ソクラテスの生涯と思想を紹介し、哲学とは何を問うものであるか、私たちの生活にはどのように 関わってくるのかということを考える。 「私はどのような人か」という小レポートを、講義開始時に提出して欲しい。様式などは自由。 第2回 考えるとはどういうことか 「ゼノンのパラドックス」を、まず紹介する予定である。謎々か何かのように見えるこの問いかけ は、私たちがものごとをどのように考えているかということを映し出している。考え、答えがわか ったと思うところに生じやすい過ちについても、併せて考える。 第3回 自己疎外 私たちはどのようにして、今のこの自分になったのか。そこには自己疎外という現実が存在するこ とを、多くの思想家が指摘し、警告している。そのありさまを考察し、自己回復という面につい ても考える。 第4回 ことばの働き 私たちは、自分で自由に考え、判断していると思っている。しかし、それは、ことばの働きによっ て大きく制約を受けている。ことばが誤って働く時、人間の判断も誤る。そのようなありさまにつ いて考察し、私たちは何に気づいておかなければならないのかという点についても考える。 第5回 隠されたカリキュラム 学校は、学びを助ける場でもあるが、同時に、ある錯覚を与えてしまうものでもあると、イリイチ は気づいた。それは何だろうか。大学生活を充実したものにするために、イリイチの言葉に耳を傾 けてほしい。 第6回 存在と価値 価値に対する私たちの意識はどこから生じるのか。「存在」に対する考察から始め、「価値」につ き動かされている私たち自身の生き方に注目する。			

第7回 実存と価値

「実存」という捉え方に注目し、生の意味に触れる。さらに、「価値」を2つに分け、「失われぬ価値はあるか」という問いに立ち向かう。

第8回 日本の哲学

岡倉天心の美学を中心に、教育論・文明論をも視野に据えて論じる予定である。日本的感性は、どのような美学を生んだであろうか。

第9回 中国の哲学(1)

私たちの文化に様々な影響を与えた中国の哲学を紹介する。儒教は、単に身分の上下にこだわる窮屈な思想ではない。それは生き生きとした活力に満ちている。

第10回 中国の哲学(2)

老荘の思想は、単に虚無を見つめているのではない。無にさえ意味があることを教えている。孫子の言葉は、多くの成功者にヒントを与えた。人生の知恵を学ぼう。

第11回 イチローの哲学

イチローが語る哲学を探ろうとするのではない。哲学者がイチローの生き方・感じ方をみると、それらはどのように見えるかということである。坂本龍馬・清水宏保・甲野善紀らも登場する。

第12回 これまでの「私」

自分自身を振り返るための方法を、一つ紹介し、実施する。自分のために、自分だけのものとして、各自取り組んでもらいたい。いわゆる「自分史」なるものよりも、はるかに有効であると、担当者は感じている。

第13回 現代を如何に生きるか

現代社会はさまざまな矛盾を抱え、困難に直面しているが、学生諸君は、そのことにどれだけ気づいているだろうか。社会の問題や、これからの自分自身のあり方について、整理し、考え直してみようという授業となる。

第14回 公共哲学

公共性ということについて、どう考えるか。ある人類学者がかつて論じたことだが、日本人は、単独の個人としては、公共性が薄いという。本当だろうか。私たちはどう考えるだろうか。哲学の領域における最近の話題について、ともに考えたい。

第15回 試験

受験する上で注意しなければならないことなどを説明し、試験を実施する。

使用教科書

教科書は特に用いない。必要に応じて、教材プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、次回のための予習となるような内容の問いを、課題として提示する。よく調べ、あるいは考えて、準備をするよう望む。それ以外の課題は、別に示す。

[授業科目名] 宗教と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 宗教文化の多様性に対する理解を持つとともに、社会・文化のさまざまな領域が、宗教と密接に関わっていることを理解できるようになることを、授業の目標とする。			
授業の概要 日常経験によって証明できない秩序に関心を持ち、それによって日常の平安から人生の究極の意味にいたるまでの問題を解決したいと願う心が、宗教の根幹にある。本科目では、宗教体験、儀礼など、宗教一般の事項について解説するとともに、仏教・キリスト教などの個別の宗教や、現代の宗教事情について考察する。			
学生に対する評価の方法 毎回、数分程度で仕上げられる小さな提出物を課す。これを含めて、積極的な授業参加態度（30%）と、学期末レポート（70%）により、評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本人は本当に無宗教か 宗教の定義、多神教と一神教などについて説明し、宗教というものの捉え方を考える。次いで、日本の宗教の特徴について解説する。 なお、「私にとって宗教とは何か」という小レポートを授業開始時に提出して欲しい。様式などは自由とする。 第2回 古代神話のヒーローたち 古代神話に登場するヒーローたちを紹介し、後世に与えた影響などについて考察する。 第3回 イエス・キリストの7つの秘密 イエスの生涯などについては、実は謎が多い。常識とされているものについても、実はいくつもの間違いがある。それらを順に解き明かしながら、キリスト教の世界をのぞいてみよう。 第4回 コーランの響き キリスト教とイスラム教を中心に考察する。キリスト教の教会の体制、イスラム教の特徴などを解説し、最後に、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教について、いくつかの点で比較を試みる。 第5回 曼荼羅の神秘 仏教の成立とその後について概観し、次いで密教の特徴について説明する。密教をわが国に伝えた空海は、何を夢見たのか。絢爛たる曼荼羅は、何を語っているのか。ビデオ視聴の予定。 第6回 一休さんの悟り方 頓知で知られる一休さんは、実在した禅僧であり、純粹な悟りの世界を徹底して探求した。禅の文化と、禅寺の生活などについて紹介する。ビデオ視聴の予定。 第7回 浄土への祈り 浄土を祈り求めた浄土教と、仏国土を建設したいと願った日蓮宗について、解説する。仏教の世界に、「祈り」はあるか。			

第8回 千と千尋の宗教学

宮崎ワールドには様々なからくりがある。『千と千尋の神隠し』を例にとり、そこに様々な神話や民俗が生きていること、この物語にはどのようなからくりが隠されているのかということなどを探究し、「宗教」を新たな角度から考察する。

第9回 豆腐小僧のかわいい悪戯

民話の世界に生きている妖怪やその他の不思議な話、年中行事の宗教的な意味など、身の回りにある「宗教」について、紹介する。

第10回 「道」の世界

剣・弓・茶などの世界に、宗教がどのように関わっているかを考察する。私たちの祖先が、単に表面的な完成には満足せず、究極の世界を目指したことがわかるであろう。

第11回 枯山水の宇宙

わが国の宗教建築や庭園などのいくつかを取りあげて紹介し、それらの鑑賞のしかたの要点を簡単に解説する。ビデオ視聴の予定。

第12回 謎の微笑

仏像にはそれぞれに意味があり、仏師の工夫がこらされている。仏像の種別や意味、鑑賞のしかたなどを、いくつかの例を紹介しながら説明する。ビデオ視聴の予定。

第13回 残照の聖ミカエル

ヨーロッパの宗教芸術のいくつかを取りあげて紹介する。キリスト教建築・美術の例としてモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂を予定している。また、ガウディの信仰と作品の関わりについても、解説したい。ビデオ視聴の予定。

第14回 花子さんはなぜ学校に現れるか。

宗教という文化は決して過去のものではない。「花子さん」や「口避け女」にも歴史があり、そして現代人の心の中に、今も住んでいる。現代都市文化の中の宗教について解説する。

第15回 現代社会と宗教

現代の諸宗教の動向について、まず紹介する。次いで、世界の宗教文化がどのように変貌しつつあるか。また、諸科学がどのように宗教に直面しつつあるかということについて解説し、簡単な未来展望も行いたい。

使用教科書

プリントを配布して用いる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、「読み物」と題した予習用教材プリントを配付する予定である。これを事前に読んで積極的に学びたいという学生に、受講をしてもらいたい。プリントを配布しない回には、予習方法を別に示す。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 倫理上に生じるアンビバレント（両価的）な状況について具体的に理解するとともに、それらの問題に対して自分なりの判断をすることができるような能力を育てることを目標とする。			
授業の概要 倫理の問題について、特に現代社会の諸問題を意識しながら、そしてできるだけ意識する視野を広くとりながら、共に考えていこうとする。近年話題になったさまざまな出来事、あるいは新たに登場してきた問題などを視野に置く。 問題意識を深めるために、小グループによる話し合いの時間を持つ予定であるが、その回数については相談の上変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 予習のための課題への取り組みなど、積極的な授業参加（30%）と、学期末レポート（70%）により評価する。詳しくは第1回授業時に、また、レポートについては必要に応じて説明する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 倫理学とは何か 「倫理」という言葉について解説した後、本科目で扱う問題について、具体的に展望していく。 「私の心温まる体験」という小レポートを、授業開始時に提出してほしい。 第2回 黄金のルール 多くの文化圏で共通に語られる道徳律は、一見自明に見える。しかし、本当であろうか。問題の深さに、できるだけ早く気づいておきたい。 第3回 男らしさと女らしさ さまざまな文学作品などを例に、ジェンダーがどのように倫理上の問題に絡んできたか、今はどうあるのかということを考える。 第4回 総合的学習(1) 小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。 第5回 「男と女」再考 討論をした経験を踏まえて、改めて、この問題を考え直す。倫理上の問題に関して、我々がどれだけ、「エートス」（この語については、第1回に解説する）に左右され、「常識」にとらわれているかということも、考えたい。ビデオ視聴の予定。 第6回 孤独について 「孤独」について考えると、人間の社会性のある一面が見えてくる。プライバシーの問題にも触れながら、考えてみたい。 第7回 「いじめ」の構造 なぜ、そしてどのように「いじめ」は起こるのか。どのような対策があるのか。いじめる側、いじめられる側、そして周囲の人々という、それぞれの視点を区別して、この問題について、考えていく。			

第8回 総合的学習(2)

小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。

第9回 環境問題はどこが難しいか

環境問題に対する私たちの心構えに注目し、具体例を取り挙げながら、そこに問題点がいくつも潜んでいることを説明する。

第10回 環境問題の現状と倫理

「環境」は、現在どのように問題になっているのか、さまざまな問題が叫ばれながら、なぜ、対策が後手にまわりがちなのかという点について、ともに考える。

第11回 生命と倫理(1)

身体性に注目し、私という存在を身体のみから考えてみる。私の身体は、どのように社会に直面しているであろうか。働きかけるだけでなく、社会から、どのように見られ、扱われているだろうか。生と死の社会性について、また、重病の患者をめぐる生と死に関わる葛藤などを考察する。

第12回 生命と倫理(2)

生と死にまつわる倫理上の問題について、また、動物愛護に関わる問題について考察する。諸君は、動物に「権利」はあると思うだろうか。今から約100年前、1頭のイルカを保護するための法令が発せられた。倫理的には、動物の「権利」に関する偉大な考察がそこにあると考えることが可能である。これらを、広く、生命全般の問題として考察する。

第13回 産業社会と倫理(1)

さまざまな産業にとって、あるいはそこに働く者にとって、倫理とは何であろうか。近年のさまざまな事例をも視野に入れながら、できるだけ具体的に考察したい。

第14回 産業社会と倫理(2)

前回に引き続き、特に個人の問題として考えていく。組織的決定が曖昧で、個人として意思決定を迫られる時、問題はどのようにひろがるだろうか。

第15回 まとめ

これまでの考察を整理し、必要に応じて補足を行う。

使用教科書

主として教材プリントを用いる。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、予習となるような内容の問いを提示する。さらに、「総合的学習」のためにはかなりの時間をかけた予習が必要となるが、これらについては授業中に説明する。

[授業科目名] 現代社会と倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 真田 郷史																																													
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考																																													
授業の到達目標及びテーマ テーマ「現代社会における諸問題を、倫理的視点から考える。」 現代社会において、具体的にどのような問題が起こっているのか、また、それらの何が問題であるのかを正しく理解した上で、さらには、それらの問題に対する自分なりの意見を持てるようになることを、本授業の到達目標とする。																																																
授業の概要 20世紀の後半から主にアメリカを中心として、現代社会の諸問題に対して、倫理的な視点からのアプローチが試みられて来た。「応用倫理学」と呼ばれるそれら一群の問題領域は、非常に多岐にわたっているが、その中から「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」といった3つの問題領域を取り上げ、それぞれの領域における典型的・基本的な問題を紹介する。																																																
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に関する短いレポートを課すので、それら全15回分のレポート評点を基に、科目としての評価・単位認定を行う。授業への出席・講義内容の理解(60%)・課題への積極的取り組み(40%)が、受講生には、毎回要求されるものと考えておくこと。本授業は、期末試験および再評価を、実施しない。																																																
授業計画(回数ごとの内容等) 「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」の3つの領域から、それぞれ4つないし5つのトピックを具体的に紹介して行くとともに、各講義の最後に課題を提示するので、講義時間内に所定のレポート用紙に「解答」を記入し、提出してもらう。課題作成のための作業時間は10分程度を予定しているが、講義内容の理解を前提としているので、受講中も気を抜かないように。ただ漫然と聴いているのではなく、常に、自分から問題を考えようとする積極的姿勢で、受講して欲しい。																																																
<table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>ガイダンス</td> <td>「応用倫理学」について</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>生命倫理(1)</td> <td>脳死をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>生命倫理(2)</td> <td>臓器移植をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>生命倫理(3)</td> <td>生殖医療をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>生命倫理(4)</td> <td>遺伝病をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第6回</td> <td>環境倫理(1)</td> <td>人間と自然をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第7回</td> <td>環境倫理(2)</td> <td>自然の権利をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第8回</td> <td>環境倫理(3)</td> <td>世代間倫理をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第9回</td> <td>環境倫理(4)</td> <td>地球全体主義をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第10回</td> <td>環境倫理(5)</td> <td>人口爆発をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第11回</td> <td>情報倫理(1)</td> <td>匿名性をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第12回</td> <td>情報倫理(2)</td> <td>プライバシーをめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第13回</td> <td>情報倫理(3)</td> <td>著作権をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第14回</td> <td>情報倫理(4)</td> <td>ネット社会と現実社会をめぐる問題</td> </tr> <tr> <td>第15回</td> <td>情報倫理(5)</td> <td>言語グローバリズムをめぐる問題</td> </tr> </table>				第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について	第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題	第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題	第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題	第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題	第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題	第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題	第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題	第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題	第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題	第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題	第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題	第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題	第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題	第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題
第1回	ガイダンス	「応用倫理学」について																																														
第2回	生命倫理(1)	脳死をめぐる問題																																														
第3回	生命倫理(2)	臓器移植をめぐる問題																																														
第4回	生命倫理(3)	生殖医療をめぐる問題																																														
第5回	生命倫理(4)	遺伝病をめぐる問題																																														
第6回	環境倫理(1)	人間と自然をめぐる問題																																														
第7回	環境倫理(2)	自然の権利をめぐる問題																																														
第8回	環境倫理(3)	世代間倫理をめぐる問題																																														
第9回	環境倫理(4)	地球全体主義をめぐる問題																																														
第10回	環境倫理(5)	人口爆発をめぐる問題																																														
第11回	情報倫理(1)	匿名性をめぐる問題																																														
第12回	情報倫理(2)	プライバシーをめぐる問題																																														
第13回	情報倫理(3)	著作権をめぐる問題																																														
第14回	情報倫理(4)	ネット社会と現実社会をめぐる問題																																														
第15回	情報倫理(5)	言語グローバリズムをめぐる問題																																														
使用教科書 なし(必要に応じて、適宜、資料プリントを配布する。)																																																
自己学習の内容等アドバイス 日頃から、TVのニュースを観たり、新聞に目を通すなどして、社会の中で何が起きているのか、現在、何が問題になっているのかを、自分から関心を持って知ろうと努めること。																																																

[授業科目名] 心の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 科学的心理学の視点から、社会や人間について考察することを目標とする。また、これまでの自分の視点や世間の常識的な視点をとらえなおすことで、大学教育にふさわしい新たな枠組みを構築していく。			
授業の概要 知覚、記憶、学習、対人行動といった心理学の入門的内容を扱う。基本的な心理学の研究を紹介しながら、現実世界で遭遇する問題について考えていく。授業中簡単な実験や調査を体験することで、多様な心理学の世界を考えてみる。			
学生に対する評価の方法 再評価は行わない。授業中の小レポートと終盤に行う筆記試験で総合的に評価する。なお出席状況や授業態度が悪い場合は、減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 心理学と心の科学 第2回 科学的に考えるとは 第3回 無意識の世界1 無意識の世界とは 第4回 無意識の世界2 見えるものと見えないもの 第5回 無意識の世界3 記憶に残るものと残らないもの 第6回 無意識の世界4 好きになるときならないとき 第7回 マインドコントロール1 条件づけと行動変容 第8回 マインドコントロール2 説得による態度変容 第9回 マインドコントロール3 集団と権威の力 第10回 暴力的なところ1 暴力的な人の特徴 第11回 暴力的なところ2 暴力が起きやすい条件 第12回 暴力的なところ3 攻撃に関する理論 第13回 暴力的なところ4 身近な暴力・虐待 第14回 評価 第15回 調査研究の報告			
使用教科書 下野孝一著 「こころの解体新書 心理学概論への招待」ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと理解しやすい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の見点から青年期をとらえる視点をもち、成人期への移行の姿勢を自分なりにとらえていくことを目標とする。またレポートを書くことで、各テーマに対する自分の考えを客観的に見直していく。			
授業の概要 本講義は、青年心理学の入門的内容を扱う。大学生にとって身近な身体の変化と心の変化、恋愛とセクシャリティ、性役割として自分探しといったテーマについて、最近のニュースを取り込みながら考えていく。			
学生に対する評価の方法 再評価はしない。期間中課す4回のレポート(20%)と終盤に行う筆記試験(80%)から総合的に評価する。ただし出席状況や授業態度が悪いときには減点する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 「青年期」の成立 第2回 成長する身体と性役割意識1-身体の成長と成熟する性 第3回 成長する身体と性役割意識2-性別と性役割意識 第4回 認知能力の発達1-抽象的な認知能力 第5回 認知能力の発達2-他者視点の取得と道徳性の発達 第6回 成長する私1-自己と自我 第7回 成長する私2-アイデンティティの確立 第8回 成長する私3-社会的比較理論と友人関係の発達 第9回 彷徨する親子関係-親子間のコミュニケーション 第10回 恋愛と性行動1-恋愛に関する理論 第11回 恋愛と性行動2-恋に落ちるとき 第12回 恋愛と性行動3-恋愛の進展 第13回 恋愛と性行動4-セクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 「青年心理学への誘い-漂流する若者たち-」 和田実・諸井克英著 ナカニシヤ出版			
自己学習の内容等アドバイス 事前に教科書を読んでおくと、理解しやすい。またレポートを書くにあたり、新聞や雑誌等の関連記事にも目を通しておくとよい。			

[授業科目名] 青年期の心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松尾 美紀
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻のみ (認定心理士資格取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 生涯発達の視点から青年心理学の基礎を学ぶとともに、青年期教育に関連する問題への心理学的アプローチについて理解することを目標とする。			
授業の概要 認定心理士取得を前提とする。青年心理学の基本的な問題について解説し、さらに心理学研究、教育心理学研究、発達心理学研究といった雑誌の関連論文の内容をしながら、最近の研究動向についても概観していく。			
学生に対する評価の方法 再評価をしない。指定論文の要約をも含めたレポートと、終盤における筆記試験によって総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「青年期」の成立と青年心理学の誕生 第2回 文化的規定と生物学的規定 第3回 身体の成長と瘦身願望 第4回 性の分化 第5回 性役割と現代社会 第6回 認知発達と学校教育 第7回 他者視点、共感性 第8回 アイデンティティの確立 第9回 自己の分化と自尊感情 第10回 友人とのつきあいかたと孤独感 第11回 親子のコミュニケーション 第12回 恋愛に関する理論：成人期アタッチメント 第13回 恋愛至上主義とセクシャリティ 第14回 評価 第15回 レポート講評			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 関連する内容について、他の授業とあわせて考えると理解しやすい。また心理学の研究雑誌も目を通すようにしておくことがのぞましい。			

[授業科目名] 日本の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代日本の歴史、ことにアジア・太平洋戦争にいたる過程を、テキストに沿ってじっくり学ぶ。場合によっては当時の新聞・雑誌類を参照しながら、時代のリアリティを感じるのが大切である。諸君が時々耳にされるであろう「平成の開国」とはなにであるのか、「開国」は日本になにをもたらししてきたのかを、順を追って観ていく。			
授業の概要 松本健一の『日本の失敗』をテキストに、その内容を各章ごとに区切って講義し、時には教室で学生諸君に音読を求める。日本はなぜ戦争をし、それに負けたのかがテキストのテーマである。授業では一歩進んで、敗戦と現代の生活はどのようにつながっているのか、いま、日本はなにをしなればいけないかを考えて行こう。			
学生に対する評価の方法 毎回、講義内容に沿った小テストをする。出席も大切だが、各回の答案に表れる、問題をどうとらえたか、いかに真剣に答えようとしたかを重視する。毎期末、出席が足りないがどうかしてほしいという学生が出現するが、もはや取り返しのつかない事態であることを理解するべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 日本の歴史を学ぶ意味とは 第2回 日米の仮想敵国 第3回 発端としての「対支二十一カ条」 第4回 アジアの帝国主義 第5回 「日米衝突」のシナリオ 第6回 満州事変というファシズム 第7回 世界戦争のプロローグ 第8回 「侵略」という認識 第9回 統帥権干犯の思想 第10回 軍部の独裁化をめぐる 第11回 精神的鎖国としての国体イデオロギー 第12回 日本の「世界史」 第13回 大東亜戦争の「開戦の詔勅」をめぐる 第14回 時代思潮としての「死の哲学」 第15回 外の力 テキストは決して平易ではない。が、平易ではない書物に出会う場が、大学である。とはいえ、本には読み方がある。難しいものは、易くして理解する方法がある。だから心配することはない。いままでの自分がどうであったかは問わない。ただ、この科目を履修するには、毎回、きちんと出席することが大切である。学ぶことについて、近道の遠回りもありえる。しかし単位に関する限り、抜け道はない。各回の講義の時間内に、頭を使って課題を解決していくことが、案外、これからも、生きていく上で大切な能力だと理解されると思う。			
使用教科書 『日本の失敗』松本健一著、岩波現代文庫			
自己学習の内容等アドバイス 講義が終わったら、わからない用語を調べておくこと。前もって読んでおくつもりが出てきたら、それは大変な進歩である。松本氏の他の著作も読んでみることをすすめる。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早坂 泰行
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義ではドイツを中心に、ヨーロッパの近代史を取り上げる。現在私たちが自明のもののみなしている社会のしくみや制度、生活様式のうち、多くのものは近代に入ってから始めてつくり出されたものである。また近代の歴史は、現在の私たちにとってもなお重大な、多くの問題をも突きつけている。近代世界の形成過程を学ぶことをつうじて、現在の私たちの社会や生活のかたちを、複眼的に捉える姿勢を養うことを目指す。			
授業の概要 近代ヨーロッパ全体の動向を広く視野におさめながら、近現代(17世紀半ば～20世紀半ば)のドイツについて、その政治・経済・社会的な側面を取り扱う。講義においてはPowerPoint やDVDなどの視聴覚教材も利用し、その時代ごとの具体的な生活や技術のありよう、また社会の変化に関するイメージを容易に捉えられるよう配慮する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から、内容の理解度を総合的に判定する。なお、この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 近代ヨーロッパとドイツ史に関するイントロダクション 第2回 ウェストファリア体制 第3回 啓蒙思想と近世の文化 第4回 フランス革命とナポレオンの時代 第5回 ドイツの自由主義とナショナリズム 第6回 「ドイツ」帝国の成立 第7回 第二次産業革命～大陸ヨーロッパとドイツの工業化 第8回 帝国主義の時代 第9回 世紀転換期ドイツの社会と文化 第10回 第一次世界大戦～総力戦の時代 第11回 ワイマル共和国 第12回 ナチズムと第二次世界大戦(1) 第13回 ナチズムと第二次世界大戦(2) 第14回 戦後冷戦と再統一の間のドイツ 第15回 期末試験			
使用教科書 特になし。毎回の授業ごとにレジュメを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業後に要約・要点の整理をおこなうなどして、その回の内容を自分なりにまとめるとよい。単なる事実の羅列ではなく、過去との対比の中で現在の社会や文化を捉えなおしながら、考えや論点をまとめること。			

[授業科目名] 西洋の歴史／ヨーロッパの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 京極 俊明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ドイツの近代史を学び、基礎的な知識を身につけると同時に、ナショナリズム、帝国主義、総力戦といった近代史上の重要な概念について、理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 啓蒙専制君主の時代から、第一次世界大戦終結までのドイツの近代史について、ヨーロッパ全体の動向と結びつけて講義を行う。授業ではプリントとパワーポイントを使用する。またDVD教材「映像の世紀」を視聴する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席状況(10%)、期末試験(70%)、レポート(20%)の結果から総合して判定する。この授業は再評価を認めないので、その点には十分留意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 はじめに 第2回 啓蒙専制君主の時代（1） 第3回 啓蒙専制君主の時代（2） 第4回 ナポレオン戦争 第5回 ウィーン体制 第6回 1848年革命 第7回 ドイツ統一（1） 第8回 ドイツ統一（2） 第9回 ドイツ帝国の成立 第10回 ビスマルク体制 第11回 ヴィルヘルム2世の時代 第12回 第一次世界大戦（1） 第13回 第一次世界大戦（2） 第14回 まとめ 第15回 試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 参考図書として、坂井栄八朗「ドイツ史十講」（岩波書店）を挙げておく。			

[授業科目名] アジアの歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鵜飼 尚代
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 最近「東アジア共同体」などという語を耳にするようになった。結束の目的は何であれ、ユニットとしてのアジアを考える場合、それぞれの国・地域の過去を考慮しないわけにはいかない。そうした歴史を踏まえて現在を見なおし、それぞれの国・地域の特質・特長を総括してこそ「東アジア共同体」の可能性も考えられよう。また学生自身の関心に沿って東アジアを見ることも重要であると思われるので、学生は各自でテーマを決め、調査をしてもらいたい。			
授業の概要 世界史的観点からアジア史、とくに東アジアの諸問題を考察する。中国史が東アジア史の一大要素であることは確かであるので、近年経済的にも政治的にも注目を集める中国の近代化の流れを中心に、東アジアの近代化を概観する。受講生には各自でテーマを選び、調査をして、レポートにまとめてもらう。提出されたレポートは、担当教員が授業中にできるだけ紹介する。			
学生に対する評価の方法 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。そこで、a. レポートを課す。レポートを担当教員が紹介するので、b. それを聴いての意見や感想を毎回提出してもらう。講義内容については、c. 期末試験も予定しているので、評価はa. b. c. を総合して判断することになる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業は以下の通り進める予定である。 第1回 授業についてのオリエンテーション 授業の目的、進め方、学生に求める姿勢等を説明する。 第2回 中国の近代化①（アヘン戦争～太平天国の乱） 第3回 中国の近代化②（日清戦争前後） 第4回 中国の近代化③（義和団事変前後） 第5回 中国の近代化④（中華民国成立前後） 第6回 中国の近代化⑤（中華人民共和国成立前後） 第7回 中国の近代化⑥（現代中国への道） 第8回 朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後） 第9回 朝鮮半島の近代化②（日清戦争前後） 第10回 朝鮮半島の近代化③（朝鮮半島の独立前後） 第11回 朝鮮半島の近代化④（南北分離前後） 第12回 朝鮮半島の近代化⑤（現代朝鮮への道） 第13回 ベトナムの近代化①（独立前後） 第14回 ベトナムの近代化②（現代のベトナムへの道） 第15回 試験 但し、学生のレポートを授業中に紹介するので、進度が変わることもある。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。 【参考図書】 ：布目潮風、山田信夫編「新訂東アジア史入門」（法律文化社）			
自己学習の内容等アドバイス 講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。高校で使った年表や地図帳での確認、歴史事典での調査でも知識は深まり、また広がります。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1・3年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 小学校社会科の学習内容の研究が主たる目的である。小学校3年から6年までの学習内容は、多岐にわたっており、それらは地理、歴史、公民的分野の基礎的かつ専門的内容である。それらを理解することが目標であるが、同時に、小学校社会科の目標である、公民的資質を培う上で大切な時事問題をNIE方式で毎時間取り上げ、社会への関心を強めることも目標とする。			
授業の概要 社会科は、社会生活を総合的に理解することを通して、公民的資質を養うという重要な役割を果たす教科である。日本の国土や地域の産業、地理的環境、文化財や先人の業績、歴史と伝統、政治の働きと考え方、国民生活、国際社会における日本の役割等について、考える力を養成する。また、社会科への理解・態度・能力を身につけ、記述内容・写真・統計資料・地図等の資料の活用することができる柔軟な探求力を養うことをねらいとしている。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(30%)、小テスト・レポート(30%)、テスト(40%)などを総合的に評価する。特に授業欠席や遅刻は減点の対象となる。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 社会科の目標及び授業全体の紹介 第2回 社会科教育の教科内容 第3回 小学校第3学年社会科(私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし)・小テスト 第4回 小学校第3学年社会科(暮らしを守る、火事や事故) 第5回 小学校第4学年社会科(ごみ、水道)・レポート 第6回 小学校第4学年社会科(郷土の歴史、私たちの県・愛知県) 第7回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と日本の農業、工業) 第8回 小学校第5学年社会科(私たちの生活と情報、国土と環境)・小テスト 第9回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第10回 小学校第6学年社会科(歴史的分野) 第11回 小学校第6学年社会科(政治経済、国際理解) 第12回 具体的な人物学習の事例①近世の人物・レポート 第13回 具体的な人物学習の事例②明治維新の人物 第14回 各種統計資料の利用方法 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 東京学芸大学社会科教育学研究室編「小学校社会科教師の専門性の育成 改訂版」教育出版			
自己学習の内容等アドバイス 社会への関心を持つために時事問題を取り上げ、新聞をNIEとして活用し、輪番制で発表するので、つねにマスコミ等の時事問題の動向に注意しておくこと。			

[授業科目名] 歴史と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安井 克彦
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会科学を学習するとき、つねに歴史的・社会的に見ることが、物事をより深く、本質的に見ることになる。そのことが、正しい社会観や世界観をつくっていくことになる。その意味で、日本の教育を「歴史」と「社会」の側面から追究させたい。高校日本史を専攻していない学生も多いかと思われるので、さまざまな史料等も提示して、学生が興味を持つように授業を構成する。			
授業の概要 日本の社会と歴史を教育の視点から見ようとするものである。「歴史」と「社会」が教育を規定する面もあるが、逆に「教育」によって社会や歴史が切り拓かれるという面も見られる。明治維新の「学制」発布から150年近く経ったことになる。この間の教育、学校、子どもの様子を「歴史」や「社会」と関連して追究しようとするものである。			
学生に対する評価の方法 授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度(20%)、レポート(20%)、テスト(60%)などを総合的に評価する。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション・歴史的・社会的な見方について 第2回 近代教育制度の成立と展開 第3回 小学校の普及と子どもの生活の変化 第4回 天皇制教育体制の確立 第5回 明治期小学校教育の実態 レポート 第6回 中等教育の拡充、高等教育の拡大 第7回 大正デモクラシー期における社会と教育の再編 第8回 都市新中間層と農村・都市下層の教育 第9回 大正自由教育の高揚 第10回 貧窮する農村、変化する社会 レポート 第11回 戦時体制下の学校と子ども 第12回 敗戦直後の日本の教育、占領政策と戦後改革 第13回 新学制の展開、戦後教育の新段階 第14回 高度経済成長後の社会と教育 第15回 学習のまとめと試験			
使用教科書 片桐芳雄・木村元編著「教育から見る日本の社会と歴史」八千代出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間課題を提出するので、事前によく調べておくこと。特にテキストは次回の範囲を指定するので、事前によく読んで、授業に臨むこと。			

[授業科目名] 日本の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期レポート
授業の到達目標及びテーマ 智恵子抄の世界 詩の分析とその詩の背景を学ぶことによって、思考力と想像力を涵養する。			
授業の概要 詩集『智恵子抄』の各詩の分析を通して、彫刻家で詩人の高村光太郎が一人の女性智恵子を如何に愛し、如何に表現したのかについて学ぶ。			
学生に対する評価の方法 主にテストと授業に取り組む姿勢によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ） 第2回 文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して） 第3回 『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで） 第4回 『智恵子抄』前詩「あをい雨」について 第5回 第1部の世界 詩「人に」、詩「或る夜のころ」、詩「おそれ」とその背景 第6回 詩「或る宵」とその背景 第7回 詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景 第8回 愛の統合的定義の『智恵子抄』について 第9回 詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景 第10回 詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晩餐」とその背景 第11回 9年間の詩空白の意味と生活 第12回 第2部の世界 詩「樹下の二人」～ 詩「美の監禁に手渡す者」とその背景 第13回 第3部の世界 詩「人生遠視」～ 詩「梅酒」とその背景 第14回 テスト 第15回 『智恵子抄』その後			
使用教科書 大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社			
自己学習の内容等アドバイス 本時に扱う詩について事前に鑑賞し、疑問を持って授業に臨むこと。授業後、本時に扱った詩とその背景について感想文を書く。			

[授業科目名] 英米の文学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河口 和子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～3年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～4年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 本講座では、歴史的社会的背景を踏まえつつ、英語で書かれた文学、特にイギリス、アメリカ、アイルランド文学について概観することを到達目標とする。			
授業の概要 代表的な作家の優れた作品を選び、視聴覚機器を用いながら鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 定期試験（50%）、平常の授業態度、発言、レポート（50%）で総合的に評価を行う。 なお、授業開始から30分以上遅れてきた場合は欠席とする。遅刻3回で1回の欠席とする。 開講期間中、数回のレポート提出を課す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入（講義内容の説明、英国について） 第2回 英文学：英文学の導入 第3回 英文学：演劇と劇場 第4回 英文学：シェイクスピア1 第5回 英文学：シェイクスピア2 第6回 英文学：18世紀の小説 第7回 英文学：ジェイン・オースティン1 第8回 英文学：ジェイン・オースティン2 第9回 英文学：まとめ 第10回 アイルランド文学：アイルランド文化 第11回 アイルランド文学：神話、民話 第12回 アイルランド文学：W.B.イェイツ 第13回 米文学：演劇1 第14回 米文学：演劇2 第15回 試験日			
使用教科書 随時、資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げた作品を読んでおく。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 国の最高法規である憲法の原理を学ぶ。憲法の由ってきたる理念、および歴史的淵源に遡って考察することで、日本国憲法のより深い理解を身につける。また憲法の解説を通じて、社会知識、教養をも涵養する。すなわちテーマは、憲法の概説である。			
授業の概要 国の最高法規であり、国の基本体制を規律する憲法について概説する。国民主権、人権尊重、平和主義など日本国憲法の原理を学び、あわせて社会的視野の拡大にもつとめる。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、憲法の意義や憲法の基本的概念の理解度を主に問う。原則として、再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 憲法とは何か 第3回 憲法とは何か（続） 第4回 社会契約説について 第5回 社会契約説について（続） 第6回 憲法の歴史 世界 第7回 憲法の歴史 世界（続） 第8回 憲法の歴史 日本 第9回 憲法の歴史 日本（続） 第10回 天皇制と戦争の放棄 第11回 三権分立について 第12回 自由と平等について 第13回 論文の書き方 第14回 社会権について 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名] 日本の憲法		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 早川 秋子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 周知のごとく、日本は、第二次世界大戦終結のためにポツダム宣言を受諾し、今後の近代国家のあり方を憲法に示した。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重を3本柱とする憲法の内容を理解し、国民の権利を尊重するとは具体的にどのようなことか等、事例の整理を通して理解し、各自が自分の言葉で権利義務、平和維持、国づくりのあり方を考え、他者に伝えることができるようにしたい。			
授業の概要 憲法の歴史を踏まえながら、基本的人権を判例を通して整理する。法の下での平等や表現の自由を身近な問題に照らし合わせながら整理する。平和維持に関する問題では、湾岸戦争以来の国際社会の動きを軸にして自衛隊問題や国際協力について整理する予定である。 必要に応じてプリント配布、DVDやパワーポイントを使用する。			
学生に対する評価の方法 積極的に参加する姿勢を強く求める。当然のことながら私語や他ごとをする学生を許さない。 ①受講態度 ②不定期に行う小テスト（講義時間中にレポートを作成してもらうこともある）③最終評価（筆記テスト）（①20パーセント+②20パーセント+③60パーセント） 追試・再試はレポートで行う			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 憲法の制定・概念 憲法とは何か、どのような内容であるかを理解する 第2回 国家について考えてみよう 個人の尊重、国民主権、平和主義 第3回 人としての基本的な権利1 人権とは何か、幸福追求権 第4回 人としての基本的な権利2 新しい人権・自己決定権（尊厳死法の必要性について考える） 第5回 人としての基本的な権利3 法の下での平等（女性の再婚禁止期間・親殺し重罰規定違憲訴訟） 第6回 人としての基本的な権利4 信教の自由（靖国神社参拝問題を考える） 第7回 人としての基本的な権利5 表現の自由（報道の自由とプライバシー保護のバランスを考える） 第8回 人としての基本的な権利6 生存権（朝日訴訟と社会保障制度） 第9回 平和主義1 戦争放棄（歴史的視点から考える） 第10回 平和主義2 自衛隊（政府の憲法解釈を基に考える・イラク自衛隊派遣違憲訴訟） 第11回 天皇 象徴天皇制（国事行為と女性天皇） 第12回 民主主義の政治制度 権力分立・裁判員制度 第13回 地方自治と 条例の制定（住民による直接請求） 第14回 憲法の改正 改憲の可能性・問題点 第15回 総まとめ・評価			
使用教科書 初宿正典他『いちばんやさしい憲法入門』（第4版）有斐閣 1600円			
自己学習の内容等アドバイス 講義で扱う内容は新聞やニュースで日々報道されている内容と深く関係しています。いつ、どんな出来事が起こってどのような問題が生じたのか、それについて自分は何を感じたのか、という日々問題意識を持つことが、興味をもって憲法に取り組むきっかけになります。ただ、聞き流すのではなく、書き留めて改めて考え直す習慣をつけてみて下さい。			

[授業科目名] 法と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会生活において、法というものがきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、高等学校までの学校教育で教えられることはあまりに少ない。ほぼ初心者といってよい学生諸君に、法を一通り学んでいただくのが本講義である。また法の解説を通じて、社会知識、教養の涵養にもつとめる。すなわちテーマは、法の概説である。			
授業の概要 民法を中心に、現代日本の実定法秩序を、ときに歴史的観点、国際的観点をも取り入れて、概説する。受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、法というものの理解、「権利」など法に関する基本的概念の理解を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 法のかたち 第3回 国家法と非国家法 第4回 法と道徳 第5回 法と道徳（続） 第6回 法のちから 第7回 法による制裁 第8回 刑罰について 第9回 裁判とはいかなるものか 第10回 司法の制度 第11回 民法とはいかなる法か 第12回 損害賠償の法 第13回 財産所有の法 第14回 契約の法 第15回 筆記試験			
使用教科書 教科書というわけではないが、『岩波基本六法』（岩波書店）は必携。（すでに六法をもっている者ほどの出版社のものでも可）			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結晶の早道である。法や裁判に関する読書、映画・ドラマの鑑賞も大いに薦める。			

[授業科目名] 政治と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 島田 弦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この講義は、政治と社会に関する現代の問題について民主主義という視点から考えてみることにする。「民主主義」というのは、多くの人にとってもっとも身近な政治用語でしょうし、大切なことだと思うでしょう。しかし、民主主義の内容は時代や地域により多種多様です。この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かを考えます。			
授業の概要 この授業ではさまざまな民主主義の内容を理解するとともに、すべての人が民主主義という手続を受け入れ、社会が安定して運営される条件とは何かについて多くの事例をもとにビデオ素材などをもとに考えます。講義で取り扱ったビデオの内容について、400-600字のレポートを書いてもらいます（おおむね5回から6回）。また、授業開始15分以上の入室を認めないので注意すること。			
学生に対する評価の方法 ビデオに関するレポートの評価及び期末試験（論述式）の評価を合計して算出する。したがって、一定以上の成績を取るためには、各レポートの提出が重要であることを理解して下さい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1. オリエンテーション：民主主義のイメージ 2. 民主主義のための戦争 3. 民主主義のための戦争（対テロ戦争に関するビデオ） 4. 民主主義と表現の自由 5. 民主主義と表現の自由（デンマークの事例に関するビデオ） 6. 民主主義とマスメディア 7. 民主主義とマスメディア（ベトナム戦争とマスメディアに関するビデオ） 8. 民主主義と選挙 9. 民主主義と選挙（日本の選挙に関するビデオ） 10. 民主的社會における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ前半） 11. 民主的社會における裁判と私たち（裁判員に関するビデオ後半） 12. 民主主義の実験 13. 民主主義の実験（中国の学校での試みに関するビデオ） 14. 講義のまとめ 15. 期末試験 受講者数、受講者の構成によって若干変更する場合があります。 また、時事問題を取り扱うために、順番や内容を変更する場合があります。			
使用教科書 指定しない			
自己学習の内容等アドバイス 各回のレポートを提出しないと、成績評価が大幅に下がり、単位認定が困難になります。短いレポートなので欠かさずに提出するようにしてください。			

[授業科目名] 経済と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 釜賀 雅史
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 経済は、「疎遠なもの」、「難しいもの」といった印象を持つ人は多いかもしれない。しかし、そうではない。なぜなら、経済現象は人間の営みそのものであるから。 本講の目標は、学生諸君に、①一見、疎遠に感じられる新聞の経済欄に親しくなってもらうこと、「経済記事が読める」または経済欄の記事に「ついていける」ようになってもらうこと、②現代経済社会の諸問題について理解を深めてもらうこと、ここにある。			
授業の概要 上の目標に基づき、本講では、日頃、経済記事（報道VTR）などで頻繁に目にするトピカルな話題を念頭に置きつつ、それを理解するのに必要と思われる経済学上の幾つかの基本項目についてわかりやすく講義する（パートI）。そして、わが国の経済発展のありようについて、特にその光と影の部分について考えてみる（パートII）。			
学生に対する評価の方法 ①授業への参画態度（評価ウエート20%） ②産業・経済記事のレポート……具体的に産業・経済に関する新聞記事の一つとりあげ、それについて自分なりに展開する（内容紹介だけにとどまらず、他の情報も導入して記事内容を追究したり、自分なりの見解を展開したりする。）（評価ウエート40%） ③最終レポート……授業内容からのテーマについてレポートを作成提出。（評価ウエート40%） 以上3点から総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（経済学の役割） 第2回 序・市場経済とは何か？ われわれが生きる経済社会の基本メカニズムを考える。 ≪パートI 経済記事を読む上で知っておきたい経済知識≫ 第3回 円高・円安と経済生活① 外国為替の基本的メカニズムを学ぶ。 第4回 円高・円安と経済生活② 円高・円安に関する記事を読むときに必要な知識を学ぶ。 第5回 GDPとは何か？① 日本経済を大づかみに捉える（巨視的にみる）手法=GDPについて学ぶ。 第6回 GDPとは何か？② そもそも「豊かさ」とは何か？ その指標としてのGDPの問題点を考える。 第7回 景気とは何か？① 景気循環はなぜ起るか、その原理と景気予測の手法について学ぶ。 第8回 景気とは何か？② 日本の景気循環のありようを歴史的に振り返る。 第9回 政府・財政の役割とは？① 現代経済における政府の役割について学ぶ。 第10回 政府・財政の役割とは？② 日本の財政の現状と問題点を考える。 ≪パートII 経済社会の諸問題を考える ～経済発展の光と影≫ 第11回 日本の経済社会はどのように発展してきたか、VTRを見ながらその発展の経緯をサーベイする。 第12回 われわれは経済発展で何を、何を失ってきたか？ 経済成長の影の部分（自然破壊やさまざまな社会病理現象）について考える。 第13回 世界経済の諸問題① グローバル化とは何か？ アジア地域の経済の発展の経緯を考察しつつ、その意味を考える。 第14回 世界経済の諸問題② 資源・エネルギー、環境問題など、現代世界が抱える問題について考える。 第15回 まとめと発展的学習のための主要文献解説。			
使用教科書 テーマ関連の資料・記事などを毎回配布し、それに従って授業を行う。準拠する文献は、釜賀雅史著『日本経済を読む－新聞記事で学ぶ経済学－』学文社（参考書≒教科書）。			
自己学習の内容等アドバイス 授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。 ≪より深く学ぶために≫ 授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみる。			

[授業科目名] 企業と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業後の進路として、企業や何らかの組織に就職を希望している皆さんにとって、企業の役割や実態、あるいは経営戦略などを理解できること、乃至、就職活動や社会人へのパスポートとしての企業経営の知識を身につけることが目標である。			
授業の概要 企業経営における領域は多岐にわたるので、限られた時間内で網羅することは到底不可能なので、下記の4つの領域に絞り、企業の役割や全体像を把握することにする。①会社の方向性を決める「戦略論」、②顧客のニーズを探り、売れる仕組みづくりを考える「マーケティング」、④社員を動かす「組織論」、④会社の活動をお金という点から把握する「会計学」である。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70%）、毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識（15%）、受講態度・欠席回数（15%）など、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業概要と心得. 企業と社会および環境変化との関係. 経済学と経営学との違いについて. 第2回 株式会社など企業形態の諸特質について. 第3回 企業における戦略の役割、および戦略の次元（全社戦略、機能別戦略、事業部戦略など）について. 第4回 企業を取り巻く環境分析（内部環境、外部環境） 第5回 基本的な競争戦略（コスト・リーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略など） 第6回 マーケティングの全体像（マーケティングの定義を含めて） 第7回 市場細分化およびその基準、標的市場の選定 第8回 マーケティングの基本戦略 ①製品戦略 第9回 マーケティングの基本戦略 ②価格戦略 第10回 マーケティングの基本戦略 ③プロモーション戦略、④流通チャネル戦略 第11回 組織論（モチベーション論、リーダーシップ論、チームマネジメント論など） 第12回 会計 ①貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書 第13回 会計 ②利益の概念（売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益） 第14回 会計 ③経営分析（安全性の分析、収益性の分析、効率性の分析、成長性の分析など） 第15回 学期末試験			
使用教科書 教科書は使用しない。随時、プリント等を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 学期末試験は、プリントとその講義内容から出題するので、全出席と講義の復讐および専門用語の意味調べ等が必須である。			

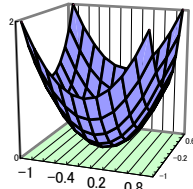
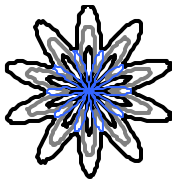
[授業科目名] 情報と社会		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代社会、特に便利で効率的で合理化が叫ばれるような情報社会といわれる現代、そのメリットだけではなく、多くのデメリット（負の側面）を認識することも重要である。さまざまな社会の病理現象を認識し、その中で如何に生きるべきかを問い直すことが目標でありテーマである。			
授業の概要 IT（情報技術）の進展により、携帯電話からインターネットなど、我々はデジタル・情報社会の中で、多くの恩恵を享受しているが、反面、多くの問題も孕んでいる。講義では情報のもつ意味を考えながら、情報社会で多用されているカタカナ語・略語等の意味の理解、情報社会の功罪両面、情報社会に潜む病理現象および豊かさ・便利さ・効率化・合理化に潜む負の現象など、現代社会の特質を考察する。			
学生に対する評価の方法 学期末試験は勿論のこと、受講態度、遅刻数、欠席回数などのも考慮に入れて総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報社会を学ぶにあたっての授業の目的と講義内容の概要、授業方法等の説明および授業日程の説明 第2回 ①情報社会で多用されている日常用語の説明・解説（DVD、ADSL、IC、POS、ユビキタスなど） 第3回 ②情報ネットワークで多用されている用語の説明（LAN、eコマース、光ファイバーケーブルなど） 第4回 情報という言葉の由来と歴史的な展開 第5回 情報の性質と種類 第6回 現代社会における呼称の特質と解釈・内容（情報化社会、情報社会、高度情報社会、知識産業社会、高度通信技術社会、ハイテクノロジー社会、システム社会などの特質） 第7回 情報社会の特質「システム」の意味とシステム社会に関連して 第8回 ①高度情報化社会の具体的動向とその影響（個人・家庭生活・社会生活における事例とその光と影） 第9回 ②高度情報化社会の具体的動向とその影響（経済・産業・企業活動における事例とその光と影） 第10回 ①国際関係における情報化の具体的動向とその影響（グローバルに展開する情報化の進展について） 第11回 ②国際関係における情報化の具体的動向とその影響（デジタルエコノミー、eビジネス世界の進展、および主要各国の情報化の取り組み） 第12回 ①情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会に潜む病理現象と人間生活） 第13回 ②情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会の便利さ、効率化、合理化に潜む負の現象） 第14回 ネットワーク社会の進展にともなう諸問題（コンピュータの不正使用や有害情報、ネットワーク犯罪、プライバシーの問題など情報倫理問題） 第15回 学期末試験			
使用教科書 『高度情報化社会の諸相』折笠和文著（同文館出版）			
自己学習の内容等アドバイス 回数毎の授業内容が明記されているので、理解を深めるためにも事前にテキストを読んでおくことが望ましい。			

[授業科目名] 社会学／家族の社会学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 今井 隆太
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 社会学の対象と方法についての基礎知識を得ること。グローバル化という現代社会の現象が、私たちの日常生活をどのように変容させているかを知ること。毎回、小テストを実施する。インプットと同時に、アウトプットを学ぶこと。すこしでも文章を書くことが大切。			
授業の概要 指定テキストに沿って、各項目について講義する。テキストのテーマは、グローバル化時代の日常生活であり、私たちの学校生活、家庭生活、将来の職業生活がいま、どのような変化に直面しているかを学ぶ。事柄にはすべて歴史という側面がある。現在の大変さを知って、過去の教訓に学ぶのもまた重要だ。生きることに希望をもっていこう。そのための道案内が、社会学に課せられた課題でもある。			
学生に対する評価の方法 ほぼ毎回、講義内容に沿った小テストもしくはレポートを求める。これは出席と試験が一体になったもので、当然、出席は重視するが、小テストの答案が、出席していた内容を物語ることになることに注意すべきである。			
授業計画（回数ごとの内容等） 入れ替えはあるが、大体、以下の項目について講義する。 第1回 社会学入門、社会的相互行為、グローバル化 第2回 社会学理論と社会調査 第3回 身体社会学（健康・病気・障害） 第4回 社会成層と階級 第5回 貧困・社会的排除・福祉 第6回 人間の安全保障 第7回 人種とエスニシティ 第8回 組織社会学 第9回 戦争と現代 第10回 ライフストーリーの社会学 第11回 家族論 第12回 戦後日本の家族1 第13回 戦後日本の家族2 第14回 高度成長期の日本社会 第15回 現代をどうとらえるか テキストの他に、教材として映画、文芸作品などを用いる。とくに小津安二郎の映像作品には、家族について考えさせられるテーマが含まれている。例年、「東京物語」、「晩春」などをとりあげている。小津作品には、家族論的な要素と共に、戦後日本社会の変動をはかる要素も描かれている。映画史上見事な作品であるが、社会的な見方を学んでみよう。			
使用教科書 『入門 グローバル化時代の新しい社会学』西原和久・保坂稔共編、新泉社			
自己学習の内容等アドバイス 予習は特に求めない。復習として、難解な用語を調べる癖をつけたい。それも一般的な語義で十分なのか、『社会学用語辞典』のような専門辞書に拠る必要があるのか、それを判断するのもいい訓練になる。			

[授業科目名] アメリカの社会と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 河井 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人種、階級、ジェンダーの視点から、もうひとつのアメリカをみる。マイノリティの視点から、アメリカ文化の基本的価値である「自由・平等」理念の歴史的展開について学ぶことで、今アメリカで起こっている事象がどのような意味を持ち、なぜ起きているのかをよりよく理解できるようになることを目標とする。			
授業の概要 自由の国としてのイメージをもつアメリカ。しかし、アメリカの自由は固定されたものではなく、21世紀になった今もたえず議論されているし、また変えられていくべきである。アメリカ合衆国が軍事的、経済的、文化的に世界で傑出した国でありながら、今なお戦争をしているためにその国際的影響力は弱まっている時であるからこそ、アメリカの歴史と価値を学ぶことは重要である。 本授業では、映像資料や歴史史料も用いながら「自由」をキーワードに、「自由」の意味、その社会的条件、その境界（自由を享受する資格）という3つの視角から、自由と民主主義、物質的豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席捲する20世紀前半と、冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカが国内外の新たな試練にさらされる20世紀後半をみていく。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度及び授業内で行うレポートによる授業の理解度（40%）、最終に実施する試験（60%）で総合的に評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義の概要説明 「アメリカの世紀」 第2回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第3回 アメリカの根源—その理想と現実（植民地時代～南北戦争） 第4回 アメリカの文化の成立—その光と影（南北戦争後～1890年代） 第5回 20世紀前後のアメリカ—1890年代 第6回 革新主義の時代—1900年代～1910年代 第7回 大衆消費社会の展開—1920年代 第8回 「現代アメリカ」の危機—1930年代 第9回 アメリカの世紀へ—1940年代前半 第10回 冷戦下の「黄金時代」—1940年代後半～1950年代 第11回 激動の時代—1960年代 第12回 激動の時代—1960年代 第13回 保守の時代—1970年代～1980年代 第14回 文化戦争の世紀末—1990年代以降 第15回 試験日			
使用教科書 有賀夏紀『アメリカの20世紀』（上・下）（中公新書） 参考史料は適宜配布する。 【参考図書】 エリック・フォナー『アメリカ 自由の物語』（上・下）（岩波書店、2008年）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容をテキストで予習しておくこと。			

[授業科目名] 民族と文化		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 齊藤 基生
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 地球上には数多くの「民族」や「文化」が存在しているが、その定義はきわめてあいまいである。まずは言葉の定義から始め、各自の「民族」観や「文化」観を作る。そして、いまだ絶えることのない民族紛争の要因である、誤解、偏見、差別について、その背景を考える。			
授業の概要 民族や文化などの、言葉を定義する。自然人類学、文化人類学、それぞれの観点から、ヒトと人を見る。それらを踏まえたうえで、環境・民族と文化の関係を、衣食住それぞれの分野から概観する。			
学生に対する評価の方法 成績は、期末試験の平均点を指標（50％）に、受講態度（出席、遅刻、早退、出席カードへの記入など）を加味（50％）しながら、総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入。各自が民族や文化をどうとらえているか、アンケートを実施する。あわせて、講義の概要を説明する。 第2回 アンケート集計結果の講評。それを手がかりに、文化とは何か、民族とは何かを考える。動物学から文化人類学まで、様々な分野でどのように定義されているか解説し、各自の「文化」観を作る。 第3回 文化人類学と民族1。民族の定義。人文科学の諸分野で民族がどのように定義されているか、様々な研究者の見解を紹介する。 第4回 文化人類学と民族2。民族、民俗、風俗の違いについて述べる。 第5回 自然人類学と民族1。人種とは何か、人類の進化から解き起こす。 第6回 自然人類学と民族2。人種と形質、民族との関係について述べる。 第7回 自然人類学と民族3。血液型と民族の関係について述べる。 第8回 スライド大会。日本各地の食とデザインについて、スライドを用いて解説する。 第9回 世界の地理と気候。気候が人々の暮らしに及ぼす影響について、主に植生との関係を概観する。 第10回 衣と民族。赤道直下の熱帯から酷寒の極地まで、人々は様々な条件の下で暮らしており、それぞれの気候風土にあった衣服を身にまとっている。それらを概観する。 第11回 食と民族、その1。韓国、東アジアを中心に、食文化に表れた国内外の違いを見る。 第12回 食と民族、その2。食材と食に関する禁忌。 第13回 食と民族、その3。食器の話、箸とフォーク、食器を通して食の作法の違いを知る。 第14回 住まいと民族。衣食住同様、住まいも地域差が著しい。自然への適応と住文化の違いを考える。 第15回 評価試験。			
使用教科書 特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 普段から新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミに親しみ、世の中の動きに注意を払ってほしい。			

[授業科目名] 国際社会の動き		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 現代の社会生活において、国際的な知識、発想を有することは大きな財産といえよう。本講義は、日々最新の国際事情を解説して、受講者の理解に供するのみならず、それらによって来たる歴史的淵源を考察することで、将来を展望する。すなわち学問としての「国際社会の動き」を、つとめて平易に講ずるものである。			
授業の概要 まず考察の基礎として、国際社会における重要な要素である民族・文化（言語・宗教）・国家（政治）について、ヨーロッパとシナ（中国）を中心に解説する。世界の盟主としての地位が揺らいではいるが、なお相対的にはナンバーワンであり続けるアメリカについても、わが国と対照しつつ考察する。 受講者の希望に応じ、随時時事問題を取りあげる。新聞が苦勞なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。			
学生に対する評価の方法 学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、国際社会の動きへの関心度、基本的概念の理解度を主に問う。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教養とは何か 第2回 国際社会とは 第3回 アジアの国々 第4回 ヨーロッパの国々と諸民族 第5回 地理と歴史の重要性 第6回 地理と歴史の重要性（続） 第7回 民族とは何か 第8回 言語と世界 第9回 宗教と世界 第10回 宗教と世界（続） 第11回 国家と世界 第12回 アメリカと世界 第13回 アメリカと世界（続） 第14回 日本と世界 第15回 筆記試験			
使用教科書 『なるほど知図帳 2011 世界』昭文社 『世界史年表・地図』吉川弘文館			
自己学習の内容等アドバイス 日頃、新聞・テレビなどの国際情報に触れ、地図や年表で確認する習慣を身につければ、国際的素養は短期間で飛躍的に向上するであろう。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 千鶴夫
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 数式があまり好きでない人も、数式にはこんな意味があるのか、数式はこんなことに役立つのか、数式を図形化するとこんな面白い図形になるのか、ということ、パソコンを利用しつつ、比較的容易に理解することをテーマとし、結果として「数式は結構面白く、身近なもの、役立つもの」と実感でき、ある程度デザインなどに役立たせることができるようになることを到達目標とする。			
授業概要 高校で学んだ数式および若干新しい数式を対象にし、日常生活に関連した現象に結び付けて説明する。さらにパソコンを使い、数式を形に表すことによって、数式の新しい側面を見出しつつ理解を深める。			
学生に対する評価の方法 出席と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、図形の自由作成と期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、数字の歴史、国際単位系 第2回 関数関係（1）：1次関数、多次関数（線、面積、体積） 第3回 パソコンによる1次、2次関数の図形化 第4回 関数関係（2）：弧度法と三角関数 第5回 直角座標と極座標 円、楕円、双曲線、放物線、等を表すのに便利な極座標 第6回 三角関数と極座標関数を使ったパソコンによる図形化 第7回 図形の自由作成 第8回 関数関係（3）指数関数、対数関数 第9回 パソコンによる指数関数、対数関数等の図形化 第10回 微分概念とパソコンによる近似計算。 第11回 積分概念とパソコンによる近似計算 第12回 関数関係（4）特殊な関数、パソコンによる図形化 減衰振動、サイクロイド、トロコイド、リサージュ、バラ曲線等。 第13回 ベクトル：ベクトル概念を理解し、演習を行う 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ			
		 <p>半径の異なる円の等高面</p>	
		 <p>三角関数と極座標を用いた花模様</p>	
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 石原 繁 編 「大学数学の基礎」 裳華房			
自己学習の内容等アドバイス パソコンを使って数式・数学の新しい理解に活用するため、欠席はパソコンの新しい操作の仕方を学ぶ機会を逸するため極めて好ましくない。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ 数学に関する興味・関心を持つことと数学的素養を養うことを目的とする。数と図形に関する基本的な内容を学ぶことにより、数学的な系統性・論理生を理解し、日常生活に活かし、考えることの楽しさや数学的な美しさや良さを理解することを到達目標とする。また、初等教育における「数と計算」「図形」指導を念頭に置く。			
授業の概要 この講座では、「数」と「形」についての算数的研究活動を通して、日常生活で活用されている算数・数学的な処理のよさに気付くとともに、考えることの楽しさや美しさを理解する。また、「算数的活動」、「見通し」をもち、筋道を立てて考え、表現する能力の育成のために、実践的な活動を多く取り入れた授業を行う。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20％）、課題・レポート（約20％）、試験の結果（60％）などで総合的に評価を行う。 特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・算数を学ぶことの意義・数学的背景) 第2回 数の表し方と記数法の歴史の概観（零の発見と位取り・記数法） 第3回 数の拡張と演算①（整数の加減乗除・九九） 第4回 数の拡張と演算②（小数・分数の加減乗除） 第5回 数と計算の意味とその活用（四則演算の性質・問題作成） 第6回 日常における数学的な事象の考察 第7回 数と計算領域のまとめ及びテスト 第8回 小学校における図形の指導目標と内容 第9回 「図形」：平面図形（三角形・四角形・正方形・長方形・円） 第10回 「図形」：平面図形（平行四辺形・ひし形・台形・多角形） 第11回 「図形」：対称・合同な図形がつくる美しい模様(敷き詰め) 第12回 「図形」：立体図形（立方体・直方体・球・展開図） 第13回 「図形」：立体図形（角柱・角錐・円柱・円錐） 第14回 図形領域のまとめ及びテスト 第15回 小学校学習指導要領の目標及び授業のまとめ （数と形についての関係及びその算数的考察）			
使用教科書 必要に応じて、そのつどレジュメを配付する。(参考書 小学校学習指導要領解説 算数編 文部科学省 東洋館出版社)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 数と形		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 小学校・中学校の数と計算・図形の一連の学習の流れを振り返り、小学校での算数の指導の重要性を知る。数学を学ぶことの楽しさや意義を実感し、日常生活に活かし物事を合理的に処理する力を養う。			
授業の概要 ここでは数学的素養を養うことを目的とし、数に関する話題を広く取り上げ講義する。またその際、幼児・初等教育における算数の学習指導（数と計算の指導）の場を念頭に置く。 具体的には、「数とは何か」、「数とはどう表現するのか」、「数の計算はなぜできるのか」を追究する過程を通して、自然数、整数、分数、小数について、そのとらえ方と性質を様々な角度から述べる。人類がどのように数を数字で表したか、数詞の仕組みを見付け出したかという数学史の面から資料の考察をする。また、「数とはどのように用いるのか」を追究する過程を通して、数と図形の関わりについても考察する。			
学生に対する評価の方法 毎時の学習評価問題の取り組み及び授業への参画態度を基に評価する。（40%） 講義内容の理解と自己変革と自己実現という観点から、評価する。（20%） 講義内容の理解度の程度を評価するテストを第8回と第14回に行う。（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 集合と数（ピタゴラスの実験、幼児の数の認識） 第2回 数の表し方と記数法の歴史（4大文明の記数法） 第3回 零の発見と位取り記数法 第4回 n進数（2進数等を基に、十進位取り記数法以外の記数法） 第5回 数の拡張と演算 その1 第6回 数の拡張と演算 その2 第7回 数の拡張と演算 その3 第8回 四則演算の意味（加法、減法、乗法、除法）・小テスト 第9回 数と計算の意味の活用（指数計算、複利計算、対数計算、方程式解法） 第10回 数と計算の意味の活用（平方数やパスカルの三角形、ピタゴラス数） 第11回 図形の形と大きさ 第12回 小学校における図形の指導目標と内容 第13回 中学校における図形の指導目標と内容 第14回 三平方の定理の多様な証明方法・まとめのテスト 第15回 日常の事象の数学的な手法での観察			
使用教科書 「入門 算数学」 日本評論社 黒木哲徳 著 ≪参考書≫：小学校算数科学習指導書、中学校数学科学習指導書 文部科学省			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 本日の授業範囲を教科書で復習しておく。 関連する内容を図書・インターネット等で調べる。			

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者] 森 千鶴夫																								
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：管理栄養学部 後期：メディア造形学部																								
授業の到達目標及びテーマ 私達の身の回りには、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろんな種類の多くのデータがあり、その活用に迫られることが多くある。それらのデータを、パソコンを使って整理して、確率と統計の理論に基づいて解析し、意味付けを行なうことをテーマとする。 確率と統計の初歩的な理論を理解すること、身近なデータを、パソコンを使って整理し解析して、グラフ表現を行なう具体的な手法を体得することを到達目標とする。																											
授業概要 確率について身の回りの出来事を例にとりて説明し、次に確率の延長としての確率分布（2項分布、ポアソン分布、正規分布、など）について述べる。続いて、身の回りのいろんなデータとその統計処理法について述べ、パソコンを使って、統計的データを整理して図形化し、種々の統計的数値を求める。																											
学生に対する評価の方法 出席状況と授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。																											
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、順列、組合せ 第2回 確率、2項分布 第3回 パソコンによる計算と表示 第4回 データ：データの収集、整理、平均値、広がり、標準偏差 第5回 パソコンによるデータの整理、種々の計算、表示 第6回 ポアソン分布、正規分布、 第7回 偏差値 第8回 パソコンによるポアソン分布、正規分布に関する計算とグラフ表現 第9回 最小2乗法：回帰直線、近似曲線 第10回 共分散、相関、相関係数 第11回 パソコンによる相関係数の計算、近似曲線による表現 第12回 推定と検定 第13回 生活と統計 物価指数、景気動向指数、ローレンツ曲線、ジニ係数 第14回 試験日 第15回 学習のまとめ																											
		<table border="1"> <caption>確率分布のグラフデータ</caption> <thead> <tr> <th>当りの枚数 (枚)</th> <th>確率 (割合)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>0</td><td>0.05</td></tr> <tr><td>1</td><td>0.15</td></tr> <tr><td>2</td><td>0.23</td></tr> <tr><td>3</td><td>0.22</td></tr> <tr><td>4</td><td>0.17</td></tr> <tr><td>5</td><td>0.10</td></tr> <tr><td>6</td><td>0.05</td></tr> <tr><td>7</td><td>0.02</td></tr> <tr><td>8</td><td>0.01</td></tr> <tr><td>9</td><td>0.005</td></tr> <tr><td>10</td><td>0.002</td></tr> </tbody> </table>	当りの枚数 (枚)	確率 (割合)	0	0.05	1	0.15	2	0.23	3	0.22	4	0.17	5	0.10	6	0.05	7	0.02	8	0.01	9	0.005	10	0.002	この図はお年玉つき年賀はがきが100枚ある場合に4等が1枚も当たらない確率は0.05（5%）であり、たとえば3枚当たる確率は0.23（23%）であることを意味する。この分布は2項分布と呼ばれる。このような計算をして図に示すことはEXCELを使えば簡単にできる。
当りの枚数 (枚)	確率 (割合)																										
0	0.05																										
1	0.15																										
2	0.23																										
3	0.22																										
4	0.17																										
5	0.10																										
6	0.05																										
7	0.02																										
8	0.01																										
9	0.005																										
10	0.002																										
使用教科書 毎回、プリントを配布する。 【参考図書】 室 淳子・石村貞夫著 「Excel でやさしく学ぶ統計解析」 東京図書																											
自己学習の内容等アドバイス 上級生になると、種々の調査、実験、および研究のデータを扱うようになり、データの整理を行なって報告書を作成しなければならない。その際に、データの整理が統計学的手法によってなされ、意味のある統計的な数値を導き出されているかどうかは重要な事柄である。統計学的手法の有用さを十分に理解するように努めて欲しい。そのためには、アンケートデータや実験データなどに随時適用することを勧める。																											

[授業科目名] 確率と統計		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 服部 周子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な統計処理の手法を理解し、それをもとに身近な現象を理解したり分析したりできるようなる。 ・多くの演習を通して統計学の知識をマスターする。 ・統計学独特の専門用語を身につける。 			
授業の概要 <p>私達の身の回りにある自然現象や社会事象には、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろいろなデータがあり、その活用に迫られることが多くある。しかし、それらのデータを活用するには、科学的な分析方法によって解析し、意味付けを行って初めてその価値をもつ。統計学は、大量のデータの中にある法則性を見出す分析方法である。そこで、確率と統計の基礎的な手法を理解し、それをもとに、身近で具体的なデータを解析し、グラフ表現を行う手法を体得する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>毎時、具体的な統計処理あるいは学習評価問題と授業への参画態度を基に評価する。(40%) 講義内容の理解を評価するテストを第8回と第14回に行う。(40%) 自己実現、自己変革を果たしかたかを評価する。(20%)</p>			
授業計画 (回数ごとの内容等) <p>第1回 統計学の考え方の基礎・分析概念 第2回 確率と確率分布の特徴 第3回 母集団と標本・標本抽出 第4回 階級分けと資料の作成 第5回 標本分布の特性値 ・ 中心的傾向の特性値 (中央値、最頻値、平均) 第6回 標本分布の特性値 ・ 変動の特性値 (分散、標準偏差、変動係数) (テスト) 第7回 確率とは・確率を表す方法と記号 第8回 確率変数と確率分布・第1章と第2章のテスト 第9回 二項分布 (離散型確率分布) 第10回 ポアソン分布 (離散型確率分布) 第11回 一様分布 (離散型一様分布・連続型一様分布) 第12回 正規分布 (標準化・正規分布表の読み方)・偏差値 第13回 統計的有意性 (信頼係数・有意水準)・標本平均の分布 第14回 母平均μの推定平均・第3章と第4章のテスト (テスト) 第15回 t分布</p>			
使用教科書 <p>「はじめての統計学」 日本経済新聞社 鳥居泰彦 著</p>			
自己学習の内容等アドバイス <p>次回の授業範囲を教科書で予習しておく。 専門用語の意味を確実に理解するよう復習しておく。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
自然のしくみ		講義	井谷 雅治
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1・3年次前期	選択 (教職必修)	幼児保育専攻のみ (小学校教員免許取得用に開講)
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容、観察・実験を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解・技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20% なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、小学校学習指導要領解説(理科編)、			
自己学習の内容等アドバイス <ul style="list-style-type: none"> ○ 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 ○ シラバスについての予習 ○ 講義内容の深化学習 			

[授業科目名] 自然のしくみ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井谷 雅治
[単位数] 2	[開講期] 1～2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさを感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。			
授業の概要 講義内容を通して積極的に参加し、理科の本質をつかもうとする態度や知識・理解、技能を身に付けるとともに、自然のもつ偉大さ・巧みさ・しくみに共感し、自然を愛する人間につとめる。			
学生に対する評価の方法 試験50%・小論文30%・授業態度20%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：自然科学概論 第2回：学習指導要領の解説 第3回：物質とエネルギー(1) 水溶液 第4回：物質とエネルギー(2) 熱と光と力 第5回：物質とエネルギー(3) 電気と磁石 第6回：生物とその環境(1) 身近な生き物 第7回：生物とその環境(2) 植物の生活 第8回：生物とその環境(3) 動物の生活 第9回：生物とその環境(4) 飼育と栽培 第10回：地球と宇宙(1) 地形と土地 第11回：地球と宇宙(2) 天気と季節 第12回：地球と宇宙(3) 地球と宇宙 第13回：地球と環境 第14回：筆記試験と自然界の事象についてのディスカッション 第15回：授業のまとめと小論文提出			
使用教科書 テキスト：プリント、			
自己学習の内容等アドバイス <input type="checkbox"/> 自然現象のニュース・情報を基にした自己学習 <input type="checkbox"/> シラバスについての予習 <input type="checkbox"/> 講義内容の深化学習			

[授業科目名] 生命の科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 日暮 陽子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 授業テーマ：「生命の科学」では、生体の基本構造である細胞を学ぶ。 到達目標：生体の基本知識の習得			
授業の概要 細胞の構造・機能、細胞間の情報伝達を理解したうえで、生体内で起こっている現象について講義をしていきます。生体の基本を学ぶことで、生体のしくみを考える基盤を作っていきます。			
学生に対する評価の方法 筆記試験を行う。評価は以下の配分で行う。 出席点：全出席で10点 試験点：中間試験（40点）・期末試験（50点）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生命科学とは 第2回 細胞：細胞の構成 第3回 細胞内小器官の機能 第4回 組織：上皮組織・結合組織・神経組織・筋組織 第5回 生体の構成：生命の物質的基盤 第6回 生命の設計図1 第7回 生命の設計図2 第8回 中間試験 第9回 生体内恒常性 第10回 代謝 第11回 エネルギー産生 第12回 情報伝達 第13回 食と健康 第14回 記憶 第15回 期末試験			
使用教科書 生命科学 羊土社 東京大学生命科学教科書編集委員会			
自己学習の内容等アドバイス 講義の内容を振り返り、教科書やノートを見直してみてください			

[授業科目名] 人間と地球環境		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大矢 芳彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 私たちは地球上で生を受け、地球上で生活を営み、そして地球に還る。本講では、私たちの生活の場である「地球」あるいはそこに住む私たち「人類」というものを様々な観点から理解する。そして私たち人類が今後も地球と調和的に生きるためには何をすればよいか一人ひとりが考え、行動できる知識と方法を取得することを目的とする。			
授業の概要 授業方法は講義形式で行うが、画像や映像を取り入れてより理解が深まるよう工夫しながら解説する。前半は宇宙を知り、宇宙から地球と人類を探ると同時に生きている地球の現状について理解を深めていく。そして後半には地球の動きと私たちの生活との関係について概説する。ここでは特に、「自然災害」と「地球環境問題」についてその現状を認識する。			
学生に対する評価の方法 基本的には、平常の授業態度（10%）、最終時に行う試験（90%）であるが、自主レポートなどを書いたものはその内容によって評価に加える。また、授業中に無駄話をするなど他の学生の迷惑行為をした場合は別途減点する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 授業計画は、第1回のアンケート調査に基づいて決定されるが、大まかな授業計画は次のとおり。 第1回 ガイダンスとアンケート（講義の内容・目的と単位取得の方法など） 第2回 宇宙の大きさとその動き（宇宙における地球の位置付け） 第3回 星の一生（星の誕生から消滅まで宇宙で行われている現象の認識） 第4回 太陽系の構成（地球に近い天体、特に太陽と惑星の特徴） 第5回 地球の誕生（どのようにして地球は誕生したのかを探る） 第6回 生命が存在する環境と地球外生命体の可能性（生命は地球だけのものか） 第7回 生命の誕生（地球上で生命がいつに誕生したのかを探る） 第8回 生物の進化と地球環境の変化（生物の進化と地球環境との深い関連性を知る） 第9回 地震の原因と被害（災害の中で最も恐ろしいと言われる地震の原因を探る） 第10回 東海地震について（地震予知の現状と東海地震に対する対策の現状についての把握） 第11回 地球環境問題の素因（なぜ今、地球環境問題が叫ばれているのかその理由の認識） 第12回 エネルギー問題（エネルギー問題の現状とその対策の把握と未来のエネルギーについての考察） 第13回 地球温暖化（温暖化問題について地球科学的な見地からの分析と将来予測） 第14回 生物種の減少（現在の生物種の減少の現状と過去の生物の進化の歴史との比較） 第15回 定期試験			
使用教科書 「はるかなる地球」 大矢芳彦著 荘人社			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味などを事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 科学の歴史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松浦 俊輔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 自然科学や、それと密接に関係する技術が、現代の私たちの社会生活や精神活動にとってどんな役割を担っているのかを理解します。自分の領分とは離れたところの話を、自分の中にあるものと関連づけて理解することが目標です。			
授業の概要 自然科学がどのように成立したか、科学的方法がどのように確立したか、その歴史的な由来や展開をふりかえることによって、科学的思考のあり方をいくつかの方向から捉えることによって、自然科学や科学技術の総合的なイメージを把握します。A（前期）は光と色を中心とした科学史の話題、B（後期）は自然の統一的理解のためのアイデアや実験という面からの話題を取り上げます。			
学生に対する評価の方法 ①日常の出席状況と、毎回提出してもらった授業の感想 ②期末試験（基礎知識の確認と論述。論述はあらかじめ課題を出しておき、原稿を用意して試験に臨んでもらいます）を総合評価（①50%+②50%）しますが、出席点が6割に達していない場合は、再評価なしの不合格とします。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス。 第2回 科学を論じることのイメージをつかむための資料を見てもらいます。 第3回 A自然哲学の誕生 B自然哲学の誕生 第4回 A中世からルネサンスへ Bアリストテレス 第5回 A望遠鏡と顕微鏡 Bギリシアの先駆的成果 第6回 A光の速さ Bアルキメデス 第7回 A光の正体とニュートン Bギリシアからイスラムへ 第8回 A電磁波としての光 Bルネサンス 第9回 A光、時間、空間 B天体の動き 第10回 A光の二重性 Bコペルニクスの展開 第11回 A科学と芸術（色彩と空間） Bチコ・ブラーエとケプラー 第12回 A科学と芸術（抽象化への道） Bガリレオ 第13回 A予備 Bニュートンのりんご 第14回 Aまとめ B様々な統一とまとめ 第15回 試験 なお、実際の反応を見て、進度を修正することがあります。			
使用教科書 教科書はとくに指定しません。授業時に資料を配付します。また、参考書については、授業時に提示します。			
自己学習の内容等アドバイス だんだん見えてくる(?)「科学的な扱い方」とはということかの理解をふまえて、自分の身のまわりにある素材について、科学的に考えてみることを繰り返してください。			

[授業科目名] 美術の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近代以前の日本絵画が問題としてきた視覚表現の諸要素を理解し、情報を視覚によって表現することの意味を知ることを目標とする。			
授業の概要 主に江戸時代以前の日本美術に属するさまざまな絵画の中に示される視覚イメージについて、毎回ひとつの着眼点を設定し、その意味や歴史的展開を紹介してゆく			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 フィクションとしての絵画 第3回 凶像とは何か 第4回 絵の中の空間 第5回 絵の中の空間 第6回 絵の中の言葉 第7回 模倣と見立て 第8回 怪物の造形 第9回 変身のイメージ 第10回 腐乱死体の美術 第11回 絵画における描かないことと見えないこと 第12回 異界へのまなざし 第13回 試験 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎回膨大なスライドを投影するので、記録用の撮影機材があるとよい。毎授業ごとに必ず復習し、ノートの内容と画像を結び付けておかないと、授業終盤でまとめて試験対策を講じようとしても内容を復元できなくなるので注意。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黄木 千寿子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 西洋芸術音楽を聴く為にコンサート会場へと足を運ぶ愛好家の数は、年々減少している。その一方、ドラマやCM等のBGM、またネット上の音楽配信によって、西洋芸術音楽はポピュラー音楽と並び扱われ、知らず知らずに我々の耳に届く、意外に身近な存在でもある。この授業では、こうした西洋芸術音楽の流れを歴史的、文化的に理解することによって、教養としての西洋芸術音楽の知識を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 中世から現代まで、西洋芸術音楽の発展の歴史を概観する。各々の時代における社会的、文化的背景などを交えながら、比較的有名な楽曲を例に平易な解説を行い、西洋芸術音楽を鑑賞する力を養うとともに、雑多なジャンルの音楽が氾濫する現代において、西洋芸術音楽が果たしてきた役割を理解することを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度（14%）、小テスト（26%）、最終筆記試験（60%）で総合的に評価を行う。試験の欠席は認めないので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（西洋芸術音楽とは何か、講義内容の概要、参考書の紹介など） 第2回 中世音楽（グレゴリオ聖歌とその発展、ノートルダム楽派） 第3回 中世～ルネサンス（アルス・ノヴァ、フランドル楽派） 第4回 ルネサンス（16世紀、ジョスカン・デ・プレ他） 第5回 バロック①（マドリガーレ、オペラの誕生） 第6回 バロック②（協奏曲、バッハ、ヘンデル他） 第7回 ウィーン古典派①（前古典派、古典派の作曲技法） 第8回 ウィーン古典派②（ソナタ形式、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン） 第9回 ロマン派①（ロマン派の作曲技法、ショパン、シューマン他） 第10回 ロマン派②（ロマン派オペラ、ワーグナー、ブラームス他） 第11回 ロマン派③（民族主義の音楽） 第12回 世紀転換期から第1次世界大戦へ 第13回 20世紀①（ストラヴィンスキー、シェーンベルク他） 第14回 20世紀②（1945年以降） 第15回 最終筆記試験			
使用教科書 岡田暁生著『西洋音楽史』中公新書1816（中央公論新社）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習することが望ましい。授業では音源を多用するため、聴き漏らさないよう注意する。			

[授業科目名] 音楽の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・「音楽とは何か」「芸術とは何か」「創作とは何か」を理解し、各自の領域で探求する。 ・「西洋音楽とは何か」「邦楽とは何か」を理解、探求する。 ・教養としての「音楽」を習得する。 			
授業の概要 「音楽」について、歴史、地理、文化、社会、宗教、民族、風俗、言語などのさまざまな角度からアプローチし、音楽の多様性の理解と同時に、本来のリベラルアーツとしての教養を高めます。授業は毎回のテーマを中心に、講義、音楽、映像など、さまざまなサンプルから深く考察していきます。			
学生に対する評価の方法 「授業ごとの参加度」(30%)－毎回のコメントにて確認、「期末レポート」(70%)－講義で習得した「芸術」「音楽」「教養」を各自が理解し、論述できるか。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 「音楽」とは何か? － オリエンテーション、音楽とは何か、西洋音楽と邦楽 第2回 日本の音楽 (1) － 邦楽は西洋音楽だった (奈良時代、音楽の伝来、邦楽) 第3回 日本の音楽 (2) － 舶来品の西洋音楽 (明治時代、西洋音楽と邦楽) 第4回 テキストと音楽 (1) － 歌い方には4通りもある (テキストと音楽との関係、西洋詩学) 第5回 テキストと音楽 (2) － 和風ラップに至る道 (日本語と音楽の関係、東遊歌、能楽) 第6回 宗教と音楽 － 感動『戦場のピアニスト』に隠された秘密 (宗教、民族と音楽) 第7回 ポピュラー音楽 － Mozart の時代にもポピュラー音楽はあった (大衆芸能と芸術の差異) 第8回 日本音楽の受容 － エッフェル塔と三味線 (パリ万博、異国趣味、印象派の音楽) 第9回 音律 － ドレミは対数? (音響学基礎、音律、世界の音階) 第10回 『第9』とは － なぜ『第9』は年末恒例? (戦後西洋音楽受容史、西洋音楽の衰退) 第11回 著作権 － 自分の曲でも使用料払うの!?! (音楽における国内、海外の著作権法の概説) 第12回 オペラ － 愛の結末は・・・ (古典派オペラ、イタリア・オペラ、楽劇) 第13回 電子音楽 － 電子立国ニッポンはすごい! (発振の原理、発展史、日本の技術とアーティスト) 第14回 民族音楽 － 音楽は世界非共通 (民族音楽とその関連、民族音楽からの享受) 第15回 現代の音楽 － 音楽、なう! (20世紀後半からの現代音楽、音楽と社会)			
使用教科書 指定なし。毎回の授業で資料を配布する。参考資料などについては授業内で紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げたテーマに関する楽曲や作品を鑑賞すること。また、作者、時代背景など、関連した項目についても幅広く調べること。			

[授業科目名] 文芸の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 短編小説の魅力 小説とは何か。短編小説の方法とその魅力について知る。 小説の方程式を知れば誰でも1編の小説は書けることを知る。 ☆実際に書いてみたい人は、「教養総合演習Ⅰ（短編小説を書く）」を受講してください。			
授業の概要 文芸作品には、詩歌・小説・戯曲（脚本・シナリオ）・評論・随筆など様々なスタイルがある。講義では、特に短編小説について学ぶ。『漢書芸文志』によれば、小説とは「街談巷語の説」である。だとすれば、小説では何をどう書いてもよいはずである。が、これまでに発表された小説には、本質らしきものや普遍的技法といったものがみられることを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法） 第2回 文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて） 第3回 志賀直哉の「山鳩」と小説の三要素について 第4回 小説の三要素と有史以来の作品について 例えば「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」など 第5回 小説の構造1 例えば志賀直哉「出来事」 第6回 小説の構造2 例えば芥川龍之介「蜜柑」 第7回 小説のジャンルについて1 例えば川端康成「合掌」 第8回 小説のジャンルについて2 例えば内田百閒「風の神」・「山東京伝」 第9回 小説のジャンルについて3 例えばヘミングウェイ「老人と海」 第10回 模倣ということ 例えばレイモンド・チャンドラーと村上春樹など 第11回 模倣からオリジナルへ1 例えば芥川龍之介『今昔』から「鼻」へ 第12回 模倣からオリジナルへ2 例えば芥川龍之介『今昔』から「運」へ 第13回 人称（視点）の問題について 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ なお、小説作法の方程式については各講義の中で少しずつ明らかになっていく。			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 予習・事前に配布する短編小説を分析しながら読んでくる。復習・本時にあつかった作品の鑑賞文を書く。			

[授業科目名] 演劇の世界		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 田尻 紀子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：管理栄養学部・メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ テーマ「浄瑠璃の成立と展開」 「文楽」として親しまれている人形浄瑠璃の成立と展開をたどりながら、演劇を通して日本の古典芸能や日本文化について学ぶことを目標とする。			
授業の概要 浄瑠璃は、江戸時代に「語り」と伴奏を伴った人形劇として完成されたが、その源流は、中世の『平家物語』（平曲）にまで遡る。本講義では、浄瑠璃の歴史的展開をたどりながら、大人気を博した近松門左衛門の世話浄瑠璃作品を紹介し、その特色について考察する。また、作品を鑑賞しながら、歌舞伎との関わりや、時代物の三大名作『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』についても言及したい。			
学生に対する評価の方法 学期末試験の成績や作品鑑賞時のレポートによって評価する。 授業への出席状況も反映されますので、欠席や遅刻には十分注意すること。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション・芸能の起源 第2回 時代の特色——中世—— 第3回 『平家物語』と「語り」の成立 第4回 平曲の衰退と早物語『浄瑠璃物語』の流行 第5回 浄瑠璃節と人形浄瑠璃の成立 第6回 時代の特色——近世—— 第7回 古浄瑠璃時代 第8回 近松門左衛門と世話物——『曾根崎心中』と『冥途の飛脚』—— 第9回 作品鑑賞① 第10回 合作時代における時代物 第11回 時代物三大名作② 第12回 作品鑑賞 第13回 時代物三大名作③ 第14回 定期試験 第15回 作品鑑賞			
使用教科書 必要に応じて資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 作品鑑賞に際しては、鑑賞のための資料をあらかじめ配付するので、事前に梗概や特色などについて予習しておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ I 自然に興味を持たせ、自然に上達させること II 各自の技能に応じてルールや審判法を高度なものにしていき、最終的に競技と呼べるところまでもっていく III バドミントンを楽しむこと、そして、楽しみ方を知ること			
授業の概要 スポーツや身体運動は、生涯にわたって健康的な生活を送るために、全ての人間に必要な不可欠なものである。本授業では、バドミントンを中心に理論に基づいた運動実践法を講義し、その具体的方法について実習する。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果 (60%)、受講態度 (40%) など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 実習 初歩的技能の習得 1. バドミントンの歴史 2. シャトルあそび 3. グリップ 2回 実習 初歩的技能の習得 ○運動特性、技術、用具などに関する知識の習得 1. ハイサービス 2. ストローク 3. 簡易ゲーム 3回 実習 初歩的技能の習得 ○各種グリップの理解 1. ショット ・ドライブ ・スマッシュ ・ヘヤピン ・ドロップ ・クリヤー ・ロブ 2. 簡易ゲーム (ハーフコートダブルスゲーム) の実践 4回 実習 初歩的技能の習得 ○ストロークの理解と競技規則に関する知識の習得 1. いろいろなサービス ・ショートサービス ・ドライブサービス ・クリックサービス 2. 簡易ゲーム (オールコート3対3のゲーム) の実践 5回 実習 基本的技能の習得 1. 高度なストローク 2. フットワーク 3. 基本フラインの組み合わせ練習 6回 実習 基本的技能の習得 ○ダブルスゲームの進め方の理解 1. ダブルスゲーム ・ダブルスのルール ・フォーメーション ・審判法 ・ゲームの実践 7回 講義 VTR (全日本バドミントン選手権大会ダブルスの部) を見る 1. トップアンドバック、サイドバイサイド 2. 入れ替わり (攻守) のタイミング 3. VTRを見て動きや打球技術のポイントをまとめ、レポートを提出する 8回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○サービス中のフォルトの理解 9回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○ラリー中のフォルトの理解 10回 実習 基本的技能の習得 ダブルスゲームの実践 ○セッティングの理解 11回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅰ 12回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅱ 13回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅲ 14回 実習 応用技能の習得 公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅳ 15回 個人で取り組んだ課題の成果をまとめ、レポートを提出する ☆課題とは毎時間実施する 20 分間の有酸素運動 (ウォーキング、ジョギング、ランニング) のこと			
使用教科書 (参考図書) 大体連研修部作成教材 バドミントン (平成 20 年度作成 DVD 教材シリーズ)			
自己学習の内容等アドバイス バドミントンに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	正 美智子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1～4年次前・後期	選択	メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ I テニスの基本技術を習得し、ゲームができる。 II 瞬発力、持久力、調整力などの体力を高める。 III テニスを通してスポーツマンシップを涵養する。			
授業の概要 最近の身体運動に関する様々な現象についての科学的研究の進展は著しい。21世紀を健やかに生きるために、身体運動に関わる科学的知識と手段をテニスを実践的に学習する中で獲得する。 テニスは、現在国際的なスポーツであることや、年齢・性別などそれぞれに応じたプレイを楽しむことができるので生涯スポーツに適している。			
学生に対する評価の方法 課題に対する取り組みと成果(60%)、受講態度(40%)など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 1. ガイダンス 大学体育の意義、授業の目的や進め方について解説する。 2. スポーツのスキル 第2回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ラケットワーク 2. グランドストローク 第3回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. ボレー 2. サービス 第4回 実習 テニスの基礎 I 打球技術 1. スマッシュ 第5回 講義 テニスの技術論 1. 技術構造及び基本技術について解説する。 2. 一流プレイヤーの動きを分析・解説するとともに受講生の動作について分析・解説する。 3. 打球技術及び動きのポイントについてまとめ、レポートを提出する。 第6回 実習 テニスの基礎 II 総合練習 第7回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの基本戦術 1. フォーメーション 2. 連続プレイの組み立て 3. コンビネーションの理解と実践 第8回 実習 テニスの基礎 II ダブルスの応用戦術 1. フォーメーション 2. コンビネーション 3. コンビネーションの実践 第9回 実習 ルールとマナー 1. 試合の進行 2. 審判法 3. ルール 4. マナー 第10回 実習 テニスの基礎 II 基礎練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する。の応用 第11回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦1 第12回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦2 第13回 実習 応用技能の習得 ダブルス リーグ戦3 第14回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦1 第15回 実習 応用技能の習得 ダブルス トーナメント戦2 ◎雨天時やコートコンディション不良時は、アリーナまたはサブアリーナで実施する。			
使用教科書 (参考図書) VTR 神和住 純 監修 「ザ・ベスト・オブ・ウィンブルドン」 ポニーキャニオン VTR BBC 制作 「テニス教室決定版」 ポニーキャニオン			
自己学習の内容等アドバイス テニスに必要な基礎体力を身につける努力をすること。			

[授業科目名] スポーツと健康 I (実習 I)		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 笹川 慶
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学科 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ フライングディスク フライングディスク(frisbee)を用いた競技は近年注目されており、性別・年齢に関わらず、技能レベルに応じて誰でも手軽に楽しめるニュースポーツである。このようなフライングディスクの特性を理解しながら、身体を動かす喜びやゲームの楽しさや、異なる個性との関わりを通じて、互いに学び合い、助け合い、励ましあい、チームとしての強調性などを習得し、生涯を通してスポーツに親しむ習慣を養う。そこで、本講義ではチームスポーツを中心としたフライングディスク競技を可能な限り紹介、実践することを目的とする。			
授業の概要 心身の健康は万人共通の願いであり、健康の上こそ大なる個性の発展が期待できる。しかし、近年における機械文明の急速な発展に伴って心理的なストレスや運動不足が増すと共に、豊饒な食生活とも相俟って健康を損ねる機会が多発している。そこで本講義では、実際にスポーツ活動を行うことによって、心身の健康を維持増進させる方法のひとつである生涯スポーツへ自ら積極的に親しむ姿勢を養うことを目標とする。			
学生に対する評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・授業への取り組み方、授業態度等から総合的に評価する ・出席が3分の2に満たないものは単位習得なしとする。 			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 基本的技能Ⅰ (グリップ、スローイング、キャッチング) 第3回 基本的技能Ⅱ (バックハンドスロー、サイドアームスロー、ハンマー、など) 第4回 ドッチビー 第5回 他競技スポーツ 第6回 アルティメットについて (講義、班編制およびルール)スポーツ 第7回 ポートアルティメットⅠ 第8回 ポートアルティメットⅡ 第9回 基本練習とミニゲーム 第10回 他競技スポーツ 第11回 アルティメットの練習法 (基本動作とフォーメーション、ルール) 第12回 リーグ戦Ⅰ 第13回 リーグ戦Ⅱ 第14回 リーグ戦Ⅲ 第15回 トーナメント (リーグ戦Ⅲの結果をもとに)			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 反復練習あるのみ。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康 I (実習 I)		実習	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前・後期	選択	前期：幼児保育専攻 後期：子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ 1) 卓球、バレーボール、バドミントン及び身体育成、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。 2) 自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深め、各スポーツの運動量や運動強度などを把握して効果的な運動の実践ができる。			
授業の概要 本科目では、健康維持のために科学的理論に基づいた運動実践法について実習することを目的とする。また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受する。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物 (50%)、授業態度 (35%)、学習成果及びレポート (15%) を総合的に判断して評価を行う。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明 第 2 回 スポーツの理論と実践法 卓球① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計により卓球の運動量や運動強度を測る。) 第 3 回 卓球② 応用技能の習得とゲームの実践 第 4 回 卓球③ ゲーム内容の発展 第 5 回 スポーツの理論と実践法 バレーボール① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバレーボールの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 6 回 バレーボール② 応用技能の習得とゲームの実践 第 7 回 バレーボール③ ゲーム内容の発展 第 8 回 スポーツの理論と実践法 バドミントン① 基礎技能の習得とゲームの実践 (ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。) (ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。) (歩数計によりバドミンントンの運動量や運動強度を測る。) (ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。) 第 9 回 バドミントン② 応用技能の習得とゲームの実践 第 10 回 バドミントン③ ゲーム内容の発展 第 11 回 健康的な身体育成法の実践 第 12 回 表現的な身体育成法の実践 第 13 回 リズミカルな身体育成法の実践 第 14 回 歩数計による各スポーツの運動量や運動強度の分析を行う。体重、体脂肪率を自己点検する。 第 15 回 総括 <注意事項> 第 1 回の授業は、NIAS ホールで行う。運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。 第 2 回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ (室内用) を着用すること。			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。			
自己学習の内容等アドバイス 卓球、バレーボール、バドミンントンのルールの下調べをしておくこと。			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 高橋 篤史
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 口論義運動公園のプールを利用
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・クロールを中心に四泳法について学び、ゆっくりと長く泳ぐことができるようになること。 ・水中で歩行などの運動を行い、自らの健康増進について理解を深める。 			
授業概要 <p>生命の源“水”。水と人とのかかわりは深く、人間の身体は水そのものといっても過言ではない。その人間が水中で運動すると、陸上では考えられない多くの運動効果が得られる。水泳は、全身運動であり、幼児期から高齢期までの一生涯を通じて行なえるスポーツである。</p> <p>授業では水中運動を通じて健康の維持増進を目指す。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>出席状況（60%）、授業態度（20%）、技術習得状況等（20%）、について総合的に評価する。</p> <p>実技が中心であることから履修者は積極的にカラダを動かすことが望ましい。</p> <p>本授業では再評価を実施しない。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、水の特性、水泳理論等講義 第2回 水中ウォーキング、正しい姿勢の習得、クロール（キック・プル） 第3回 水中ウォーキング、クロール（姿勢・呼吸の習得）、背泳（姿勢・キック） 第4回 クロール、背泳、平泳（キック） 第5回 クロール、背泳、平泳 第6回 クロール、バタフライ 第7回 4泳法のテスト、アクアエクササイズ ※ 第1回は教室での授業とし、第2回よりプールへ移動する。 ※ 第2回からは口論義運動公園まで、往復徒歩で移動する。（片道徒歩約30分・雨天時） ※ 授業は二時間続きで行い、移動の時間もウォーキング運動ととらえる。 ※ 移動時のウォーキングには適した服装（ジャージ、夏場はハーフパンツ等）と運動靴を用意すること。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス <p>実習期間中は春から夏にかけているため気温の変化が大きいことが考えられる。日頃から体調管理を行い、実習に取り組むことを心がけてほしい。</p> <p>実習の回数は限られていることから、実習以外でも積極的に水中運動に親しみ、理解を深めてもらいたい。</p>			

[授業科目名] スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 1	[開講期] 1～4年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考 全学部対象、現地実習（3泊4日）

授業の到達目標及びテーマ

冬季スポーツ種目として、スノーボードを実施する。
授業の目的は、冬の自然環境の中に身を置き、各種目と自然との対話を通して、人類のみが有する運動文化としての価値を認識する。また、自然環境と人間との関わり方（自然との交流）、スノーフィールドを仲間と一緒に楽しむ基本的な技術やマナーを体験を通して学ぶ。

授業の概要

授業は、学内授業および、現地授業（実習）より構成する。学内授業はスノーフィールドでの現地実習がより円滑に効率よく進められるようにするために行う。現地実習は、各自の技能段階に応じ、初心、初級の班別に細分して実施する。日程は、午前および午後にスキー場またはスノーフィールドにて実習を行い、夕食後は、講義、全体会等を通して一層の理解を深める。

学生に対する評価の方法

技術能力（30%）、受講態度（50%）、レポート等（20%）を参考に総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

- 1回 [学内授業]
1. 歴史、魅力と概念
2. 基礎技術のVTRを教材に運動メカニズム等基礎知識の説明
- 2回 [学内授業]
1. 現地授業における生活上の諸注意を行う
2. 安全指導
3. 基礎体力トレーニングプログラムの実施について
- 3回～15回 [現地授業]
スケジュール

1日目	2日目	3日目	4日目
8:15 大学発 8:30 上社発	7:30 起床・洗面 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習	7:30 起床・洗面 朝食 8:30 集合・移動 9:30 実習 <バジジテスト> 閉講式
昼食 12:00 研修所着 12:30 集合・移動 13:00 開講式 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:30 実習	12:00 昼食 13:00 集合・移動 14:00 研修所出発
16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「滑走理論」 (20:30迄)	16:00 集合・移動 17:00 入浴 夕食 19:00 講義 「安全なスノーボード を楽しむために」 (20:30迄)	
22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	22:30 消灯・就寝	

使用教科書

教科書は使用しないが、資料を作成し配布する
(参考図書) 日本スノーボード協会著作・編集 「J S B Aスノーボード教程」 山と溪谷社

自己学習の内容等アドバイス

とにかく基礎体力を実習前に養っておくこと。

[授業科目名] スポーツと健康科学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 「運動やスポーツは健康に良いのか、悪いのか」をテーマに、運動の功罪から健康とスポーツ・身体運動の関係を考えてみる。そして「よく生きてゆく人間」を目指して、科学的な見地から自分自身の姿や生きていることメカニズムを心得て生活してもらいたい。そして、授業の成果として、生涯にわたる身体の健康にたいする意識と活動を期待する。			
授業の概要 本講義では、現代生活における健康と身体運動の意味、健康と身体運動のかかわり、身体運動のメカニズム、具体的な身体運動の実践方法などについて解説する。			
学生に対する評価の方法 期末試験（50%）、課題の提出（10%）、受講態度（40%）を総合して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 I－1. 身体は細胞のすみか、そして主は私 1) 自分を見る目をつくる 2回 2) 身体運動の意味 3回 3) 地球誕生のスケールの中に人間をおいてみる 4回 2. 宇宙空間における生体変化 5回 3. 運動しているとき、身体の中で何がおこっているのかー ヒトは動くようにできているー 6回 II－1. 生涯発達と健康 1) 発達と健康科学 7回 2) 身体能力の年齢的变化(ライフステージ)に応じた健康スポーツ 8回 III－歩行の生涯健康 1. DNAの持つはるかな記憶 2. ヒトがサルと別れた日 9回 3. 歩行の定義 10回 4. 歩行の運動学的意義 1) 歩く(ウォーキング)速さと歩幅 2) 歩く速さとエネルギー消費量 11回 3) 歩行ー健康に良い有酸素性運動ー 12回 4) 歩行と健康 5) 歩行と脳 13回 IV－運動とからだの健康 1. 運動不足と健康障害 2. 肥満の予防・解消ー基礎代謝量・活動代謝量を高めるためのトレーニング 14回 3. 健康的に痩せるとはどういうことか V－運動の功罪 15回 期末試験			
使用教科書 生涯発達の健康科学 藤井勝紀共著（杏林書院）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康科学		講義	森 奈緒美
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次前期	選択	ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 1) 健康な生活を送るために必要となるスポーツや運動に関する科学的な基礎知識を理解する。 2) 生涯にわたる継続的なスポーツ・運動実践による体力の維持・増進を図る方法について理解する。			
授業の概要 本科目では、スポーツと健康に関する科学的知識の習得を目的とする。運動と健康、生活習慣病予防と運動、健康のための効果的な運動実践法、生涯スポーツ、運動生活の設計、事故予防への配慮、などの内容を取り上げる。			
学生に対する評価の方法 毎回の課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（30%）、レポート（20%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の目的と講義内容の概要、自己学習の仕方、参考図書の紹介、授業日程の説明 第2回 スポーツ・運動の意義と健康との関わり 第3回 生活習慣病予防のための運動の理論と実践法 第4回 定期的な運動実践の効果及び運動例 体脂肪率からみたウエイトコントロールの重要性 第5回 歩数による日常生活の運動量の把握 生活習慣チェックリストを用いた健康生活の自己点検 第6回 健康のための個人に応じた運動内容、運動量、運動強度、時間、頻度などを配慮した運動プログラムについて 生活習慣病予防のための運動実践記録をまとめ、レポートを提出する。 第7回 運動施設の整備・拡充について 第8回 運動クラブの育成・援助について 第9回 運動プログラム・行事の設定・提供について 第10回 運動生活の類型、構造及び運動者行動 第11回 運動と体力及びトレーニングの原則について 第12回 運動の安全な行い方と熱中症を予防する具体的方法 第13回 健康のための生涯スポーツの理論と実践法 第14回 課題のまとめ 第15回 総括			
使用教科書 授業の中でプリント等の資料を配付する。 参考図書（購入は自由）：「健康とスポーツ概論 ― 運動と健康の理論 ―」 芝山正治他著 圭文社			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語について復習しておくこと。			

[授業科目名] 英語コミュニケーション I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] ファルク・スコット・シキ ポージン・ポーター・モヤ ポッティンジャー・マクドナルド
[単位数] 1	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語ネイティブスピーカーが担当し、授業進行は基本的に英語で行う。ネイティブの発話に慣れ、基本的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。			
授業の概要 自己紹介に始まり、身近な生活に関わる話題について表現できるように指導する。その為に先ず、自然の速度で話される英語を理解する訓練をしながら、正しい発音の仕方、さまざまな実用的な英語表現を習得させる。クラス内の、実質的で有効なコミュニケーションを可能にするために少人数クラスを設定する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introducing Self and Others.（自己や周りの人の紹介） 第02回 Talking about Daily Routine.（日常生活について語る） 第03回 Asking to do Something.（してもらいたいことをお願いする） 第04回 Talking about Likes / Dislikes.（好き・嫌いについて語る） 第05回 Talking about Experiences.（自分の経験談を語る） 第06回 Exchanging Personal Information.（個人のアピールを試みる） 第07回 Talking about Frequency of Activities.（クラブやサークルについて語る） 第08回 Talking about Past Schedule.（今までのスケジュールを紹介する） 第09回 Describing Locations of Places.（場所の具体的な位置を述べる） 第10回 Talking numbers: Time, schedule, and prices.（数表現についての練習：時間、計画、値段など） 第11回 Checking / Confirming Information.（情報の精査と確認） 第12回 Positive / Negative Tag Questions.（肯定形・否定形の付加疑問文の練習） 第13回 Talking about Future Plans.（先々の計画について語る） 第14回 Review Activities / Prep for final oral Test.（総復習・最終オーラルテストの準備） 第15回 Final oral Test in small groups.（小グループごとの最終オーラルテストを実施）			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅡ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤・ファルク・スコット・シキ ボージン・ポーター・モヤ マクドナルド・ポッティンジャー
[単位数] 1	[開講期] 1年次後期	[必修・選択] 選択（一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英語コミュニケーションⅠに引き続き、さらに進んだコミュニケーション能力の増進を目的とする。日常生活上想定されるさまざまなシチュエーションに対応できるようよう訓練する。			
授業の概要 徹底的なパターン練習によって基本表現を習得したうえで、より幅広い会話範囲を維持できるように、語彙力の増強に努める。想定される一般的なシチュエーションを発展させることによって、より現実的な応用力を高める。英語コミュニケーションⅠと同様、小人数クラスで行う。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 出席状況30%、授業参加貢献度30%、最終オーラルテスト40%の割合で評価する。再評価は行わない。出席数は、授業参加貢献度評価にも影響する。全授業回数の3分の1以上の欠席者には単位は与えられない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Responding to a question or statement. Following up a conversation. (質問および提示に対して回答する。英会話を続ける。) 第02回 Agreeing and disagreeing an opinion. Asking for and giving shorter directions. (意見に対して賛成したり反対したりする。簡単な指示の内容を尋ねたり、与えたりする。) 第03回 Giving an opinion. Giving reasons. Starting and following up conversation. (意見を述べる。理由を述べる。会話を始めて、そのまま続ける。) 第04回 Giving instructions. Asking for help. Commenting. (指示を与える。助けを求める。感想を述べる。) 第05回 Inquiring and giving information about times and prices. (時間と値段について尋ねたり情報を与えたりする。) 第06回 Getting attention. Talking about countries, cities, travel abroad and entertainment. (注意をこちらに向ける。国、都市、海外旅行そして娯楽について話合う。) 第07回 Confirming and giving advice. Saying good-bye. Talking about friends. (助言を確認したり与えたりする。お別れの挨拶。友達のことを語る。) 第08回 Talking about holidays/events plans. Ending and following up a conversation. (休暇やイベント計画について語る。会話を終わらせるまたはそのまま続ける。) 第09回 Talking about New Year's custom and entertainment. Talking about similarities. (新年の習慣や楽しみ方について語る。他国との類似点を語る。) 第10回 Responding to happy/unhappy news. (幸福なもしくは不幸な知らせに対応する。) 第11回 Asking people to do things formally and informally. (人々に型にはめて行動すること、また型にはまらないで行動することを依頼する。) 第12回 Inquiring and giving information about drugs/medicines. Confirming a statement. (薬についての情報を尋ねたり教えたりする。提示内容を確認する。) 第13回 Inquiring and giving information about tours abroad. English for Study Abroad. (海外旅行について尋ねたり教えたりする。海外で学ぶ英語) 第14回 Excitements. Thanks. Closing remarks. (感激の言葉。感謝の言葉。言及を終える。) 第15回 Final Oral test in small groups. (小グループでの最終会話テスト)			
使用教科書 原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。			
自己学習の内容等アドバイス 機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。			

[授業科目名] 英語コミュニケーションⅢ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] S.ポージン
[単位数] 1	[開講期] 2年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ※ヒューマンケア学部 08 生のみ 開講期：4年次前期／単位：2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ <u>This class has 3 goals</u> 1. Learn vocabulary 2. Practice speaking 3. Use English in a game or activity</p>			
<p>授業の概要 Most of the lessons will begin by a short free talk between the teacher and the course participants individually or a game between the teacher and the whole class. Below is a tentative study plan for 15 lessons comprising communication skills and areas. However, there will be some changes in the order and the contents according to the member' interests, learning needs, and spoken abilities.</p>			
<p>学生に対する評価の方法 Grading is based on the following 1. being active in class 50 2. group activities 30 3. speaking/interview test 20 Total 100</p>			
<p>授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 Introduction to this class. 第02回 Speaking about yourself. 第03回 Speaking about daily life 第04回 Describing people 第05回 Group Activity Preparation 第06回 Group Activity 第07回 Speaking about past activities 第08回 Speaking about plans 第09回 Giving instructions 第10回 Group Activity Preparation 第11回 Group Activity 第12回 Inviting, accepting and rejecting invitations 第13回 Review for test 第14回 Vocabulary/interview test 第15回 Last class. Speaking about your future</p>			
<p>使用教科書 No textbook is required for this class. The teacher will provide all materials for this class..</p>			
<p>自己学習の内容等アドバイス Students are recommended to review contents they have studied in the Eigo Communication I and II, and / or listen to English conversation programs available on radio, TV and the Internet before taking the Eigo Communication III course.</p>			

[授業科目名] 総合英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択 (一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 英文で書かれた専門書や雑誌、各種文献はもちろん、情報時代の今日、インターネットで海外の最新情報を得るために英語の読解力は不可欠である。本講では、英語で書かれた文章の意味を正確に理解する能力の習得を目的とする。			
授業の概要 語と語の有機的な関係を重視したフレーズ・リーディングから、パラグラフ・リーディングへと読み進める訓練をする。対象によっては精読よりもむしろ早く要点を把握することが優先される場合もあり、それぞれの目的に応じた読み方を学習する。英訳量を増やし、経験からそのテクニックを学ぶ。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する。 第2回 演習 英文和訳① 英語講読の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 英文和訳② 第2回からステップアップして、段階的に英文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 英文和訳③ 第3回で行った和訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 英文和訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 英文和訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた英文内容で和訳を行う。 第8回 演習 英文和訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第9回 演習 英文和訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第10回 演習 英文和訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第11回 演習 英文和訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第12回 演習 英文和訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの英文和訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題訳提出 担当者が一定の英文を提示し、テスト形式解答もしくは課題として提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語 I (前期) では、主として英文和訳を学習するので、英語本や雑誌、またインターネットなどで英語の文章に触れる機会をできるだけ多く持つように心がけてほしい。			

[授業科目名] 総合英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤(直)・加藤(直)・増田 足立・杉浦(恵)・森(明)
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(一部必修)	備考 ※ヒューマンケア学部は必修
授業の到達目標及びテーマ 総合英語Ⅰで習得した英語読解力に基づいて、正しい英語表現力を養うことを目標とする。日本語の内容をそれぞれの目的に応じ正確に英語で表現するためには、多くの英文に接し、語彙・語法・英語特有の表現などについて知ることが必要である。			
授業の概要 本講では現代社会のさまざまな問題や、興味深い身近な話題を扱ったマテリアルを用いて実用的な語彙、語法を習得させながら、英語表現の訓練をする。単に機械的な和文英訳ではなく、自己表現につながるものとして、英語の文章を書く能力を高めたい。量を重ね、テクニックを習得する。 尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。			
学生に対する評価の方法 テストもしくは課題60%、出席状況20%、授業受講態度・姿勢20%で評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 講義 授業計画・試験方法(評価方法)についての説明 今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する 第2回 演習 和文英訳① 和文英訳の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。 第3回 演習 和文英訳② 第2回からステップアップして、段階的に和文内容および長さのレベルを上げる。 第4回 演習 和文英訳③ 第3回で行った英訳用教材のレベルを上げる。 第5回 演習 和文英訳④ 今後順次、教材レベルを向上させて行く。 第6回 演習 平常テスト実施 第5回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。 第7回 演習 和文英訳⑤ 第6回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた和文内容で英訳を行う。 第8回 演習 和文英訳⑥ 第7回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第9回 演習 和文英訳⑦ 第8回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第10回 演習 和文英訳⑧ 第9回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第11回 演習 和文英訳⑨ 第10回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第12回 演習 和文英訳⑩ 第11回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。 第13回 演習 復習・質疑応答 いままでの和訳英訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。 第14回 演習 最終テストもしくは課題形式英作文提出 担当者が一定の和文を提示し、テスト形式解答をする。もしくは課題英作文を提出する。 第15回 予備日 学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。			
使用教科書 最初の授業にて、もしくは授業ごとに担当者がプリントなどで配布する。原則として教科書は使わない。			
自己学習の内容等アドバイス 総合英語Ⅱ(後期)では、主として和文英訳を学習するので、本や雑誌、またインターネットなどで自分が英語に訳せそうな日本語の文章に触れ、実際に英語で表現してみる。(初段階では翻訳ソフトを使ってもらわない。但し、翻訳ソフトの訳は間違いが多々あるので、のち修正する必要がある。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。英会話で雑談する教材も用意。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 専門科目からの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 専門科目からの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 総合英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期 ※4年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部 ※08生のみ：4年次前期
授業の到達目標及びテーマ 家族的な明るい雰囲気の中で、異国語としての英語を話す・聴く・書く・読むの4技能を通じて、英語国の文化・歴史・習慣などを学習する。			
授業の概要 異国を理解するには、母国の事情も知っていると、比較しながら、効果的に学習できるから、日本の民話や詩歌を英語で読んでみる。インターネットから、新しい海外情報も入手して、ニュース英語の読み方も、身に付けてもらいたい。英語国の人情を、少しでもわかるために、ジョークを英語で読む機会も作りたい。日本の小咄・落語も、英語で鑑賞する。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 宮沢賢治の「雨にも負けず…」を英語で読む。 第2回 英会話の練習。 第3回 ネットからの教材。 第4回 英語のジョーク。 第5回 日本の小咄を英語で読む。 第6回 ピーター・ラビットを読む。 第7回 海外ニュースを読む。 第8回 日本の昔話を英語で読む。 第9回 ネットからの教材。 第10回 英語の歌。 第11回 英語のなぞなぞ問題。 第12回 ネットからの教材。 第13回 定期試験についての傾向と対策。 第14回 定期試験。 第15回 落語を英語で楽しむ。 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 毎回、プリントを用意するので、特定のテキストは、採用しない。常に、辞書を持参してほしい（できれば、昔からの紙の辞書を）			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 英語検定2級に合格するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 異国語としての英語学習を通して、自国語と比較しながら、英語国の文化・歴史・習慣などを学びたい。英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点に置きながら、家族的雰囲気の中で、みんなと一緒に楽しく、英語に慣れるような授業をめざす。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50％）と14回目の授業で実施する試験結果（50％）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を利用して基礎力養成。 第2回 英検2級問題の出題形式を解説。 第3回 文法問題を中心に解く。 第4回 同上 第5回 比較的短い英文を解釈する。 第6回 同上 第7回 Eメールの英文を解説する。 第8回 同上 復習の単語小テスト 第9回 やや長い英文を速読して、大意を把握する訓練。 第10回 同上 第11回 リスニングテストの実施。 第12回 長文英語の内容理解の方法を説明する。 第13回 同上 第14回 定期試験 第15回 二次面接試験の解説と実施。 上記の授業計画は、学生の反応・関心と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変更したりすることもあります。			
使用教科書 「7日間完成英検2級予想問題ドリル（旺文社）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2級」合格のための実力を養う事を目的としている。英検2級の問題は簡単ではないが、合格のためには満点を取る必要は全くない。よって、一次試験においては「各セクションの攻略」、二次試験においては、「英語面接の練習」という準備の有無が合格への大きな決め手となる。このため、各問題に取り組む中で、それぞれの正解・不正解の「理由・意図」をおさえ、「合格のための自分の指針を知る事」が授業のテーマになる。			
授業の概要 15回という限られた授業数の中で短期間集中的な問題演習となる。英検2級の出題形式を体験し、それぞれの問題の意図を探り適確に応答するコツをつかめる授業となるよう配慮する。授業の後半では二次試験(英語面接)の準備も行う。授業の開始時には簡単な復習の時間がある。 時間が許す限り、問題演習のみならずさまざまな言語材料(映画、TVドラマ、インターネット)を提供する予定。『自分の得意とする英語学習法』を見出し、「英語の授業以外でも英語に親しめる方法」見出して欲しい。本授業はComputer LABにて行うため、コンピュータを用いた英語学習を身につける良い機会にもなる。授業への要望などは、積極的に受け入れる方針であるため、遠慮なく要望を述べてもらいたい。英検2級は就職の際に、履歴書において十分なアピールとなる資格である。その事を念頭に置いて、真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み(30%)、課題提出(30%)、および確認テスト(3回)での得点(40%)を考慮して評価する。なお、課題については、問題を解答し、電子メールにて答案内容を提出すること。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回目は、授業内容の説明および自分の長所短所を知るための模擬試験の場である。 第2回～第6回までは、英検2級の「語彙力・英熟語の習得・語順整序・(読解練習)」の問題演習と攻略を行う。第7回～第11回までは、「リスニング」の問題演習と攻略を行う。第13回と第14回では、2次試験対策を行うが、あくまで予定であり、授業の様子を見て変更する可能性はある。 第1回 授業および英検2級についての説明。受講生の英検へのニーズ調査。 第2回 語い問題 (part1) 第3回 語い問題 (part2) 第4回 語法問題 (part1) 第5回 語法問題 (part2) 第6回 語順整序 (part1) + 復習 第7回 第1回確認テスト 第8回 リスニング演習 (part1) 第9回 リスニング演習 (part2) 第10回 リスニング演習 (part3) 第11回 リスニング演習 (復習) 第12回 第2回確認テスト 第13回 2次試験対策 (英語面接) (part1) 第14回 2次試験対策 (英語面接) (part2) 第15回 第3回確認テストおよび総括第1回			
使用教科書 英検2級 頻出度別問題集 (CD付き) (高橋書店)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 林 久男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ TOEICテストで、目的に応じた高得点を獲得するための英語力を養成すること。現代英語に多面的に取り組む。			
授業の概要 出題形式を分かりやすく解説する。過去の問題を参考にして、問題形式に慣れるように、練習を繰り返す。英語学習を通して、英語国の文化・歴史・習慣なども、詳しく面白く説明していく。もちろん、英語を読む・聴く・話す・書くという4技能を重点において、授業を進める。家族的雰囲気の中で、みんなで楽しく、英語に触れて、親しめる工夫をしたい。			
学生に対する評価の方法 平常の出席率と授業に対する取り組む姿勢（50%）と14回目の授業で実施する試験結果（50%）を総合的に判断して評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業の内容説明。過去の問題を参考に、出題形式を解説。 第2回 写真描写問題を解説。 第3回 応答問題を解説。 第4回 会話問題を解説。 第5回 説明文問題を解説。 第6回 短文穴埋め問題を解説。 第7回 長文穴埋め問題を解説。 第8回 読解問題を解説。 第9回 復習単語小テスト。 第10回 弱点の補強。 第11回 同上 第12回 応用問題。 第13回 定期試験の傾向と対策 第14回 定期試験 第15回 全体的総復習&まとめ 上記の授業計画は、受講生の興味と進捗状況に応じて、臨機応変に順番を変更したり、一部内容を変えることもありうる。			
使用教科書 「TOEICテスト対策実況中継（コスモピア）」			
自己学習の内容等アドバイス 語学学習の基本は、単語力と基本文法力。予習より復習に重点を置いて、毎回新出単語と語句を見直すこと。習った英文を音読練習することの努力を忘れないでください。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、今日の日本企業で広く採用される英語能力判定試験である TOEIC 試験の対策を目的としている。目標を履歴書に書ける点数である“500 点”達成と定めるが、内容は決して容易な問題ばかりではない。当然ながら教員は授業に投入するが、履修生の頑張りをも期待する。TOEIC という試験の「Listening」、および「Reading」の 2 セクションからなるが、その双方を体験し、攻略のための力の養成が授業のテーマになる。			
授業の概要 <u>TOEIC の問題形式はかなり固定されているが、限られた時間内で数多くの問題(200 問)が出る。そのため、じっくり考えながら問題を解く手法や、一文ずつ訳して解答する手法は適切ではない。「問題からいち早く最低限の情報を読み取り解答する」ことが要求される。</u> ただ、そのためには、普段の取り組みの中でポイントをつかむ意識を持つ必要がある。授業では「リスニング」「リーディング」双方をバランスよく取り入れて進む予定であるが、合理的かつ実効性のある試験対策の場にしていきたい。また、授業への受講生からの要望などを取り入れていく予定である。積極的に要望等、伝えてもらいたい。コンピューターを各々に備えた教室での授業となる。			
学生に対する評価の方法 出席 (20%)、授業態度 (20%)、課題 (20%) に加え、2 回の確認テストでの得点(40%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) TOEIC の試験形式は、以下の形となっている。 ①リスニング(聞き取り ⇒ 4 種類) (1) 写真問題(10 問) (2) 質問と返答の問題(30 問) (3) 会話文問題(30 問) (4) モノログ(一人語り)の問題(30 問) ②リーディング(読み取り ⇒ 3 種類) (1) 短文穴埋め問題(40 問) (2) 長文穴埋め問題(12 問) (3) 短文読解問題(48 問) 使用するテキストは上記の 7 つのセクションを、それぞれのユニットに含んだ内容の構成となっている。下記の通り、様々な話題があるので楽しみつつ取り組む事も良い。 (〔 〕の中は発音と構文のテーマ)			
第 1 回 授業および TOEIC に関する説明と TOEIC に対する受講生のニーズの調査。 第 2 回 テキスト Lesson1 (旅行) [接尾辞による品詞の見極め] 第 3 回 テキスト Lesson2 (日常生活) [注意すべき主語と動詞の一致] 第 4 回 テキスト Lesson3 (健康) [動詞の後の動名詞・不定詞の選択] 第 5 回 テキスト Lesson4 (外食) [分詞の叙述用法と限定用法] 第 6 回 テキスト Lesson5 (出来事) [関係詞の制限用法と非制限用法] 第 7 回 第 1 回確認テスト 第 8 回 テキスト Lesson6 (遊び) [注意すべき受動態] 第 9 回 テキスト Lesson7 (メディア) [同形の単語の品詞の見極め] 第 10 回 テキスト Lesson8 (オフィス) [3 つの完了形の違い] 第 11 回 テキスト Lesson9 (人材) [比較を使った慣用表現] 第 12 回 テキスト Lesson10 (金融) [置詞・接続詞いずれにも使える語] 第 13 回 テキスト Lesson 11 (昇進) [従属節における主語の省略] 第 14 回 テキスト Lesson12 (購買) [代名詞の特殊な用法] 第 15 回 全体総括と今後の指針の指示。第 2 回確認テスト ※ クラスの全体的な英語運用能力によって、授業内容は変更される可能性がある。			
使用教科書 THE NEXT STAGE TO THE TOEIC TEST Pre-intermediate 金星堂			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] 実践英語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M.ファルク
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ファッション造形学科
授業の到達目標及びテーマ 今日広く社会で評価されている英語力試験である TOEIC 450-500 点以上達成を目標とし、文法、リスニング、リーディングを中心とする試験対策と問題練習のための演習である。目的達成のための (Task-based) リスニング、英文法および語法に関する CR (Conscious Raising)、英文による情報の要点理解等具体的な実践を通し、試験対策を合理的かつ実効性のあるものにする。			
授業の概要 Most of the TOEIC study areas below are taught through quizzes, and simulation activities. At the beginning, the students will take an original and complete TOEIC test with no preparation. Later, they learn and practice the required TOEIC test taking /learning skills in pairs, groups and with the whole-class; and then take the original complete TOEIC test again. During the study, the students will work with the teacher individually to get confidence in understanding the TOEIC strategies according to their own abilities. . Below is a tentative study plan for 15 lessons. However, there will be some changes in the order and the contents according to the students' interests, and learning needs.			
学生に対する評価の方法 学期中のテストは実施しません。成績評価は、平常の課題作成 (50%)、授業内における授業に関する討論への参加度 (50%) で決まる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業目的と実践テスト1ー宿題。 第2回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合い。 第3回 聴解テスト パート1：実践テスト1について解説と話し合いおよび実践テスト2ー宿題。 第4回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第5回 聴解テスト パート2：質疑応答および実践テスト2についての話し合い。 第6回 聴解テスト パート3：簡単な英会話、実践テスト2についての話し合いおよび実践テスト3ー宿題。 第7回 聴解テスト パート3：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第8回 聴解テスト パート4：簡単な英会話および実践テスト3についての話し合い。 第9回 聴解テスト パート4：簡単な英会話、実践テスト3についての話し合いおよび実践テスト4ー宿題。 第10回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第11回 読解テスト パート5：文法・英文構成および実践テスト4についての話し合い。 第12回 読解テスト パート6：読解、モデルテスト4についての話し合いおよび実践テスト5ー宿題。 第13回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第14回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。 第15回 読解テスト パート6：読解および実践テスト5についての話し合い。			
使用教科書 教科書: Anne Tayer. <i>Target TOEIC</i> (2 nd Edition). Compass Publishing.2006. (about 3,000 yen) TOEIC 情報: http://myhome.shinbiro.com/~jinkag/toEIC.htm			
自己学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てほしい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 実践英語Ⅲ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 明智
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は、TOEFL (Test of English as a Foreign Language)の試験対策を目標としている。将来、英語圏の大学や大学院において本格的な海外留学を希望している学生やさらに高い英語力を付けたい学生に向けて、学術的な英語力をつける内容が授業のテーマである。(TOEIC 対策ではない点に注意する事)			
授業の概要 現在の TOEFL は、Listening、Reading、Writing、Speaking の 4 セクションから成るが、名古屋学芸大学が実施する留学システム内の TOEFL では、Listening、Grammar、Reading の 3 セクションになり、試験形式が変わる。よって、初回の授業で、受講希望者のニーズを確認する予定である。基本的に、本授業では短時間で結果が出やすい Listening のセクションに特に着目して授業内容を進めていく。ただ、Grammar や、Speaking・Writing のセクションも、解答のコツがあるため、スコアをあげるための方法を示したい。また、様々な言語材料 (映画、音楽、インターネットなど) を、時間が許す限り授業で紹介する。授業では、Computer Lab にて問題演習する機会を設ける予定である。コンピュータを用いた英語学習方法を身につける良い機会にしたい。大学での外国留学を考えている意欲ある学生の真剣な取り組みを求める。			
学生に対する評価の方法 出席、授業に対する取り組み (30%)、課題提出 (30%)、および模擬テスト 2 回 (40%) での得点を考慮して評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <ul style="list-style-type: none"> ・ TOEFL への準備段階として、第 2 回～第 7 回までは一文ずつに区切った形で TOEFL の英文に取り組み、さらに学術的な語いに触れていくための内容を行う。 ・ スコアアップへの実践力を高めるため、第 9 回からは TOEFL の実際の問題に似た形の英文を対象にしつつ授業内容を進めていく。 ・ 時間が許す限り、毎回の授業で Grammar や Speaking・Writing の攻略も授業内容に含める。 第 1 回 講義に関する Introduction、および TOEFL についての説明。受講生の TOEFL へのニーズ調査。受講生の事前の英語力を調査するための模擬試験(成績には何ら関係しない) 第 2 回 問題演習: Listening (4～5 語のディクテーション / 5～6 語のディクテーション) + α ① 第 3 回 問題演習: Listening (ディクテーション否定形 / 否定形(not の短縮形)) + α ② 第 4 回 問題演習: Listening (ディクテーション l と r / 発音とスペル) + α ③ 第 5 回 問題演習: Listening (二重母音 / 長い名詞句) + α ④ 第 6 回 問題演習: Listening (慣用表現 / 7～8 語のディクテーション) + α ⑤ 第 7 回 問題演習: Listening (第 2 回から第 7 回までの復習) + α ⑥ 第 8 回 第 1 回模擬試験実施 (授業内) および既習事項確認 第 9 回 問題演習: Listening (ノートの取り方 / 話し言葉の特徴) + Grammar & Speaking 第 10 回 問題演習: Listening (使役動詞 / 助動詞(could/should/would)) + Grammar & Speaking 第 11 回 問題演習: Listening (口語表現 / 句動詞・イディオム) + Grammar & Speaking 第 12 回 問題演習: Listening (基本動詞 学生生活のキーワード①) + Grammar & Writing 第 13 回 問題演習: Listening (学生生活のキーワード② / 健康相談) + Grammar & Writing 第 14 回 問題演習: Listening (第 9 回から第 13 回までの復習) + Grammar & Writing 第 15 回 第 2 回模擬試験実施 (授業内) および総括			
使用教科書 TOEFL テストリスニング問題 350 喜田慶文 著 (旺文社)			
自己学習の内容等アドバイス 英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。			

[授業科目名] フランス語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 視聴覚教材の付いた教科書を用いて、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。また、フランスの文化についての理解も深める。フランス語検定試験の5級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。会話で重要な単語、表現、文法事項を学び、練習問題で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせ60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業について説明、第0課（アルファベと基本表現） 第2回 第0課の復習、第1課（国籍を言う） 第3回 第0課のテスト、第1課復習、第2課（名前・職業を言う） 第4回 第1課のテスト、第2課復習、フランス語の発音と綴りの読み方 第5回 第2課のテスト、第3課（もちものをたずねる） 第6回 第3課復習、第4課（趣味を語る） 第7回 第3課のテスト、第4課復習、第1～第4課復習の練習問題 第8回 第4課のテスト、第5課（誰か尋ねる） 第9回 第5課復習、第6課（したいことを尋ねる） 第10回 第5課テスト、第6課復習、第7課（住んでいるところを言う） 第11回 第6課テスト、第7課復習、第8課（何をしているか尋ねる） 第12回 第7課テスト、第8課復習、第5～第8課の練習問題 第13回 第8課テスト、第9課（家族を語る） 第14回 第9課復習、第10課（年齢を言う） 第15回 第9課テスト、第10課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 復習してテストに備えること			

[授業科目名] フランス語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 田村 真理
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ フランス語Ⅰに続き、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）において均等に使えることをめざす。 また、フランスの文化についての理解も深める。 フランス語検定試験の4級が目標。			
授業の概要 教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。はじめの数回はフランス語のⅠで学習した内容を復習し、その後は各課の「会話」を通じて、重要な単語、表現、文法事項を学び、「練習問題」で理解と定着をはかる。ほぼ2週に1課のペースで進み、各課毎に小テストを行う。			
学生に対する評価の方法 各課で小テストを行い、それを合計して60点満点に換算し、出席点（全部出席すると40点、1回欠席するとマイナス5点）とあわせて60点以上を合格とする。遅刻は欠席とし、5回欠席すると失格。再試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 フランス語Ⅰで学んだ内容の復習（第0課～第3課） 第2回 同上（第4課～第6課） 第3回 同上（第7課～第9課） 第4回 第10課（年齢を言う） 第5回 第10課復習、第11課（時刻を言う） 第6回 第10課テスト、第11課復習、第9～第11課の練習問題 第7回 第11課テスト、第12課（紹介する） 第8回 第12課復習、第13課（日課を説明する） 第9回 第12課テスト、第13課復習、第14課（量を表す） 第10回 第13課テスト、第14課復習、第15課（天候を言う） 第11回 第14課テスト、第15課復習、第12～第15課の練習問題 第12回 第15課テスト、第16課（比較する） 第13回 第16課復習、第17課（過去のことを語る） 第14回 第16課テスト、第17課復習、第18課（未来のことを語る） 第15回 第17課テスト、第18課復習			
使用教科書 藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社			
自己学習の内容等アドバイス 必ず復習し、テストのために準備して下さい。			

[授業科目名] 中国語 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本授業は半年で中国語の発音要領、基礎的文法と初歩的な会話を身に付けることを目標とする。			
授業の概要 中国語はリズム感がとても大事なので、まず発音をしっかりと教える。正確な発音から簡単な会話に入り、さらに短文を理解するために、必要な文法を系統的に教えていく。授業は教材に沿って進行する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第1課 中国語の特徴と発音要領及びその構成を説明する。 第3回 第2課 母音・子音と声調(アクセント)を組んで発音の練習をさせる。 第4回 第3課 「自己紹介」。人称代名詞と平叙文、否定文の学習。 第5回 第3課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第4課 「これは誰のですか?」。指示代名詞、疑問詞、副詞と疑問文の学習。 第7回 第4課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第5課 「あなたはどこに行きますか?」。動詞の学習。 第9回 第5課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第6課 中国語と中国事情 第11回 第7課 「これはどうですか?」。形容詞の学習。 第12回 第7課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プレントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 中国語Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 李 萍
[単位数] 2	[開講期] 1年次後期 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ この授業では、それぞれの場面を設定して、受講者が自分なりの会話能力を形成していくための手がかりをつかませる。中国語での会話資質を向上させることを目的とする。			
授業の概要 この授業は「中国語Ⅰ」を修了した学生が受ける科目である。まず前半で習得したものを復習して、正確な発音に直す。「中国語Ⅰ」につづいてテキストの後半に沿って教え、文法も「中国語Ⅰ」の後につづく。各課が終わったごとに、本文の会話を真似して、それぞれ自分の事情に合う言葉に書き直す。その後、それらの短文で会話を練習する。			
学生に対する評価の方法 期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 履修に関するガイダンス・オリエンテーション 第2回 第8課 「中国語Ⅰ」で学んだ疑問詞、動詞、形容詞を復習する。 第3回 第9課 「中国語Ⅰ」で学んだ文の表現を復習する。 第4回 第10課 「あなたは食事をしましたか?」。過去形、完了文を学習する。 第5回 第10課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第6回 第11課 「彼はいつ用事がありますか?」。時間の表現を学習する。 第7回 第11課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第8回 第12課 「あなたの家は遠いです遠くないか?」。介詞、反復疑問文を学習する。 第9回 第12課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第10回 第13課 中国語と中国事情 第11回 第14課 「あなたは何時から始まりますか」。助動詞を学習する。 第12回 第14課の要点、難点を詳細に説明する。本文を真似して、トレーニングを行う。 第13回 「チャレンジ問題」を用いて学習する。 第14回 総合的復習。 第15回 全体のまとめ。 (受講者の理解度をみながら進度を調整する)			
使用教科書 プリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 前回の授業で学習した内容を復習してほしい。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・学ぶということ） 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンに「接続語」はいらない。 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 日本語表現		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鈴木 互
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 1～4年次：メディア造形学部 1～3年次：ヒューマンケア学部
授業の到達目標及びテーマ 特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。			
授業の概要 日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義概説と作文 第2回 書けることの再発見とその内容 第3回 何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。 第4回 起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。 第5回 「書き出し」と「主題」 第6回 明快な文章は一文が短い。 第7回 時間軸と方向軸について 第8回 文章のレッスンと作文 第9回 強い名詞と形容語 第10回 写生文と報告文について 第11回 小論文について（論より証拠） 第12回 履歴書で学ぶ日本語表現 1 第13回 履歴書で学ぶ日本語表現 2 第14回 テスト 第15回 講義のまとめ			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くこと。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。			

[授業科目名] 総合講座 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 高齢化および少子化という日本社会の現状に関して偏らない理解を持ち、将来の生活を考えるための視点を持てるようにすることを授業の目標とする。			
授業の概要 少子化・高齢化が急速に進行する社会の状況を正確に認識することは大切である。そして、それとともに、老年期は「余生」ではなく、「人生の収穫の時期であり、生の味わいを真に見つめる時期である」と捉えることも同様に大切である。そのためには何が必要か。自らの生をどのように生き、他者の生をどのように支援することができるか。以上のような問題を多面的に検討する。			
学生に対する評価の方法 総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 科目の位置づけや問題のありかについて解説をする。 併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法についても説明する。 《医学の立場から》 第2回 高齢化社会の姿 長寿世界一となった日本は、諸外国の模倣ではなく自らの手で未来長寿社会を築く責務を担うに至った。その高齢化社会の本質とは何か解説する。 第3回 介護保険 平成12年に導入した介護保険について、その特徴、導入の経緯、導入後5年の現状や見直しについて解説する。 第4回 高齢社会の健康科学 遺伝的因子より環境的因子が人間の寿命に影響を与えると認識され始めている。長寿と生活習慣との関係について解説する。 第5回 ターミナルケア 高齢社会を迎え「ターミナルケア」の必要性が高まってきている。「ターミナルケア」の役割、その重要性について解説する。 第6回 高齢社会の生と死 成熟した高齢社会では死の問題は避けて通れない。高齢者の死生観、生き甲斐、生きる幸せ、終末期のあり方について高齢者の立場から考えてみる。			

《社会科学の立場から》

第7回 高齢社会と経済成長

高齢者の増加は日本経済にとって経済成長を鈍化させるのか、あるいは、労働生産性や労働力はどうなっていくのかなど、経済的視点から高齢社会を論じる。

第8回 高齢社会と財政負担

高齢社会による財政負担および社会保障給付の問題を扱う。未曾有の高齢社会において、大きな支出項目となる財政負担、あるいは年金、医療費、福祉など、さまざまな面から功罪両面を論じる。

第9回 高齢社会による期待成長産業

シルバー産業、生活支援産業、ビジネス支援産業など、高齢化によって成長が期待される産業と産業構造の変化などについて論じる。

第10回 マーケティング論の立場から高齢社会を考える。

マーケティングの発想—消費者行動論の立場から、今後の高齢社会のあり様を考える。

《総合的学習》

第11回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。プレゼンテーションも試みる。

《人文科学の立場から》

第12回 「ふるさと学」

私たちはどのように「ふるさと」を持つのだろうか。必要とするのだろうか。どのようにして充実した環境を得て、如何に質の高い生活を得るかという問題を、少子高齢社会の「ふるさと」の姿という観点から論じる。

第13回 「老」の価値

「老」の文化論をともに考えてみたい。私たちの祖先は、「生老病死」をどのように受け止めてきたのだろうか。今ここにいる私たちには、「生老病死」をどのように見つめることができるだろうか。

第14回 ライフ・サイクル

「ライフ・サイクル」論について基本的な解説をする。併せて、諸民族のライフ・スタイルと、彼らが加齢 (aging) をどのように受け止めているか、いくつかの具体例をも紹介し、その智慧に学ぼうとする。

《まとめ》

第15回 まとめ

レポートの書き方について説明し、全体的なまとめを行う。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 総合講座Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 井形 昭弘・折笠 和文 松本 高志 他
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目は、「あなた（学生）にとって、環境問題とは何か」という問いかけを一貫した柱とするものである。地球環境の諸問題を理解し、率先して行動しようとする意識を持つことができるようになることを、授業の目標とする。</p>			
授業の概要 <p>環境に関わる危機的な兆候や状況が繰り返し問題にされているが、それらに関する情報は、未だ十分に公開されているとはいえない。このような中で、私たちはどのように行動することができるのか、必要なのかということ、さまざまな角度から解説する。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>総合的学習において、研究または作品を発表する学生に対しては、その発表内容を評価して成績とする。これを希望しない学生は、レポートを提出して評価を受けるものとする。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） 《オリエンテーション》 第1回 総説 「環境問題」について、現代文明のあり方の問題として捉えることから始める。併せて、学習の仕方についても助言をし、単位認定の方法を説明する。 《自然科学の立場から》以下3回は、外部講師が参加する。 第2回 自然科学の立場から見た地球環境 地球の歴史から人類の誕生、そして文明の起源を解説することから始める。文明の歴史は、環境への適応と、そして同時に環境への負荷の歴史でもある。 第3回 水とゴミ(1) 水などの資源に始まり、廃棄物の問題にいたるまで、第一線の研究者としてだけでなく、現場の陣頭指揮に当たった立場から、ありのままをわかりやすく紹介する。 第4回 水とゴミ(2) 環境の浄化やリサイクルの問題などを取りあげる。 《医学その他の立場から》 第5回 水俣病問題を考える 公害の原点とされている水俣病は50年前に水俣市の化学工場（当時新日本窒素、現在チッソ）から排出されたメチル水銀が魚類に蓄積し、それを多食した住民が罹患した。長く鹿児島で過ごし、この問題に深く関与してきた。その経緯を述べ、公害問題をともに考えてみたい。 第6回 屋久島の事例から考えること 富士山が世界遺産への登録を拒否されたことを知っているだろうか。その理由は散乱するゴミである。一方、屋久島は1993年に世界遺産に登録された。私たちの生活と環境との関わりをみつめるうえで、極めて貴重な事例となっている。長くその現場に取り組んできた立場から解説する。 第7回 放射能について 核兵器の脅威、放射能の害などについて解説する。原爆による被害の状況などを具に証言するゲスト・スピーカーが参加する予定である。			

《生物学の立場から》以下2回は外部講師が参加する。

第8回 環境問題と生物(1)

生態系はどのように連鎖しているか。そこで環境破壊が行なわれると、生命はどのような影響を受けるか。長く現場で取り組んできたこの分野の専門の講師を迎えて実施する。

第9回 環境問題と生物(2)

生物の棲息環境の保護について、具体的な取り組みの事例を紹介しながら、そのさまざまな問題点を考えていく。

《総合的学習》

第10回 総合的学習

小グループに分かれるなどして、各自が調べてきたことや考えたことなどを紹介しあい、相互に学ぶことを試みる。

《社会科学の立場から》

第11回 経済成長と環境

高度経済成長期から、安定成長期、グローバル化が進展した時期、バブル崩壊後といった、それぞれの局面の経済活動と、それに派生した環境問題を取り上げる。

第12回 環境ビジネス企業の最前線

環境を悪化させない社会経済システムの構築に向けた取り組みについて論じる。また、環境ビジネス企業最前線の取り組みも解説する。

《人文科学の立場から》

第13回 環境に関する教育・思想の潮流と具体的な取り組み

「環境」は今、どのように論じられているか。それらのいくつかを解説し、身近な取り組みについても紹介する。

第14回 リングの教え・海の教え

環境の問題に取り組んだ人々の事例と、そこから学ぶことのできる教訓について解説する。

第15回 環境人類学の黎明

世界の諸国・諸民族は、環境の問題にどのように直面してきたか、また取り組んできたか。それらの事例から、今後の人類のあるべき姿についても考えたい。

使用教科書

教科書は特に定めず、必要に応じて教材プリント等を用いる。

自己学習の内容等アドバイス

授業の中で、必要に応じて課題を与える。「総合的学習」でプレゼンテーションに参加する学生は、事前に相談をし、指導を受け、十分な準備をすることが必要となる。

[授業科目名] 教養総合演習 I (短編小説を書く)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 大島 龍彦
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期リポート
授業の到達目標及びテーマ 小説作法を実践的に学び、1 編の短編小説を書き上げる。			
授業の概要 近現代の短編小説を分析（図形化）し、基本的な小説の作り方を知る。授業では小説執筆の 1 つのプロセスを学び、1 編の短編小説を完成させる。本授業では、「創作」という行為と作品の間のせめぎ合いを体験し、制作の苦悩と歓びとを体験する。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は、受講態度、予習、復習、提出作品など、総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第 1 回 授業概説（ある小説の分析「作図」を通して、今後行うべき作業について概説する） 第 2 回 あるテーマとその描き方について学ぶ。 第 3 回 テーマの見つけ方・各自 10 のテーマを設定する。 第 4 回 初めに主題文あり。主題文からストーリーへ。10 のテーマのうち、5 つのストーリーを書く。 第 5 回 小説にプロットは欠かせない。5 つのうち、3 つの設計図（小説の姿）を書く。 第 6 回 3 つの設計図にそれぞれ登場する人物の履歴書作り。 第 7 回 場面と 3 つの作品の参考資料の収集。 第 8 回 3 つの設計図から 1 編を選び、ストーリー・プロット（作図）・登場人物等を再考する。 第 9 回 1 編の小説を書き始める。 第 10 回 1 編の小説を書き終わる。 第 11 回 第 1 回改訂作業（登場人物は機能しているか） 第 12 回 第 2 回改訂作業（導入部は読者の心を掴むか・障害物は適切か） 第 13 回 第 3 回改訂作業（伏線・ユーモア・小道具などは適切か） 第 14 回 各自朗読と批評 1 第 15 回 各自朗読と批評 2			
使用教科書 必要に応じてプリントを配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 次回のシラバスの内容に留意して自主的に準備してくる。また、演習中に実践したことを再考するなど、特に復習に力を入れると学習効果が上がる。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (『アジアの歴史』を読む)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 英明
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 松田壽男博士の名著『アジアの歴史』を講読する。 本書は、アジアの地理、風土、歴史を、世界史的視野において分析・通観したもので、出色の概説書である。これを学ぶことによって、近隣アジアの基礎知識を身につけつつ、社会人としての力量向上をめざす。			
授業の概要 従来型の「世界史」に対する批判の書であり、また一方で平易な入門書でもある本書を、丹念に読み、これを報告発表することによって、地理的・歴史的知識、あるいは専門用語や教養常識を蓄積するとともに、読解力、要約力、批判力、報告力（レポート作成技術を含む）を養う。			
学生に対する評価の方法 試験は行わない。成績は、平常の演習内での報告・発表、質疑応答など授業参加状況によって、総合的に評価する。再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 報告分担 第3回 「世界史とアジア」「歴史と風土」 第4回 「アジア史の基礎」 第5回 「黄土の文化」「中国の北と南」 第6回 「インド文化のひろがり」 第7回 「海洋に生きる人たち」 第8回 「地中海という世界」 第9回 「イラン文化のかがやき」 第10回 「アジアの十字路」「西域の文化」 第11回 「漢民族の栄光」 第12回 「絹馬の交易」「ステップの道」 第13回 「トルコ＝イスラーム」 第14回 「世界史の転換」 第15回 総括			
使用教科書 松田壽男『アジアの歴史』（岩波現代文庫） 『世界史年表・地図』（吉川弘文館） 『なるほど知図帳 2011 世界』（昭文社）			
自己学習の内容等アドバイス テキストを読む際に、地名は歴史地図・現代地図で、歴史上の事柄は年表で確認しておくこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (マーケティング)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ※募集人数は 15 名前後
授業の到達目標及びテーマ マーケティングの理論と実践をテーマとして、各専攻学生の興味ある問題提起とマーケティングの理解および問題解決能力の育成を目的とする。学部・学科のそれぞれの専門教育と連動させ、マーケティング的な発想を培うまたとない機会となるであろう。			
授業の概要 マーケティングは、企業の経営戦略の考え方を学ぶためにも、賢い消費者になるためにも必要である。幸い、本学では管理栄養学科—食品流通、食品マーケティング、映像メディア学科—メディアを介したマーケティング活動、デザイン学科—普及活動や広告デザインとしての広告論、ファッション学科—流行理論や販売促進のためのプロモーション戦略、ヒューマンケア学部—各種子どもの市場調査とマーケティングの模索などを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 積極性や問題意識、自分の専攻分野に関するマーケティング的発想・応用度ならびにレポート等で評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 サブゼミ (演習) の概要とマーケティングとは何かを説明する。 第 2 回 マーケティングの歴史と理論 (平易に解説) 第 3 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 1 章—製品戦略に関する解説・説明 第 4 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 2 章—価格戦略に関する解説・説明 第 5 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 3 章—プロモーション (広告等) に関する解説・説明 第 6 回 マーケティングの基本理論 (輪読) 第 4 章—流通チャネルに関する説明・解説 第 7 回 マーケティングの最近の手法 (気付かないで多用している身近な話題) 第 8 回 マーケティングに関連する、各自興味ある問題テーマ等について話し合う。 第 9 回 消費者行動論 第 10 回 市場調査、マーケティング・リサーチ 第 11 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 12 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 13 回 各自あるいはグループの興味あるテーマとマーケティングの接点を見出し、問題意識をまとめて発表 (1~3 人程度で発表し討論を行う) 第 14 回 総括 第 15 回 レポート等の提出と半期を振り返って。			
使用教科書 未定			
自己学習の内容等アドバイス 基本となるマーケティングの理論を短期間でマスターすること。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (健やかにダイエット)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 正 美智子
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 受講対象者については要件参照
授業の到達目標及びテーマ ・身体についての問題点や課題を自ら発見・理解できる能力の育成を目的とする。 ・演習のテーマ：「からだを変える、からだは変わる “健やかにダイエット” 」 <受講の要件> ①体格指数(BMI)25 以上 ②体脂肪率 男子 25%以上、女子 30%以上 ③腹囲 男子 85cm、女子 80cm 以上 ①②③のいずれか一つ以上、該当する学生が対象			
授業の概要 本演習は、「肥満に対する効果的な運動」と「肥満対策を主にした有益な食習慣」について実体験をし、健康体重への減量に対する気運を高めること及び知識を行動につなげる「ヘルスリテラシー」の確立を目指す。			
学生に対する評価の方法 受講態度および課題に対する取組みの姿勢(40%)とレポートのできばえ(60%)を総合的に評価する。 なお、期末試験および再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 1 第 2 回 身体と運動を考える (サイエンスを学ぶ) ○ 文献研究 2 第 3 回 身体運動の展開 (栄養及び食習慣と運動の関係を理解し、応用する) ○ 運動前 身体組成の計測及び体力測定 ○ ライフコーダ (生活習慣記録機) の使用説明 第 4 回 身体運動の展開 1 ○ ライフコーダによる 1 週間分のデータを分析する ○ コンバインドトレーニングの実施 (レジスタンストレーニング、エアロビクス) 第 5 回 身体運動の展開 2 第 6 回 身体運動の展開 3 第 7 回 身体運動の展開 4 第 8 回 身体運動の展開 5 第 9 回 身体運動の展開 6 第 10 回 身体運動の展開 7 第 11 回 身体運動の展開 8 第 12 回 身体運動の展開 9 第 13 回 身体運動の展開 10 ○ コンバインドトレーニングの実施 ○ 運動後 身体組成の計測及び体力測定 第 14 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成) 第 15 回 データをまとめて結果を考察する (レポート作成)			
使用教科書 必要に応じて、資料を配布する			
自己学習の内容等アドバイス ・運動している自分自身を科学する。 「やってみるごと」→「やったことを言葉にすること」→「やったことの【理】を知ること」 ・知識を豊富にするために身体に関する図書を多く読むこと。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] M. ファルク
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ この授業の目的は、1) 各学生の専門分野 (管理栄養など) に関連する話題のプレゼンを行う 2) プレゼンに際して、学生間で英語で相互に意見交換する、などの基礎的技術を養う。個人個人の学習を把握するため、受講人数は10～15人くらいを予定している。 英語でプレゼンテーション・この授業を受けるにあたり、文法や語彙などの英語基礎学力は問わない。どのようにして面白いプレゼンができるかということを目指し、いかなる学生も受講できる。			
授業の概要 下記に挙げたほとんどの学習材料は、実生活、クイズ、疑似活動などを取り上げたもので、先ず初めは学生たちが事前準備なしで口頭によるプレゼンを行なう。後に計画を練ったり、準備したりして、更にプレゼンを進めて行く。学習期間中、学生は自信を持って計画を立案したり、自分のプレゼンを作成していくために、個々に教員と共に勉強して行く			
学生に対する評価の方法 成績評価の内訳は次の通り；レポート提出 (50%)、オーラルテストとしてのパワーポイントを使った自身の専門に関するプレゼン発表 (50%)。原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回～第5回 基礎英語コミュニケーションスキル (実践/復習) 第6回～第7回プレゼン一般を立案するための基礎技術 第8回～第9回一般的なプレゼンを構築するための基礎技術 第10回～第14回自己の専門分野に関連した内容のプレゼン実習 第15回最終オーラル試験として、自分の専門分野に関する内容のプレゼンを準備・実践する			
使用教科書 ・Jones, L. and Alexander, R. 2000. <i>New International Business English</i> . CPU. 学生は教科書購入の必要なし。上記の参考文献からのプリント類が準備される。ネット上からも教材を得る。			
準備学習の内容等アドバイス 受講を希望する学生は、上記の書籍と以下のウェブサイトから事前に授業に必要な情報を得てもらいたい。 URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/mfarooq/frqHP/default.html			

[授業科目名] 教養総合演習 I (諸外国事情)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安藤 直
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前・後期は同内容でリピート
授業の到達目標及びテーマ 基本的な英文を文法・語彙選択などを間違わずに作成する。英訳だけではなく、英作方法を修得する。 註) 「基礎英語学力向上のための Web 授業」がネット上に公開されているので、学内での空き時間ならびに自宅など学外での余暇の時間に各自が自由に学習できる。(学外から当該サイトへのアクセスには、大学ネットワークにログインする各自の ID・パスワードが必要) URL: http://nuas611d.nuas.ac.jp/			
授業の概要 各自が英語を母国語とする国をひとつ選び、その文化、歴史、政治、法律、習慣、日常生活などをインターネットや文献で調べ上げ、自分の意見や感想、コメントを加えた報告レポートを英語で書く。1,500～2,000語を目標とする。個人の学習内容や進捗度合いを見極めるために、10～15人を予定。使用教室は、E-31(東館3階同時通訳演習室)を予定している。(空きがない場合は小教室)			
学生に対する評価の方法 レポート内容70%、授業貢献度20%、授業受講態度・姿勢10%で評価する。 原則として、再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第01回 講義 授業計画・評価方法についての説明、およびレポートの書き方を教授 第02回～04回 演習 諸外国の情報を入手し、日本語でまとめ上げる。 第05回～08回 演習 日本語での情報内容を英語に訳し、自分のコメントも加える。 第09回～13回 演習 各自が訳した英文を担当教員がチェックし、修正しながら指導する。 第14回 演習 レポート提出 (個々にチェックを行い、修正箇所がある場合は次週に再提出) 第15回 演習 レポート最終提出 (完成版)			
使用教科書 原則として教科書は使わない。インターネットや雑誌などから情報を入手する。			
自己学習の内容等アドバイス 授業受講前に各自が雑誌やインターネットで必要な情報を入手し、学習材料として準備する。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (オペレーションズ・リサーチ)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 3年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人が生活していくと、その身の回りには多くの課題や問題が発生する。我々は、それら問題を解決するために多くの判断を下していかなければならない。一般にそれら判断は、現在の状況や過去の経験、直感などを基に下されることが多い。だが、そのような問題の中には数理的な要素を加味して対処した方が、遙かに確実に効果的な結果が得られるものも多数存在している。このように、様々な問題に対して数理的なアプローチで効果的な施策を考え解決を試みる学問が、オペレーションズ・リサーチ (OR) である。この演習では、OR の基本を学び、様々な身近な問題に対して、数理的な要素を考慮して問題解決ができるような能力の育成を目指す。			
授業の概要 本授業では、まず OR でよく出現する実社会における幾つかの問題に対する数理的な解決方法を、EXCEL を使った演習を通じて学ぶ。その後、各自が自分で問題を設定し同様に解決を試みる。最後にこれら演習をレポートとしてまとめる。 なお、この科目受講に際しては、情報リテラシー（もしくは情報処理1）、表計算演習（または情報処理2）を事前に修得しているか、もしくはこれらに対して同等以上のスキルを有することが望まれる。			
学生に対する評価の方法 期末試験は実施しない。成績は受講態度、指定課題（EXCEL のワークシート）などから総合的に評価する。なお、原則再評価は実施されないので注意されたし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション（書注意、講義内容、成績評価方法など） 第2回 簡単な生産計画問題を使い線形計画法の基本を学習する。 第3回 EXCEL のソルバー機能を使って実際に解く。 第4回 自分の身近な問題へ適用してみる。 第5回 シミュレーションによる問題解決方法を学習する。 第6回 EXCEL を用いて、金利返済やバスの乗車など身近な問題をシミュレーションで解いてみる。 第7回 実際の自分の問題へ適用してみる。 第8回 PERT/C PMを用いた工程管理を学習する。 第9回 EXCEL を用いて、工程管理を行う 第10回 卒業研究や卒業作品作成のスケジュール管理などに適用してみる 第11回 AHP による意志決定手法を学習する。 第12回 EXCEL を用いた演習を行う。 第13回 その結果を自分の就職活動の意志決定に適用してみる。 第14回 今までの学習結果を整理し、レポートとしてまとめる。 第15回 同上			
使用教科書 なし（授業内で参考となるデータファイルを配布する）			
準備学習の内容等アドバイス 時間外において、授業で実施した問題を自分の力でもう一度繰り返し挑戦するなどの復習が重要になる。授業内容が十分に理解できなかった場合や進度に遅れがちな場合は特にこのようなフォローを必ず行っておく。			

[授業科目名] 教養総合演習 I (宗教心理学)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3 年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 15 名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 宗教が、その周辺の諸文化と密接に結びつき、生活の中に根付いているその様相を研究テーマとする。それらさまざまな文化・社会の中に宗教的要素が内在していることを感じ取り、それらについて宗教心理学という新しい視点から考えることができるような力を養うことを目標とする。学期末には研究レポートを作成する。			
授業の概要 研究のための視点として宗教心理学を講じると共に、それに並行してさまざまな宗教文化についても解説し、心理学的な分析をする。 受講者は、その希望に応じて研究テーマを選び、個別指導を受けながら取り組むことになる。 「宗教と文化」単位取得者の履修が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1 回 宗教心理学とは何か 心理という人間一般の地平で宗教を眺めようとすることは、宗教を人間性に内在するものとして研究しようとすることを意味する。その基本的な立場と方法について解説する。個人指導のための日時の調整もする。 第 2 回 心の深層と象徴 宗教の周辺文化の中では、「宗教」は直接的な教説として現われず、さまざまな象徴の形で表される。象徴というものの意味と現れを探る。童話『花咲き山』・『100 万回生きたねこ』などを題材に解説する。 第 3 回 元型(1) ユングが提唱した元型という概念に触れ、その中から「太母」「影」を紹介する。「鬼子母神」説話・『ジキルとハイド』・『山月記』その他を題材に解説する。 第 4 回 元型(2) 「マンダラ」や「異性像」などについて解説する。『曼荼羅』や、『ピーターパン』・「一寸法師」説話・「トリスタンとイゾルデ」伝説などを題材とする。 第 5 回 神話に学ぶ愛のかたち 神話やさまざまな物語の中には、さまざまな愛のかたちが描かれる。前回に続いて「異性像」を取り上げ、そこに物語られるものについて考察する。マーリン (アーサー王伝説)・かぐや姫などを題材とする。 第 6 回 変容 一般に「瞑想」と呼ばれる行為を中心に考察する。それは宗教的「行」としてだけでなく、私たちの日常生活の中にも存在し得る。錬金術・茶道・キャンプファイアー・箱庭などを題材に解説する。 第 7 回 「身体」の宗教心理学 「行」と呼ばれる行為の形で、身体は、宗教という文化やその周辺の文化と深く結びつく。それが私たちの日常生活の中にもあり得るものであることについては、第 6 回に解説した。これに深く関わる「身体」性を探究する。スポーツ・装飾・「パフォーマンス」などについても触れる。			

第8回 「回心」の研究

「回心」研究の歴史は、キリスト教布教の試行錯誤の歩みの中に綴られてきた。それらに少し触れた後、現代版「回心」論と言えるような領域を紹介する。『あゝ無情』その他を題材とする。

第9回 宇宙飛行士の悟り

「個」を超える心について、易しく考えたい。それは、異なるものとの融和し、一体化しようとする心である。何も難しくはない。飛行士たちは宇宙空間を飛んだだけで、それを直観したのだから。

第10回 生と死の心理

前回に引き続く内容である。生と死をめぐる諸問題から、現代の科学的な宗教研究にいたるまでを解説する。

第11回 芸術と宗教

芸術や芸術家の生涯を取り上げ、宗教文化との関わりを探る。題材については、バッハやゴッホなどを予定しているが、受講生の希望にできるだけ沿う形で勧める。

第12回 教育と宗教

西洋でも東洋でも、教育という営みに宗教は深く関わる。それは何故か。教育史を概観しながら解説する。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 教養総合演習Ⅱ（人間性研究）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 松本 高志
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択	備考 15名前後を募集する。
授業の到達目標及びテーマ 「人と思想」をテーマとする。 学生時代に深く傾倒する一人の人物と出会うこと、それも、歴史、風土、人間関係、さまざまな文化的背景などの複合的な研究を通して触れることは極めて有意義である。人間性について、その幅広さや奥深さを知り、その業績だけでなく、思想的遍歴から一つひとつの努力や工夫といった細部にいたるまで研究し、将来の判断や行動の指針について考察できるようになることを目標とする。			
授業の概要 「人間性」について解説し、併せて研究方法について説明する。これと並行して、受講生は一人の人物を選び、著作・作品研究などを通して、「思想」という面を切り口として、その人間性を研究する。 「哲学へのいざない」「宗教と文化」「現代社会と倫理」のうち少なくとも1科目の単位の取得者が望ましい。			
学生に対する評価の方法 授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「人間性」とは何か なぜ、人は時に、特定の人物に強く惹かれるのか。その人の生き方、思想、成し遂げたことの中に、何を感じるのか。その秘密について、共に考える。個人指導のための日時の調整についても話し合う。 第2回 人間性研究の方法論 研究のための方法論を概説する。一人の人間を研究するためには、資料の収集と精査、歴史的社会的背景、ライフ・ヒストリーの研究など、様々な作業が必要になる。そのための全体的な概論である。 第3回 資料について 資料をどのように読みこなしていくか、その方法や留意点について解説する。 第4回 日記・手記・伝記・評伝 日記や手記を読むのには注意が必要である。また伝記・評伝にも、筆者の人間観や価値観が反映するものである。それらの点について解説する。 第5回 人物の背景 歴史的社会的、そして文化的背景を決して見逃すことはできない。現代という観点からのみ見ることは危険である。この点について解説する。 第6回 ライフ・サイクル ライフ・サイクルという概念について、まず解説をする。それから、偉人と呼ばれる人々が、しばしば個人的なライフ・サイクルを描き出すことについて解説する。 第7回 契機 個人的なライフ・サイクルを描き出すということについて、「契機」という問題を考えていく。そのために、「共時性」についても若干の解説を行う。			

第8回 評価

歴史上の人物には「評価」がつきまとう。受講者の演習論文にこれを加えることは求めないが、実質的に、その内容に書き込まれやすいものである。

第9回 歴史的影響(1)

歴史的影響というとその範囲は広いが、近接する文化的領域などへの影響、そして、後継者や賛同者など、さまざまな面を考えなければならない。それらを挙げながら、中でも、近接する文化的領域などへの影響を中心に考える。

第10回 歴史的影響(2)

後世の人物への影響などを中心に考える。

第11回 「人間性研究」のまとめ(1)

全員が、やがて何らかのまとめを行うことになる。結論とまではいかななくても、それに近い考察の仕方というものがあるはずである。これまでに触れた視点・考察点のすべてを、受講生の演習論文に求めるわけではない。各自が望む、そしてそれぞれにふさわしい力の入れ方がある。それらを解説する。

第12回 「人間性研究」のまとめ(2)

前回の解説を振り返りながら、各自のまとめの作業に入る。

第13回 演習レポートの書き方(1)

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業に着手する。

第14回 演習論文の書き方(2)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回 演習論文の書き方(3)

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことからについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも1冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名] 情報基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. コンピュータの基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンの基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 コンピュータを効果的に利用する為には、ハードウェア/ソフトウェアを中心とした、基礎的知識が必要である。本講義では、我々の日常生活とコンピュータとの係わりを考え、人間の仕組みと対比して、コンピュータの仕組みや情報の扱い方、並びに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な知識を学ぶと共に、それらの知識の必要性について理解し、考える。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 コンピュータの特徴（世界最初のコンピュータ、コンピュータの特徴） 第3回 ハードウェアとソフトウェア、コンピュータの五大機能と五大装置 （ハード/ソフトの定義、コンピュータの五大装置・五大機能、CPU） 第4回 デジタルとアナログ（デジタル/アナログの定義、デジタルの利点、デジタル化の方式） 第5回 基数変換（2進数、16進数、基数変換） 第6回 数値表現①（固定小数点数と補数、浮動小数点数と精度・誤差） 第7回 数値表現②（ゾーン10進数、パック10進数） 第8回 文字表現（1バイト系コード、2バイト系コード） 第9回 命令とプログラム （命令とプログラム、プログラム記憶方式、ノイマン式コンピュータ、第五世代コンピュータ） 第10回 補助記憶装置（ハードディスク、フロッピーディスク、CD） 第11回 補助記憶装置（DVD、光磁気ディスク、半導体ディスク） 第12回 入出力インタフェース（シリアルインタフェース、パラレルインタフェース） 第13回 入出力装置（入力装置、出力装置） 第14回 ソフトウェア（オペレーティングシステム、アプリケーションソフトウェア） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 情報倫理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 折笠 和文
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 昨今のインターネットや携帯電話等によって、不特定多数の人との交流が盛んになったが、便利であるが故の利便性と危険性の両面も潜んでいる。そうした危険性に巻き込まれないために、あるいは快適な生活を送るためにも、現代人の必須ともいわれる「情報倫理」の知識と規範を学ぶことが求められる。以上のさまざまな問題点を認識し、危険性の潜む現代社会を理解することが到達目標である。			
授業の概要 インターネット社会の功罪（光と影）、個人情報、知的財産、インターネット・ビジネスの功罪、インターネット犯罪の具体例、情報セキュリティ対策など、情報倫理の問題等を広範に学ぶことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 学期末試験（70点）、単元ごとの達成度小テスト（5回分合計30点）、出席回数等を考慮して、総合的に評価する。 ※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 情報倫理の範囲と方法（倫理学とは、情報倫理とは、現代倫理学の特質など） 第2回 情報社会（インターネット社会の光と影、情報の働きと性質、情報の信頼性） 第3回 個人情報と知的財産（個人情報とは、知的財産権、著作物と著作権） ※第1回達成度小テスト 第4回 社会生活における情報（新しい文化形態としての学習環境の変化、医療・福祉・公共サービス、ビジネスの変化） 第5回 身近な生活における情報（生活スタイル・携帯電話の普及による変化、健康面への影響、コンピュータや情報通信技術の悪用による影響） ※第2回達成度小テスト 第6回 電子メールによる情報の受信・発信（電子メールのマナー・内容、メーリングリスト） 第7回 Webページによる情報の受信・発信（Webページの構成・活用、情報の信憑性、発信する責任、ネット上でのコミュニケーション） 第8回 情報セキュリティ（セキュリティとは、認証とパスワード、暗号とセキュリティ） ※第3回達成度小テスト 第9回 コンピュータの被害（不正アクセス、コンピュータウイルス、スパムメール・チェーンメール） 第10回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の有害情報や犯罪行為） ※第4回達成度小テスト 第11回 ネット社会における被害と対策（インターネット上の違法行為） 第12回 ネット社会における被害と対策（ネット上でのトラブル） 第13回 まとめ：ネット社会における問題点と解決すべき強化面 ※第5回達成度小テスト 第14回 まとめ：健全な情報社会のあり方を考える 第15回 学期末試験			
使用教科書 『情報倫理』 情報倫理教育研究グループ著（実教出版）420円			
自己学習の内容等アドバイス 簡単な「達成度小テスト」のためにも、復讐あるいはテキストの準備は不可欠である。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。参考図書は必要に応じ紹介する。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理 I		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1 年次前期	[必修・選択] 必修	備考 幼児保育専攻
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報リテラシー		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典・内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ レポート作成とは、大きく考えると、与えられた状況で、いかに効果的な情報を的確に収集、整理し、自らの考え方を論理的に提供できるのかという力が試されていることになる。本授業では、レポート作成という演習を通じ、PC操作能力と情報の取捨選択、発信能力（この演習では、このようなコンピュータリテラシーとメディアリテラシーを統合して情報リテラシーと呼んでいる）を学ぶことが大きな目的である。			
授業の概要 この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。 具体的な演習内容として、 <ul style="list-style-type: none"> ・ パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWWや電子メールによる情報の検索・送受など） ・ ワードプロソフト（Microsoft Word）の基本操作 ・ レポートの書き方とワードプロソフトを用いたレポートの作成 といった点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。			
学生に対する評価の方法 普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題(20%程度)とレポート課題(60%程度)で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションとPCの基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。 第2回 PCの基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ） 第3回 インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWWによる情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法） 第4回 ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能） 第5回 作表（作表、イラスト、文字装飾） 第6回 描画（図形描画） 第7回 基本課題その1（学習した機能を使い複合文書を作成） 第8回 基本課題その2（同上） 第9回 レポートの書き方1（論理的な文章について） 第10回 レポートの書き方2（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて） 第11回 レポート課題の作成1（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める） 第12回 レポート課題の作成2（インターネットなどを利用した文献調査） 第13回 レポート課題の作成3（章立て・執筆） 第14回 レポート課題の作成4（推敲・添削・修正・提出） 第15回 レポート課題提出（提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集が望まれる。			

[授業科目名] 情報処理Ⅱ（表計算）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 濱島 秀樹
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻
授業の到達目標及びテーマ <p>学校あるいは企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が保健あるいは心理アンケート等を行い、収集したデータを計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、性質の異なったデータに対して、適切な機能を選択し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15 点程度）、授業内で提出する課題（85 点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が 50 点満点であり、残りは、収集したデータを計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて 35 点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第 1 回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第 2 回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第 3 回 計算機能についての学習 第 4 回 グラフ機能についての学習 第 5 回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第 6 回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF 関数の基本 第 7 回 IF 関数の入れ子 第 8 回 IF 関数と論理積・論理和 第 9 回 日付処理の方法 第 10 回 検索行列関数の使い方 第 11 回 カレンダーを作る 第 12 回 保健あるいは心理アンケートの作成と実施 表集計ソフトを利用して、アンケート用紙を作成する。 第 13 回 アンケートから得たデータの打ち込みと分析その 1 第 14 回 データの分析その 2 と解釈 第 15 回 計算表と作図を含めたレポート作成（提出）</p>			
使用教科書 <p>なし。参考図書は必要に応じ紹介する。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。</p>			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報処理Ⅱ（表計算）		演習	堀尾 正典
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1年次後期	選択	幼児保育対象
授業の到達目標及びテーマ 企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイディアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。			
授業の概要 本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、 <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決に対する楽しさを体験していただければと考える。			
学生に対する評価の方法 受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） 表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）			
使用教科書 なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。			
準備学習の内容等アドバイス 授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 1年次：管理栄養学部 1～4年次：メディア造形学部
授業の到達目標及びテーマ <p>企業内でのパソコン利用形態は、ワープロソフトや電子メールと並び、表集計ソフトの利用頻度が高い。これは、表集計ソフトはデータの管理や計算を得意とし、電卓代わりの簡単な利用から複雑なプログラミングに近い作業まで利用者の工夫とアイデアに応じて様々な活用が可能になるからである。学習した事柄は現在の生活に対して有益になることはもちろんであるが、なによりも演習を通じて学ぶ、問題に対するこのような試行錯誤の取り組みは、将来の自分にも必ずプラスとなるであろう。なぜならば、このような行為の積み重ねこそが、大きな問題解決能力の育成につながるからである。</p>			
授業の概要 <p>本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について ・アンケートによるデータ収集方法について ・実践的な活用法 <p>を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その1ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なるアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤で完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決の楽しさを体験していただければと考える。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>受講態度（15点程度）、授業内で提出する課題（85点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が50点満点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて35点を満点とした工夫点として加える。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)とデータの入力・編集の基本。 第2回 書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明 第3回 計算機能についての学習 第4回 グラフ機能についての学習 第5回 データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法） 第6回 関数の基本、絶対番地、混合番地、IF関数の基本 第7回 IF関数の入れ子 第8回 IF関数と論理積・論理和 第9回 日付処理の方法 第10回 検索行列関数の使い方 第11回 カレンダーを作る 第12回 バイト給与計算表の作成1（実現機能の検討） 表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その1ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できるようなものであること。 第13回 バイト給与計算表の作成2（必須機能の実現） 第14回 バイト給与計算表の作成3（工夫機能の実現） 第15回 バイト給与計算表の採点（課題提出）</p>			
使用教科書 <p>なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。</p>			

[授業科目名] 表計算演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 古藤 真
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択	備考 管理栄養学部
授業の到達目標及びテーマ 到達目標は、マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS) Excel2007 を取得できる範囲、内容、難易度とする。また、学生の到達度によっては、Excel の応用として、モデル化とシミュレーションまで学び、傾向分析やABC分析などの各種のデータ分析手法の基礎と、マクロ(VBA)を利用する応用能力まで発展させる。			
授業の概要 表計算ソフトあるいはスプレッドシートともいう(Microsoft Excel)を用いて、表やグラフの作成、統計処理等における基本知識の再確認と効率的な作成技法について学ぶ。機能や操作方法だけでなく、わかりやすく表現力のある資料を短時間に作成できるように努める。応用能力として、複雑な計算やシミュレーション、データの集計や統合あるいは抽出というデータベース処理の基礎までを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業への参画態度(20%)、実技試験(60%)、情報リテラシーを身につけさせる自習型の Web テスト(20%)などで総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンスおよび基本操作 受講する上での諸注意や演習の概要、成績の評価方法など 第2回 Excel の基礎知識 データ入力 第3回 Excel 入門 簡単な表の作成 ファイル操作 プリンタの操作 演習室利用の際の諸注意 第4回 ワークシートの活用1 第5回 ワークシートの活用2 第6回 ワークシートの活用3 第7回 グラフ1 第8回 グラフ2 第9回 データベース1 第10回 データベース2 第11回 データベース3 第12回 Excel の応用1 第13回 Excel の応用2 第14回 実技試験1 第15回 実技試験2			
使用教科書 Windows Vista 対応 30 時間でマスター Excel 2007 実況出版編集部編 (実教出版)			
自己学習の内容等アドバイス ソフトウェアの修得には、短期間で集中して演習することも必要です。時間があれば教科書を自習すること。Web テストの URL は、授業の中で連絡します。随時実施すること。			

[授業科目名] ネットワーク論 ／情報処理Ⅲ（ネットワーク論）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. ネットワークに関する基礎知識と技術を習得する。 2. パソコンをLANやインターネットに接続する時の基本的な問題に対処できる。			
授業の概要 今日のこのようなネットワーク社会においては、コンピュータはLANやインターネットなどに接続されていることは必須となっており、ネットワークに関する幅広い知識や技術が要求されている。本講義では、LANとインターネットを中心としたこれらの基礎知識について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画） 第2回 ネットワークの概要 （LANとWAN、ネットワークを構築するハードウェア、クライアント／サーバ・システム） 第3回 OSI参照モデル（OSI参照モデルの概要） 第4回 TCP/IP①（TCP/IPの概要、TCP/IPとOSI参照モデル） 第5回 TCP/IP②（IPアドレス、サブネットマスク） 第6回 LAN①（LANの特徴、伝送媒体の種類） 第7回 LAN②（LANの種類、プロトコル） 第8回 WAN①（WANの構成とインターフェース、伝送制御） 第9回 WAN②（電気通信サービス） 第10回 インターネット①（インターネットの特徴、接続技術、ドメイン名） 第11回 インターネット②（インターネットのサービス） 第12回 インターネット③（インターネットの接続方法） 第13回 ネットワークセキュリティ（セキュリティの概念、不正アクセス行為と対策、ウイルス） 第14回 ネットワーク関連知識（ネットワーク管理ツール、OS、符号化と伝送技術、関連法規） 第15回 試験			
使用教科書 なし 但し、随時プリント等の補足資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習 ／情報処理IV(プレゼンテーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、自分が発見したことや考え、アイデアなどを表現するための道具としてプレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint）を活かしながら課題探求することである。 特に課題の作成・発表・評価を主体とし、具体的なテーマに基づいたプレゼンテーションの実際を体験しながら、効果的なプレゼンテーションを行うための知識と技術を習得することを到達目標とする。			
授業の概要 ビジネスの現場では、プレゼンテーション能力のある人、クリエイティブな能力のある人の活躍がめざましくなっている。 そこで本科目は、プレゼンテーションの基本的理解、資料の作成法の習得、プレゼンテーションのスキル習得、聴者・評価者としての態度の理解と習得、という四つの側面から展開する。 具体的な授業の進め方として、プレゼンテーションの基礎知識、プレゼンテーションソフトの機能と操作、効果的なプレゼンテーションテクニック、課題の作成・発表・評価等の各項目について学習して行く。			
学生に対する評価の方法 プレゼンテーションの結果(50%)、提出を義務付けた課題(30%)、授業における取組状況 (20%)により評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど） 第2回 プレゼンテーションの基礎（プレゼンテーションの概要とPowerPointの基本操作） 第3回 プレゼンテーションデータ作成の基礎1（テキストデータによるスライドの作成） 第4回 プレゼンテーションデータ作成の基礎2（スライドの編集・加工、印刷） 第5回 プレゼンテーションデータ作成の基礎3（図表やグラフの利用） 第6回 プレゼンテーションデータ作成の基礎4（スライドマスタの利用、特殊効果の設定） 第7回 復習問題 第8回 プレゼンテーションの実践1（オリジナルプレゼンテーションのテーマ設定、ストーリーシートの作成） 第9回 プレゼンテーションの実践2（情報の収集、スライドの作成） 第10回 プレゼンテーションの実践3（スライドの作成） 第11回 プレゼンテーションの実践4（シナリオの作成） 第12回 プレゼンテーションの実践5（発表する技術、発表を聞く技術、討論の技術、評価の技術について） 第13回 プレゼンテーションの実践6（リハーサルの実施、チェックシートによる自己評価） 第14回 発表1（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価） 第15回 発表2（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価）			
使用教科書 実教出版編集部（編）『30時間でマスター プレゼンテーション+PowerPoint2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] データベース演習 ／情報処理VI (データベース)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 内田 君子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本科目のテーマは、データベースシステムを用いて身近な問題を解決することができる実践的な情報処理能力の育成である。 特に実務を想定した例題演習を主体とし、データベースソフト (Microsoft Access) を利用してリレーショナルデータベースを作成し、必要な情報を適切かつ効率的に引き出すための基礎的な知識と技術の習得を到達目標とする。			
授業の概要 研究やビジネスにおける活動を高度化、効率化する上で、データベースの活用は不可欠の要素となっている。特に産業界では、データベース技術を持つ人材のニーズが高まっている。 そこで本科目は、データベースの基本構成および概念の理解、データベースを使用するための概念や方法の理解、データベース設計の基礎の理解、という三つの側面から展開する。 具体的な進め方として、リレーショナルデータベースの仕組み、データベースソフトの機能と操作、データベースの作成 (テーブル)、データの抽出や集計 (クエリ)、データ入力画面の作成 (フォーム)、各種報告書や宛名ラベルの印刷 (レポート) 等の各項目について学習していく。			
学生に対する評価の方法 期末試験 (50%)、提出を義務付けた課題 (30%)、授業における取組状況 (20%) により評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス (授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど) 第2回 データベースの基礎1 (リレーショナルデータベースとは、データベースソフト Access の基本操作) 第3回 データベースの基礎2 (データの検索、並べ替え、印刷) 第4回 テーブルの作成1 (テーブルとは、データの形式、データの入力) 第5回 テーブルの作成2 (入力支援機能の活用、効率的なデータ入力) 第6回 フォームの作成 (フォームとは、使いやすいフォームの特徴、各要素の編集) 第7回 クエリの作成1 (クエリとは、選択条件の作成) 第8回 クエリの作成2 (集計処理、式ビルダの利用、関数の利用) 第9回 クエリの作成3 (アクションクエリの利用) 第10回 データベースの設計1 (新規テーブルの作成、フォームの設計) 第11回 データベースの設計2 (リレーションシップの設定、データの入力) 第12回 データベースの設計3 (リレーションシップされたクエリの作成と計算) 第13回 レポートの作成 (レポートとは、書式や配置のアレンジ、印刷時の機能) 第14回 全体の復習 第15回 期末試験			
使用教科書 実教出版編集部 (編) 『30時間でマスター Access2007』実教出版			
自己学習の内容等アドバイス 課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。			

[授業科目名] プログラミング演習 ／情報処理Ⅶ（プログラミング）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 堀尾 正典
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ <p>本科目の目的は、プログラミングの基本を学習し、論理的な思考法を身につけることにある。プログラミングの学習は、コンピュータの本格活用を目指す者にとっても重要となるばかりでなく、学ぶことにより、コンピュータの適用範囲を広げ、道具としてのコンピュータの本質的な面白さにも気づくことができるはずである。</p> <p>本講義受講後、直ちに本格的プログラマーへの道が開かれるほど、プログラミングは安易なものではないことは心しておいていただきたいが、将来の挑戦に対する足がかりには十分なるであろう。</p>			
授業の概要 <p>本演習では、プログラミング技法の基礎について学ぶ。学ぶ言語は、プログラミング初心者でも手軽に楽しく学べる点などを配慮して、ホームページに対して動的なアクションを与えることができるJavaScriptを用いる。具体的には、まずホームページ作成の基本を解説した後、Java スクリプトについて学び、プログラミングを行う上での基本的な考え方（逐次、分岐、繰り返し、関数、配列）を、練習問題を通じて学習していく。Java スクリプトをきちんと理解すれば、高度なホームページの作成や複雑なページのソースコードの理解も可能になるだろう。</p> <p>なお、本科目はでは情報の教職課程の履修を目指す学生（映像メディア学科2年以上で教職を選択する者）を優先とし、希望者多数の場合は、抽選となる場合もありうるので注意いただきたい。</p>			
学生に対する評価の方法 <p>普段の受講態度(20%)、授業内で提出する演習課題(80%)を総合的に判断して評価する。</p>			
授業計画（回数ごとの内容等） <p>第1回 オリエンテーション（諸注意）、プログラミング概論（プログラミングとは、機械語とコンパイルについて、各種言語の歴史、特徴など）、エディタの使い方。 第2回 HTML と CSS について（ホームページ作成・表示の基本的な仕組みなどについて学習） 第3回 主なタグ（HTML 言語を用いて簡単な Web ページの作成） 第4回 JavaScript の概要（基本構造、変数、オブジェクト、演算子） 第5回 入出力の方法（プロンプト、テキストボックスによるデータの入出力） 第6回 分岐1（IF の基本的な使い方） 第7回 分岐2（条件分岐の応用） 第8回 繰り返し1（繰り返し処理の作り方） 第9回 繰り返し2（多重ループ） 第10回 関数（関数とは、作り方、呼び出し方） 第11回 配列（配列とは、配列の利用方法） 第12回 課題作成1（簡単なゲーム作成など、いくつかのプログラムを課題として作成する） 第13回 課題作成2 第14回 課題作成3 第15回 評価</p>			
使用教科書 <p>なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。</p>			
準備学習の内容等アドバイス <p>授業内だけでプログラミングの考え方を習得することは、きわめて困難であろう。時間外で、授業中に出された練習問題を各自、繰り返し復習していくことが重要である。</p>			

[授業科目名] システム開発と運用論 ／情報処理Ⅷ（システム開発と運用）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 情報システムの開発、運用、管理に関する基本知識や各種技法を理解する。 2. 経験者の指導の下で、情報システムの開発、運用、管理等の実務ができる。			
授業の概要 情報システムの開発、運用、管理に関する知識や技法は、情報システムだけではなく、一般の業務の遂行においても必要であり、それらを踏まえた上で、情報システムの開発業務に関わる場合に必要な、基本知識と各種技法を学ぶ。本講義では、開発技法、ソフトウェアの再利用、開発の準備、要件定義、分析・設計技法、外部設計、内部設計、プログラム設計、プログラミング技法、テスト・レビュー技法、システム構成技術、システムの性能と信頼性の項目に分類し、各々の詳細についてその基本を学習する。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 受講ガイダンス（授業の目的、授業計画、評価方法等の受講ガイダンス） 第2回 システム開発の概要（システムの定義、システム化とは、システム開発の概要） 第3回 システム開発（システム開発技法、開発コストモデル） 第4回 ソフトウェアの再利用（サブルーチン、関数、プログラム属性、リバースエンジニアリング） 第5回 システム化開発の準備（準備の手順） 第6回 システム化要件定義（調査方法、分析方法、分析設計図法） 第7回 システム設計技法（プロセス中心設計、データ中心設計、オブジェクト指向設計） 第8回 外部設計 （要件定義の確認、サブシステム分割、画面設計、報告書設計、コード設計、論理データ設計） 第9回 内部設計（プログラム分割、物理データ設計、入出力詳細設計、レビュー） 第10回 プログラム設計（構造化設計、モジュール分割技法、モジュールの独立性、レビュー） 第11回 プログラミング （モジュール設計、構造化プログラミング、プログラミング手法、コーディング、成果物） 第12回 テストとレビュー （ボトムアップアプローチ、テスト手法、デバッグ手法、レビュー手法、テスト管理） 第13回 システム構成技術（システムの構成、処理形態） 第14回 システムの性能と信頼性（稼働率、処理能力、性能評価法、信頼性の指標） 第15回 試験			
使用教科書 なし。 但し、随時プリント等の参考資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 本講義は、情報処理技術者試験の「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。			

[授業科目名] 総合講座 クリエーション ナウ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] メディア造形学部 教員
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア造形学部を構成する映像メディア学科、デザイン学科、ファッション造形学科の全体像を把握することで、メディア造形の世界がいかに複雑かつ密接にあるかを学ぶ。その上で、表現することが、いかに様々な領域を横断し合って成立しているかを知るとともに、自ら積極的に他領域とブラグインしていく姿勢を養う。			
授業の概要 映像・デザイン・ファッションの各領域の分野を、メディア造形学部全学科の教員により紹介・解説しながらも、メディアとは何かを根底に置き、より拡張された表現世界を呈示する。また、3学科分野に限らず、人が創造する行為（クリエイション）と社会とを接続する内容で各講義を行っていく。			
学生に対する評価の方法 出席状況、学科単位で行うレポートによる。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 今、メディア造形のあり方とは～領域を越えて 第2回 映像メディア1（映像メディアについて・映像基盤としての写真） 第3回 映像メディア2（CGとアニメーション表現） 第4回 映像メディア3（TVというメディア） 第5回 映像メディア4（映画の世界） 第6回 映像メディア5（サウンドとインスタレーション） 第7回 デザイン1（総合） 第8回 デザイン2（プロダクト・デザイン） 第9回 デザイン3（ビジュアル・デザイン） 第10回 デザイン4（環境空間デザイン） 第11回 ファッション造形1（ファッション・トレンド予測） 第12回 ファッション造形2（ファッション・プレゼンテーション） 第13回 ファッション造形3（生活者の意識変化とファッション小売業態） 第14回 ファッション造形4（ファッション素材と染色） 第15回 拡張するメディア造形へ			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 自分の専攻以外の学科について、特に注目すること。			

[授業科目名] 現代映像論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬島 久美子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像が現在に至るまでの歴史と基礎、映像のためのさまざまな考察によって、視覚表現、映像表現を实践するための基本的考え方や制作のための幅広い情報収集の方法を習得する。			
授業の概要 映像表現の出発点として、映像装置の歴史(日光写真、ゾーマトロープ、フェナキストスコップ、立体視などから3Dシステムまで)、視覚と見ることの構造、光と色彩と映像の歴史、時空間の考察を経て、映像のより深い認識へと向かう。講義内容の理解度を量るために、実験やテーマについて的小論文提出、そして自己表現、コミュニケーション能力を養うためのコンセプト発表を取り入れる。			
学生に対する評価の方法 受講態度、(20%) 授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(60%)に加えて、講義への参加意識やコミュニケーション能力などで総合的に評価する。 本授業は再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 講義のはじめに、パースペクティブ描画、点と線による抽象表現を実施する。			
第1回	見ることの構造	見ることのはじまりから透視図法への表現と歴史	
第2回	視覚構造(1)	視差、錯視、3Dなど視覚特性を利用した表現の考察	
第3回	視覚構造(2)	残像効果による動画の成立	
第4回	光と視覚(1)	光と色彩	
第5回	光と視覚(2)	光による映像表現	
第6回	映像における時間	時間の概念と映像における時空間	
第7回	映像の芸術表現(1)	映像芸術の成立と歴史	
第8回	映像の芸術表現(2)	不可視の可視化	
第9回	映像の抽象表現(1)	点・線・面による映像表現	
第10回	映像の抽象表現(2)	表現を読み解く	
第11回	映像と情報	情報の収集、分析、読み取りから表現へ	
第12回	イメージの視覚化(1)	視覚化のためのコンセプトと設計	
第13回	イメージの視覚化(2)	設計のプレゼンテーション	
第14回	作品と講評	映像作品を講評する	
第15回	映像論 まとめ	講評	
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 講義で得たことについて復習し、実践で確認できることは実践を試みる。			

[授業科目名] メディア論 (コミュニケーションとメディア)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本のメディアと限定することなく、グローバルデジタル化の変遷の渦中にあることで、その変化の詳細を検証する。現存のメディアがネット上の仮想空間に吸収され、そのメディアとしての性格も変化を余儀なくされる。そんなデジタル環境の変化の中から、不安なく人間が歓迎できる新しいメディアの盟主を探求・考察し、それぞれの学生の‘メディア論’の構築を到達目標とする。			
授業の概要 放送、新聞、出版、広告、インターネット、アニメ、ゲームなど、19世紀から20世紀に発達したメディアの形成の歴史に触れながら、現在の社会的木鐸と称されるマス・メディアというものの功罪を学ぶ。さらに、ネットとの融合を不可避とするデジタル化するメディアの性格の変化に伴い、人間や社会との関係、メディアインフラ、法律、モラル、ジャーナリズム、そして将来のメディアリテラシーについても学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業内容の理解と好奇心、探究心の提示（30%）、出席数（40%）、試験レポート（30%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回. 過去のメディア、現在進行形のメディア、将来完了形のメディアの変遷 メディアとネットとの融合が生み出すものは 変化する「メディア」という性格 第2回. マス・メディアの役割と功罪 メディアリテラシーの基礎理論 第3回. 表現の自由（1）言論・表現の自由とは 第4回. 表現の自由（2）プライバシーの権利、匿名性という存在、知る権利 第5回. 表現の自由（3）著作権、芸術性とわいせつ表現 第6回. 新聞のメディア性（1）ジャーナリズム論の理論化 第7回. 新聞メディアの未来（2）新聞離れの実態 第8回. 出版メディアの現実と将来予測 第9回. 映画・アニメーションメディア（1）映像誕生から映画制作の現状 第10回. アニメーションメディア（1）アニメーションのグローバル席卷 第11回. 放送のメディア性（1）ネットとの融合 第12回. 放送メディア（2）ジャーナリズムはどのように生き残るか 第13回. インターネットの特性と既存メディアの関係 第14回. インターネットツールの拡大とメディアの住み分け 第15回. 試験レポート			
使用教科書 とくになし。			
自己学習の内容等アドバイス デジタル世代の視座をもとに、過去、現在、将来のメディアの性格、社会的使命の変化の源泉を探求する。日常的なメディアとの関係性に、恣意的違和感や不安を想定し、人間が歓迎する未来のメディアを検証する。			

[授業科目名] 認知心理学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 伊藤 君男
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディア学部にも所属する学生にとって、「人がどのようにものを認識しているのか」についての知識を得ることは、各々の専門を深く習得するために役立つと思われる。本講義では、認知心理学が提供する知識を習得し、人間の認知機能についての理解を深めることが目標である。			
授業の概要 認知とは、人が自分をとりまく環境をどのように認識し、そこからどのような知識を、どのような方法で手に入れているのか、そして、どのように、それらの知識を使用し、判断しているのかを説明しようとするものである。本講義では、知覚・記憶・問題解決・推論などを中心に解説していく。			
学生に対する評価の方法 最終的におこなう試験（50%）、授業時のレポート課題（30%）、平常の授業態度（20%）によって評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 本講義の概要 第2回 認知心理学が取り扱う領域 第3回 認知心理学の研究法 第4回 記憶のメカニズム 第5回 短期記憶と注意 第6回 長期記憶と検索 第7回 記憶の歪み 第8回 パターン認識 第9回 文脈効果と認識の歪み 第10回 問題解決 第11回 推論のメカニズム 第12回 推論の歪み 第13回 意思決定 第14回 認知と感情 第15回 試験			
使用教科書 使用しない。参考書などは、講義中に必要に応じて紹介する。			
自己学習の内容等アドバイス 認知心理学に習得した知識を、講義内だけでなく、他の講義や日常生活の理解などに適用してみるよう、心がけるとよい			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
美学		講義	瀬島 久美子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1～4年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 芸術学、美学、美学哲学の解体と再構成の歴史を考察することから、a 独自の美学確立へ向かうことを目標とする。			
授業の概要 絵画、映像、音楽、空間造形など、美学の基礎となる作品を考察することで東洋と西洋の美の差異、世界の美の変遷を辿り、また自分を取り巻く情報環境を認識し、現代の美の輪郭を把握する。			
学生に対する評価の方法 受講態度(20%)、授業内で実施する課題、小論文による理解力、表現力の評価(60%)に加えて、コミュニケーション能力などで総合的に評価する。 本授業は再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 講義のはじめに、文章表現のトレーニングとして、絵画、映像作品の印象批評、分析などを発表または提出する。 第2回 遠近法(1) 表現の歴史とさまざまな遠近法 第3回 遠近法(2) 知の遠近法としての美学、哲学 第4回 遠近法へのアプローチ 遠近法の探索 第5回 記号と言語(1) 言語による表現について 第1回 記号と言語(2) 映像における記号と言語 第6回 知覚と認識(1) 線的認識と面的認識 第9回 知覚と認識(2) 光の面的認識 第7回 ヴァナキュラーな表現(1) ヨーロッパの光、日本の光 第8回 ヴァナキュラーな表現(2) 西洋の表現、東洋の表現 第10回 GENIUS LOCI(1) 歴史と自然環境からのアプローチ 第11回 GENIUS LOCI(2) 情報の読み取り 第12回 時空間の表現(1) 空間の概念。建築とインスタレーション 第13回 映像的アプローチ(1) 遠近法の探索と考察 第14回 映像的アプローチ(2) 考察結果のプレゼンテーション 第15回 まとめ、講評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 講義で学んだ事を基礎として表現に応用するために、復習の段階で実践を試みる。			

[授業科目名] 芸術英語コミュニケーション		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 白前 晋
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 文献（主に映像、ファッション、デザインに関わるもの）を講読し、理解力を高め日本語でのコミュニケーション能力の向上を計ることを狙いとする。専門分野における制作の方向性を明確にできる力を養うことを目標とする。			
授業の概要 主に英語文献を読み解き（授業の中で訳す）、ディスカッション形式で授業を進める。写真や映像、音楽なども資料として取り扱うことでより理解を深める。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(20%)、授業内で行なうレポートにより各授業項目の理解度(40%)、最終に実施する試験(40%)などで総合的に評価を行う。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーションと英語力の確認テスト 第2回 文献購読にあたり 第3回 文献講読① 第4回 文献講読② 第5回 文献購読③ 第6回 文献購読④ 第7回 文献購読⑤ 第8回 英語文献講読⑥（映像鑑賞） 第9回 英語文献講読⑦（映像鑑賞） 第10回 文献購読⑧ 第11回 文献購読⑨ 第12回 文献購読⑩ 第13回 文献講読（試験に関して） 第14回 試験日① 第15回 試験日② 履修者の状況（履修者所属学科及び学年）によって、上記のスケジュール及び内容を変更することも想定している。映像鑑賞に関しては授業の進行状況などによって日程を変更することが想定される。文献に関してはファッション、デザイン、映像に特化せず幅広く取り扱う予定。 英訳ができるツール（電子辞書など）を持参すること。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 語学力を向上させるための授業ではないので、英語検定などの試験対策などは各自で行うことをすすめる。			

[授業科目名] 西洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 松田 愛
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 近現代のアートのおさまざまな作品と実践について、美的・芸術的価値だけでなく社会的・歴史的意義について分析し、思考する力を身につけます。本授業が自身や他者の生、世界との関わり方について見つめるきっかけになればよいと思います。			
授業の概要 アートは現代という時代に生きる私たちのものの見方や、社会の事象を映し出すと同時に、時代を超えて「生きること」そのものについての問いを投げかけます。近現代の作家たちの作品や、さまざまな実践をとりあげ、制作意図や活動背景を知るとともに、アートが現代の社会や歴史、世界や私たちの生とどのように関わっているのかを考えます。			
学生に対する評価の方法 授業での小レポート 40%、定期試験（レポート） 60%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 近代までの西洋美術史 第3回 西洋近代美術のはじまり（1）：マネの絵画 第4回 西洋近代美術のはじまり（2）：印象主義の実践 第5回 近代から現代へ：後期印象主義とセザンヌの絵画 第6回 マティスの絵画 第7回 ピカソの芸術 第8回 キュビスムの実践 第9回 ダダ、シュルレアリスム 第10回 抽象表現主義 第11回 ポップアート 第12回 日本のポップ 第13回 コンセプチュアル・アート 第14回 現代の芸術 第15回 定期試験			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 本や資料を通して学べることは限られているため、積極的に美術館や展覧会へと足を運び、作品と直接向き合う機会をもちましょう。			

[授業科目名] 日本美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 木下 稔
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 スライド使用
授業の到達目標及びテーマ 美術の歴史は、美の殿堂でもあり、人間の生活の記録でもある。美術作品は、美しさを通して、我々に感動と興奮を覚えさせる。美術作品が、我々に呼びかけ、語りかける意味とその意味の関連について考察し、異なる時代に於ける美術の特徴、制作意識、技術的意味と意義など自ら理解できるよう指導する。			
授業の概要 本講では、特に平安・鎌倉時代の「やまと絵」、室町時代における「水墨画」及び近世初期、桃山から江戸初期に至る障屏画、近・現代の絵画を中心に、それぞれの様式上の特徴と変遷、その意味と意義、そして今日的意義を概説、考察する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (20%)、各授業項目の理解度 (30%)、最終に実施する試験 (50%) などで総合的に評価を行う。尚、出席率は3分の2以上を必要とする。特別理由の無い限り再評価はしない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義内容の説明、そして造形美術の意味と意義について 第2回 造形美術との出会い、造形美術は如何にあるべきか 第3回 先史時代の美術 ―その生活と文化― 第4回 奈良時代の美術、彫刻・工芸を中心に 第5回 平安時代の美術について、日本独自の美術様式の成立 第6回 「やまと絵」 ―源氏物語絵巻を中心に―、 <u>小テスト</u> 第7回 鎌倉時代の絵画 ―中国宋・元画と日本の絵画について― 第8回 室町水墨画と雪舟の世界 第9回 桃山時代の美術とその精神 第10回 桃山時代の美術 ―永徳・等伯・友松の世界― 第11回 光悦・宗達、そして琳派について ―その世界と時代思潮― 第12回 江戸時代初期における美術について、その流派と画家達 第13回 近・現代の美術、絵画を中心に (劉生・鬘光・大観・古径・遊亀ほか) 第14回 評価試験 第15回 日本美術の精神、そして今後における造形美術の使命			
使用教科書 特に使用しない。必要に応じてその都度、文献資料の紹介と資料コピーを提供。 参考図書 山根有三監修『日本美術史』美術出版社 他			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を事前に知らせる。そして必ず質問事項を尋ね アドバイスする。			

[授業科目名] 東洋美術史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 鷹巣 純
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 日本はアジア文化圏の一隅を形成しており、古来この圏内のさまざまな文化を吸収することで独自の文化を形成してきた。この授業では日本に影響をおよぼしてきたアジア文化の歴史的展開について、特に美術的な観点から理解することを目標とする。			
授業の概要 広範な東洋美術の歴史について、中国・韓半島の絵画史、およびインドから中国・韓半島に及ぶ仏教彫刻史を概観する中で論じる。			
学生に対する評価の方法 期末試験およびレポート 原則として再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 北朝時代までの中国絵画（第1章①②） 第3回 中国の石窟寺院の仏教壁画（第1章③④） 第4回 隋・唐・五代の絵画（第1章⑤⑥⑦） 第5回 宋・南宋時代の中国絵画（第1章⑧⑨） 第6回 元代以降の中国絵画（第1章⑩⑪⑫） 第7回 韓半島の絵画（第1章⑬⑭⑮） 第8回 インドの仏教彫刻（第2章①②③） 第9回 中国の初期仏像（第2章④⑤⑥⑦⑧） 第10回 隋から宋代にかけての仏像（第2章⑧⑨⑩⑪⑫） 第11回 韓半島の仏像（第2章⑬⑭⑮） 第12回 試験 第13回 レポート講評 第14回 レポート講評 第15回 レポート講評			
使用教科書 「すぐわかる東洋の美術」（東京書籍）			
自己学習の内容等アドバイス 授業初回に通達するサイトから必要資料をダウンロードし、常に次回分を予習すること。ほとんどの学生にとって東洋美術史は予備知識のない領域なので、予習なしに授業を理解することは難しい。また復習もこまめに行うこと。膨大な情報量をまとめて復習できるとは思っていない。			

[授業科目名] 先端芸術論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 人間の能力と先端技術を藝術によって融合させ、新しい文化と共生関係を創造し続けている現代の藝術は、従来の絵画、デザイン、工芸、彫刻という表現領域では推し量れないものになってきている。そこで来るべき時代意識に即した様々な藝術表現を探り、広く社会に目を向けた創造とはどのようなものがあるかを知り、視野を広げることを目標とする。特に現代美術の終焉以降のアート有り様を中心に、様々な場で発表されている変容するアート表現としてのドキュメントを見てながら解釈し、ポスト・アートとして提示する。			
授業の概要 テクノロジーの発展において現在の藝術は、今までの価値観・文脈の延長上では捉えきれない表現内容・方法を取っており、様々な展開を今現在見せている「アート」の具体的作品を多数とりあげ、新たな解釈をしていく。			
学生に対する評価の方法 試験期間中に授業内容に関する題目でレポートを作成し、その内容で評価する。 出席状況、受講態度をもとに総合的に評価とする。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第一回 「藝術表現とはなにか」～ コンテキストとアートワールドの逸脱 第二回 「モダンアート」～ 創作上の自由宣言・主義主張 / 個人の自律という幻想 第三回 「前衛って何？」～ お藝術でなければ何でもいい 社会の文脈を問うその質があった時代 第四回 「モダンアートの終焉の始まり」～ 複製の環境のなかで / 主体でなくなる 第五回 「大衆音楽」～ ROCK MUSIC 百花撩乱 / ポップと箱(制度)からの脱出 第六回 「身体」～ 他者としての私 / 汗・臭いが漂白世界と記号化する世界 第七回 「リアリティからリアルへ」～ 日常と世界の彼方 / 2001-9.11 以後 第八回 「日常のマイノリティ」～ 大袈裟でないリアルなもの / 透明な日常 第九回 「他者との交わり」～ 知らないものとの出会い / 不気味さと興味 第十回 「情報を経験する」～ データーベースの憂鬱を超えてテクノロジーと制御不可能な私 第十一回 「錯綜する複数のナラティブ」～ 物語の破綻からものかたる 第十二回 「メディアがコンテンツ」～ 透明化するメディアの前で 第十三回 「ニュー・メディア」～ 新たな画像 ～ 可能性としてのメディア 第十四回 「人の欲望」～ 試してみたいから、大きな問い 第十五回 「再び、アートとはなにか」～ アートは必要か *藝術ではない「アート」を考えていきます。			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語の意味等は授業後でもよいので必ず確認すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アントレプレナー I (会社設立)		講義	井上 芳郎
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2～4年次後期 (集中)	選択	
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家(新しい事業を起こす人)と企業家(既存の組織を変革する人)の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会(ビジネスチャンス)を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、起業家及び変革に必要なプロセスについて概説したうえで、自らの事業計画作成を通じて、起業に際して求められる条件を考察します。			
授業の概要 企業経営を理解するには、企業経営を取り巻く環境を理解したうえで企業経営を評価する理論的な枠組みを駆使することが必要です。この授業では特にアントレプレナーのマインドを意識しつつ企業経営の歴史の変遷を確認するとともに、企業経営を理解する上で必要な切り口(経営戦略、マーケティング、ビジネスシミュレーション等々)を説明します。その上で、学んだ知識をビジネスプランに反映させる方法を体験してもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況と発言(50%)、ビジネスプランについてのレポート(50%)により評価する。 受講者数によってはグループによる演習を行う。その場合は、グループワークの成果も評価に加えることがある。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回:日本のベンチャー創業の現状と課題/日本における開業率の低下の現状と、これに伴う課題について学ぶ 第2回:第1回の続き 第3回:日米のベンチャー創業の比較分析/ベンチャー先進国米国との比較を通じて、日本の置かれた現状と課題について学ぶ 第4回:経営に関わる理論/アントレプレナーに必要な経営理論を学ぶ 第5回:第4回の続き 第6回:事例を通じた経営理論の理解 第7回:第6回の続き 第8回:マーケティングに関わる理論 第9回:第8回の続き 第10回:事例を通じたマーケティング理論の理解 第11回:前回の続き 第12回:シミュレーションの枠組みと事例研究 第13回:ビジネスアイデアの発想法/ビジネスアイデアを見つけた際の着眼点について学ぶ 第14回:演習 第15回:演習と発表 **項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進度及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがある。			
使用教科書 井上芳郎「小さな会社のビジネスプラン」東洋経済新報社			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アントレプレナーⅡ（会社運営）		講義	井上 芳郎
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3・4年次前期（集中）	選択	
授業の到達目標及びテーマ アントレプレナーとは、起業家（新しい事業を起こす人）と企業家（既存の組織を変革する人）の両方を含む概念です。いずれの「きぎょうか」にも新たな事業機会（ビジネスチャンス）を見つけだし、それを事業化するための知識を具備する必要があります。この授業では、アントレプレナーⅠの受講者を対象に、新たに開始した事業を順調に成長させるために必要となる専門的な知識を、事例研究と演習をもとに学びます。			
授業の概要 現実の企業経営では事業の発展段階に応じて経営課題も多様化し、それに応じた対応が求められます。この授業では、こうした経営課題の中から特に重要とされる経営戦略と市場開拓、マーケティング活動に焦点をあてて、基本的な知識について講義した後に実在する企業経営を評価します。その上で、各自が事業戦略の策定やマーケティング計画の作成におこなってもらいます。			
学生に対する評価の方法 日常の出席状況と参加態度（50%）、戦略とマーケティング計画に関して作成したレポート（50%）により評価する。なお、再評価は実施しない予定。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：事例を通じた経営戦略の理解① 第2回：事例を通じた経営戦略の理解② 第3回：事例を通じた経営戦略の理解③ 第4回：事例を通じたマーケティング戦略の理解① 第5回：事例を通じたマーケティング戦略の理解② 第6回：事例を通じたマーケティング戦略の理解③ 第7回：発展段階に応じた経営理論の適応① 第8回：発展段階に応じた経営理論の適応② 第9回：ビジネス・プランの作り方① 第10回：ビジネス・プランの作り方 第11回：グループによるビジネスプラン（演習） 第12回：第11回の続き 第13回：ビジネスプランのプレゼンテーション① 第14回：ビジネスプランのプレゼンテーション② 第15回：個人別ビジネスプランの作成 **項目の順序や時間配分は状況に応じて予定から変わることがあります。 **授業の進捗及び開講時間の設定により、授業時間以外にレポートを課すことがある。			
使用教科書 井上芳郎「小さな会社のビジネスプラン」東洋経済新報社			
自己学習の内容等アドバイス 授業での学習と並行して、実際の経済社会での事例に興味を持つようにしてください。具体的には、経済の流れ、話題の企業の具体的な内容、などです。			

[授業科目名] 映画鑑賞・評価		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映画を自分自身の眼で見、自分自身の考えで読み解く事を目的とし、映像の表現者を志す者、又は生涯にわたり映画から多くの糧を得ようとする者に、よく視ることがよく表現することの第一歩であることを理解してもらおう。と同時に、安易に量産される商品としての映画と、映像表現の精華であり時の重圧に耐えうる作品としての映画を見極める鑑賞眼を養う。			
授業の概要 映画とはどうゆうメディアか。それを理解するための構造分析、思考、映像表現等の講義と、実際の映画上映とその研究解説を主軸とする。上映する映画は年代、国籍を問わず広範囲に選択されるが、必ずしも名作と言われるものにかぎらず、映画としての充実度が重視される。また上映される作品は毎年変わる。限られた数本の映画ですべてを語る事は出来ないからである。			
学生に対する評価の方法 中間、期末の2回の試験で評価する。 試験は、映画を上映してその後、その場で論文を作成するもので、当日まで作品題名は伏せるので、学生独自の視点と思考が重要視される。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義 映画その構造、原理、社会性、人間に与える影響 人はなぜ映画を観たがるか？ 第2回 講義 映画的表現とはなにか、映画に映っているなにに注目すべきか？ 自作CMの表現を例に解説。 以後3回から14回は映画の上映と解説を行うが、すべて上映作品は当日発表する これは先入観なしで映画と向き合ってもらうためである。従って、ここには前年の授業内容を参考として紹介する。 （2010年度内容） 第3・4回 「フレンジー」（アメリカ）アルフレッド ヒッチコック サスペンス表現における、間と呼吸 巨匠最晩年の若々しい実験。 第5・6回 「天国と地獄」（日本）黒澤 明 雄弁な画面構成とは、構図が語る登場人物の内面心理。 第7・8回 「緑の光線」（フランス）エリック ロメール 中間試験 映画と人生の補色構造 第9・10回 「教授と美女」（アメリカ）ハワード ホークス スクリューボールコメディと透明な演出 第11・12回 「ひまわり」（イタリア）ヴィットリオ デ シーカ 俳優の存在感で可まる映画 小道具の意味 第13・14回 「奇蹟」（デンマーク）カール テオ ドライヤー 期末試験 虚構のなかに生まれる人間感情の真実。 第15回 講義 映画のDNA 映画誕生に至る経緯とその独自性 「月世界旅行」 ジョルジュ メリエス			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 授業の性質上特に予習は必要ないが、復習は重要である 授業中に参考として紹介された映画、資料は必ず鑑賞、参照しておくこと。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習（フोट）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 安達 洋次郎・園田 加奈
[単位数] 2	[開講期] 1年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像の原点である写真を通して表現する事の楽しさを身につける。写す楽しさ、写るおもしろさ、被写体を観察する大切さ等を知り、レンズを通しての自己表現を実感させ写真の本質を理解する。基礎的撮影技術の修得と写真を見る力、読む力、選ぶ力を学ぶ。			
授業の概要 35ミリフィルム1眼レフカメラ（NikonFM10）を使用して、前後期通して課題に取り組み、繰り返し撮影演習をすることにより、基礎的撮影技術を修得する。 前期は My Interest を(私の関心事)制作する。撮影は授業時間外に自由に行い、撮影された全てのプリントを机上に並べ、受講者全員で鑑賞し見る力、読む力、選ぶ力を身につける。A-2 上にレイアウトし自己表現の大切さを学ぶ。 夏期休暇中の課題として、「ひとり旅」を制作する。 後期は My Interest を更に大きく深く発展させストーリー性があるもの、感覚表現によるもの等自由な発想で映像の絵本（自分で撮影した写真を使って）を制作する。 後期に学外撮影実習（東山動植物公園を予定）しA-2 上にまとめあげる			
学生に対する評価の方法 課題の My Interest および映像の絵本の評価（70%） 授業への参画態度、「ひとり旅」の作品、校外撮影実習時の作品（30%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 1. 総論 2. NikonFM10の使用説明および初歩的撮影知識の修得。 3. 学内撮影実習（Nega Color で1本撮影） 第2回 1. レンズの画角ついて(広角、標準、望遠、ZOOM)。露出について（シャッター、絞りの関係）フィルムの種類および感度について撮影知識の修得。 2. 学内撮影実習作品発表（ギャラリー）および教員とマンツーマン講評 3. 全体作品講評。次週への宿題説明（テーマは自由で学外撮影自習作品 Nega Color で1本撮影）。前期課題の My Interest の説明。 第3回 1. 光について。光の種類（デーライト、ストロボライト、タングステンライト他）光の性質について。色温度ほか。撮影知識の修得。 2. 自習作品発表（ギャラリー）および教員とマンツーマン講評。A-2 横上で写真構成（レイアウト）演習。 3. レイアウト演習および作品講評。 第4回 1. 課題の My Interest レイアウト。A-2 上へ仕上げ。 2. 課題 My Interest の講評および採点。（西宮副学部長参加） 3. 同上。夏期休暇課題「ひとり旅」説明。前期終了			

- 第5回 1. フォーカス（ピント）について。焦点深度について。手ぶれについて。フィルムのラチチュードについて。写真化学（現像処理、プリントほか）写真の基礎知識の修得。
2. 夏期休暇課題作品発表（ギャラリー）。レイアウト演習。
3. 作品講評。後期課題の映像の絵本の説明。次週の校外演習について説明と注意。
- 第6回 1. 校外撮影実習（東山動植物公園を予定）1.4組 2.3組合同
2. 同上
3. 同上
- 第7回 1. フレームについて（カメラの種類とサイズほか）。写真の基礎知識の修得。
2. 校外撮影実習作品発表（ギャラリー）。レイアウト演習。
3. 作品の講評。後期課題「映像の絵本」の再説明。（自宅制作）
- 第8回 1. 画題「映像の絵本」講評および採点。（西宮副学部長参加）
2. 同上。
3. 同上。後期終了

使用教科書

特に使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

隔週で2組に分かれての授業です。授業と授業の間隔がながいので要注意。（4週）その間に課題の撮影と自主的な撮影を積極てきに行ってください。映像を学ぶ学生なので常に光りを感じながら日常生活をする事。

[授業科目名] 基礎映像メディア演習（映画・ビデオ）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 横井 照政・吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 近年の撮影機材の発達は、映像の制作を身近なものとした反面、映像技術の基本法則に対する意識を希薄なものとしている。本演習では、企画から撮影、編集に至る映像制作の各プロセスを通して、動く映像における1コマ（フレーム）、1カットの概念を認識することから始め、映像のプロとして作者の意図を的確に伝達できる映像技法の基礎を習得することを目標とする。			
授業の概要 前半の5回は、映像を制作する上で最低限必要な技術を習得するため、グループ制作課題としてショートムービーを制作する。 後半は、個人制作課題として映像による自己表現演習を行う。			
学生に対する評価の方法 グループ制作課題に対する制作態度（30%）、個人制作課題の作品評価（70%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 <ガイダンス> ・授業の目的と概要、授業日程の説明 <映画・ビデオの基礎知識（講義）> ・撮影機材、カメラワークについて 第2回 <ショートムービー制作実習①> ・撮影機材の取扱い方法 ・映像表現技法の基礎 第3回 <ショートムービー制作実習②> ・撮影実習 第4回 <ショートムービー制作実習③> ・ノンリニア編集実習 第5回 <ショートムービー制作実習④> ・作品発表および講評 <映像による自己表現演習①> ・課題の説明および企画、シナリオ／コンテ制作 第6回 <映像による自己表現演習②> ・撮影／編集 第7回 <映像による自己表現演習③> ・撮影／編集／MA 第8回 <映像による自己表現演習④> ・作品発表および講評			
使用教科書 教科書は特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 映像作品にふれる機会を増やすと同時に、制作サイドに立った視点での視聴・評価を心がけること。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習 (コンピュータグラフィックス)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬口 雅人
[単位数] 2	[開講期] 1年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 写真、映画、TV、WEB あるいはインスタレーションなどに、現代では道具としてのコンピュータは不可欠です。そのコンピュータを用いた映像表現の基礎を培います。空間と時間の技術的制御と映像アート表現の第一歩を目指します。			
授業の概要 CGの基礎として Draw 系と Paint 系の 2D グラフィックアプリケーションを用い、ペーパーメディアにおける平面構成や、ビデオ映像における色や形の構成を習得します。			
学生に対する評価の方法 提出作品および目標達成度で総合的に実施します。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 授業概要と計画、コンピュータグラフィックスのオリエンテーション 第2回 Illustrator のインターフェイスと基本操作 塗りと線、ペンツール(ベジェ曲線)のハンドリング、レイヤーワーク オブジェクトの変形(移動、回転、拡大縮小、リフレクト等) 第3回 音楽を 2D 平面に表現する 1 音のイメージの視覚化 平面上におけるリズムとメロディーの表現 第4回 音楽を 2D 平面に表現する 2 ペーパー出力、プレゼンテーション・講評 第5回 2D モーショングラフィックスの制作 1 Illustrator データから Photoshop データへの変換、FCP のインターフェイス 画像サイズ、カラーモード、画像圧縮 モーション設定 (サイズ、回転、位置、モーションパス、不透明度) キーフレームによるサウンドとの同期 第6回 2D モーショングラフィックスの制作 2 グラフィック素材とサウンド素材の準備 モーションタイポグラフィの制作 第7回 2D モーショングラフィックスの制作 3 QuickTime 書出し プレゼンテーション・講評			
使用教科書 授業の中で適宜提示			
自己学習の内容等アドバイス 周囲の様々なもの観察して、色彩の使い方、形のありかたなどを常に考える習慣を身につける。形の美しさ、動きの面白さ、その幾何学的造形や、時間軸の捉え方をつねに分析の視点で考える。			

[授業科目名] 基礎映像メディア演習（サウンド）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 中上 淳二
[単位数] 2	[開講期] 1年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 最終課題は1分間のオリジナル音作品を制作することである。また最終授業までに、内容をきちんと把握できているかの確認のため簡単な課題提出と小テストをそれぞれ1度ずつ行い、評価の対象とする。音作品を制作するにあたって必要な事項を習得し、オリジナリティの発見を授業の目標とする。コンピュータやデジタル機器を主に使用し授業を進行するため、これらの機材の基本的操作や概念についてはマスターしてもらう。			
授業の概要 この授業は日常にあふれている様々な音に耳を傾け、音と生活との関連、音と映像との関連など、普段耳にする音そのものに焦点をあて理解を深める。また音を採取し自らの手で構築する経験を通じて、音作品制作の基本的な概念・技術を習得するための授業とする。 データバックアップのため必ずUSBメモリ/外付けHDのような外部記録装置を持参すること。またヘッドフォンを各自毎回用意すること。			
学生に対する評価の方法 出席率40%、最終課題提出30%、課題15%、小テスト15%			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 「音を聴くこと・録音に馴れる」 <ul style="list-style-type: none"> ・ブラインドウォーキングとイヤークリーニング ・フィールドレコーディングを行い、音を聴くこと/録音することに馴れる ・アナログとデジタルの違いについて 授業を進行するにあたり、必要な録音機器を貸し出し、実際に音を録音する経験を覚え今後の制作に必要な音素材を採取する。またデジタル機器であるため、アナログとデジタルについても理解する。 第2回 「コンピュータと音の関連性」 <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータの基本的な操作方法の取得 ・波形編集ソフトウェア Peak チュートリアル ・Max/MSP を使った音の基本的な概念の説明 第3回 「マルチトラックレコーディングの理解」 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチトラックレコーダーの概念について理解する ・ProTools を使用し音を編集し多重再生を行う レコーディング用ソフト ProTools を使用してコンピュータ上で音を扱うことに理解を深める。 第4回 「オリジナルサウンドを制作」 <ul style="list-style-type: none"> ・ProTools に直接声を録音し編集してみよう ・代表的なエフェクタを使い空間を表現する 音編集のための基本的技術を理解した上で、ProTools を使いオリジナルの音を制作する。 第5回 「音楽制作の基本的概念と技術の確認」 <ul style="list-style-type: none"> ・1分間の音作品制作のためのコンセプトシート作り 最終課題制作に向けてのコンセプトシート制作 第6回 ・小テストの実施 ・「制作」 第7回 「講評」			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 毎回新しい単語が出てくるので、復習を行うこと。普段生活する中で聴こえる音を意識的に聴いてみること。			

[授業科目名] 映像メディア基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬口 雅人・加藤 和郎 安達 洋次郎
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 多様な映像のすべてのカテゴリーを学ぶのが当学科カリキュラムの特長です。 序曲として、もう一つの特長である最前線のプロフェッショナル教員陣により、各メディアの最も重要であり最先端の部分を紹介します。 4年間の映像教育のプロローグとして、映像メディア学科教員の紹介も含め、学科基本コンセプトを多様に伝えます。			
授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> 各メディアの教員陣が、それぞれのカテゴリーの基礎と先端の表現を紹介します。 多様な映像世界をオリジナリティあふれアーティスティックに表現をする「映像メディアマトリクス」を制作します。 			
学生に対する評価の方法 映像メディアの多様な研究制作 [映像メディアマトリクス] 作品			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 総合的な映像メディア論、MATRIX オリエンテーション 第2回 アートとしての映像概論 第3回 未来の映像 人類の歴史的アニメーション 第4回 写真の基礎、銀塩のしくみ・暗室のプロセス 第5回 デジタル写真の現在と未来 第6回 TVの世界の多様な要素1 第7回 TVの世界の多様な要素2 第8回 映画の基礎-1 第9回 映画の基礎-2 第10回 CG・コンピュータの歴史 第11回 CGの基本概念 第12回 映像こととしてのサウンド 第13回 サウンドアートとプログラミング 第14回 映像基礎のまとめ 第15回 映像メディアマトリクス講評			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 日頃から幅広く様々な映像メディアに積極的に触れ、その分析を試みる。そして、自分ならこうした表現をするということを常に考える。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
人間研究		講義	西宮 正明・光 幸國
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1 年次後期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 現在、人間性の喪失が著しい。社会人の基本として、ディベートを重ね、考察しながらテーマを決定し、人間研究新聞、公共ポスター制作を行う。その過程において芸術教育にマッチングさせながら、自分とは何か、人間とは何か、社会とは何か、を深く考察探求する姿勢を修得し、独創性等をメディア人として、人間としてのバックボーンを育てる事を目的とする			
授業の概要 世界的に若者達の活字離れが危惧されて久しい。共同での新聞制作を通して時代の風潮に流される事無く、主体的に考察探求し、他人の考えを知り、現代社会の問題、自分達の問題をまとめ上げるコミュニケーション能力、企画力、指導力、創造性を持った人間育成。又公共ポスター制作を通して、如何に言語を説明的でなくインパクトのある映像イメージとして伝えるかをテーマに独創的発想の出来る知的メディア人の育成。			
学生に対する評価の方法 小論文「私の人間研究」を一枚のイメージ・フォトと共に決められた用紙（アート紙A4）で提出 1 2 グループに分かれ人間研究新聞、公共ポスター制作を行い、グループ研究の修得			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 人間研究概論（西宮正明、光 幸國） 人間研究新聞、公共ポスターについて 受講生を 11 グループに分け、リーダー、サブリーダー 2 名を選出 11 グループより編集委員を選出（編集長 1 名、副編 2 名、編集委員 9 名） 第2回 編集委員による現代の問題点についてディベート 第3回 グループ別公開ディベート 第4回 グループ別公開ディベート 第5回 グループ別プレゼンテーション（テーマ決定） 第6回 各グループ調査、取材、原稿作成、編集 第7回 各グループ調査、取材、原稿作成、編集 第8回 各グループ調査、取材、原稿制作、編集、編集委員会紙面構成、課題「私の人間研究」 第9回 各グループ原稿構成プレゼン、課題レポート「私の人間研究」提出 第10回 各グループ原稿構成プレゼン 編集委員会編集、各グループ公共ポスター制作 第11回 各グループ原稿構成プレゼン、各グループ公共ポスタープレゼン及び制作 第12回 記事完成・編集委員による紙面構成発表、公共ポスター最終プレゼン 第13回 新聞印刷入稿、ポスター完成・発表、発表ポスター印刷入校 第14回 新聞印刷上がり、特集ポスター印刷上り、レポート「私の人間研究発表 第15回 新聞、ポスターについての検証、配布先作業 上記の基本的なワークに加えて、毎週の頭に、その時々ライブな時事、ニュースをテーマに学生達と話し合う、10分程の時間を持つ事を重要な要素としている。			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 一般新聞の購読、日々世の中の問題に興味を持ち考える事			

[授業科目名] ドローイング		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 稲垣 敏彦
[単位数] 1	[開講期] 1 年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 様々な作品制作の体験により、単に描写技術習得のトレーニングだけでなく、自己の内面から自由に発想・表現出来るクリエイターとしての“ものを見る眼”を養うことを目標とする。			
授業の概要 映像メディアを学ぶ学生の基礎として、まず始めに自然の形を通じて“世界がどのように見えるのか”を知る。次に自由な自己表現をテーマに“世界をどのように見えるか”という視点から自分の形を創造する。			
学生に対する評価の方法 提出作品（80%）、授業態度（20%）等で総合的に評価する。 再評価は実施するが、そうならないように授業に臨むこと。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ドローイングの履修にあたって（授業内容の概要と目的） 【自然の形の探求（陰影と調子・質感・量感・動勢・比例と均衡・構図等について）】 第2回 鉛筆デッサン①石膏幾何形態 第3回 鉛筆デッサン②降り鶴 第4回 鉛筆デッサン③手 第5回 鉛筆デッサン④つぶれた缶ジュース 第6回 ③手、④つぶれた缶ジュースを透明水彩絵の具で着彩 第7回 鉛筆デッサン⑤りんご 透明水彩絵の具で着彩 【人体の構造（骨格・筋肉・関節）を知る、（プロポーション・動き・重心の位置等について）】 第8回 人物クロッキー① 第9回 人物クロッキー② 第10回 人物クロッキー③ 第11回 展覧会鑑賞 【自分の形の創造】 第12回 イメージ・ドローイング① 第13回 コラージュ+ドローイング 第14回 イメージ・ドローイング② 第15回 まとめ、提出作品を返却			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 白い紙と鉛筆さえあれば、いつでもどこでも描くことはできる。億劫がらず、積極的に手を動かすこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
グラフィックデザイン I		実習	山川 尚子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	1 年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ クリエイティブな映像表現にとって色や形などのデザイン能力が欠かせません。グラフィックデザイン I ではデザインの基本である色彩・平面構成など効果的な表現方法を体験的に学び、総合的なデザイントレーニングを行うとともに、デジタルデザインツールである Adobe Illustrator の習得もめざします。			
授業の概要 平面におけるデザインの基礎である、画面構成や、色彩、タイポグラフィなどを実践的に学びながら、同時に、どのように考えて作品を作ったのか、自分の作品や、その考え方、自らの視点について発表出来る力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業態度(20%)、それぞれの各課題への取り組み方(20%)、提出作品(60%)などで総合的に評価を行う。 特に授業欠席は減点の対象となるため注意すること。(6 回以上の授業欠席者は、以後の履修を認めない。)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 グラフィックデザイン概要 第2回 ムーブメント&リズム 点による平面構成 1 第3回 ムーブメント&リズム 点による平面構成 2, 発表・講評 第4回 ムーブメント&リズム 線による平面構成 1 第5回 ムーブメント&リズム 線による平面構成 2, 発表・講評 第6回 ムーブメント&リズム 面による平面構成 1 第7回 ムーブメント&リズム 面による平面構成 2, 発表・講評 第8回 カラーコンポジション 色の三属性色の三属性・混色・対比・色の感情など色彩の応用による幾何学図形カラーコンポジションの制作 1-1 第9回 カラーコンポジション 色の三属性色の三属性・混色・対比・色の感情など色彩の応用による幾何学図形カラーコンポジションの制作 1-2, 発表・講評 第10回 カラーコンポジション 色の三属性色の三属性・混色・対比・色の感情など色彩の応用による幾何学図形カラーコンポジションの制作 2-1 第11回 カラーコンポジション 色の三属性色の三属性・混色・対比・色の感情など色彩の応用による幾何学図形カラーコンポジションの制作 2-2 第12回 タイポグラフィ 1 文字から発想する視覚的アプローチによるイメージ表現 組版を意識した情報構成・エディトリアル表現 第13回 タイポグラフィ 2 文字から発想する視覚的アプローチによるイメージ表現 組版を意識した情報構成・エディトリアル表現 第14回 タイポグラフィ 3 文字から発想する視覚的アプローチによるイメージ表現 組版を意識した情報構成・エディトリアル表現 第15回 発表・講評			
使用教科書 デザイン・ルールズ 伊達千代・内藤タカヒコ著 ISBN978-4-8443-5842-8 発行エムディエヌコーポレーション 発売インプレスコミュニケーションズ			
自己学習の内容等アドバイス 授業の中で学んだ内容を、日常生活の中でも自分なりの視点で考察してみる。			

[授業科目名] グラフィックデザインⅡ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 山川 尚子
[単位数] 1	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 意思や思考、概念や論理を視覚化することがグラフィックデザインの基本概念である。ペーパーメディアにおける DTP(デスクトップパブリッシング)の方法論を学び、デジタルプロセスにおけるグラフィックデザインの可能性を追求する。			
授業の概要 前期で学んだデザインの基礎をベースに、より実践的な作品制作を行いながら、作品の深め方や完成度をあげる方法などを学ぶ。同時に、どのように考えて作品を作ったのか、自分の作品や、その考え方、自らの視点について発表出来る力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業態度(20%)、それぞれの各課題への取り組み方(20%)、提出作品(60%)などで総合的に評価を行う。 特に授業欠席は減点の対象となるため注意すること。(6 回以上の授業欠席者は、以後の履修を認めない。)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 視覚化のためのコンセプトメイク 1, グループワーク 第2回 視覚化のためのコンセプトメイク 2, 個人作業 第3回 シンボルマークデザイン1 アイデアスケッチ 第4回 シンボルマークデザイン2 ブラッシュアップ 第5回 シンボルマークデザイン3 フィニッシュ, 発表・講評 第6回 ロゴタイプデザイン 1 第7回 ロゴタイプデザイン 2, コーポレートカラー 第8回 シンボルマーク・ロゴタイプによるベーシックデザインまとめ, 発表・講評 第9回 DTP の基本概念, ペーパーメディアデザイン, 名刺 第10回 ペーパーメディアデザイン, ポスター 1 第11回 ペーパーメディアデザイン, ポスター 2, プリントアウト, 発表・講評 第12回 ペーパーメディアデザイン, 会社案内 1 第13回 ペーパーメディアデザイン, 会社案内 2 第14回 ペーパーメディアデザイン, 会社案内 3 第15回 プリントアウト, 発表・講評			
使用教科書 デザイン・ルールズ 伊達千代・内藤タカヒコ著 ISBN978-4-8443-5842-8 発行エムディエヌコーポレーション 発売インプレスコミュニケーションズ			
自己学習の内容等アドバイス 授業の中で学んだ内容を、日常生活の中でも自分なりの視点で考察してみること。			

[授業科目名] コンピュータリテラシー演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武・田部井 勝彦
[単位数] 2	[開講期] 1年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ (Mac OSXを前提とした) コンピュータリテラシー基礎と ・デジタルグラフィックス (ベクター/ビットマップ) ・デジタルムービー&サウンド を取り扱う上でベースとなる知識と技術の習得を到達目標とする。			
授業の概要 映像メディア学科で行う作品制作及び研究に必要な不可欠と思われる基礎的な知識/技術のレクチャーを「リテラシー」として位置づけ講義します。(※「リテラシー」とは「識字能力、読み書き能力」を指します)			
学生に対する評価の方法 期末試験 出席状況 ※再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 基礎リテラシー1 導入、ハードウェア、ソフトウェア 第2回 基礎リテラシー2 Mac OSX、デジタルデータ、ネットワーク 第3回 ベクターグラフィックス1 Illustrator I 第4回 ベクターグラフィックス2 Illustrator II 第5回 ベクターグラフィックス3 Illustrator III 第6回 ベクターグラフィックス4 Illustrator IV 第7回 ビットマップグラフィックス1 Photoshop I 第8回 ビットマップグラフィックス2 Photoshop II 第9回 ビットマップグラフィックス3 Photoshop III 第10回 ビットマップグラフィックス4 Photoshop IV 第11回 ビットマップグラフィックス5 Photoshop V 第12回 デジタルムービー&サウンド1 導入、Final Cut Pro I 第13回 デジタルムービー&サウンド1 Final Cut Pro II 第14回 デジタルムービー&サウンド1 Final Cut Pro III 第15回 期末試験 ※15回に割っていますが、授業の進行状況を見て適宜進めます。			
使用教科書 特に指定しない。			
自己学習の内容等アドバイス 他の専門必修授業の内容とリンクさせながら進めます。 別個の授業として捉えずに他の授業と関連づけて理解していくよう意識してください。			

[授業科目名] アートとしての数学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 大内 雅雄
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像、音響、造形などアート作品をつくる人の関心をもとにして、アートと数学の共通の源泉である手作業や自然現象観察をおこない、アートと数学の双方のあり方を考え直す。そして、新たな表現技法のアイデアを生み出すことを目指す。 講義を聞くだけでなく、実際に手を動かし創意工夫する経験を多く積むことを促し、アート作品を制作する個人にとって数学との有益なつきあい方をそれぞれ見つけてもらうことを、目標とする。			
授業の概要 具体的なテーマは、(1)映像＝(光と影の造形と運動)の実験的試み (2)極小性のつくる形(石鹼膜など) (3)同じ形の繰り返しによる造形(広義の対称性) (4)形と比と数列(黄金比とフィボナッチ数列など)。 計算が必要な場合は、電卓を使って計算できればよい。昔習った数学の得意苦手は忘れて、話しの流れと意味をつかみ、わからないことは人に聞き、数学を自分の作業に生かすための道具にしてほしい。			
学生に対する評価の方法 (1) 授業内容を基にした工作作品の提出。 (2) 授業であつかった数学的内容についての筆記試験。 (1)、(2)を総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 水と光が生む映像。反射、屈折、虹などを実際に見る。 第2回 石鹼膜の作る形を見る。 第3回 針金や糸輪に張る石鹼膜の形と膜面積極小性について。 第4回 針金と樹脂膜による造形。 第5回 光の直進が生む映像。 第6回 回転落下する紙。 第7回 回転落下と形の対称性の関係。 第8回 巻き貝、虫の飛行、銀河系など、この世界に現れる「渦、螺旋」を紙工作でなぞる。 第9回 対数螺旋の性質と映像。 第10回 紙の編み込み。ルールとバリエーションの作り出す形。 第11回 第6回～第10回の内容にもとづく紙工作の試作。 第12回 植物の形とフィボナッチ数列。 第13回 黄金比とフィボナッチ数列。ペンタグラムと魔よけ。形の呪力について。 第14回 提出作品の講評。今期授業のまとめと補足。 第15回 数学内容に関する筆記試験。			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 授業で触れたことを、身のまわりに見つけ出したり、ヒントにして何か作り出せないか、など試してほしい。 授業で配布するプリント類は、次のURLにも載せる。 http://homepage1.nifty.com/haniu/nuas/			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
著作権		講義	近藤 紀男
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1～4年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 著作権の根拠となる著作物、著作者、現に著作権を有する者（著作権者）、著作権の制限、保護期間、利用の許諾等の基礎的な概念の修得を到達目標とし、それを基に著作物の利用に関する確かな判断力を身につけることをテーマとする。			
授業の概要 著作権は、発明やデザインを保護する特許権、意匠権等と並ぶ知的財産権の一つであるが、著作物を創作する者の精神的利益を保護する著作者人格権を伴う点で他の知的財産権と相違する。 また、特許権等が特許庁への出願、審査、登録という手続きを経てはじめて発生する権利であるのに対し、著作権は、そのような手続きを必要とせず、著作物を創作しただけで権利が認められる。 従って、著作権の存否、主体、内容等が客観的に明確にはされていないため、他人の作品を利用する者にとって著作権侵害とされるリスクが大きい。 授業では、文芸、学術、美術、音楽等の多様かつ広範な著作物の中から、主にメディア造形の分野に係る事例を取り上げて、著作権制度の基本を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業態度（15%）、学期の途中で行う2回のテスト（25、30%）及び期末試験の成績（30%）によって総合的に評価する。〔（）内は評価算出の割合を示す〕 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 著作権とは：財産権、知的財産権、著作権法の定める権利、著作権の処理（著作権等管理事業） 第2回 著作物（一）：著作物の例示、外国著作物、著作物の要件 第3回 著作物（二）：著作物の要件（続：創作性）、権利の目的とならない著作物、保護期間（相互主義） <div style="text-align: right;">[第1回テスト]</div> 第4回 著作者の権利（一）：著作者人格権 第5回 著作者の権利（二）：著作者と著作権者、利用の許諾、裁定、複製権、出版契約 第6回 著作者の権利（三）：頒布権、貸与権、譲渡権、上映権；著作権の制限（私的使用のための複製） 第7回 著作権の制限（続）：教育、福祉、報道等のための利用、目的外使用の禁止 第8回 著作隣接権；演奏権 [第2回テスト] 第9回 美術の著作物（展示権）；建築の著作物；応用美術：意匠、判例 第10回 応用美術（続）：商標、不正競争防止；写真の著作物 第11回 肖像権、プライバシー、パブリシティ；映画の著作物 第12回 映画の著作者・著作権者、映画化権；二次的著作物、翻案権 第13回 翻案の要件；編集著作物、データベースの著作物 第14回 プログラムの著作物；公衆送信権 [期末試験] 第15回 インターネットと著作権、ネットビジネス、侵害防止措置			
使用教科書 とくに使用しない。毎授業時、次回の授業内容の概要を記した講義要項等の資料を作成配布する。 【参考図書】 中山信弘「著作権法」有斐閣（2007）；半田正夫「著作権法概説 第14版」法学書院（2009）； 斉藤博「著作権法 第3版」有斐閣（2007）；作花文雄「著作権法 第3版」発明協会（2008）ほか			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を講義要項及び資料で予習し、専門用語の意味を事前に調べておくこと。用語辞典や参考図書は、本学の図書館、公共図書館に備え付けられているものを使うとよい。			

[授業科目名] 映像史		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 光 幸國
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「自分が感動した映像はたとえ一瞬見た作品であっても一生忘れない」この視点から作品の制作年代、作家の名前を覚えるよりも大切な、感動、作品の読み方、その時代背景等を映像を鑑賞しながら講義する事により、受講生に自分の創作活動を一人よがりならず、創造性やオリジナリティーのある創作を行うためには、人間とは何か、社会とは何か、自分とは何かを深く考察探求する知的作業であり、その事を理解し行動する姿勢の習得			
授業の概要 講義は映像作家を志す受講生に、映像史上の著名な作家の作品を鑑賞しながら、それぞれの思想、目的、技術、コンセプトを学び、如何に主体的に、オリジナリティーを持ちながら、社会に適応する創作を行なうかと云う視点から講ずる。特に世界に多大な影響を与えたアメリカの1900年代～1990年代の作家を中心に、その時代背景と照らし合わせながら講義する。			
学生に対する評価の方法 小テスト2回（20％）・課題レポート（80％） 当講義では再評価をしない。授業の出欠には十分注意する事。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義総論・写真の始まりから（ニエプス、ダゲール、タルボット） 第2回 小テスト. 初期の写真家（ナダール、タルボット、キャメロン）アメリカに渡った写真（フレディー等） 第3回 映画の始まり（E. マイブリッジ、T. エジソン、D.W. グリフィース） 写真の父（アルフレッド・スティーグリッツ、エドワード・スタイケン） 第4回 ユウジェーヌ・アジェ、マン・レイ、モホリ・ナギ 第5回 無声映画の名作（チャップリン）音が無くとも映像でどれだけ想いを伝えられるか 第6回 写真のピカソ（エドワード・ウエストン）、ランドスケープの巨匠（アンセル・アダムス） 第7回 報道写真家（ロバート・キャパ）ドキュメンタリー写真家（ユージン・スミス） 第8回 小テスト、フランスの巨匠達（ブレッソン、ドアノー、ブラッサイ、ケルテス） 第9回 学生映画の名作タルコフスキー（ローラーとバイオリン） 第10回 20世紀の偉大ファッション写真家（アーヴィング・ペン、リチャード・アヴェドン） 第11回 ロバート・メイプルソープ、植田正治 第12回 セバスチャン・サルガド、サラ・ムーン 第13回 レポート課題について、ポートレートの巨匠（U・カーシュ）ダイアン・アーバス 第14回 レポート提出、ロバート・フランク、田原桂一、「LIFE」の写真家達 第15回 その他の写真家			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 映像を見た作家で感動した作家があれば図書館で写真集やDVDを見る事、又美術館で名作のオリジナル作品を見る事			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ネットワーク演習		演習	山本 努武
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	1 年次前・後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 基礎知識としての 1) 「ネットワーク と インターネット」 2) 「HTML と CSS」 に関して各種検定試験の初級レベル合格水準を到達目標とします。			
授業の概要 前半はTCP/IPをはじめとするネットワーク技術の基礎的な知識に関する講義を行います。 後半はそれらを実用するための身近な技術として、www サーバ上で展開する web ページ制作に関する基礎的な知識と技術を身につけます。2年次以降で web についての学習を深める基礎となる講座です。Web 系の講座を履修する学生、検定の受検を希望する学生がこの講座の履修を強く勧めます。			
学生に対する評価の方法 小テスト web ページ制作課題 出席状況 ※再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) (ネットワーク知識) 第1回 導入、インターネットの概念 第2回 LAN、無線LAN、Bluetooth 第3回 ブロードバンド 第4回 インターネット・プロトコル 第5回 web サーバ、メールサーバ 第6回 インターネット・リテラシー 第7回 セキュリティ 第8回 著作権法、個人情報保護法 (HTML 基礎) 第9回 W3C 準拠、DTD 第10回 ブロック要素 第11回 インライン要素 第12回 練習 第13回 Cascading Style Sheet 第14回 練習 第15回 web ページ制作課題提出			
使用教科書 「.comMaster 教科書★」NTT ラーニング社刊、「小会 HTML&CSS 辞典」秀和システムズ その他プリント等			
自己学習の内容等アドバイス 特殊なソフトウェアを使った授業内容ではありませんので、自宅のコンピュータでも予習・復習が可能です。			

[授業科目名] 音楽基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の概要 この授業では、音楽を扱う上で基礎となるルール（＝楽典）を学習します。また、現代には不可欠な「コードネーム」を中心とした音楽の構成法について学習します。 毎回の授業は、前半の「楽典」などの学習に加えて、後半には映像と音楽との関係を実例を挙げ学習します。			
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な音楽のルールを理解する ・コードネームを読み書きできる ・音楽と映像についての視点を持つ 			
学生に対する評価の方法 授業への参加度（30%）、中間考査（30%）、期末考査（40%）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 楽譜（音部記号、音符） 第2回 音名（各国語での表記） 第3回 拍とは（拍、拍子－単純拍子、複合拍子、変拍子） 第4回 楽語（各国語での表記と意味、その背景） 第5回 調性（調性、調号、長調、単調） 第6回 音程（完全音程系、3度） 第7回 中間テスト 第8回 コード1（メジャーコード、マイナーコード） 第9回 コード2（セブンス） 第10回 ドミナント・モーション 第11回 循環コード（循環コード、カデンツ） 第12回 音階と旋法（長音階、短音階、さまざまな旋法） 第13回 音色（楽器法、アレンジについて） 第14回 コード3（コードの応用） 第15回 期末テスト			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 授業は毎回連続してステップアップしていきますので、必ず復習をし、学習内容を理解しておく必要があります。			

[授業科目名] クリエイティブアニメーション 基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 瀬口 雅人・押井 守 他 映像メディア学科教員によるオムニバス
[単位数] 2	[開講期] 1～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義は、国内外の多くのアニメーション作品に触れることで、今まで漠然と持っていたアニメーション（あるいは「アニメ」）に対するイメージを広げ、映像表現の多様な可能性を探求することを目的とする。			
授業の概要 平面、立体、2D/3DCG などの様々な技法によるアニメーション作品について学ぶ。また、アニメーションにおけるイメージの読解（解釈）や、美術、メディア・アート、ゲーム、サウンドなどの領域とアニメーションの関わりについても学ぶ。 ※本講義は映像メディア学科教員によるオムニバス形式で行なわれる。			
学生に対する評価の方法 受講態度（授業後の小レポートにて確認）及び、レポート課題による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション（瀬口+伏木） 第02回：アニメーションという表現1（押井） 第03回：アニメーション技法の紹介1（愛澤） 第04回：アニメーション技法の紹介2（愛澤） 第05回：アニメーション技法の紹介3（佐藤） 第06回：アニメーションという表現2（押井） 第07回：アニメーション技法の紹介4（佐藤） 第08回：アニメーションとサウンド（森） 第09回：アニメーションと日本の美術（小笠原） 第10回：アニメーションという表現3（押井） 第11回：アニメーションの分析（伏木） 第12回：アニメーションとインタラクティブメディア（山本） 第13回：アニメーションとインタラクティブメディア（山本） 第14回：アニメーションという表現4（押井） 第15回：総括（瀬口+伏木）			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 講義内では一部の作品にしか触れることができない。その為、映画館、美術館、図書館/MLC、インターネットなどを利用して、講義の中で紹介した作品、またはそれらの作家に関係する文献、映像資料などに触れるよう心がけて欲しい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
メディアリテラシー演習 I		演習	杉本 達應
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ ふだん何気なく接しているメディアの仕組みや自分との関係を冷静に見つめなおすことで、メディアを分析、評価し、さらに発信、活用できる能力を獲得することを到達目標とする。			
授業の概要 さまざまなメディアに囲まれて生活する私たちにとって、マスメディアやインターネットが提示する「現実」を批判的に読み解き、メディアを主体的に活用する能力を身につけることが重要になっている。 本科目では、講義とワークショップを組み合わせで行う。講義部分では、現代のメディア状況と様々な取り組みや作品を紹介する。演習部分では、自らの視点からメディアを批判的に読み解きながら、積極的に活用するための試みをグループで企画する。映像メディアを学ぶ将来のクリエイターとして、日常的に関わったり制作するメディアと社会の関係を意識的に捉えてほしい。 授業中に随時、試験やレポートを課す。また、内容は受講生の理解度に応じて適宜変更する場合がある。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (30%)、レポート・小課題 (30%)、最終課題プレゼンテーション (40%) などで総合的に評価する。 特に出席を重視し、授業欠席は減点の対象となる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 インTRODakション・全体概要説明 第2回 メディアリテラシーとは 概論 第3回 メディア分析1 第4回 メディア分析2 第5回 ケーススタディ・映像作品鑑賞1 第6回 ケーススタディ・映像作品鑑賞2 第7回 メディアワークショップ1 第8回 メディアワークショップ2 第9回 課題説明1 第10回 課題説明2 第11回 課題制作と発表準備1 第12回 課題制作と発表準備2 第13回 課題発表とディスカッション1 第14回 課題発表とディスカッション2 第15回 授業総括・振り返り			
使用教科書 森達也『世界を信じるためのメソッド—ぼくらの時代のメディア・リテラシー』理論社 【参考図書】 菅谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書 そのほか、授業中に指示する場合がある。			
自己学習の内容等アドバイス 隔週開講であるが、ほぼ毎回小課題を課すので、自己学習の時間をとって積極的に課題に取り組むこと。			

[授業科目名] 映像メディア表現論 (05生以前 写真論)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安達 洋次郎・加藤 和郎・伏木 啓
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像というメディアを扱っていくうえで不可欠な思考力、批評眼を身につけることを目標とする。それは現在の高度メディア社会のなかで「自己を定位」し、情報を受容するだけでなく「読み解き」「発信する力」を身につけることを意味する。従って、本講義では作品分析のみではなく、創り手の立場でそれぞれの作家がその時代の「何を感じ」「何を表現しようとした」のか考え、あなた自身の「視点」を築くことを主題とする。			
授業の概要 19世紀における「写真」発明以降、映像メディアは常に新しい技術とともに発展してきた。本講義では、それらの歴史的な脈を辿りながら、写真、映画、テレビ、ビデオ、コンピュータをメディアとして扱う作家や作品に触れ、19世紀以降の映像メディアが人々にどのような影響をもたらし、またそれらの映像がその時代の何を表象してきたのかを探る。最終的には、課題「マイ・フレーム」を制作し、自分たちが「現在」をどのように切り取り思考するのか、発表する。			
学生に対する評価の方法 受講態度（授業後の小レポートにて確認）、最終課題（マイフレーム）による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション 第02回：19世紀・20世紀初頭の映像 第03回：映像メディア論I「記号と映像」 第04回：第二次世界大戦期及び戦後の映像 第05回：1960・70年代の映像 第06回：1960・70年代以降の写真表現を巡って（西宮・安達作品とともに） 第07回：映像メディア論 II「反記号としての映像」 第08回：1980・90年代の映像 ※課題提示「マイ・フレーム」 第09回：映像メディア論 III「虚構と現実」 第10回：現在（2000年以後）の映像 第11回：マイ・フレーム発表と講評 第12回：マイ・フレーム発表と講評 第13回：マイ・フレーム発表と講評 第14回：マイ・フレーム発表と講評 第15回：マイ・フレーム発表と講評及び、総括			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 講義内では時間の都合上、一部の作品にしか触れることができない。その為、図書館やMLCなどを利用して、講義の中で紹介した作家や作品に関する文献、写真集、映像資料などに目を通すよう心がけて欲しい。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
インスタレーション演習 I		演習	小笠原 則彰・白前 晋
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	必修	
授業の到達目標及びテーマ 現代のアート作品の多くは、単体のオブジェクト(モノ)として象徴的に表現する以上に、テキストとオブジェクト、映像と投影される場との密接など関係をその表現内容とする。そこで、この演習では、映像というメディアを中心にテキストや場との関係性による表現(インスタレーション)を学ぶことを目的とする。また、インスタレーション表現の特性である「空間」の意識と、その環境全体を対象視し構成する力を養うことを目標としている。			
授業の概要 「映像」と「オブジェクト」、「映像」と「場」(特定された空間・サイトスペシフィック)との関係作用を実際の空間で設営しながら、テーマに添った表現を実際の制作を通して学ぶことをめざす。			
学生に対する評価の方法 課題制作におけるテーマの理解力・表現内容の追及の深さ・構想能力中心に、各作品発表(プレゼンテーション)より、評価する。 出席状況・受講態度より、授業に対する意欲として判断し、評価とする。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回「関係性の表現」 多様な表現「インスタレーションとはなにか」について 第2~4回「セルフポートレート」制作 ~ 写真とモノと文字(テキスト)との関係表現 自分の身体映像(写真)とオブジェクトとテキストという三つの「モノ」を同一空間(箱の内部)に配置することで、 それら三者による関係作用を用いて自画像を表現する。 1. セルフポートレートとしての写真撮影 2. 写真とオブジェクトとテキストの関係 3. 表現におけるデノテーション(外示)から、コノテーション(内示)の理解 4. プレゼンテーション 第5回「インスタレーション作品の体験」 学外授業・ギャラリーにて、今現在の作家がどのように表現しているかを実際の作品の空間の中で体感することにより、空間表現の重要性について認識する。 第6~9回「フェイク・ストーンがあるべき場所」制作 ~ 場とモノとの関係 複製物を可塑性素材で作りあげ立体造形としての基礎技術を養うとともに、疑似である石とそれが置かれる場との関係性を考え空間装置化することで、サイトスペシフィックにおけるオブジェクト(偽石)と関係性を表現する。この設置現場を映像記録として発表する。 1. 偽石制作 2. 場所リサーチ 3. ドキュメント撮影 4. プレゼンテーション 第10~15回「日常の場に潜む力」フェイク・ストーンがあるべき場所」制作 ~ 場を顕在化する表現 場の力を顕在化させるために、現場にて様々なオブジェクト、テキスト、映像などを効果的に装置化すること。 1~2. 場所のリサーチ(チーム) 撮影、場所決定 3. セッティング及び企画書作成(場所撮影許可) 4. セッティング制作 5. 現場設営・撮影 6. プレゼンテーション			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に映像資料(撮影などをし)具体的提案物を準備すること。			

[授業科目名] プレゼンテーション演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉野 まり子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標は、特定されたテーマの表現伝達方法を考え、発表内容を論理的に構成し、プレゼンテーションを限られた時間内に完成させ実践する（3回の実践）。また、3年次のゼミ展、4年次の卒業作品展において、自分の作品におけるプレゼンテーションにも応用できる技能を獲得する。			
授業の概要 主題（テーマ）を伝達・表現するプレゼンテーションを演習することで、内容を効果的にまとめあげる効果を予測する、そして対象となる聴衆心理を理解する力を身につける。授業では、テーマ伝達の理念、伝達対象（聴衆）の把握、伝達内容の構成、伝達支援の活用方法などを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 授業内容と効果への理解度ならび授業への参加姿勢（30%）、出席数（30%）、評価対象の3つのプレゼンテーション完成度（40%）を総合的に評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 口頭発表（プレゼンテーション）が活かされる状況と場面 概論 第2回 プレゼンテーションの目的、主題（テーマ）の決定、内容、構成、対象、効果などの説明 第3回 プレゼンテーションの支援素材の活用 その（1） 第4回 プレゼンテーションの支援素材の活用 その（2） 第5回 プレゼンテーションの実践 15名 その（1）テーマ「学業計画 なぜ大学進学を選んだか」 第6回 プレゼンテーションの実践 15名 その（1）テーマ「学業計画 なぜ大学進学を選んだか」 第7回 第1回プレゼンテーションの反省と改善点（30名全員による講評） 第8回 第1回プレゼンテーションの反省と改善点（30名全員による講評） 第9回 プレゼンテーションの実践 その（2）テーマ「プレゼンテーションをよりよくするためのプレゼンテーション」（全員による講評） 第10回 プレゼンテーションの実践 その（2）テーマ「プレゼンテーションをより良くするためのプレゼンテーション」（全員による講評） 第11回 プレゼンテーションの準備 その（3） テーマ「社会性、時事性を背景とするテーマにおけるプレゼンテーション」 内容は自分の映像・表現論の構築を目標とするもの 第12回 プレゼンテーションの準備 第13回 プレゼンテーションの発表 第14回 プレゼンテーションの発表 第15回 全員による講評 発表（プレゼンテーションの実践）は、1回目以降も15名ずつ2回に分けて実施する。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 単なるプレゼンテーションソフトを使いこなせることを目標としていないことを自覚しながら、自分の考え方、思考背景、テーマへの探求心などを表現・伝達するという行為の難しさ、不思議な力を把握する。			

[授業科目名] 映像メディア演習（フォト）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 光 幸國・安形 嘉真 小山 智大
[単位数] 3	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像の原点は写真である、その写真の基礎を各カテゴリー（ポートレート・スチルライフ・スナップ・風景）を通じて作品を制作する。その課程において、アナログからデジタルまでコンセプトワークも含め、写真の基本を考察研究し習得する事を達成目標とする。			
授業の概要 映像の基本は写真である事を軸に、上記各カテゴリ演習を通じて、フレームワーク、コンセプトワーク、フォーカスワーク、ライティング、の基本をしっかりと習得し、3年次からの写真、映画、テレビ、CG、インスタレーションゼミに適応出来る能力を身につける事			
学生に対する評価の方法 平常の演習態度（20%） 最終回に提出する13枚の課題作品評価（80%） なお再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 総論／カメラの仕組み（開放絞り、パンフォーカス、シャッタースピードと絞りの関係）／小テスト 第2回 学外実習 距離2mで開放絞り1枚、パンフォーカス1枚、自由作品1枚 第3回 二班に分かれ一班は現像・コンタクト／二班は4×5撮影（絞り開放、パンフォーカス） 第4回 二班に分かれ二班は現像・コンタクト／一班は4×5撮影（絞り開放、パンフォーカス） 第5回 2Lにてアナログプリント（開放絞り1枚、パンフォーカス1枚、自由作品1枚） 第6回 ポートレート（屋外）自然光ライティング／デジタルの基本 第7回 ポートレート（スタジオ）スタジオライティング／デジタルの基本 第8回 スチルライフ（屋外）自然光ライティング／デジタルの基本 第9回 スチルライフ（スタジオ）スタジオライティング／デジタルの基本 第10回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ）／デジタルの基本 第11回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 第12回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 第13回 作品制作／作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 合格者はラボにプリント出し 第14回 最終作品チェック（Lサイズ or 2Lサイズ） 合格者はラボにプリント出し 第15回 提出作品（1.ポートレート、2.スチルライフ、3.風景 or スナップ or その他）			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 写真技術書を自主的に購入し映像の原理原則を知る事 演習での課題は最低限であり、自発的に作品制作を行い教員からアドバイスを受ける事 大学図書館の著名な映像作家の写真集や作品集を鑑賞する事 積極的に美術館やギャラリーに行き名作のオリジナル作品を鑑賞する事 夏休み、春休みは自分でテーマを見つけ、作品制作を行う事。			

[授業科目名] 映像メディア演習（映画・ビデオ）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 真・吉野 まり子
[単位数] 3	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 目標はオリジナルの「ドラマ映像」を制作すること。 テーマは映像制作のための基礎的な技術を個人として習得しつつ、グループというユニットでの制作プロセスを経ることで社会との関係やコミュニケーション能力を高める。またその制作プロセスで必要な情報の共有、公開、説明責任などを理解して、責任ある人格の形成をおこなう。			
授業の概要 すべての映像制作プロセスの基礎をプロフェッショナル仕様機材を使って学び、作品を完成させていく。 前半授業においては映像が作品として成立するための技術を学び、実際に機材に触れてもらう。その後制作過程に入り、役割に応じた指導の下、完成を目指していく。講習は表現技術だけでなく総合的に行う。			
学生に対する評価の方法 制作物の評価。制作に関係する参画態度。授業内小テスト。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業説明/グループ分け/企画検討（企画案選定） 第2回 小テスト/撮影機材取扱い/録音機材取扱い 第3回 参考上映/企画検討（プロット作成） 第4回 小テスト/照明機材取扱い/企画検討（脚本化へのポイント） 第5回 プロダクションブックの取扱い/脚本制作 第6回 脚本読み合わせ/企画検討 第7回 撮影実習 第8回 撮影実習 第9回 撮影実習 第10回 撮影実習 第11回 編集基礎/編集実習 第12回 編集実習/整音 第13回 編集実習/整音 第14回 編集実習/整音/作品チェック 第15回 講評			
使用教科書 プロダクションガイドブック配布（初回授業時）			
自己学習の内容等アドバイス 毎回の授業の前にプロダクションガイドブックの項目を予習しておきたい。 また添付されているサンプルの書式や項目にも目を通して欲しい。 機材の取扱いは名称の理解と触れること双方が必要であるため、実習時もガイドブックを参照し、撮影時も誤作業のないようにしたい。			

[授業科目名] 映像メディア演習 (コンピュータグラフィックス)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 山本 努武・清家 美佳
[単位数] 3	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 2DCGアニメーション作品の制作を通して、Adobe Flash, Adobe Premiere, Adobe AfterEffects, Adobe Photoshop, Apple Final Cut Pro等のソフトウェアの使用法を習得する。また表現手法として、キャラクターアニメーション、VFXアニメーション、抽象的なアニメーション、実験的なアニメーションを用い、それぞれが持つ固有の視覚言語の習得と分析を行う。			
授業の概要 1 : Adobe Flash, Adobe AfterEffects等の基本～応用操作を習得 2 : グループによるコンセプトワーク、ストーリーボード制作、アニメーション制作 3 : 作品素材の編集、ポストプロダクション作業 4 : 発表、講評、分析			
学生に対する評価の方法 出席状況、グループワーク状況、完成作品 ※ 再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 導入、作例の紹介 / ソフトウェアレクチャー 第2回 作例の紹介 / ソフトウェアレクチャー 第3回 作例の紹介 / ソフトウェアレクチャー 第4回 グループワーク ストーリーボード制作 第5回 ストーリーボード プレゼン 第6回 グループワーク アニメーション制作 / グループ毎に進捗をチェック / 技法に関する調査など 第7回 同上 第8回 同上 第9回 同上 第10回 同上 第11回 同上 第12回 同上 第13回 同上 第14回 ポストプロダクション作業、最終調整、プレゼン準備など 第15回 作品発表、分析 / 個々の今後の展望に関して			
使用教科書 特に指定しない			
自己学習の内容等アドバイス グループワーク、アニメーション制作は、授業時間以外にも活発に行ってください。			

[授業科目名] 映像メディア演習 (サウンド)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康
[単位数] 3	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択必修	備考
授業の到達目標及びテーマ コンピュータを用いた「作曲」の演習を行う。テーマは「映像と音楽」であり、あくまでも「映像イメージ」や実際の「映像ムービー」を前提に、音楽制作を行う。これまで作曲など一度も経験したことがなくても半年後は音楽を作れるようになる。音楽経験がある人は、さらにその可能性を開花させることができる。そのために必要な知識と技術、現代的な作曲技法を実際に課題をこなしながら学ぶ。3年次にどのような専門ゼミに進もうとも、そこで必要となる音楽を自分で創り出せる基礎力を養うことを目標とする。 履修にあたって楽器演奏や楽譜の読み書きの能力は問わない。			
授業の概要 シーケンサー・ソフトLogicによる「音楽制作」、MIDI、サンプリング、デジタル・オーディオ、エフェクター、オーディオメーション、ミキシングおよびマスタリングなどについて基礎的な知識と技術を身に付け、実際の制作を通じて映像に対する音楽的イメージネーションの訓練を行う。同時に作曲経験や楽器の経験を前提としない作曲技法として、ミニマル、モード、音色の音楽などを学ぶ。 課題制作は「映像イメージによる作曲」「アニメーションへの作曲」「ミックス/リミックス」を行う。さらにインタラクティブな映像/音響プログラミングMax/MSPを体験し、コンピュータ音楽の未来を展望する。 ※必ず個人用ヘッドフォンを持参すること			
学生に対する評価の方法 授業の出席・態度 [30%]、課題作品とレポート [70%] で総合的に評価する。 遅刻については厳しくマイナス評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) *** Logic をマスターする *** 第1回 インTRODクシヨN 音楽と映像の関係、Logicの基礎 第2回 Logic 課題演習(1) ソフトウェア音源の利用 第3回 Logic 課題演習(1) エフェクタの基礎 第4回 Logic 課題演習(1) 音楽ミキシングとマスタリング 第5回 Logic 課題演習(1) 制作発表と講評 *** アニメーションを素材にした本格的な音楽制作 *** 第6回 Logic 課題演習(2) ムービーと音楽制作 第7回 Logic 課題演習(2) 音楽における音色と空間の重要性 第8回 Logic 課題演習(2) デジタル技術をベースにしたさまざまな作曲技法 第9回 Logic 課題演習(2) コンピュータの限界とそれを越える工夫 第10回 Logic 課題演習(2) 制作発表と講評			

*** ミックス/リミックスで広がる音楽の世界 ***

第11回 レコーディング+ミキシング演習 スタジオの機能とレコーディングの実際

第12回 Logic リミックス課題演習(3) レコーディング素材から新しい音楽を作る

第13回 Logic リミックス課題演習(3) 制作発表

*** インタラクティブな映像と音楽の関係を体験する ***

第14回 Max/MSP 演習 映像とサウンドをインタラクティブに「演奏」する

第15回 Max/MSP 演習 音楽、映像、インスタレーション…すべてがつながる

※必ず個人用ヘッドフォンを持参すること

使用教科書

参考図書：「最新 音楽用語辞典 (改定新版)」リットーミュージック社

自己学習の内容等アドバイス

課題の音楽制作に集中すると、ともすれば耳が中立ではなくなり、冷静な判断ができなくなる。積極的に教員や友達に途中経過を聞かせて意見をもらって欲しい。時にはヘッドフォンを取り替えてみるのも良い。先入観を持たずに、さまざまなジャンルの音楽を聞く。その時ぼんやり音楽にひたるだけでなく、分析的に聞く訓練も合わせてトライして欲しい。例えば、ひとつの楽器だけに集中して聞いたり、高音/低音のバランスに注意したり、音の広がり感に注意したり…。確実に耳が鍛えられ、自分の音楽制作にも大いに役立つ。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
メディアリテラシー演習Ⅱ		演習	杉本 達應
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次後期(集中)	選択	
授業の到達目標及びテーマ 従来から謳われているメディアリテラシーを獲得するだけでなく、現在のメディア状況に即した新たなリテラシーを探究し、今日版のメディアリテラシーを涵養するためのプログラムを企画し、わかりやすく発表できる能力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 現在の生活に不可欠な存在となっているメディアは、現実を切り取って再構成して私たちを取り囲んでいる。本牧は、講義とワークショップを組み合わせる。講義部分では、現代のメディア状況と様々な取り組みや作品を紹介する。ワークショップ部分では、自らの視点からメディアを批判的に読み解きながら、積極的に活用するための試みを企画し、発表する。 受講生には、映像メディアを学ぶ将来のクリエイターとして、メディアとメディア表現の新しい可能性や活用方法を主体的に探究し積極的に議論することが求められる。 本科目は、「メディアリテラシー演習Ⅰ」の単位習得者を対象に開講する。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度(30%)、レポート・小課題(30%)、最終課題プレゼンテーション(40%)などで総合的に評価する。集中講義であり自己学習時間を十分にとれないため、全回出席を前提として授業を進めるため、授業欠席は大幅な減点の対象となる。特に初回と最終回の欠席は失格とするので、必ず出席すること。本科目は再評価を実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション 全体概要説明 第2回 メディアリテラシーとは メディアの分析とメディア表現 第3回 メディアの変遷 技術、装置、電子メディアの可能性 第4回 メディアと産業 ジャーナリズム、職業 第5回 メディアと学び 教育、ミュージアム、ワークショップ 第6回 メディアとコミュニティ 市民メディア、インターネット、モバイル・メディア 第7回 メディアリテラシーをテーマとした企画オリエンテーション 第8回 メディアリテラシーをテーマとした企画作成 第9回 企画発表準備 第10回 企画発表とディスカッション 第11回 企画をもとにした制作1 第12回 企画をもとにした制作2 第13回 発表準備 第14回 最終成果発表とディスカッション 第15回 まとめ			
使用教科書 【参考図書】 菅谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書 必要な資料は授業中に指示する。			
自己学習の内容等アドバイス 集中講義であり、自己学習の時間をもって積極的に課題に取り組むこと。			

[授業科目名] 映像演出論 (06生以前 演出論)		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ コミュニケーションとしての「演出」を基本にふまえながら映像表現と「演出」の関係を具体的に理解する。 映画のなかの様々な要素、技術の効果的な活用の仕方を学ぶ。			
授業の概要 様々な映像作品から、優れた「演出」のエッセンスを抽出して紹介する。 過去の名作から自作CMまでを例にとり、適切、具体的に解説する。 観念的ではなく、自らの映像制作現場の経験に基づいた、即応可能な実践的授業である。			
学生に対する評価の方法 最終的には課題に基づくレポートで評価するが、中間で行う演出コンテ作成の実習も評価に加えられる。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1・2回 映像演出の現状 自作CMを例に具体的な演出法を紹介。 第3・4回 巨匠の現場 世界的名監督の貴重な現場風景 エピソードの紹介 現場の演出シーンと完成シーンの比較。 第5・6回 名場面に観る演出の極意。 第7・8回 コンテ主義と即興主義 サスペンスとはなにか？ 第9・10回 演出コンテ作成実習 テーマに基づいて簡単なコンテをつくる。 第11回 撮影における演出。 第12回 映像と音楽。 第13・14回 編集について 画面構成とモンタージュの諸相。 第15回 未完成という名の演出？ 人間と人生についての探求。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 授業中に取り上げられた映画をかならず全編鑑賞すること。 紹介された映画作家のほかの作品、文献にも眼を通すこと。			

[授業科目名] S F X 演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐藤 敦紀・押井 守
[単位数] 2	[開講期] 2～4 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ (視覚効果概論) 昨今すべての方法論が「デジタル・CG」の一言で括られる風潮のある VFX の世界であるが 実は現実の現場はもう少しややこしく複雑だ。ましてやそれらの「デジタル」技術も過去の膨大な「アナログ」技術に拠って支えられている事を忘れがらだ。本講では映像技術の発達と共に進化を遂げてきた「視覚効果」の世界を、その歴史を縦軸に技術を横軸にしながら全体を俯瞰し理解し基礎技術を習得してもらうことを到達目標とする。			
授業の概要 講師が担当した作品の実体験を踏まえた VFX メイキングも含め 国内外の多くのメイキング映像を使用しながら SFX の世界を俯瞰してもらいつつ それらがどのように映像作品に寄与し影響を与えてきたかを考えて行きたい。			
学生に対する評価の方法 出席とレポート提出			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第 1・2 回 視覚効果／概論 第 3・4 回 MAT ペインティング 第 5・6 回 キャラクター／ストップモーションからゴーモーションそして CGI へその 1 第 7・8 回 キャラクター／ストップモーションからゴーモーションそして CGI へその 2 第 9・10 回 コンポジット／合成 第 11・12 回 ミニチュアと視覚効果 第 13・14 回 コンピューターグラフィックスと視覚効果 第 15 総評			
使用教科書 特に使用せず 映像と KeyNote を併用して行く予定			
自己学習の内容等アドバイス 映画を観てください 空気のように観てください			

[授業科目名] シナリオ演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 長崎 俊一
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 脚本をとにかく書く。そして、読む。かつ、そこでとどまるのではなく、どうしたら、脚本が、映画が面白くなるのかを考える。脚本術ではなく、自分なりの脚本を書く力、読む力の出発点を作ることが目標。			
授業の概要 脚本の実作、またそれに向けての準備作業を通して、脚本とはどういうものか体感する。また、受講者間の相互批評で、自分の考えや感覚がどういふものか、どうしたら伝わるかを考える。受講者には、書く、読むという負担がかかることを覚悟しておいて欲しい。(授業計画の各課題を参考にして下さい) もちろん好奇心があれば、それは負担ではない。			
学生に対する評価の方法 課題の実績。脚本の実作。 他人の作品をどう思ったか? (意見) それをどう咀嚼したか? (脚本の直し作業)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 講義の狙い、目的について。 私(長崎)の好きな映画 どういうところが好きか。 参考部分上映 紅の流れ星/わが輩はカモである <u>課題</u> 自分の好きな映画を一本選び、どういふところが好きか伝える。 第2回 前回課題の発表 映画は多様で、基本的に自由である。同時に物語というものから逃れられず、不自由でもあることを知る。 <u>課題</u> 自分ないし身の回りの人を主人公にしたストーリーを400～600字程度で作る。 (自分の好きな映画のストーリーを真似する事でも構わない) 第3回 前回課題の講評 第4回 物語とは何なのか考える。また、映画のテーマ(何を描くか)、題材について考える。 参考部分上映 第9地区/リトル・ミス・サンシャイン/台湾の短篇映画/裏窓 <u>課題</u> 自分が作りたい30分の映画の企画を考える。どんな主人公でも、どんな内容でも良い。 第5回 前回課題=各人の企画を発表。(この企画を個人企画と呼ぶ) 受講生間で質疑応答。個人企画の人気投票をする。 上位二つの個人企画は自動的に脚本に向けていくこととする。 第6回 発表された個人企画を参考に三人一組のグループを作る。 <u>課題</u> そのグループで新たに企画を考える。 もちろん、メンバーの誰かの企画でも構わない。 グループ企画と違う個人企画を作りたい者は、グループ企画と平行してなら、作る事が出来る。 脚本の構成について考える。 参考部分上映 或る夜の出来事/マイマイ新子と千年の魔法			

- 第7回 前回の課題＝グループ企画の発表。個人企画を作りたい者はそれも発表。
キャラクターについて考える。
参考部分上映 ローラーガールズ・ダイアリー/スクール・オブ・ロック/長屋紳士録
- 第8回 組別相談。他の組は作業を進める。その企画をより面白くするにはどうしたらいいか、検討する。
課題 脚本を作る。
- 第9回 脚本に向けた各組の進行具合を聞く。組別相談（やはりこの間他の組は作業を進める）。
各組にとって今必要な作業は何かを考える。例えば、何を描こうとするのか（テーマ）の確認、
話を短く伝える事が出来るか、映像で語ることが出来ているかの確認。
さらに、どうやったら話が展開するか、キャラクターをくつきりさせられるか。
- 第10回 映画の始まり方について、あるいは印象的なシーンについて考える。
参考部分上映 生きるべきか死ぬべきか/晩菊/ダーティハリー
脚本の締め切りを設定する。脚本には企画意図と粗筋を添付する。
- 第11回 提出された脚本の講評。最後まで書いてない組がいても、途中までを提出する。
また各組は、あらかじめ分担して他の組の脚本を読み、批評する。
- 第12回 脚本を直すということ。演出ということ。
私の最新作「少女たちの羅針盤」の経験を資料を使って話す。
課題 脚本を直す。途中までの組は最後まで書く。
- 第13回 直した脚本の講評。ならびに相互批評。ここでは、未完の組が出ないようにしたい。
- 第14回 各組、執筆中の1シーンの本読みを公開する。本読みは動き（芝居）も加えること。
課題 さらに脚本を直す組は直す。各人、他の組の脚本を全部読む。
- 第15回 各組、自分たちの脚本がどういう面白さを持った映画になるかプレゼンする。
皆で投票をし、この講義で一番人気のある脚本を決める。

使用教科書

なし。参考として既存映画のDVD。
また、受講者が書いた脚本。

自己学習の内容等アドバイス

失敗は一番の教科書になるので恐れない。

[授業科目名] フィルムアーカイブ特論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 石原 香絵
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期 (集中)	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映画フィルムの物的な側面に触れ、映画遺産を次世代に向けて守り残すことの意義およびフィルムアーカイブの機能/フィルムアーキビストの役割を理解することによって、動的映像を学ぶ上での新しい視座を獲得すること。			
授業の概要 この授業では、多様な動的映像メディアの中でもとくに「映画フィルム」を中心的に取り上げる。前半はその基本構造や物的性質、修復・復元の倫理、後半は国内外の映画保存活動の現状を実例から学ぶ。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度 (30%)、授業内レポート(30%)、最終日に実施する試験 (40%) によって総合的に評価をおこなう。授業欠席は減点の対象とする。試験の欠席は認めないので注意すること。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 ガイダンス 第2回 映画フィルムの基本構造1 第3回 映画フィルムの基本構造2 (カラー) 第4回 映画フィルムの基本構造3 (サウンド) 第5回 映画フィルムの修復、復元、保存1 (可燃性フィルム) 第6回 映画フィルムの修復、復元、保存2 (不燃性フィルム) 第7回 フィルムアーカイブ1 (類型) 第8回 フィルムアーカイブ2 (国内事例) 第9回 フィルムアーカイブ3 (海外事例) 第10回 フィルムアーキビストの役割 第11回 小型映画 (アマチュアフッテージ、ホームムービー、オフファンフィルム) 第12回 展示・上映 (映写) 第13回 映画保存の実例1 (発掘→調査→復元) 第14回 映画保存の実例2 (復元→上映→保存) 第15回 試験			
使用教科書 参考テキスト ① レイ・エドモンドソン (著)『視聴覚アーカイブ活動:その哲学と原則』(ユネスコ)、② 全米映画保存基金 (編)『フィルム保存入門:公文書館・図書館・博物館のための基本原則』			
自己学習の内容等アドバイス 上記参考テキストを講義の前後に参照のこと (何れも映画保存協会のウェブサイトより無料ダウンロード可能)。① http://www.filmpres.org/archives/159 ② http://www.filmpres.org/archives/458			

[授業科目名] CM映像論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 安達 洋次郎・金巻 康朗
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考 集中講義あり，日程に注意
授業の到達目標及びテーマ 広告映像は時代を映す鏡であり文化でもある。長年、広告映像の世界を生き抜いてきたクリエイター（金巻）とアーティスト(安達)の2人による実践的授業です。企業のメッセージをいかに消費者に強いインパクトを与えるか、ディレクター指向をめざす学生をターゲットに企画力，創造力を身につけることを目標とする。印刷媒体における映像論、広告全般は安達が、電波媒体における TVCM 論を金巻がそれぞれ担当します			
授業の概要 安達より 商品企画からマーケティングリサーチまで広告全般を幅広く学ぶ。 過去に発表されたあらゆる広告作品をいろんな角度から考察研究してコンセプトワークを学び取る。 広告映像表現におけるアーティストの精神について学ぶ。 金巻より TV-CMの成否は90%企画に掛かっていると言ってもいい。あまりに多くのCMが世に溢れ、CMがCMを模倣している現在、新たな可能性を追求するには、企画の原点であるアイデアをどう開発するかに立ち返る必要が有る。この授業は、最新の脳科学によるCMの分析を踏まえながら、実際のCM企画の流れに乗っ取って、アイデアから構成、コンテ作成、プレゼンまでを、講義と演習によって修得してもらう。実際の映像制作は経験にはかなわないが、アイデアこそは、学生もベテランも同じスタートラインであることを忘れない様に。			
学生に対する評価の方法 安達の評価50%、金巻の評価50%、再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 オリエンテーション、広告概論その1 広告媒体について 第2回 広告概論その2 企業のマーケティング活動の一環としての広告の位置付け 第3回 広告概論その3 広告というメディアのなかでのCMの位置付け、日本の広告費の現況を論じる 第4回 印刷媒体における広告制作のながれ、およびコンセプトワークについて学ぶ 第5回 印刷広告(新聞)を中心に現代広告現象論 広告を読む 第6回 印刷広告(雑誌、ポスター、SP他)を中心に広告を読む 第7回 広告における言葉(コピー)の役割 コピーライター 第8回 広告におけるアーティストの心構え 写真家、イラストレーター、他 第9回 『いかに、人は潜在意識下でコントロールされているか』、 CMは脳にどう働きかけるか?最新の脳科学で分析する 第10回 『独創的クリエイティブの発想』 CM企画立案の方法論 第11回 クリエイティブ演習、課題オリエンテーションとブレインストーミング 第12回 『企画コンテ表現法』、プレゼンコンテの作り方 第13回 クリエイティブ演習、コンテ作成 第14回 プレゼンテーション、および講評 第15回 西宮広告映像論、まとめ			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 日々実生活の中で見られる全ての広告物に注目し、それらが消費者に対して何を伝えようとしているかを読み取る習慣を身に付けるよう心がける。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ドキュメンタリー制作論		講義	海老名 敏宏
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択	
授業の概要 制作者のメッセージを伝えるドキュメンタリーというジャンルを、主にテレビドキュメンタリーの立場から解説していく。ドキュメンタリーの概念や考え方、テーマの設定や表現方法、さらに取材方法など、表現者としてのモラルも含めて具体的なドキュメンタリー作品を見せながら展開していく。制作者の意図を読み取る感性を鍛えながら、自分なりのドキュメンタリーへのアプローチの方法をつかんでいくことをめざす。			
授業の到達目標及びテーマ 講座では常に、「ドキュメンタリーとは何か」を問い続ける。テレビメディアにこだわらず、新しいメディアでの表現の可能性も提示しながら、表現者としての自分なりの企画をまとめあげ、提案できることを講座の目標とする。表現したいテーマをつかみ、企画書に仕上げる過程のさまざまな課題を具体的に取り上げていくことでドキュメンタリーの幅広い感性と視野をひろげていくことが目的である。			
学生に対する評価の方法 講座に対する姿勢（30%）、自分を表現できること、講座の理解度を求めるレポート（30%）、最終講座までに提出するドキュメンタリー企画書（40%） 毎回、ドキュメンタリー作品を視聴するので、出欠はそのまま評価に反映する。再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講座の目的と進め方 テレビドキュメンタリーの現状と映像メディアを取り巻く環境。 第2回 ドキュメンタリーとは何か ドキュメンタリー制作者が目指すものとは何か ※レポート課題 第3回 ドキュメンタリーの変遷 メディアの進化と時代の記録 第4回 ドキュメンタリーは何を記録してきたか 第5回 ドキュメンタリーのジャンルとテーマ ドキュメンタリーは何がテーマとなりえるか 第6回 記録する側と記録される側 事実とは何か ※レポート課題 第7回 ドキュメンタリーの演出とは何か 第8回 ドキュメンタリーの仕掛けとヤラセとは何か 第9回 ドキュメンタリーは嘘をつく 第10回 ドキュメンタリーの表現とはなにか ※レポート課題 第11回 テレビドキュメンタリーの課題と限界 第12回 取材することのモラルと姿勢、タブーと挑戦 第13回 企画書とは何か 第14回 ドキュメンタリーの可能性 第15回 ドキュメンタリーを志す人へ、テレビを目指す人たちへ ※ 最終試験はドキュメンタリー企画書で評価（最終講座までに提出のこと） ※ 各レポートのテーマはその都度提示する			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 講座期間中、意識的にテレビドキュメンタリーの視聴を薦める。 ドキュメンタリー作品の時代背景を学ぶ必要がある場合は、その都度提示する			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
ノンリニアエディティング演習		演習	斎賀 和彦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 本格的な映像制作を行う3年次以降に必要な基礎的制作スキルとして主に映像編集系の内容に特化したスキルトレーニングを行う。そのため、編集技術に精通まではしなくとも、基本的にひとりでポストプロダクション作業が行えるまでの技術取得を目標とする。			
授業の概要 映像編集は、編集機（あるいは編集ソフト）を使いこなす、という技術的スキルの側面と、演出を理解し、編集段階でより深く、映像の意味性を補強する創造性の側面という2軸がつねに存在する。トータルな意味で「映像編集」を実行できる能力は映像制作者の重要な要件である。			
学生に対する評価の方法 実技テストおよび出席点 スキル取得の要素が大きい演習ゆえ、出席日数への要求は厳しい。原則として1/3を越える欠席もしくは実技テスト欠席者は成績評価の対象としない（再評価はおこなわない）。また、同じ観点から大幅な遅刻も欠席として扱われることを予め知っておいて欲しい。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 演習アジェンダの解説（演習の進行スタイルの提示と到達目標、評価方法について） 第2回 編集入門：iMovieをマスターする 第3回 編集スキル1：基本操作 インターフェイスの理解 第4回 編集スキル2：基本操作 編集、トリム、カット編集、インサート、オーバーライト 第5回 編集理論1：トリミングとモンタージュ、トランジションの考え方 第6回 編集スキル3：エフェクト、パラメータの制御 第7回 技術講義1：ビデオフォーマットの種類と特徴、コーデック、 第8回 編集スキル4：オーディオ、マルチトラック編集 第9回 編集スキル5：キャプチャ、素材管理 第10回 編集スキル6：合成、縦軸編集 第11回 技術講義2：コンポジットの理論とマスク 第12回 編集スキル7：タイトル、モーショングラフィック 第13回 編集理論2：時間軸 第14回 実技テスト 前半 第15回 実技テスト 後半			
使用教科書 「Final Cut Pro 実践講座」 玄光社			
自己学習の内容等アドバイス 毎回、習得内容を設定して進むため、授業時間内で習得できなかった部分、不安な部分、また、欠席した場合などは他の同等設備を使って復習してくる必要がある。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
3DコンピュータアニメーションI		実習	愛澤 伯友
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ Mayaによる基礎的な3DCG技法のマスター。あわせて、3DCG制作に必要な知識を学習する。			
授業の概要 授業は、Mayaを使った実際の制作方法を学ぶ演習系授業と、CG全般について学ぶ理論の講義系授業から編成されています。			
学生に対する評価の方法 各項目での制作50(%)、知識編の筆記試験50(%)			
授業計画(回数ごとの内容等) <実技編> 第1回 3DCG ツール概説 (Maya インターフェース) 第2回 モデリング概説 第3回 NURBS モデリング (1) 第4回 NURBS モデリング (2) 第5回 NURBS モデリング (3) 第6回 UV とテクスチャ 第7回 Polygon モデリング (1) 第8回 Polygon モデリング (2) 第9回 Polygon モデリング (3) 第10回 Shading とマテリアル 第11回 Subdivision Surface モデリング (1) 第12回 Subdivision Surface モデリング (2) 第13回 キャラクター作成 (1) 第14回 キャラクター作成 (2) 第15回 アニメーション <知識編> 第1回 コンピュータグラフィックスとは 第2回 デジタル画像の基礎 第3回 座標系、回転、移動、拡大縮小 第4回 モデリング技法 第5回 マッピング技法とマテリアル 第6回 カメラワーク、ライティング、レンダリング 第7回 演出、制作進行			
使用教科書 「Maya Beginners」本城なお著、BNN 新社 (ISBN-10 : 4861004284)、CG-ARTS 協会『入門 CG デザイン』(ISBN978-903474-12-0)、配布プリント			
自己学習の内容等アドバイス 単元ごとの課題は次回までに必ず実施して、習得しておくこと。			

[授業科目名] 3DコンピュータアニメーションII		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 1	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ※同講座Iを履修したもの
授業の到達目標及びテーマ 同講座Iに引き続き、3DCGのさまざまな技法を習得する。 3DCG制作過程の理解と制作を到達目標とする。知識レベルでは、CG検定3級程度を目標とする。			
授業の概要 同講座Iと同様、実技編と知識編の授業で構成されている。			
学生に対する評価の方法 各単元での制作（70%）、知識編の筆記（30%）			
授業計画（回数ごとの内容等） <実技編> 第1回 Polygonモデリングの応用（1） 第2回 Polygonモデリングの応用（2） 第3回 Polygonモデリングの応用（3） 第4回 アニメーション（1） 第5回 アニメーション（2） 第6回 アニメーション（3） 第7回 モーション（1） 第8回 モーション（2） 第9回 モーション（3） 第10回 映像系画像処理、映像系イラスト 第11回 マテリアル研究（1） 第12回 マテリアル研究（2） 第13回 特殊効果 第14回 合成 第15回 パッケージング <知識編> 第1回 写真カメラ、ビデオカメラ 第2回 カメラワーク 第3回 映像編集 第4回 マテリアル&モデリング 第5回 アニメーション 第6回 シーン構成、演出 第7回 プロダクト・ワーク			
使用教科書 バンダイナムコ共著『Maya教科書2』（ISBN：978-4-68246-111-7）、CG-ARTS協会『デジタル映像表現（改訂版）』（ISBN：978-4-903474-10-6）			
自己学習の内容等アドバイス 授業内の課題は、次回までに必ずマスターしておくこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アニメーション演習 I		演習	佐藤 敦紀
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 「映像には原則があり文法がある」 これを理解し分析し自分の作品作りの際に役立ててもらおうのが本講の目的である 昨今 カメラや編集機材は使うのはうまくてもその結果作られた作品がデータラメなものがあまりにも多い したがってここではハードウェアの使い方ではなくソフトウェアとしての撮影／編集技法を学ぶのが目的である			
授業の概要 映像の演出とは 映像の連続性と映像の変化が生み出すダイナミズムの創作であるという観点を中心にテーマやストーリーの問題は取り上げず「カット＝映像の制作（脚本、撮影、作画、編集）に含まれる問題」に焦点を当てて説明していきたい イマジナリィ・ラインといった基本的な事柄から 画角 レイアウト フレーミング カメラワーク そして編集の仕方等の方法論をベースに「何を表現し 何を伝えるのか?」を実際の作品を例にとりながら観念的ではなく具体的に追求していきたい また本講では実写映像とアニメーションは区別せず同一の映像として扱うものとする 一部撮影実習を実施する予定			
学生に対する評価の方法 レポート提出			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 概論 映像のスタイル 第2回 映像の原則 1 アンングル ライティング カラー フレーム 第3回 映像の原則 2 動きの方向性 フレームの上手下手 第4回 映像の原則 3 イマジナリィライン 第5回 映像の原則 4 カメラワーク 第6回 映像の原則 5 コンテュニティ （一部撮影実習あり） 第7回 映像の原則 6 編集 第8回 総評			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 映画を観てください 空気のように観てください			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
アニメーション演習Ⅰ		演習	吉田 雅則
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、アニメーション表現の原点に立ち返り、キャラクターを自らの目と手を用いて「動かす」という体験を通じて実際に作品を制作、形として残すことにより、表現の基礎を学ぶことを目的としている。			
授業の概要 映像表現におけるアニメーションの技法は日々多様化し、デジタル技術に負う部分も増加の一途をたどっている。しかし、本来動かないものを動かし生命を与えるというアニメーションの持つ本質的な目的はアナログ／デジタルに関係なく共通である。本講義ではその基本概念を、演習形式で学習する。アニメーション演習Ⅰは基礎を重点に、アニメーション演習Ⅱでその発展を演習を通して実践する。			
学生に対する評価の方法 出席、受講態度、課題作品による総合的な判断による。 特に課題作品を重視する。(70パーセント) 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 簡易的なキャラクターを組み立て、撮影、編集までの一連の流れをワークショップ形式で経験する事により、アニメーション制作の理論と仕組みを体験する。 本講義では主にカットアウトアニメーション (切り紙アニメーション) と呼ばれる技法を通じ、基礎的なキャラクターアニメーションについて学習する。 第1回 アニメーションとは① カットアウトアニメーション 第2回 アニメーションとは② 作品研究Ⅰ 第3回 アニメーションとは③ 作品研究Ⅱ 第4回 キャラクター制作① 第5回 キャラクター制作② 第6回 撮影① 第7回 撮影② 第8回 撮影③ 第9回 キャラクター制作③ 第10回 キャラクター制作④ 第11回 撮影④ 第12回 撮影⑤ 第13回 撮影⑥ 第14回 編集 第15回 総評			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 歩き、ジャンプなどの基本的な人の動きについて、友人や街中の人などをよく観察してみてください。			

[授業科目名] アニメーション演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐藤 敦紀
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 「映像には原則があり文法がある」 これを理解し分析し自分の作品作りの際に役立ててもらおうのが本講の目的である 昨今 カメラや編集機材は使うのはうまくてもその結果作られた作品がデタラメなものがあまりにも多い したがってここではハードウェアの使い方ではなくソフトウェアとしての撮影／編集技法を学ぶのが目的である			
授業の概要 映像の演出とは 映像の連続性と映像の変化が生み出すダイナミズムの創作であるという観点を中心にテーマやストーリーの問題は取り上げず「カット＝映像の制作（脚本、撮影、作画、編集）に含まれる問題」に焦点を当てて説明していきたい イマジナリィ・ラインといった基本的な事柄から 画角 レイアウト フレーミング カメラワーク そして編集の仕方等の方法論をベースに「何を表現し 何を伝えるのか?」を実際の作品を例にとりながら観念的ではなく具体的に追求していきたい また本講では実写映像とアニメーションは区別せず同一の映像として扱うものとする 一部撮影実習を実施する予定			
学生に対する評価の方法 レポート提出			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 概論 映像のスタイル 第2回 映像の原則 1 アンングル ライティング カラー フレーム 第3回 映像の原則 2 動きの方向性 フレームの上手下手 第4回 映像の原則 3 イマジナリィライン 第5回 映像の原則 4 カメラワーク 第6回 映像の原則 5 コンテュニティ （一部撮影実習あり） 第7回 映像の原則 6 編集 第8回 総評			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 映画を観てください 空気のように観てください			

[授業科目名] アニメーション演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 吉田 雅則
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、アニメーション表現の原点に立ち返り、キャラクターを自らの目と手を用いて「動かす」という体験を通じて実際に作品を制作、形として残すことにより、表現の基礎を学ぶことを目的としている。			
授業の概要 映像表現におけるアニメーションの技法は日々多様化し、デジタル技術に負う部分も増加の一途をたどっている。しかし、本来動かないものを動かして生命を与えるというアニメーションの持つ本質的な目的はアナログ／デジタルに関係なく共通である。本講義ではその基本概念を、演習形式で学習する。本演習はアニメーション演習Ⅰの発展であるので、同講義を受講している事が望ましい。			
学生に対する評価の方法 出席、受講態度、課題作品による総合的な判断による。 特に課題作品を重視する。(70パーセント) 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 自ら考案したキャラクターを作成し、撮影、編集までの一連の流れをワークショップ形式で経験する事により、各自の作品制作への扉を開き第一歩を踏み出すきっかけとする。 本講義では主にカットアウトアニメーション (切り紙アニメーション) と呼ばれる技法を通じ、基礎的なキャラクターアニメーションについて学習する。 第1回 アニメーションとは① カットアウトアニメーション 第2回 アニメーションとは② 作品研究 第3回 キャラクターアイデア① 第4回 キャラクターアイデア② 第5回 プレゼンテーション① 第6回 プレゼンテーション② 第7回 キャラクター制作① 第8回 キャラクター制作② 第9回 キャラクター制作③ 第10回 キャラクター制作④ キャラクターの完成 第11回 撮影① 第12回 撮影② 第13回 撮影③ 第14回 撮影④ 第15回 総評			
使用教科書 使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 簡単なストーリーを組み立て、実際にショットを制作することにより、後に必要となる独自の映像表現への基礎作りをします。普段から、好きな映画などのショットの割り方を分析しながら見るように心がけてください。			

[授業科目名] インタラクティブメディア基礎論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の概要 様々なデバイス、記憶媒体、形態としてのインタラクティブ・メディアについて、歴史と現状を考察し、新たなメディア作品創作の基礎を学習する。授業は、講義と講義を受けた課題評価とを交互に繰り返す。したがって、この授業では、実務レベルでのプレゼンテーションの資料作りも習得する。			
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・様々なデバイスや技術の特徴、仕様、将来性などの理解 ・新しい技術の評価方法 ・プレゼンテーション資料作成方法 			
学生に対する評価の方法 授業参加度 (30%)、各課題評価 (70%) 一計7回			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 オリエンテーション (何を学ぶのか。何に役立つのか。授業の進め方説明。) <形状別> 第2回 ゲーム機の応用 各種機器、表現の制限、ゲームの社会性、ゲーム機を応用した技術 第3回 課題評価 (1) 第4回 TV、ディスプレイ類 ディスプレイの種類、出力規格 (ハイビジョン、など)、音声再生 第5回 課題評価 (2) 第6回 デジタルカメラ、ビデオカメラ 一眼レフカメラ、ビデオカメラ、録音機器、モニター、プリンター、コントローラーなど 第7回 課題評価 (3) <形態別> 第8回 ネットワーク形態とメディア共有 1:1型、C/S型 (1:多型、スター型)、P2P型 第9回 課題評価 (4) 第10回 メディアの伝達技術、通信技術 携帯電話、LAN、放送、衛星回線など 第11回 課題評価 (5) 第12回 GPS とユビキタス ユビキタス社会、GPS の応用、SNS 形式 第13回 課題評価 (6) 第14回 アート表現としてのメディア インスタレーション、日常一体など 第15回 課題評価 (7)			
使用教科書 指定なし。講義回は配布資料あり			
自己学習の内容等アドバイス 講義に対する「課題」の提出を重視するので、必ず、既定の方法で作成すること。評価時のプレゼンテーションについても準備すること。			

[授業科目名] Web マネジメント演習 (06 生以前 Web デザイン演習)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 2 年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ビジネスとして、インターネット、または、EC サイトと関わる上で必要な知識と技能を身につける。 既学習の HTML 基礎技法に続けて、さらに進んだ Web の書法、制作法を学習します。また、そうした技法をビジネスとして結びつけるための「企画書作成」「設計・仕様書作成」「Web マネジメント」「カラーマネージメント」「Web ビジネス」などについて、実践的に学習します。			
授業の概要 授業は講義と、それに基づいた演習とで構成される。大学教育であるので、単なる技術習得を目標にせず、制作全体を統括する能力を習得することを本講座の目標とします。また、Web 制作に限らず、現代のビジネスでは必須なテクニックのひとつである企画書作成、仕様書作成ならびにプレゼンテーション技法の習得も目標とします。			
学生に対する評価の方法 単元ごとに実施される課題 (90%)、授業参加度 (10%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) <Web 書法編> 第 1 回 CSS (1) - CSS の復習、ボックス技法 第 2 回 CSS (2) - CSS の応用 (DTP 的技法) 第 3 回 Flash (1) - 基礎技法 第 4 回 Flash (2) - メディア使用技法 <インターフェースデザイン編> 第 5 回 インターフェースデザイン (1) - 基本的デザイン技法 第 6 回 インターフェースデザイン (2) - 認知心理学応用、デジタルデザイン 第 7 回 カラーコーディネート (1) 第 8 回 カラーコーディネート (2) <サイトマネージメント編> 第 9 回 Web 制作 (1) Web 制作フローの理解 第 10 回 Web 制作 (2) サイト企画段階 第 11 回 Web 制作 (3) サイト設計段階 第 12 回 Web 制作 (4) サイト制作段階 第 13 回 Web 制作 (5) サイト運営段階 第 14 回 Web 制作 (6) - 企画書制作技法、プレゼンテーション技法 第 15 回 Web 制作 (7) - 仕様書制作技法			
使用教科書 益子貴寛他著『ウェブの仕事力が上がる標準ガイドブック 2 Web デザイン』ワークスコーポレーション刊、ISBN-10: 4862670105			
自己学習の内容等アドバイス セクションごとに試験を実施するので、授業後に用語などをしっかり理解しておくこと。授業時間内で完成しなかった課題については、次週までに必ず仕上げしておくこと。			

[授業科目名] 映像サウンド演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 森 幸長
[単位数] 2	[開講期] 2年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 様々な映像に対する「音響効果」というものをシナリオから考案し、学生それぞれの持つ感性を引き出す事をテーマとし、音を自分で収録、加工して目的となるシーンに合う音をゼロから作成する能力を到達目標とする。			
授業の概要 音響効果という観点から作品を取り上げ、実際に使用されている効果音の道具やその作成方法など、実技を交えて解説し習得させる。またチーム制作を通じ、チーム内でのディスカッションを頻繁に行う事で3年次に向けたチーム制作における基礎能力や各自の責任感も養う。			
学生に対する評価の方法 課題1 30%、 課題2 30% 授業態度40%、で評価する。 作品制作における授業態度を重要視する。遅刻厳禁。再評価なし。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 音響スタジオにてアフレコ体験～録音基礎1（音声信号の流れマイクロフォンを使用した録音演習。） 第2回 録音基礎2（エフェクター1 コンプレッサー、イコライザー、ディレイ、リバーブの解説、演習） 第3回 効果音制作1（音を分解する。どんな音が何に似ているかを解析。編集の基礎） 第4回 効果音制作2（課題1 ショートアニメを数タイプ用意し効果音をレコーダーで収録、整音。音楽の選曲） 第5回 効果音制作3 課題1制作 第6回 効果音制作4 課題1制作 第7回 発表&講評 課題1に対するレポート提出 第8回 映像に対するアフレコ&効果音制作1（チームに分かれシナリオ制作） 第9回 映像に対するアフレコ&効果音制作2（この週から音響スタジオでのセリフ録音チーム順に開始。） 第10回 映像に対するアフレコ&効果音制作3（制作の進行に合わせ指導） 第11回 映像に対するアフレコ&効果音制作4（制作の進行に合わせ指導） 第12回 映像に対するアフレコ&効果音制作5（制作の進行に合わせ指導） 第13回 映像に対するアフレコ&効果音制作6（制作の進行に合わせ指導） 第14回 映像に対するアフレコ&効果音制作7（完成作品提出日） 第15回 講評、作品レポート提出			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス 私生活において大学外で観賞する映画やTV などについても、また音の出るもの全てに置いてこの授業で学んだ事を復習する意味でも、音への意識を高めること。また制作過程に置いてフィールドレコーダーを貸出しますので常に携帯し録音するチャンスを逃さない事。			

[授業科目名] 映像音響論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 森 幸長・周防 義和
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 様々な映像作品にある音をテーマとし、音楽／音響という観点から音への意識向上を目標とする。			
授業の概要 映画、テレビ番組、CMなど映像メディアにとって、音楽／音響は欠かせない存在である。しかし、映像作品を見るとき、そこで使われている音をはっきりと意識して聞いている場面は、意外に少ない。本講義は、こうした映像作品における音楽／音響の特色、効果、技術、技法について、実際の作曲ならびにサウンド・エンジニアリングをふまえた分析と考察を行う。			
学生に対する評価の方法 課題提出、授業態度、提出作品で評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 【映像と音響】 全7回 普段なにげに鑑賞している映画やテレビ、ラジオ。そこに含まれる音が自然であればある程、視聴者は自然に作品の世界へと誘われる。実際には映っていないフレームの外にある空間の広がりや現実にはない音を制作し使用する事によって、映像だけでは表現しきれない効果も生まれる。その映像、ラジオにおける音響効果、整音技術を実際の映画等のシーンを抜粋、鑑賞し、解説する。（森 幸長） ●映像と音響——全7回（森 幸長） 第1回 授業内容説明 無意識の中にある音 音の仕事 MAとは？ 必要な機材 第2回 ステレオ再生の基礎 音ってなに？ 音像の定位 位相について 第3回 録音基礎 音のレベルをとる ケーブルコネクタの種類と構造 第4回 現場での録音 同録について これだけは守ろう7箇条 ●映像と音楽——全8回（周防 義和） 第5回 CM音楽・映像と作曲—その1 デザイン的な作曲法。短い秒数の音楽分析 第6回 CM音楽・映像と作曲—その2 広告戦略のどの部分にアジャストする音楽か 第7回 TVドラマ劇中音楽の考察—その1 シーンを繋ぐ役目としての音楽。他の音との共存 第8回 TVドラマ劇中音楽の考察—その2 心情に合わせるか、アクションに合わせるか 第9回 声（voice）を使った音楽の作曲法。長調短調以外のスケールの音楽 第10回 映画音楽の分析—その1 リディアン&ドリアンモードスケール、4度の堆積和声での作曲法 第11回 映画音楽の分析—その2 ライトモチーフとアンダースコア、という考え方 ワンモチーフのヴァリエーションで構成する劇中音楽作曲法 第12回 映画音楽の分析—その3 タイミングを合わせる音楽・劇中音楽の基本傾向 ●映像と音響（森 幸長） 第13回 CMについて 放送に至るまでの流れ フォーリーアーティストの仕事 効果音実践 第14回 エフェクターについて 効果的なエフェクト処理 ノイズの効果 第15回 総論。全講義を振り返り質疑応答を行う。最終レポート課題提出。			
使用教科書			
自己学習の内容等アドバイス （森）日常のあらゆる音を意識するよう心がける。屋内、外での音の響きの違いや、音質の違いを感じる事。自宅でのリスニング環境を整え、お気に入りのヘッドフォンやスピーカーを見つけ自分のリファレンスを持つ事も大切。いろいろな環境で音や音楽を聴き違いを感じる事。 （周防）TVCMでの学習後では実際に家で見る時に今までとは異なる視点で、なぜその映像にその音楽が使用されたか考察する。授業題材の映画は一部の観賞であるため、学習ポイントや、その前後の流れを把握するためにもレンタル等で見ることでより深い理解を得られる。観賞の際、単に話の筋書きの面白さや俳優の演技だけにとらわれず、カメラの動き、アングル、客観的にセリフの意味や、セリフSE等のあるシーン、ないシーン、そして音楽の入るシーンの意味、またその入るタイミング、終わるタイミングの意味を理解できるように心がける。			

[授業科目名] サウンド・メディア・アート 特別演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 飯名 尚人
[単位数] 2	[開講期] 2～4年次後期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ メディアテクノロジーとアナログのバランスを考え、ビジュアルアートを「デザインの領域」から「表現の領域」に引き上げる。メディアパフォーマンス、メディアインスタレーションを演習の中で実践する。ソフトウェアを使いこなすだけでは、作歌が目指す「作品」にはならない、ということを理解する。作品に向かうための「テーマ/コンセプト/物語」の引き出しの必要性を知る。			
授業の概要 デジタルテクノロジーとアートの関わりを歴史的に捉え、「現在我々が表現すべきことは何か?」「デジタルテクノロジーは今どのようなポジションで我々の周辺にあるのか?」を理解する。「作品」という概念を考え、作家がいかにして「作品」というパッケージを築き、それを売るのか、を知り、課題演習としてメディアパフォーマンスもしくはメディアインスタレーションを創作する。			
学生に対する評価の方法 出席（70％） + 課題発表評価（30％）			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 インタロダクション ”デジタルテクノロジーとアート” 第2回 メディアパフォーマンスの歴史 ”テクノロジーと身体” 第3回 空間芸術としての映像表現（映像&サウンド インスタレーション） 第4回 ソフトウェア基礎講習（MAX） 第5回 MAXによる映像/音響プログラミング演習 第6回 課題/グループ製作1 第7回 課題/グループ製作2 第8回 課題/グループ製作3 第9回 テクニカルセッティング1 第10回 テクニカルセッティング2 第11回 課題発表 第12回 課題発表 第13回 課題発表 第14回 課題発表 第15回 総評			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 人の作品を見て（映画、音楽、美術、ダンスなど何でも見て）、その作り手、作家が何を伝えたいのか、何を感じているのかを探ること。また自分で感じたコトをメモに残すこと。自力で作品を作ってみること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
パフォーマンス・アーツ論		講義	伏木 啓
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2～4年次前期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 本講義では、映画、舞台芸術、現代美術、メディア・アートの文脈における「身体表象」を多様な視点から学ぶことによって、映像メディアにおいて記号的な扱いとなりがちな「身体」を、「生身のカラダ/存在」として捉え直し意識的になることを目標とする。			
授業の概要 本講義では、パフォーマンス・アーツを次の3つの視点より学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> ・演劇、舞踊などの近代以降の舞台芸術 ・20世紀以降の脱芸術的意図/日常に対する非日常性の介入をねらった「行為としてのパフォーマンス」 ・映像、インスタレーションと「身体」を複合的に扱うメディア・アートとしての「パフォーマンス」 			
学生に対する評価の方法 受講態度（授業後の小レポートにて確認）、最終レポート課題による総合評価			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回：イントロダクション（授業概要など） 第02回：物語と身体（スタニスラフスキー・システムと演劇/映画演技） 第03回：反物語と身体（オスカー・シュレンマー、イサドラ・ダンカン、マーサ・グラハムなど） 第04回：脱芸術としてのパフォーマンス1（未来派、ダダ、シュールレアリスムなど） 第05回：脱芸術としてのパフォーマンス2（フルクサスなど） 第06回：日本的身体の再考1（舞踏：土方巽、大野一雄など） 第07回：日本的身体の再考2（鈴木忠志、唐十朗など） 第08回：日本における現代演劇1（1970年代の演劇/寺山修司など） 第09回：日本における現代演劇2（1980年代-90年代の演劇/野田秀樹、平田オリザなど） 第10回：コンテンポラリーダンス1 第11回：コンテンポラリーダンス2 第12回：メディア・アートとパフォーマンス1 第13回：メディア・アートとパフォーマンス2 第14回：現在のパフォーマンス 第15回：総括 ※授業期間中に、おすすめの舞台/パフォーマンスがある場合、課題として鑑賞するように指示する可能性があります。ただ、鑑賞料を支払う必要があるため、受講生の皆さんと相談し、決めたいと思います。			
使用教科書 特に使用しない。			
自己学習の内容等アドバイス 舞台芸術やパフォーマンスは、本来は記録映像としてではなく、眼前で実際に体感することが重要である。そのため、できるだけ劇場などに足を運ぶことをおすすめする。また、講義でとりあげた作家や作品に関して、図書館などで関連文献を調べ、新たな「気づき」を持つ機会を増やすことも大切である。			

[授業科目名] インスタレーション演習Ⅱ		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 2年生前期に学んだインスタレーション分野の知識・技法を踏まえ、場と空間の関係についての表現における実験・制作の場を体験することで、インスタレーション手法による新たな表現の可能性をめざし、一つの空間作品として構成する力を養うことを目標とする。			
授業の概要 前半では、行為と場所との関係をより意識させ、場所性による必然的な空間装置を考え、設置された場をドキュメントとして発表する。また、ライブにおける行為、映像と場所性における同一空間表現の実験を通して、パフォーマンスをも射程に入れた実践・作品発表を行なう。			
学生に対する評価の方法 課題制作におけるテーマの理解力・表現内容の追及の深さ・構想能力中心に、各作品発表(プレゼンテーション)より、評価する。 出席状況・受講態度より、授業に対する意欲として判断し、評価とする。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1～7回「景色と行為の記録」～ 場における行為の表現 ある土地をリサーチし、その場に置けるゲニウス・ロキ(土地の記憶など)を認識し、その景色に含む雰囲気や自らの行為で顕在化させ、記録映像で発表する。 1. 土地の選定・撮影 2. 土地の記憶の発表よりグループ作り 3. 現場に置ける行為決定 4. 映像の記録の仕方 5. 現場での撮影 6. 映像編集 7. プレゼンテーション 第8回「インスタレーション作品の体験」 学外授業(美術館・ギャラリー)にて、今現在の作家がどのような新たな表現手法しているか、パフォーマンスも含めたインスタレーション作品に触れる。 第9～15回「映像と行為のライブ」表現 ～ 場における身体の表現 「いま・ここ」という現在性と記録映像による「かつて・そこ」の過去との関係より、表現を構成していく 1. テーマを知り、映像撮影 2. 映像を提案よりグループで行為について討議 3. タイムライン作成 4~5. 映像の再編集及び、行為練習 6~7. プレゼンテーション			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などをし)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
インターメディア・アート論		講義	佐近田 展康
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2～4年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 現代のアート状況はメディア技術抜きには語れない。これを解釈するために、この講義があげた目的は3つある。まず「メディア論」と呼ばれるものの考え方を理解すること。それを具体的なメディアの歴史をたどることで検証すること。最終的に、現代のアート状況を批判的に考察する目を養うこと、である。これら3つの目標は、知識の習得だけに終わるべきではなく、自分の作品制作に役立たせることで真に価値を発揮する。知識と制作をつなぐこの回路を各自が体感することが到達目標になる。			
授業の概要 目、光、影、鏡、声、文字...といった原初のメディアから、最新の情報テクノロジーにいたるまで具体的に検証し、メディア技術とアートの深い結びつきについて、あらゆるジャンルを横断しながら理解する。具体的には、絵画、美術、写真、映画、テレビ、ビデオアート、音楽、舞踏、パフォーマンス、インタラクティブ・アート、デバイス・アート、ネットワーク・アート等、可能な限り多くの作品を鑑賞する。 そのうえで、マクルーハンやベンヤミンに代表される「メディア論」的なものの考え方を理解する。それによって私たちの《日常的な現実》がいかによりメディアによって構成されているのかを知り、生きるため、作品を作るためになぜこのような「理論」を知ることが必要なかを考察したい。そして、これらのメディア論とさまざまなメディア技術の交わる点に、もっとも現代的な表現として「インターメディア・アート」を位置づけ、その未来を展望する。			
学生に対する評価の方法 授業の出席 [60%]、レポート [40%] で総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 インTRODクシヨン 「見える」ことの不思議 第2回 光と影(1) 影絵芝居、幻燈、光のファンタジー 第3回 光と影(2) 反射する光/透過する光 第4回 鏡と反射(1) 《まなざし》の歴史と精神分析 第5回 鏡と反射(2) 鏡の世界に住む死者たち 第6回 フレームと現実(1) 《切り取る》という映像の宿命 第7回 フレームと現実(2) バーチャル・リアリティのディズニーランド 第8回 声と文字(1) マクルーハンのメディア論 第9回 声と文字(2) 「初音ミク」と亡霊の声 第10回 テクノロジーとメディア(1) ベンヤミンと複製技術時代の芸術 第11回 テクノロジーとメディア(2) 機械に追い込まれる芸術家たち 第12回 サウンドとメディア(1) ジョン・ケージと《音のアート》 第13回 サウンドとメディア(2) 音のメディア技術、アルゴリズム 第14回 メディアアートの現在形 おもちゃとゲーム：日本のメディア芸術 第15回 インターメディア・アートの未来 生きること・アートすること・技術			
使用教科書 参考図書: W・テレンス・ゴードン著 『マクルーハン』 筑摩書房 マーシャル・マクルーハン著『メディア論 - 人間の拡張の諸相』 みすず書房 ヴァルター・ベンヤミン著『ベンヤミン・コレクション1』 ちくま学芸文庫 石田英敬著『記号の知/メディアの知』 東京大学出版会			
自己学習の内容等アドバイス 授業で触れた用語、人名、作品をインターネット等で調べ整理すること。可能な限り動画サイトで関連作品を検索すること。			

[授業科目名] 放送制作論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 和郎
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ ラジオの誕生は事件・災害の「速報」を可能とすると共に、流行歌などの演芸文化が全国同時共有されることになった。さらにTVは、「視聴者が興味を抱くであろう森羅万象の映像化」を探り続けると共に、衛星中継による「リアルタイム報道（即報）」を可能にした。それだけに、伝える側には「綿密な調査に基づく企画構成」と「瞬時の判断」が要求される。実際に放送された番組を「制作者側」の意識で分析することにより、映像表現における文法や、心理学的効果を考察する。また、「いま、最も関心のあること」を番組として企画提案することで、映像ジャーナリズムの根幹に触れさせたい。			
授業の概要 毎回冒頭にメディア界の動きを解説し、時流としての「いま」を強く意識させる。特に「放送倫理・番組向上機構（BPO）」と「日本新聞協会」の最新見解については番組制作の規範として捉えさせる。視聴する番組については、企画意図や制作データをテキストとして作成し、毎回ごとに配布する。それを元に作品を実践的かつ構造的に見る眼を養う。視聴後、討論形式で内容を吟味するとともに、出席票に感想や自らのアイデアを簡単に記したミニレポートを提出する。			
学生に対する評価の方法 教材映像の視聴態度と視聴後の討論内容、およびミニレポートにより毎回の評価とする。最終評価は、提出された「番組企画提案」の内容を加味する。試験は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ラジオ放送の誕生と社会変革 ラジオは事件・災害を速報すると共に、流行歌を始めラジオ体操、相撲中継などの大衆文化を生み出した。また標準語の普及など聴覚教育のメディアでもあった。 第2回 テレビの誕生と番組開発の歴史 テレビニュースが伝えた草創期の映像と、放送史に残る名番組を振り返る。 第3回 速報から即報へ：技術革新はタイムラグ・ゼロをめざす 衛星中継により戦場までが生中継の対象になった。問われる編集権の問題など。 第4回 番組制作の基本：企画編集の視点とカメラの視点 番組制作の原点はドキュメンタリーにある。観察—テーマの発見—リサーチ—企画提案—対象との交渉—綿密な取材—事実の積み重ねによる構成・編集の過程を考察する。 第5回 ドキュメンタリー① 人間を観察する：個人密着型ドキュメントを分析する 第6回 ドキュメンタリー② 社会を観察する：告発型や啓発型のドキュメントを分析する 第7回 ドキュメンタリー③ 自然を観察する：自然探求型ドキュメントを分析する 第8回 ドキュメンタリー番組を企画する（自由課題） 第9回 企画のプレゼンテーションと討議・評価（数編を選択して企画会議風に） 第10回 エンタテインメント番組①：ドラマ・音楽・バラエティーなど娯楽番組の演出 第11回 エンタテインメント番組②：制作費およびプロダクションの役割 第12回 教育・教養番組：子ども番組やサイエンス番組をエデュテイメント化する演出 第13回 スポーツ番組：生の迫力を多視点でリズムカルに捉える醍醐味 第14回 放送と言葉：コメントの重要性、人権に関わる禁止用語など放送番組基準について 第15回 メディア産業としての放送の未来 「放送番組制作作業実態調査」（総務省）最新データをもとに、メディア全体に占める放送産業の規模と現状について俯瞰し、多メディア化における放送の未来を考察する。			
使用教科書 なし（講師が作成したものを毎回配布する）			
自己学習の内容等アドバイス テレビ番組を「自分だったら、これをどのように捉えて構成するだろうか」と、制作する側に立って見ること。それがメディアリテラシーや伝える力を磨く効果的な手段です。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
Webプログラミング		演習	山本 努武
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	2年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ 主要 Web プログラミング 1) JavaScript 2) Perl / PHP の基礎習得、HTML への実装を到達目標とします。			
授業の概要 インターネットが一般に浸透していく中、さまざまなビジネス的応用が考えられています。そのうした応用は、インターフェイスである HTML をバックグラウンドで web プログラミングが支えています。この講座では、web プログラミングの主要言語である JavaScript と CGI を用いて、プログラミングの基礎から学習し、ブラウザ上で実際に動くプログラム作りを習得します。			
学生に対する評価の方法 項目ごとの小テスト 期末課題 出席状況 ※再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) (Javascript 編) 第1回 web プログラミング技術について概説 第2回 JavaScript (1) -document オブジェクト 第3回 JavaScript (2) -Math オブジェクト 第4回 JavaScript (3) -Date オブジェクト基礎 第5回 JavaScript (4) -Date オブジェクト応用 第6回 JavaScript (5) -その他のオブジェクト 第7回 JavaScript (6) -Image オブジェクト 第8回 JavaScript の応用 -Ajax, Document Object Model (DOM) など (CGI 編) 第9回 CGI について 第10回 CGI のシンタックス 第11回 HTML - CGI の連携 第12回 ファイルへの書き込み 第13回 アセット CGI のカスタマイズ 第14回 期末課題制作 第15回 期末課題制作			
使用教科書 「ポケットリファレンス JavaScript」古旗一浩、技術評論社 その他、随時プリント配布並びに、サンプルデータ配布。			
自己学習の内容等アドバイス 特殊なソフトウェアを使った授業内容ではありませんので、自宅のコンピュータでも予習・復習が可能です。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
映像メディア演習ゼミ（フォト）		演習	西宮 正明・安達 洋次郎 光 幸國・園田 加奈・小山 智大
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
8	3年次	必修	
授業の到達目標及びテーマ 前期は中判カメラ（ハッセルブラード）を使用し徹底したアナログ技術の習得や、高度なデジタルスキルの習得。後期は前期に習得したスキルを活かし、斬新的な作品制作を行う。一年間を通して写真創作者の命である充実したポートフォリオ制作を行い、社会に適応出来るコミュニケーション能力、企画力、コンセプトワーク力を付け責任感のある人間形成を授業到達目標とする			
授業の概要 2年次受講した映像メディア演習（フォト）をベースに、写真メディアをさらに考察研究し、オリジナリティーを持った作品を制作し、ポートフォリオの充実をはかる。その過程において社会に適応しうるコミュニケーション能力、企画力、コンセプトワーク力、高度な撮影技術を修得する事をテーマとして主体的に考え、研究し創作しうる能力を身につける事を目的とする。又写真論、映像論等の原理分析等、美学的、キュレーター等をも視野に入れて授業を行う。			
学生に対する評価の方法 平常の演習態度 20%、ゼミ展作品評価 50% ポートフォリオ 30%（前期演習作品 15%、後期演習作品 15%） 再評価はしない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 フォトゼミについて、 オリエンテーションポートレートの概略、中判カメラ（ハッセルブラード） 第2回 ポートレート撮影・現像 第3回 西宮映像論・コンタクト・プリント 第4回 ポートレートの講評／スチルライフの概略・プレゼン 第5回 スチルライフ撮影／デジタルフォト研究1 第6回 西宮映像論・スチルライフ撮影／デジタルフォト研究2 第7回 コンタクト・プリント／デジタルフォト研究3 第8回 スチルライフ講評／デジタルフォト研究4 第9回 課題組写真（10点作品）テーマのプレゼン／デジタルフォト研究5 第10回 課題制作／半紙プリント／デジタルフォト研究6 第11回 西宮映像論・課題制作／半紙プリント／デジタルフォト研究7 第12回 課題制作／半紙プリント／デジタルフォト研究8 第13回 課題プリント／デジタルフォト研究9 第14回 課題プリント／デジタルフォト研究10 第15回 西宮映像論・課題講評、夏期休暇の課題（ゼミ展への試作）プレゼン、課題「私の写真論」小論文 毎月水曜2限、フォトゼミ3・4年生合同で行い、西宮副学部長による講義（西宮写真論）30分 <後期も開催>			

- 第16回 ゼミ展作品試作及びプレゼン、コンセプトシートチェック
- 第17回 西宮映像論・ゼミ展作品再プレゼン及び制作
- 第18回 ゼミ展作品制作
- 第19回 ゼミ展作品制作
- 第20回 ゼミ展作品制作、完成者はプリント制作
- 第21回 西宮映像論・ゼミ展作品制作、完成者はプリント制作
- 第22回 ゼミ展プリント制作・内部講評
- 第23回 ゼミ展
- 第24回 ゼミ展反省会・ドキュメンタリー制作オリエン
- 第25回 西宮映像論・ドキュメンタリー制作<A-3 5頁>
- 第26回 ドキュメンタリー制作<A-3 5頁>
- 第27回 ドキュメンタリー制作 中間チェック
- 第28回 西宮映像論・ドキュメンタリー制作 中間チェック
- 第29回 作品チェック及びプリント制作
- 第30回 西宮映像論・作品提出、ポートフォリオの講評

<補足>

毎週水曜日2限、フォトゼミ3・4年生合同で行い、西宮副学部長による講義（西宮映像論）30分。<後期も開催>

また、ニューヨークで長年活躍されてきた国際写真家HASHIによる特別ワークショップを計画しています。<内容・日程については検討中>

使用教科書

使用しない

自己学習の内容等アドバイス

演習での課題は最低限であり、写真技術書（アナログ及びデジタル）を読み、自発的に作品制作を行い教員からアドバイスを受ける事。

大学図書館の著名な映像作家の写真集や作品集を鑑賞する事。

積極的に美術館やギャラリーに行き名作のオリジナル作品を鑑賞する事。

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（映画）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 眞・仙頭 武則・伏木 啓 金巻 康朗・斎賀 和彦・吉田 雅則
[単位数] 8	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 1、2年次に学んだ経験をもとに、作品制作、研究を中心に映像との関係を深める。制作の目標は11月に行われる制作展（「ゼミ展」）への出品。テーマは作品制作を通して技術の習得、社会的役割の自覚。また論文やシナリオなどによる作家/作品研究、映画/映像メディアへの理論的考察。映像を通じて思考を深化させ、制作者や研究者としての方向を定位する。			
授業の概要 映画ゼミは渡部が統括する。ゼミ生は専任教員（渡部、仙頭、伏木）の指導の下で作品制作・研究をするが、同時に「ガレージゼミ」と呼ばれる専門領域ゼミにおいても領域ごとの作品指導を受ける。 ガレージゼミ（通年） 学生は各教員の専門領域ゼミの一つ以上に登録しなくてはならない。（年次始めに希望を受ける）専門領域ゼミは作品制作とリンクする必要なく専門領域での研究集団として機能していくが、作品についての相談および別の制作に発展していくことはむしろ望ましいことである。専門領域ゼミは以下の通り。（異なる日時で開講されるので注意すること） 渡部—脚本・演出、撮影、照明、アーカイブ 仙頭—プロデュース、脚本、演出、配給・宣伝 伏木—映像表現、メディア・アート、物語表象（ナラティブ）研究、メディア論 金巻—演出、広告戦略、コマーシャル 斎賀—編集、VFX 吉田—アニメーション・映像加工			
学生に対する評価の方法 企画プレゼンテーション 作品への取り組み方 提出作品評価、制作レポート			
授業計画（回数ごとの内容等） I 作品制作 作品は個人またはグループで制作する。計画の立案、準備、制作の全般にわたって主体的に関与することが求められる。作品はオリジナル作品であり、使用される媒体はすべての権利が制作者にあるか、使用許諾を得ていること。完成した作品は期限までに提出・上映し講評を受けること。 【制作スケジュール】 4～5月 企画を持って渡部と個人面談する。ガレージゼミへの登録。 6～9月 プレゼンテーション、準備・撮影・編集 10月 提出、講評 11月 ゼミ展			

【制作内容】

- 1) 映像作品（個人制作/ Individual Production）
 - ・ 作品は動画を用いること。
 - ・ 完成尺は、映画（ドラマ/ドキュメンタリー）は本編時間 20 分以内、アニメーション、実験映像、ミュージッククリップなどの場合は原則として本編時間 10 分以内とする。
 - ・ コマーシャル映像は 15 秒、30 秒、60 秒の 3 タイプ。
 - ・ グループ制作において、単位を取得できる役職は「プロデューサー」「監督」「撮影」であり、それ以外で取得したい場合は総括教員（庶務）に理由を申し出て承諾される必要がある。
 - ・ スクリーンに投影しない立体物、モニターなどを使用するメディア・アート作品の場合は事前に教員と相談すること。
 - ・ 作品以外に制作に関するアイデアの推移、作業過程、自己分析などを記したレポート（5000字以上）をゼミ展後に提出。手書き不可。
- 2) シナリオ
 - ・ オリジナル脚本であること。60分以上の分量。
 - ・ 2度以上の推敲を担当教員と重ねること。
- 3) 研究論文
 - ・ 作品・作家研究、映像メディア/映像技術/表現に関する研究など。（2万字以上）
 - ・ 2度以上の推敲を担当教員と重ねること。

【提出】

期日まで次のものを提出する。表書きに「タイトル」「学科と専攻名」「学籍番号」「氏名」を記載すること。データのファイル形式はワード、テキスト、PDF のいずれかにし、映像資料は JPEG にする。手書不可。

- 1) 映像作品の場合
 - a) DVテープにDV形式で書き出して提出。HDV 作品の場合は HD 形式のオリジナルテープとダウンコンバートしたDV形式テープを双方提出。フィルム作品の場合はテレシネ（ビデオ変換）してDVフォーマットに収録すること。補足的にデータで提出する場合はDVD-Rに収録して提出する。
 - b) 分析レポート A4サイズ、縦位置横書き。文字サイズは10pt ないしは14Q以上にする。同じものをデータで提出
- 2) シナリオの場合

横位置縦書き。シナリオフォーマットに準ずる。かならずあらすじ（800字以内）を書き、人物表とともに提出すること。文字サイズは12pt ないしは16Q以上に設定する。同じものをデータでも提出。完成尺は60分以上。
- 3) 研究論文の場合

A4サイズ紙、縦位置横書き。文字サイズは10pt ないしは14Q以上にする。論文の形式をふまえてまとめること。文字数は（2万字程度）以上とする。（データでも提出）

【ゼミスケジュール】1

	渡部ゼミ	仙頭ゼミ
第1週	ガイダンス、全体ミーティング	ガイダンス、ミーティング
第2週	トータルデザインング	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画
第3週	セット制作	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画
第4週	セット制作	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画
第5週	編集講習	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画
第6週	照明仕込み	映画芸術論（芸術映画、商業映画）
第7週	照明と演出	3時間でわかる映画史（50年の商業映画史）
第8週	撮影と演出	興行の仕組み 米・欧・日 の比較から見えてくるもの
第9週	撮影と演出	映画祭とはなにかー取り残された日本の危機
第10週	撮影と演出	如何にして映画は創るべきか 企画と資金と創造力
第11週	個人企画プレゼンテーション	映画とは思想である 現状と未来を示唆するということ
第12週	個人企画プレゼンテーション	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第13週	個人企画プレゼンテーション	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第14週	個人企画プレゼンテーション	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第15週	前期まとめ	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第16週	編集	脚本基礎 すべての映画は「観客性の成長」にある
第17週	編集	撮影現場基礎 演技を見ること～監督の目・カメラマンの目
第18週	編集	映画とは編集である 省略と拡大の理論
第19週	提出/講評	映画音楽とは 「感情と状況」の論理 音楽の重要性を知る
第20週	提出/講評	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第21週	ゼミ展提出準備	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第22週	映画構造のみなし（参考上映）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第23週	映画構造のみなし（参考上映）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 作品解釈法
第24週	映画技術史（参考上映）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 技術解析
第25週	映画技術史（参考上映）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 技術解析
第26週	ドキュメンタリーへ（企画発案）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 技術解析
第27週	ドキュメンタリーへ（撮影）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 技術解析
第28週	ドキュメンタリーへ（編集）	「観ていふかひ語らぬならぬ」100本の映画 技術解析
第29週	ドキュメンタリーへ（整音）	総括・TV型日本映画との決別と未来への希望
第30週	総評	総括・TV型日本映画との決別と未来への希望

【ゼミスケジュール】2

	伏木ゼミ	金巻ゼミ
第1週	ガイダンス	ガイダンス、自己紹介、各自研究テーマ発表
第2週	レクチャー：映像論 I	研究テーマへのアドバイス
第3週	作品企画・個人指導	作品研究のための講義
第4週	レクチャー：映像論 II	作品研究のための講義
第5週	作品企画・個人指導	演出技法のための講義
第6週	レクチャー：映像論 III	演出技法のための講義
第7週	作品企画・個人指導	コマーシャル映像についてのディスカッション
第8週	レクチャー：映像論 IV	コマーシャル映像についてのディスカッション
第9週	作品企画・個人指導	映画鑑賞とそれについてのディスカッション
第10週	レクチャー：映像論 V	映画鑑賞とそれについてのディスカッション
第11週	プレゼンテーション	各自の研究テーマの中間発表と講評
第12週	プレゼンテーション	各自の研究テーマの中間発表と講評
第13週	プレゼンテーション	ゼミ展作品についての個別面談
第14週	プレゼンテーション	ゼミ展作品についての個別面談
第15週	前期総括	前期総括
第16週	作品企画・個人指導	作家研究のための講義
第17週	作品企画・個人指導	作家研究のための講義
第18週	作品企画・個人指導	ゼミ展指導または演出実習
第19週	提出/講評	ゼミ展指導または演出実習
第20週	提出/講評	ゼミ展指導
第21週	ゼミ展提出準備	ゼミ展最終面談
第22週	ゼミ展作品の振り返り	ゼミ展最終面談
第23週	3年次：最終課題提示	コマーシャル映像講義とディスカッション
第24週	レクチャー：映像とナラティブ	コマーシャル映像講義とディスカッション
第25週	作品企画・個人指導	映画鑑賞とそれについてのディスカッション
第26週	レクチャー：映像とナラティブ II	映画鑑賞とそれについてのディスカッション
第27週	作品企画・プレゼン	各自の研究テーマの最終発表
第28週	発表準備・個人指導	各自の研究テーマの最終発表
第29週	発表	各自の研究テーマの最終発表
第30週	発表・総括	後期総括

※ 伏木ゼミの補足：伏木ゼミでは、実習と理論を並行して行います。

映画、アニメーション、メディア・アートなどに触れながら、
20世紀以降の映画・映像をめぐる言説と表現を概観します。

【ゼミスケジュール】3

	斎賀ゼミ	吉田ゼミ
第1週	到達目標の確認、柳澤説明、自己紹介	自己紹介、ゼミ説明
第2週	編集概論 および ミーティング	ゼミ運営会議
第3週	グループ面談1	面談
第4週	グループ面談2	面談
第5週	スキル演習 (編集-1)	面談
第6週	スキル演習 (編集-2)	プレゼンテーション
第7週	スキル演習 (編集-3)	スタッフ分担決定
第8週	スキル演習 (編集-4)	美術制作
第9週	信号管理とフォーマット	美術制作
第10週	スキル演習 (編集-5)	美術制作
第11週	スキル演習 (編集-6)	美術制作
第12週	演出と編集の相関について	撮影
第13週	事例研究-1	撮影
第14週	事例研究-2	撮影
第15週	スキルチェック	撮影
第16週	編集実習 (ゼミ展作品を通して) 1	撮影
第17週	編集実習 (ゼミ展作品を通して) 2	撮影
第18週	事例研究-2	編集
第19週	編集実習 (ゼミ展作品を通して) 3	編集
第20週	編集実習 (ゼミ展作品を通して) 4	編集
第21週	出力実習	仕上げ
第22週	編集総評会	講評、フィードバック
第23週	ゼミ展	講評、フィードバック
第24週	スキル演習 (合成-1)	講評、フィードバック
第25週	スキル演習 (合成-2)	テクニック講習
第26週	デジタル合成理論	テクニック講習
第27週	スキル演習 (合成-3)	テクニック講習
第28週	スキル演習 (合成-4)	テクニック講習
第29週	先端テクノロジーレクチャー	テクニック講習
第30週	総	総括

※**斎賀ゼミの補足**：映像編集は、編集ソフトのマスターという技術要素と、演習意図を的確に表現するためのクリエイティブの要素が両輪のように存在します。そしてその両方とも受け身ではなかなか身につけません。自分で試行錯誤し、課題をゼミ時間に持ち込むような積極性を期待します。

※**吉田ゼミの補足**：アニメーション作成においては、全体の作業を見渡し、限られた製作時間をどのように配分するかがとても重要となります。現時点で自分ができる事と、これから取組み、解決すべき課題を客観的に見据え、言語化した上で、計画性をもった制作ができるように心構えをしてください。

使用教科書

特にありません

自己学習の内容等アドバイス

映画を観る行為が創ることにつながっていくので、ぜひ古今の名作に接してもらいたい。愛知芸術文化センターで定期的に行われる映画（フィルムセンターからの名作が上映される）や名古屋シネマテーク、シネマスコアなどの上映スケジュールをチェックするべきであろう。本から映像言語を考えるために、ヴァルター・ベンヤミンの「複製技術時代の芸術」、クリスチャン・メッツ「映画記号学の諸問題」、松本俊夫「映像の発見」は古典でありながら未だに多くの示唆に富んでいる。もちろん現象学を築いたフッサール、メルロ・ポンティや、記号論を応用したミッシェル・フーコー、ロラン・バルト、ジャック・デリダらのアプローチも触れておきたい。映画鑑賞のてびきとして双葉十三郎、淀川長治、蓮實重彦、山田宏一など映画評論家の著作は文庫本でも手に入るし図書館でも置いている。技術的な知識を得たい場合はそれぞれの領域を探そう。シナリオ、撮影、照明、美術、編集。また特殊メイク、VFXなども知っておいて損はない。「ディレクティング・ザ・フィルム」（キネマ旬報社・渡部真訳）は巨匠たちの制作姿勢をまとめたものであり、これも図書館にあるので一読を勧める。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
映像メディア演習ゼミ (CG)		演習	瀬口 雅人・愛澤 伯友 山本 努武・清家 美佳
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
8	3年次	必修	
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>当演習では、以下のCG分野を研究する。それぞれの実例の視聴と分析、制作を行う。</p> <p>1. 2D キャラクターアニメーション</p> <p>以下の3つに焦点を当てる。</p> <p>(a) ストーリーボード制作、キャラクターシート、色のコンセプト、グラフィックスタイル、ドラマティックな物語の時間のデザイン</p> <p>(b) セルアニメーションまたはFlash/Toonz を用いたアニメーション制作技術</p> <p>(c) 編集、合成、サウンドトラック編集、タイトルなどのポストプロダクション技術。リップシンク、ダイアログ、カメラ動作によるマルチプレーン撮影、透明効果と反射効果、基本的なカメラ動作、カメラパースペクティブや編集法則など、より高度な2D技術を使った劇的で表現的なキャラクターアニメーションの制作技法を研究する。</p> <p>2. 3DCG キャラクターアニメーション</p> <p>ブレンドシェイプとフルボディ IK (インバースキネマティクス) を用いたリアルな人間骨格(セルフポートレート)のモデリングや、表情の作成といった高度な技術に焦点を当てる。さらに、録音した音声とのリップシンク技術、アニメーション動作の基礎としてのビデオ分析、高度なカメラワークについて研究する。最終的に、学生は自身のプロジェクトを企画し制作する。</p> <p>3. 実験的CG映像 視聴者とスクリーンの関係性を追求し、マルチプロジェクション、垂直プロジェクション、リアプロジェクション(または新しいマルチスクリーンの構想)などの新しいフォーマットとコンテキスト(文脈)の創造に焦点を当てる。アニメーション技術には抽象的デザイン、ビデオ効果、2Dまたは3DのCGを含めた映像の融合等が考えられるが、当演習ではこれらを用いた実験的な姿勢が求められる。インタラクティブシステム(Max/MSP、Action Script、Processing)の構築も可能である。</p>			
<p>授業の概要</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. CG映像の調査・分析・計画・展開 2. ストーリーボードの制作 3. ワークフローの構築 4. モデリングあるいは描画 5. アニメーション設定 6. ポストプロダクション処理 7. 上映フォーマットの計画・実施 8. 制作プロセスのまとめ論文化 			
<p>学生に対する評価の方法</p> <p>実践的な作品制作を基本に評価する。評価の基準は、出席と作品の完成と発表による。 <u>再評価は実施しない。全ての授業への出席を必須とする。</u></p>			

授業計画 (回数ごとの内容等)

- 第1回 映像メディア演習ゼミのOVERVIEW
- 第2回 クリエイティブなテクニカルメソッド
2DCG/3DCG/映像編集/デジタルデータ/圧縮
- 第3回 ●3DCG演習 顔面のリアルなモデリング1
● 3DCG/2DCG リップシンク技術1
● マルチスクリーン/マルチプロジェクションのフォーマットとその技術 (第6回まで)
作品コンセプトの検討。実例アニメーションの視聴 (次回以降も随時)
- 第4回 ●3DCG演習 顔面のリアルなモデリング2
● 3DCG/2DCG リップシンク技術2
作品コンセプトの検討。実例アニメーションの視聴 (次回以降も随時)
- 第5回 ●3DCG演習 ブレンドシェイプによる表情の作成1
●3DCG/2DCG マルチプレーンカメラ動作1
ストーリーボード制作1
- 第6回 ●3DCG演習 ブレンドシェイプによる表情の作成2
●3DCG/2DCG マルチプレーンカメラ動作2
ストーリーボード制作2
- 第7回 ●3DCG演習 マルチプレーンカメラ動作3
複合ソフトウェア技術/videoFXを用いた実験的手法
- 第8回 第1回中間発表
- 第9回 ●3DCG演習 キャラクターのリアルなモデリング1
● 2DCG 2DCGアニメーションのための特殊効果 (実例と技法の分析) 1
CGアニメーション制作
- 第10回 ●3DCG演習 キャラクターのリアルなモデリング2
●2DCG 2DCGアニメーションのための特殊効果 (実例と技法の分析) 2
CGアニメーション制作
- 第11回 ●3DCG演習 背景処理 Bryce のインターフェイス
●2DCG CGアニメーション制作
- 第12回 ●3DCG演習 背景処理 Bryce のオペレーション
●2DCG CGアニメーション制作
- 第13回 ●3DCG演習 合成技法 Bryce、Flash、Maya、After Effect の融合的使用法
●2DCG CGアニメーション制作
- 第14回 ●3DCG演習 フルボディIKアニメーション/合成技法
●2DCG CGアニメーション制作
- 第15回 第2回中間発表

- 第16回 CG制作
- 第17回 CG制作
- 第18回 CG制作
- 第19回 CG制作
- 第20回 作品発表、グループディスカッションと講評。
将来の新しい技法・技術に関する一般的情報（第15回まで）。
- 第21回 作品のブラッシュアップ
- 第22回 ZEMI展
- 第23回 グループディスカッションとZEMI展作品の再検討
- 第24回 ZEMI展作品制作のまとめ（論文）1
- 第25回 ZEMI展作品制作のまとめ（論文）2
- 第26回 ZEMI展作品制作のまとめ（論文）3
- 第27回 ZEMI展作品制作のまとめ（論文）4
- 第27回 ZEMI展作品のアーカイブ/DVD制作1
- 第28回 ZEMI展作品のアーカイブ/DVD制作2
- 第29回 ZEMI展作品のアーカイブ/DVD制作3
- 第30回 ZEMI展作品のアーカイブ/DVD制作4

使用教科書

授業の中で適宜提示する。

自己学習の内容等アドバイス

CGの映像表現を考えると、ついついコンピュータハードやアプリケーションソフトの習得に目が向いてしまうが、造形の基本である色と形と動きを常に意識し、広く世界のあるいは人類の歴史を俯瞰して、現在の自分がおかれている環境を分析しつつ、自分の座標軸を設定し、自分なりの羅針盤で表現を考えてほしい。

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ（サウンド）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康・森 幸長 中上 淳二・周防 義和
[単位数] 8	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考 「音響プランニング特別演習（集中）」を必ずあ わせて履修すること
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>映像メディア学科全体においてサウンドの重要性はますます高まりつつある。サウンドゼミでは1、2年次に学んだサウンド分野の知識／技術をさらに高度に深め、課題演習および個人作品制作指導を中心に進める。本ゼミは、佐近田、森、中上の3コースに分かれ、学生はいずれかのコース（主任教員）を選択する。同時に副任教員を1名指命する。</p> <p>【佐近田コース】では、メディアアート、音のアート、現代アート研究全般をテーマとし、専攻生の要望に応じてプログラミングや iPad などデバイスを用いた表現にも挑戦する。作品のオリジナリティを求めるのは誰しも同じだが、そこには「最低限必要な基礎技能」「発想の仕方」「他の作品と比較するための視野」の3点が必要になる。「全体演習」と「個人指導」を通じてそれを獲得することが到達目標となる。</p> <p>【森コース】では、映像や空間に対する音響効果をテーマとし、同時録音、PROTOOLS、LOGICの習得、及び整音技術の向上を目的とする。</p> <p>【中上コース】では、進級制作展「ZEMI 展」での作品発表を大きな目標とし、各個人又はグループで設けたテーマの下、展覧会へ向けて制作を行っていく。その過程において「研究」「面談」「発表」を繰り返し行うことによって作品としての強度を増していく。</p> <p>【作曲特別演習（周防）】については、上記3コースのいずれかに所属したうえで、特にみずからの制作テーマとして作曲・編曲を志す者についてガイダンスと面談のうえ選択することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>【佐近田コース】では、全体課題演習と、個人制作指導およびそのプレゼンテーション演習を並行して行う。全体課題演習については、アイデアの整理法、企画の発想法、コンセプト作り、メディアを用いたプレゼンテーションの方法など「創作のための基礎的なリテラシー」と、静止画・動画・サウンド・ネットワークなど多様なメディアを軽々と駆使するための「基礎的な技術」の両面で演習を行う。ボーカロイドや iPad 等デバイスのアートへの応用など具体的素材も専攻生のテーマに応じて挑戦したい。個人制作指導では専攻生それぞれのテーマに応じて、その背景的知識や必要な技術などを面談を通じて指導する。</p> <p>【森コース】では、前期に行う映画ゼミとの合同制作を通じ、現場の録音から整音までを学ぶ。その後ラジオ番組を制作。リアルタイムでの録音から機材への理解も求める。面談を常に行い、個人の制作内容を把握、指導に当たる。 音楽／サウンド作品制作、映像に対する効果音制作なども含む総合的な録音、整音を追求する。</p> <p>【中上コース】では、コンピュータやデジタル楽器を使用し、オリジナルの音源／音楽を制作することを追求する。前期は音楽制作の基礎知識とその応用を、演習を通じて習得する。また同時に個人面談を行い、ZEMI 展へ向けての作品制作を強化して行く。何度か「アナライズミュージック」という時間を設け、好きな音楽の音源を持ち寄り、その曲を客観的に紹介することで音楽を分析的に聴く訓練を行う。後期は ZEMI 展へ向けての各個人制作作業と、各学生自身の作品のドキュメント制作を主な内容とする。</p> <p>【作曲特別演習（周防）】では、音楽理論と課題制作の両面から段階的に本格的な作曲法・編曲法を学ぶ。受講に際しては、Logicの基本操作をマスターしていることと初歩的な譜面読解力が求められる。また何らかの楽器演奏を経験していることが望ましい。</p>			

学生に対する評価の方法

出席状況および授業態度（30%）、制作内容およびレポートやドキュメント等提出物（70%）で総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

【佐近田コース】	
第1回	ゼミガイダンス、個人制作の方向性調査、コース選択
第2回	レジュメ作成の方法、アイデア整理とリサーチの方法
第3回	コンセプトは何のためにあるのか コンセプト演習
第4回	メディアアート演習1（サウンド系）、課題制作1、個人制作指導 演習テーマは 攻生の関心に じて相談して決定する。立体音響、音の地図、音響彫刻、サウンドインスタレーション、楽曲制作など 演習テーマから課題を設定する。
第5回	メディアアート演習1（サウンド系）、課題制作1、個人制作指導
第6回	メディアアート演習1（サウンド系）、課題制作1、個人制作指導
第7回	プレゼンテーションの方法、課題制作1発表と講評、個人制作指導
第8回	個人制作プレゼンテーション（テーマの決定）
第9回	メディアアート演習2（映像系）、課題制作2、個人制作指導 演習テーマは専攻生の関心に応じて相談して決定する。影のアート、スライドを使ったアート、立体プロジェクション、iPad等による「着る」アート、映像インスタレーション、映像の即興演奏など。演習テーマから課題を設定する。
第10回	メディアアート演習2（映像系）、課題制作2、個人制作指導
第11回	メディアアート演習2（映像系）、課題制作2、個人制作指導
第12回	メディアアート演習2（デバイス系）、課題制作2、個人制作指導
第13回	メディアアート演習2（ネットワ ク系） 課題制作2、個人制作指導
第14回	課題制作2発表と講評
第15回	前期最終個人制作プレゼンテーションと講評
第16回	後期最初の個人制作プレゼンテーション
第17回	個人制作指導、個人テーマに応じた演習
第18回	個人制作指導、個人テーマに応じた演習
第19回	個人制作指導、個人テーマに応じた演習
第20回	個人制作指導
第21回	個人制作指導
第22回	ZEMI展
第23回	講評、課題制作、ドキュメント制作
第24回	アート史における ZEMI 展作品の位置づけ、課題制作3、 キュメ ト制作
第 5回	情報発信の方法、課題制作3、ドキュメント制
第 6回	課題制作3、ドキュメント制作
第27回	課題制作3、ドキュメント制作
第28回	課題制作3、ドキュメント制作締切
第29回	課題制作3発表
第30回	最終講評

【森コース】

第1回	ゼミガイダンス、実習室、音響室、D棟説明。 個人の方向性調査 2人ずつ同時面談
第2回	録音に必要な機材、アプリケーション等の講義演習1 (ProTools)コース移動の場合のみ、移動者へ面
第3回	録音講義演習1 音の分解 (聞き分ける事を学ぶ。個人ファイルの管理。)
第4回	録音講 演習2 効果 制作 実習室&音響室(様々な物を利用して効果音を制作する Logic等)
第5回	映画ゼミとの合同演習授業 (実際の撮影時における同時録音技術の習得)
第6回	映画ゼミとの合同演習授業 (実際の撮影時における同時録音技術の習得)
第7回	整音講義1 整音作業 (実習室にて実演、実習室&D棟にて演習)
第8回	整音講義2 整音作業 (各自制作)
第9回	講評 (音響室にて)
第10回	ゼミ展個人 談
第11回	ゼミ展個人
第12回	ゼミ展個人面談
第13回	ゼミ展個人面談
第4回	ゼミ展に向けて制作のレジュメ提出締切日 個人面談
第15回	個人面談 夏休みのスケジュール、レジュメ提出
第16回	夏休み明け、レジュメ提出期限 個人面談
第17回	各自レジュメに沿って指導 以後ゼミ展まで制作
第18回	各自レジュメに沿って指導 以後ゼミ展まで制作
第19回	各自レジュメに沿って指導 以後ゼミ展まで制作
第20回	講評
第21回	最終調整作業
第22回	ゼミ展
第23回	反省会
第24回	ゼミ展 キ メント制作 説明会。(ラジオ番組制 進行表、台本、ポスターの 作について)
第25回	ドキュメント制作
第26回	ドキュメント制作
第27回	ドキュメント制作提出
第28回	ラジオ番組制作 (各グループ毎に録音スケジュールを組む)
第29回	ラジオ番組発表 学内サーバーへアップデート ポスター掲示 (反省会、レポート提出)
第30回	4年時におけるゼミ対策会議

【中上コース】	
第1回	ガイダンス
第2回	<p>(講義) 楽器の変遷について テルミンや Moog らのアナログ楽器からサンプラーやそれ以降の電子楽器までの歴史を、音楽のジャンルの変遷を追いながら辿り、電子楽器や音響機材との関わりを分析する。(講義) 音色が変わると音楽が変わる ある MIDI データを用意し、そこで奏でられている音源をリアルタイムに変化させるとどのような風に聴こえ方が変わるか分析する。 (演習) 名前の無い音色を作ろう プリセット音源を使用するのではなく、自分で音色を制作することを始める。そのために、シンセサイザーがどのような仕組みで音を発振しているかについて触れておく</p>
第3回	<p>(発表) 名前の無い音色を作ろう (講義) 音楽基本講座 音符の種類、音の長さ、五線譜の読み方、テンポなど、音楽を制作する上で共通言語となる基礎的な知識の確認を行う。 (話し合い) 各ゼミ生の制作課題を全員合同で面談する</p>
第4回	<p>(講義) 音楽基礎講座 音階、スケールの仕組み、コードの成り立ち、リズムなど音楽を制作する上で共通言語となる基礎的な知識の確認を行う。 (講義) 音楽基礎講座 リズムについて、色々なパターンを紹介し制作方法を提示する (講義) Logic チュートリアル ある楽譜を配布し、実際 打ち込んでみる。その際に楽譜だけでは表現仕切れない曖昧な部分があることを認識し、その打開策を模索する</p>
第5回	<p>第5回 (講義) エフェクターについて エフェクターの概念について理解し、音楽的に使用方法について、参考音源 CD を併せて聴きながら分析する。また、現代世に存在するエフェクターを紹介しつつ、それぞれどのような特徴があるか紹介する。 (演習) エフェクターを多用してシンプルな音源を音楽的にする 一つのシンプルな音源を各学生へ配布し、エフェクターだけを使って音楽的に仕上げる演習。</p>
第6回	(演習) エフェクターを多用してシンプルな音源を音楽的にする
第7回	<p>(発表) エフェクターを多用してシンプルな音源を音楽的にする (講義) 新しい音色の制作について ソフトウェア音源や既存のエフェクターを使用した音源だけでは満足いかないこともあるだろう。ターンテーブルのスクラッチ奏法にみられるように再生装置の本来の使い方とは別の方法について、色々な音を考察する。またサンプラーについても深く触れる。 (演習) 音楽をコピーする。 世の中に販売されている曲を提示し、その曲を音色からメロディ、コード進行に至るまで分析し、コピーする作業を行う。必要に応じて録音した音源を適宜使用しても良い。</p>
第8回	(演習) 音楽をコピーする
第9回	(演習) 音楽をコピーする
第10回	<p>(発表) 音楽をコピーする (講義) 音楽基本講座 (アレンジ編) ロックやジャズなど音楽のメジャーなジャンルを定義つけるリズムやコードについて詳しく講義する。 (演習) 自分で選択した曲を〇〇風アレンジする。 どのような曲を選び、どのようにアレンジするのかを担当教員と話し合いコンセプトシートに書き出す。</p>

【中上コース】

第 11 回	(演習) 自分で選択した を〇〇 にアレンジする。
第 12 回	(演習) 自分で選択した を〇〇風に変更する。
第 13 回	(演習) 自分で 択した曲を〇〇風に変更する。
第 4 回	(講義) インタラクティブな作品の提示 映像を演奏することなど、現代で出来る音楽の表現形態について紹介し作品制作に役立てる。
第 15 回	個人制作プレゼンテーション ZEMI 展へ向けての各個人制作のプレゼンテーションを行う
第 16 回	夏期休暇を終えて個人制作進捗状況報告
第 17 回	個人制作
第 18 回	個人制作
第 19 回	個人制作
第 0 回	ZEMI 展へ向けてゼミ内講評
第 21 回	個人制作
第 22 回	ZEMI 展
第 23 回	総評及びドク メン 制作
第 24 回	ドキュメント制作
第 25 回	ドキュメント制作及び楽曲制作
第 26 回	ドキュメント制作及び楽曲制作
第 27 回	ドキュメント制作及び楽曲制作
第 28 回	ドキュメント制作及び楽曲制作
第 29 回	ドキュメント制作及び楽曲制作
第 30 回	総評

【作曲特別演習（周防）】

コードスケール、ダイアトニックコード、テンションノート、ドミナントモーション等ベーシックなコードプログレッションの学習を通じて基本的な和声に対する解釈を養うことを目的とする。

和声に対する理解力を向上させる為にリハーモナイズに於ける課題を与え演習を行う。それを通じて和声理論の応用力を養うことを目的とする。

主旋律に対してオブリガートを構築する課題を与え、演習を行う。それを通じて対旋律の入った上級レベルの楽曲の編曲能力を養うことを目的とする。

ポップミュージックの楽曲分析に於いてはペンタトニックスケール、ブルーノート、シンコペーション、リズムのグルーブ感(ドラム&ベースによるリズムのボトムを構築する)などの学習により、西欧古典音楽にはない現代ポピュラー音楽の重要素を追求する。それによって現代感覚のポップな作曲編曲の独自性を身につけ養うことを目的とする。

それらのプロセスを経て、年度末には例えば「恐怖」「HOME」といったテーマによる作曲課題を与える。それらを通して理論的に学習した各ファクターを抽象的なテーマに置き換えて、または発展的に解釈して客観的な作曲編曲能力を養うことを目的とする。

これらを経て4年クラスでは自由な課題による作品制作を最終目的とする。

また理論の講義は講師周防義和自らの作品での実際例を提示してリアリティある解説にしていくことで机上の理論事象を具体的に説明していく。

第1回	ガイダンス
第2回	イントロダクション
第3回	コード進行とペンタトニック、5 進行演習 1
第4回	コード進行とペンタトニック、5 度進行演習 2
第5回	コード進行とペンタトニック、5 度進行演習 3
第6回	コード進行とペンタトニック、5 度進行演習 4
第7回	発表と講評
第8回	オブリガード解説
第9回	オブリガードを用いた作曲演習 1
第10回	オブリガードを用いた作曲演習 2
第11回	オブリガードを用いた作曲演習 3
第12回	オブリガードを用いた作曲演習 4
第13回	発表と講評
第14回	リハーモナイズ解説
第15回	リハーモナイズ作曲演習 1
第16回	リハーモナイズ作曲演習 2
第17回	リハーモナイズ作曲演習 3
第18回	発表と講評
第19回	POP MUSIC の分析 1
第20回	POP MUSIC の分析 2
第21回	テーマによる作曲演習—基本編— (A) 1
第22回	テーマによる作曲演習—基本編— (A) 2
第23回	テーマによる作曲演習—基本編— (A) 3
第24回	発表と講評
第25回	規定のテーマによる作曲演習 (B) 1
第26回	規定のテーマによる作曲演習 (B) 2
第27回	規定のテーマによる作曲演習 (B) 3
第28回	規定のテーマによる作曲演習 (B) 4
第29回	発表と総評
第30回	発表と総評

使用教科書

別途授業中に指示する

自己学習の内容等アドバイス

(佐近田) 既成概念にとらわれ思い悩んで行動しないのが一番良くない。進展や成長の状況は教員が把握してそのつど具体的な行動としてアドバイスするので、迷わずそれを実行すること。

(森) 繊細な音を聴き分ける能力を高めるため、普段観賞する音楽や映画の音に対して意識を高め観賞する。気がついた音響効果はメモをとるようにする。また作曲を志す者は浮かんだメロディーをすぐに録音出来る様に工夫する。

(中上) 発表形態に囚われず様々な作品を鑑賞し幅広い視野で数多くの作品を1年間の内に観ること。

(周防) 例えば授業では基本的に Cmajor での説明したものを 12key すべてで把握できるように自己学習すること。

それらは感覚的なことではなく合理的に完成されたものなので、技術として単純な訓練により身に付けるべくものである。

授業中に質問できなかったことを、改めて確認し、もしどうしても理解していなければ次に質問できるように、問題意識をもっておくこと。

理論など新たに学習した事柄は頭でわかったとしても音楽という実践の中で真に身体に入って理解するまでは時間がかかる場合があるので、学んだことを即自らの作品の中で生かすように作曲編曲してみることが一番理解力を深めることになる。

自分の作品制作に関しては自己学習の段階でどこまで客観的になれるかが問題なので、自分で論理的に聴ける段階まで、ボリュームを小さく聴きバランスよく聴いたり、逆に大きく聴いて音質のチェックをするなど、作品を聴き直し、冷静に作品を判断することがことが望まれる。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
映像メディア演習ゼミ (TV)		演習	加藤 和郎・吉野 まり子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
8	3年次	必修	
授業の到達目標及びテーマ ドキュメンタリー、教育ソフト、PV、CM、ドラマなどを、単一的な、または複合的なスタイルとして、メッセージ(主題)を組み立てていくTV映像コンテンツを実際制作することを到達目標とする。			
授業の概要 秒単位のものから、数十分まで多様な時間をマルチに創造するTV映像コンテンツを、その映像自身はもちろん、音響、照明の効果や限界を知りながら調和を学び、メッセージの表現方法を拓げていく。 同時に、映像論、表現論、コミュニケーション論などを理解し、感性と理性との協調の力を武器に制作活動を進める。ゼミ学生の作品は、国内外の映像コンテストなどへ出品することを奨励していく。			
学生に対する評価の方法 授業内容への理解度と学生自身の探求心の維持(30%)、出席数(30%)、完成映像作品(40%)を総合的に評価する。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1～4 優れた映像作品から、同年代の作品に至る多様な作品を多く見ることで刺激を受けながら、それら課題作を素材に、表現論、映像論を展開させる。 また、技術研修として、カメラワーク、照明、音響、編集などの基礎的映像技術を確認できる実践指導を行う。 5～6 前期前半の時点で、ゼミ展作品として関心のあるフォーム、スタイル、内容等についての暫定的プレゼンテーションを行う。 7～13 ゼミ展作品の制作に関しては、メッセージ(主題)、目的、構成、調査内容、撮影計画、編集計画などが確定した学生から制作を進める。 また、4年生との合同ゼミという特質から、先輩と学ぶことを重視し、大学以外の組織や団体との協力による多様なテーマの映像化など取組制作プロジェクトを組ませて、実社会における実践的な活動に積極的に参加させる。 14～15 前期最終の段階における、ゼミ展作品についてのプレゼンテーションを行う。 16～17 後期最初の段階における、ゼミ展作品についての最終プレゼンテーションを行う。 18～21 すでにプレゼンテーションにて制作方針が定まっているゼミ展作品制作をすすめる。 22～23 ゼミ展作品の完成とゼミ内講評 制作過程においては、メッセージ(主題)、目的、構成、調査内容、撮影計画、編集計画、自己評価など、制作にかかわる文書化した資料等の提出を義務付ける。 24 ゼミ展への出展 25～26 ゼミ展出展の経験を通じて、ゼミ内での反省、評価、今後への課題などの話し合いを行う。 27～30 継続的プロジェクトの実施			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 常に問題意識をもち、映像メディアとして伝えるべきメッセージの映像化への可能性を恒常的に探求する努力が求められる。			

[授業科目名] 映像メディア演習ゼミ (インスタレーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 稲垣 敏彦・瀬島 久美子 小笠原 則彰・齋藤 正和
[単位数] 8	[開講期] 3年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 異なるメディアが必然的に統合されることで、形成される新たな表現形態を追究する。具体的には、映像(光としての像)と様々なオブジェクトとの組み合わせより創出される関係性の総体空間を作り上げることで、創造行為全体(「アート理論」「発想・イメージ」「コンセプト」「リサーチ」「構成・構想」「表現技能」「まとめあげる力」「全過程での自己確認」「作品発表」「ドキュメンテーション」というプロセス全体)を学ぶこと、これを最大の目標としている。個人制作において重要視する点は、制作での柔軟な発想と必然性ある表現、手法作品をたんなる個人の表現に吸収せず、社会との関係性の中で成立させる演出構想力、制作にたいして主体的に取り組む姿勢(リサーチ、ジャミング、リアライズする意志と行動力)制作プロセスにおける自己確認(問題点の発見・解決方法・表現技能・発表にたいする意識)、新たな表現形態に対する積極的姿勢である。また、主体的に他ゼミと協調し横断的なコラボレーション制作にも積極的に取り組んでいく。			
授業の概要 前半では、自らの制作テーマを追究するために、様々なアート表現のリサーチと具体的作品形態の実験を行う。後期は、ZEMI 展に向けて、一つの強度あるインスタレーション作品を成立させるために、実践を通して表現とは何かを学ぶ。			
学生に対する評価の方法 制作作品の表現内容・方法の追及の深さを重視し、受講態度、ドキュメント制作をもとに総合的に評価とする。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <前期> 課題をとおして実際の制作における基礎技術修得 (1限-共通 skill-up / 2~4限 個人制作：担当制) 柔軟な発想をもとにイメージを具体的に構成していくなかでテーマを探り、具体的な手法の実験を重ねる。 第1回 インスタレーション表現とゼミにつて / 個人制作のテーマへ 第2回 テーマ・リサーチ発表全体発表 / 個人制作の調査資料 第3回 映像の様々な表現 / 個人制作のイメージ確立 第4回 カメラの基本 / 個人制作図案・素材・機材システム確立 第4~6回 撮影の基礎1(装置の使い方),2(編集),3(照明) / 個人制作における映像制作1,2,3 第7回 テーマとプランニング全体発表 / 個人制作におけるプランの修正 第8~10回 音系基礎1(実録と編集),音系基礎,2(エフェクト),素材演習1 / 個人制作における空間構成1 第12回 素材演習2 / 個人制作における空間構成2 第12回 コンセプトテキスト演習 / 個人制作における作品とコンセプトまとめ 第13回 プロトタイプ作品プレゼンテーション / 個人制作における制作展開 第14回 美術館・ギャラリー体験学外授業 第15回 ゼミ展への最終計画 / 担当教員との今後の制作進行打ち合わせ <後期> ZEMI 展をめざし作品完成をさせるとともに制作過程も含め、ドキュメンテーションを作成 第1回 夏期中の制作進行発表 / 担当教員との制作進行打ち合わせ 第2~6回 制作とコンセプト(テキスト) / 個人制作における制作1~5 第7回 ゼミ展作品プレゼンテーション / 個人制作作品修正 第8回 ゼミ展発表・批評 / 個人制作ドキュメント撮影 第9回 ゼミ展作品相互批評会全体 第10~12回 ドキュメント映像制作 / 個人制作ドキュメント映像編集 第13回 ドキュメント発表 / 個人制作におけるテーマ追究個人 第14回 卒業制作プレゼンテーションへの参加 / 個人制作におけるテーマ追究 第15回 卒業研究テーマ・リサーチ項目発表 / 個人制作における来年度テーマ展開			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などをし)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名] 情報と職業		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 望月 達彦
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 1. 主なITシステムや最先端のITシステムを理解する。 2. IT革命がもたらした企業経営の変化や新しいビジネスモデルについて理解する。 3. IT関連企業の業種と職種を理解する。 4. 起業の基本知識と方法について理解する。			
授業の概要 今日のIT革命は、それに直接関わる職業や産業だけでなく、一般の企業の経営や構造、事務システム、職種等にまで大きな変化を及ぼしており、従来の職業意識では対応出来なくなっている。本講義では、IT革命がもたらした企業経営・構造・事務システムの変化、新しい産業・職業・職種、新しいビジネスモデル、ベンチャービジネス、IT時代の職業観・職業人等、IT時代に対応できる職業人としての基礎知識を学ぶ。			
学生に対する評価の方法 以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。 <ul style="list-style-type: none"> ・試験（80%）：第15回授業時に実施する。 ・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。 			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 受講ガイダンス(授業の目的、授業計画、評価方法等の受講ガイダンス) 第2回 IT革命の概要（IT革命とは） 第3回 ITと企業経営（IT革命と企業経営の変化、今後の企業経営） 第4回 ITと企業構造（IT革命と企業構造の変化、今後の企業構造） 第5回 ITと事務システム（ITとOA、事務システムのIT化、支援ITツール） 第6回 ITとビジネス環境（ビジネス環境の変化、新しい産業） 第7回 新しいビジネスモデル①（ITとビジネスモデル） 第8回 新しいビジネスモデル②（グローバル化とビジネスモデル） 第9回 ベンチャービジネス（ITとベンチャービジネス、ベンチャービジネスの成功例と失敗例） 第10回 IT時代の職業観・職業人 第11回 ITと職業・職種①（職業・職種の变化） 第12回 ITと職業・職種②（新しい職業・職種） 第13回 企業が求める人材（企業が求める人材、IT関連の資格） 第14回 起 業（起業に関する法律、起業の方法） 第15回 試験			
使用教科書 なし。 但し、随時プリント等の参考資料を配布する。			
自己学習の内容等アドバイス テレビや新聞、インターネット等で、最新のIT関連の情報をウォッチする姿勢が必要である。			

[授業科目名] 映画構造分析論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 酒井 健宏
[単位数] 2	[開講期] 3～4年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 何気なく撮影した「動く映像」と、ふだん我々が「映画」と呼んでいるものには違いがある。「映画」とは、いくつもの規則に基づいてシステムティックに組み立てられる構築物なのだ。この講義では、映画を「映画」たらしめるものとは何かを探る方法、すなわち映画構造分析の方法とその意義について基礎的な知識および概念を修得することをテーマとし、映画作品の制作や視聴へと応用する姿勢を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 「映画分析の基本」「形式分析」「内容分析」「ジャンル分析」を軸に、具体的な映画作品を取り上げながら構造分析のストラテジーについて概説する。また映画構造の変遷は歴史的文脈、社会・文化的状況から多分に影響を受けるものであることを考慮しつつ、特定の地域性や時代性あるいは作家性に偏ることなく客観的に作品を見つめる能力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度や発言・質問等を含めた積極的な参加(30%)、小テスト (30%)、期末に実施するレポート課題(40%)で総合的に評価を行う。学習意欲の低い者、および過度の遅刻、早退、私語、居眠り等をする恐れのある者はあらかじめ受講しないこと。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 インTRODクシヨン 授業の目的と講義の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明など 第2回 映画分析の基本 (1) ショット、シーン、シークエンス 第3回 映画分析の基本 (2) ストーリー、プロット 第4回 映画分析の基本 (3) 物語世界、時間、空間、因果性 第5回 形式分析 (1) 初期映画と様々な映画形式 第6回 形式分析 (2) 古典的ハリウッド映画とオルタナティブ 1 第7回 形式分析 (3) 古典的ハリウッド映画とオルタナティブ 2 (小テストあり) 第8回 内容分析 (1) 作家主義 第9回 内容分析 (2) 構造主義、記号学、テキスト論 第10回 内容分析 (3) 精神分析的映画理論 第11回 内容分析 (4) 認知派、ネオ・フォルマリズム 第12回 ジャンル分析 (1) ジャンル論の基礎、ジャンル生成のメカニズム 第13回 ジャンル分析 (2) メロドラマ、フィルム・ノワール 第14回 オーディエンス研究 人種、ジェンダー、文化 (期末レポート出題) 第15回 まとめと考察			
使用教科書 【参考図書】「フィルム・アート 映画芸術入門」 デイヴィッド・ボードウェル クリスティン・トンブソン著 (名古屋大学出版会) 他			
自己学習の内容等アドバイス 授業で取り上げた映画作品は可能な限り各自で入手し、復習を含め分析的な観点から繰り返し視聴すること。			

[授業科目名] フィルム映像演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 仙頭 武則
[単位数] 2	[開講期] 3～4年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 映像制作の原点であるフィルムによる実習を通じて、映像との関係を深め、技術の進歩を理解すると共に映像の本質に触れ、専門職へのアプローチの立脚点とする。			
授業の概要 サイレントによるフィルム短編作品(10分程度)を企画・制作し、その過程を通して技術の進化、映像の歴史を認識し、映画、CM、TVの本質的な違いも理解、専門職への第一歩となるようにする。			
学生に対する評価の方法 成績評価＝平常の授業態度(30%)、作品完成後、提出する論文による評価(70%)で総合的に評価を行う。再評価はしない。			
授業計画（回数ごとの内容等） I：制作 企画、制作、仕上げまでを組織として制作する。計画を主体的に立案・運営すること。例外を認めない。完成後、「フィルムで撮影すること」というタイトルの論文(2000字以上4000字以内)を提出 【制作内容】 フィルム撮影・編集による短編（10分程度）サイレント映画制作 学生の合議により選出した脚本を3ブロックに分割し、3班に分かれた学生によりブロックごとに撮影・編集を行う。最終的に一本化しフィルム上映を行う。 【制作スケジュール】 第1回 サイレントで撮影する意味、サイレント映画 作品研究 第2回 スタッフ編成 第3回 撮影準備（フィルムカメラ実習） 第4回 撮影準備（フィルムカメラ実習） 第5回 撮影実習 第6回 撮影実習 第7回 撮影実習 第8回 撮影実習 第9回 撮影実習 第10回 撮影実習 第11回 撮影実習 第12回 編集実習（ノンリニア仮編集） 第13回 編集実習（ノンリニア仮編集） 第14回 編集実習（上映） 第15回 総括/論文発表提出 II：論文 以下の形式に準じること。最終授業時に提出。 【論文の規定】 (a) 基本は横書き。手書きは不可。 (b) 表紙をつける。上段に授業名、中央にタイトル、サブタイトル。下段に学籍番号と氏名を記載。 (c) 紙はA4の白色紙あるいはオフホワイト紙。 (d) 本文の書式は一行30文字×20行になるように設定する。			
使用教科書 特に無し			
自己学習の内容等アドバイス 専門用語の意味等を事前に調べておくこと			

[授業科目名] ドラマ制作論（05生以前 ドラマ）		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 三枝 健起
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期（集中）	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ「ひねりお」の研究 シナリオに書かれているト書きそのままに撮影したらどうだろうか？はたして、面白い作品になるだろうか？ 「ひねりお」とはシナリオをひねることである。それにより芝居がきまり、シーンの演技が確定し個性豊かな作品が生まれる。この授業では10人のグループを作り、ドラマ制作を経験してもらう。			
授業の概要 シナリオは学生から募集した作品。（7月中旬ごろまでにまとめた） 600字くらいのシナリオで、少なくとも2シーンは欲しい。最後にちょっとした落ち、ほっとするようなものが感じられる作品を望む。登場人物は2人～4人で、教室や学校構内で撮影可能。 セリフよりも、情景が目につかび、感性豊かなシナリオを期待。			
学生に対する評価の方法 レポートが大きな要素となる。レポートの題名は「この3日間で何となく分かったこと」800字。再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 一日目・シナリオを決定する。 第2回 字コンテの大切さ。絵コンテの発見。カット割りとはどんな形で決定されるのか、その方法を講義。 第3回 チーム編成（10人・代表、監督、役者、撮影、音声、照明、スクリプト編集）を決める。 第4回 各シーン・字コンテを3行程の文章にしてみる。→何がここで描きたいのか分かってくる。 第5回 絵コンテに起こす。→より具体的にスタッフが理解できる方法である。監督が途中で迷わないために。 第6回 二日目・必ず絵コンテの提出。 第7回 ロケ 第8回 ロケ 第9回 ロケ 第10回 ロケ 第11回 三日目・編集作業に入る。整音。 第12回 アフレコ・効果音。 第13回 音楽入れ。 第14回 テロップ入れ。 第15回 手直し。 四日目・午前中 作品発表、鑑賞、批評。			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 作品をひと味豊かにするヒント ① 見た目を使用→登場人物の心を、窓外の風景や、ちょっとした小道具を用いて表現できないか考える。 ② 扇風機を使用した風の表現→メモが飛ぶ、カーテンが揺れる、などいくらでもアイディアは湧いてくる。 ③ 小道具のヒラメキ→例えばリンゴひとつを考えてみよう。命の象徴のように机にポツンと置かれたリンゴ。歯型のついた、かじりかけのリンゴ。萎びて芯だけのリンゴが床に落ちているなど…。いろいろ状況がそこから生まれる。何かがそこから生まれ、芝居も決まる。 ④ 音にも敏感になろう。音は映像よりも芸術点が高いと常々思っている。無音のシーンを入れるのもテクニックのひとつ。例えばSEだけが遠ざかり、セリフだけがオンに聞こえてくる回想シーンも考えてみよう。			
猛暑の3日間。ドラマ制作の苦しみ、そこから生まれる新しい仲間との交流。きっといい思い出になる。			

[授業科目名] 視覚表現のための プログラミング演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 愛澤 伯友
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の概要 インタラクティブ作品、映像作品、インスタレーション作品などにおける、プログラミングによる映像表現方法の学習。また、それらを実現するための数学的、物理的処理も合わせて学習する。視覚化を学習する上での言語としてはActionScriptを使用する。			
授業の到達目標及びテーマ <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな映像表現を視覚化する方法を学習 ・物理現象を解釈し、プログラミングで再生できる ・ActionScriptを通じてオブジェクト指向言語の書法を学習する 			
学生に対する評価の方法 授業の参加度 (50%)、最終課題提出 (30%)、項目ごとの確認テスト (20%)			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回 Flashの復習 第2回 ActionScriptでの基本的な記述方法 第3回 基本的モーションに関する記述方法 第4回 物理的運動に関する記述方法 (1) 基本的な物理法則 第5回 物理的運動に関する記述方法 (2) ゲームなどに固有の物理法則 第6回 物理的運動に関する記述方法 (3) 高度な数学処理を必要とする複合領域の数学的処理 第7回 色彩表現に関する記述方法 第8回 音声に関する記述方法 (1) 第9回 音声に関する記述方法 (2) 解析 第10回 3Dに関する記述方法 (1) 基本的な3D描画技法 (含、IK) 第11回 3Dに関する記述方法 (2) プラグインを用いる応用的な描画技法 (PaperVision3Dなど) 第12回 映像に関する記述 (1) Flash Video 基礎技法 第13回 映像に関する記述 (2) 応用的な映像技法 第14回 ウェブカメラを利用した記述方法 第15回 統合的な技法			
使用教科書 「Adobe Flash CS4 詳細!ActionScript3.0 入門ノート」大重美幸、ソーテック社 (ISBN-10: 4881666940)			
自己学習の内容等アドバイス 授業は毎回項目が変わるので、その回の内容は定着するほどに、必ず復習すること。その際には、簡易なものを短時間で組み上げられるようにトレーニングすること。			

[授業科目名] 音響プランニング特別演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 梅村 真吾・福井 孝子
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期(集中)	[必修・選択] 選択	備考 原則として定員30名
授業の到達目標及びテーマ パフォーマー、スタッフ、オーディエンスなどの様々な視点から一つの舞台を捉え、感じ、舞台芸術について学ぶことをテーマとし、オーディエンスに対し「表現する」「伝える」という目的について技術的な事項と深く考える力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 この授業では、ライブ演奏やサウンド・パフォーマンスの上演には欠かせない舞台音響（PA）と舞台照明に焦点を当て、その基礎知識から応用的な実践までを演習形式で学習する。具体的には、朗読と演奏のパフォーマンスを題材に、音響と照明による舞台作りをグループワークで行い、上演する。			
学生に対する評価の方法 出席（60％）＋課題制作発表（20％）＋レポート（20％） 短期間の集中講義でグループ課題制作を行うため、遅刻は厳禁とする。 本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 舞台技術とは何か 第2回 舞台音響の基礎知識 第3回 舞台照明の基礎知識 第4回 グループ分けとテーマ演習課題 第5回 テクニカル・セッティング（1） 第6回 舞台作品制作（1） 第7回 舞台作品制作（2） 第8回 舞台作品制作（3） 第9回 舞台作品制作（4） 第10回 舞台作品制作（5） 第11回 テクニカル・セッティング（2） 第12回 リハーサル 第13回 舞台作品上演（1） 第14回 舞台作品上演（2） 第15回 講評			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 特になし			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
プロジェクトマネジメント論		講義	斎賀 和彦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3年次後期	選択	
授業の到達目標及びテーマ ものを作る、という行為には、創作するという面と、制作するという面がある。 特に商業制作物の場合、両者は常に相反する関係を持つことも少なくない。長期化、大規模化する傾向にある現代のプロジェクトにおいて、マネージメントは不可欠な要素である。そのマネージメント能力の基礎をロールプレイングを中心に学ぶ			
授業の概要 主に映像制作を中心として、具体的プロジェクト進行管理方法論を比較、検討し、グループワークによるプレゼンテーションを行う過程で、プロジェクト管理のロールプレイングを実施する。			
学生に対する評価の方法 出席状況、ワークショップへの関与姿勢、グループディスカッションでの発言回数、内容。 最終プレゼンの「制作物クオリティ」「プレゼン説得力」 自己評価レポート 上記から総合的に評価、再評価が行われる。特に最終回欠席者は公的な理由によるもの以外、評価対象としない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 講義アジェンダの解説（講義の進行スタイルの提示と到達目標、評価方法について） 第2回 グループディスカッション：映像制作の職域とタスクについて 第3回 映像制作ワークフロー1：TV コマーシャルの例 第4回 映像制作ワークフロー2：映像制作の職域とタスクについて 第5回 ロールプレイング：製品の広告戦略を通してプライオリティを理解する 第6回 グループディスカッション：映像制作のプライオリティとは 第7回 最終課題 テーマ提示 個人企画立案 第8回 個人企画プレゼン：チーム構成 第9回 チーム構成確定 ミーティング1 第10回 企画作業1（リサーチ） 第11回 プロデューサー報告 企画作業2（チーム） 第12回 企画作業3（集約フェイズ）（チーム） 第13回 プロデューサー報告 企画作業4（プレゼン準備）（チーム） 第14回 企画作業5（プレゼン準備）（チーム） 第15回 プレゼンテーション レポート記述			
使用教科書 なし			
自己学習の内容等アドバイス 講義ではあるが、多くの回で個人およびグループの発表機会がある。発表用資料の作成時間は授業内でもある程度用意されるが、多くの場合、授業時間外で作業する必要がある。受講にあたってはその時間も予め覚悟しておく必要がある。			

[授業科目名] マスコミ論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 村上 正樹
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択	備考
授業の到達目標及びテーマ 高度情報社会の現代、マス・メディアなくして我われの生活は成り立たなくなっている。世界の動向から政治、経済、そして身近なニュース、娯楽、更には溢れんばかりの広告宣伝等に至るまで、四六時中この“メディア情報”なる巨大な怪物に搦め捕られている実態。マス・メディアとは一体何物なのか。性本来ジャーナルで、“時代を映す万華鏡”の如く、祝祭的な惑乱性も併せ持つ。本講義では、映像メディアの首座に君臨する『テレビ』に主たる照準を合わせ、実社会が求める”映像的思考“の錬磨と”想像力と感性“の涵養を図る。			
授業の概要 1. 新聞・R・TV・映画・出版・広告などの機能と特性、さらに IT 社会の動向。 2. TV メディアの諸相（番組編成・放送倫理・デジタル化など）の知識と理解。 3. 報道の重要性。TV ジャーナリズムの今日的課題を考察し、検証。 4. TV 番組（ドラマ・バラエティー・音楽番組など）の制作手法を解析。 5. 制作現場の視座から、“映像的思考”の実践力錬磨。			
学生に対する評価の方法 1. 期中、小レポートを作成・提出（1・2回実施）～30%。 2. 学期末、「課題レポート」を作成・提出～70%。＊1及び2の配分で総合評価。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 マス・メディアの現在・・・・・・ ＊新聞・ラジオ・TV・出版・広告そして IT 戦略 第2回 映像メディアと活字メディア（1） ＊新聞～活字メディアとしての特性と機能 第3回 ” ” （2） ＊TV～映像メディアとしての特性と機能 第4回 TV 放送 50 年の史変遷・・・・・・ ＊TV 放送の草創期＊番組の変遷＊技術革新 第5回 TV メディアの考察（1）・・・・・・ ＊放送制度＊NHK と民放＊衛星放送とデジタル 第6回 ” ” （2）・・・・・・ ＊局の組織＊番組編成＊視聴率と CM＊放送倫理 第7回 TV 報道とジャーナリズム（1） ＊ニュース取材＊ドキュメンタリー＊戦争報道 第8回 ” ” （2） ＊「知る権利」と人権＊TV ジャーナリズムの課題 第9回 TV 番組の構造分析・・・・・・ ＊バラエティー・音楽・ワイドショー・スポーツ 第10回 TV 実践的番組制作法・・・・・・ ＊制作過程＊演出・美術・技術・照明・音響の役割 第11回 TV ドラマの制作・演出法・・・・・・ ＊企画・脚本・演出（カメラコンテ、撮影、編集） 第12回 “劇的創造力”とは何か・・・・・・ ＊想像力の源泉～能・歌舞伎・芸能・音楽・劇画 第13回 映像の芸術性と社会性・・・・・・ ＊映画の誕生と文化的軌跡＊映画文法～変幻の時空 第14回 映像メディアと IT 社会・・・・・・ ＊放送と通信の融合＊時代が求める“映像的思考” 第15回 試験日			
使用教科書 原則として、配布プリントを使用。 参考文献は適宜開示。			
自己学習の内容等アドバイス 次回の講義用プリントを予習しておくこと。 主要項目を事前に調べておくこと。			

[授業科目名] 卒業研究・制作（フォト）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 西宮 正明・安達 洋次郎 光 幸國・前野 漠 安形 嘉真・小山 智大
[単位数] 1 2	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 写真のスペシャリストを志す学生にとって最終の総仕上げとして以下の3方向で卒業研究とする。 1. 9月上旬の校外展（富士フォトサロン）にあわせ、前期中に小グループに分かれそれぞれのテーマで共同制作を行い、作品を発表する。コミュニケーション能力、問題解決能力を身につける事を到達目標とする 2. 夏期休暇中の課題として小論文「私の写真論」を書き上げる。各自「写真とは」をしっかりと考察し、研究する。卒業制作のエネルギーにする。 3. 卒業制作は4年間の集大成として、各自の個性を最大限に生かしそれぞれのルームを選択し、前後期を通して大きなテーマに取り組む。それぞれのルームではマンツーマンで制作の助言指導を徹底する。将来、プロフェッショナルとして第一歩が踏み出せるよう導く。しっかりとした人間性と高度な技術を習得する事を到達目標とする。			
授業の概要 共同制作はすべて学生の自主性で前期中に制作を終了する。 各自の卒業制作はスケジュール管理を徹底し12月中には制作を終了する。西宮副学部長のチェックを年間3回行う。（企画チェック6月下旬、中間チェック9月下旬、最終チェック11月下旬） ルーム 安達 ルーム（コミュニケーション ツールとしての写真全般、キャンデットフォト、広告写真、ほか） 安形 ルーム（キャンデットフォト、ドキュメンタリーフォト、海外取材全般、暗室ワークス、ほか） 小山 ルーム（デジタルフォトクリエイション ほか） 光 ルーム（ポートレートフォト、ファッションフォト、スチルライフフォト、暗室ワークス、ほか） 前野 ルーム（広告写真、スタジオ撮影ワークス、建築写真、デジタルフォト、ドキュメンタリーフォトほか）			
学生に対する評価の方法 共同制作（授業への参画態度）の評価（30%） 卒業制作（小論文私の写真論を含む）の（70%）。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 卒業研究について（オリエンテーション）。1＝共同制作、2＝卒業制作（ルーム）3＝小論文 1. 共同制作チーム編成、展覧会コンセプト&テーマの研究。（安形） 2. 各自の卒業制作ルーム選択について。（安達） 第2回 1.各チーム企画会議 2.ルーム決定、(担当教員と打ち合わせ) 第3回 西宮映像論（3.4年合同）1.共同制作テーマ 西宮チェック。 第4回 1.ロケハン及び撮影取材。 2.各自テーマについて教員とマンツーマンで研究 第5回 1.撮影取材 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第6回 西宮映像論（3.4年合同） 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第7回 1.撮影取材、中間チェック（安形、安達） 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第8回 1.撮影取材 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第9回 1.撮影取材 2.コンセプトワークおよびテーマの研究 第10回 1.最終撮影取材 2.コンセプトワークおよびテーマの研究			

- 第11回 西宮映像論（3.4年合同）
 1. 共同制作西宮最終チェック 2. 西宮テーマチェック（担当教員と全員）
 第12回 データ整理&プリント制作 2. ロケハンおよび資料収集
 第13回 1. データ整理&プリント制作&パネルアップ 2. 資料収集
 第14回 1. 会場レイアウト他テキスト制作 2. 資料収集&小論文の研究
 第15回 西宮映像論（3.4年 合同）講評 2. 撮影開始
 9月上旬に夏期合宿 * 校外展共同制作の反省会 * 卒業制作、小論文のチェック。

- 第16回 2. 卒業制作進行状況チェック（各ルームで）
 第17回 西宮映像論（3.4年合同）卒業制作西宮中間チェック
 第18回 制作（各ルーム 制作進行状況をチェック）
 第19回 制作（各ルーム 制作進行状況をチェック）
 第20回 制作（各ルーム 制作進行状況をチェック）
 第21回 西宮映像論（3.4年合同）
 第22回 制作（作品グレードアップ期間）
 第23回 制作（作品グレードアップ期間）
 第24回 制作（作品グレードアップ期間）
 第25回 西宮映像論（3.4年合同）卒業制作西宮最終チェック（ゼミ教員全員参加）
 第26回 再制作およびプリント制作
 第27回 再制作およびプリント制作 A-4 上で講評評価（ゼミ教員全員）12/14
 第28回 卒展用プリント制作
 第29回 卒展用プリント制作
 第30回 卒展用プリント制作

<補足>

毎週水曜日2限、フォトゼミ3・4年生合同で行い、西宮副学部長による講義（西宮映像論）30分。

<後期も開催>

また、ニューヨークで長年活躍されてきた国際写真家 HASHI による特別ワークショップを計画しています。<内容・日程については検討中>

使用教科書

特に使用しない

自己学習の内容等アドバイス

日常生活のなかで常にあらゆるものをレンズを通して見る習慣をつける。
 大学の図書館等で著名な写真家の作品等を積極的に鑑賞する。

[授業科目名] 卒業研究・制作（映画）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 渡部 眞・仙頭 武則・伏木 啓
[単位数] 1 2	[開講期] 4 年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 創作物を通して社会とのかかわりを意識し、テーマ選択、企画の骨子、制作工程、発表にいたるまで、自己中心的にならず、老若男女、民族の違いを超えた幅の広い作品づくりをめざす。 論文、シナリオなどの著作物は見点を定めて論じ、視野を広げていく。			
授業の概要 オリジナル映像作品・オリジナル脚本の完成、および映像に関する研究論文の上梓。 論文の対象制限はないが、仮説、分析、実証が明確であるものに仕上げる。映像の現在を鋭く分析したものを期待する。作品は自己発現よりながらも、広く理解を得やすく創る。 レポートは制作プロセスを分析して次の作品や研究へ継承する布石を作ることが目的である。			
指導について 【渡部ゼミの指導】 作品制作は自分の立脚点を分析し、客観的に見つめてこそ初めて可能となることなので、面談をきめ細かく行い方向性を見極めて指導する。今踏み出すべき一歩をとともに見いだしたい。			
【仙頭ゼミの指導】 映画は「社会を映す鏡」であり「問題を解決する為の思想」を必要とする。客観的に社会を見つめ、自身を見つめる視線を明確にすべく「考える力」を養うことからはじめ、「表現する力」へと導くように指導する。			
【伏木ゼミの指導】 映画とメディア・アート両方の文脈から、「物語表象（ナラティブ）」や「実験的映像表現」について研究し、実践へと結びつける。また、研究論文に関して指導する。			
学生に対する評価の方法 提出された作品と資料、および論文等の内容。 作品は設定した目標に達しているかどうか。 論文は着眼点・問題設定の特異性そして分析・実証の精確さを総合的に判断する。 プレゼンテーション、コミュニケーション能力なども考慮する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第01回 ガイダンス 第02回 トータルデザインング 第03回 トータルデザインング 第04回 セット制作 第05回 セット制作 第06回 照明と仕込み 第07回 照明と演出 第08回 撮影と演出 第09回 撮影と演出			

第10回 参考上映と視点の解説

第11回 ゼミプロジェクト編集

第12回 ゼミプロジェクトMA

第13回 個人企画プレゼンテーション

第14回 個人企画プレゼンテーション

第15回 ゼミプロジェクト上映

第16回 卒業制作・個人／グループ指導

第17回 卒業制作・個人／グループ指導

第18回 卒業制作・個人／グループ指導

第19回 卒業制作・個人／グループ指導

第20回 卒業制作・個人／グループ指導

第21回 卒業制作・個人／グループ指導

第22回 卒業制作・個人／グループ指導

第23回 卒業制作・個人／グループ指導

第24回 作品提出・講評

第25回 講評

第26回 講評

第27回 講評

第28回 卒業制作・個人／グループ指導

第29回 卒業制作展への指導

第30回 卒業制作展への指導

※制作物について

【制作内容】

4) 映像作品

- ・ 作品は動画を用いること。
- ・ 完成尺は、映画（ドラマ/ドキュメンタリー）は本編時間 30 分以内、アニメーション、ビデオアート/実験映像、ミュージッククリップなどの場合は原則として本編時間 15 分以内とする。
- ・ コマーシャル映像は 15 秒、30 秒、60 秒の 3 タイプ。
- ・ グループ制作において、単位を取得できる役割は「プロデューサー」「監督」「撮影」であり、それ以外の役割で取得したい場合は統括教員（渡部）の承諾が必要。
- ・ スクリーンに投影しない立体物、モニターなどを使用する場合の設定は教員と相談する。
- ・ 作品以外に制作に関するアイデアの推移、作業過程、自己分析などを記したレポート（8000字以上）を提出。手書き不可。

- 5) シナリオ
 - ・ オリジナル脚本であること。完成尺数 90 分以上の分量。
 - ・ 2 度以上の推敲を担当教員と重ねる。
- 6) 研究論文
 - ・ 作家・作品研究、映像技術・メディア論、映画・映像論、その他、視覚領野やイメージに関する認知心理学や文化人類学を応用した研究など。
 - ・ 2 度以上の推敲を担当教員と重ねる。

【提出】

期日までに次のものを提出する。表書きに「タイトル」「学科とゼミ名」、「学籍番号」「氏名」を記載すること。データのファイル形式はワード、テキスト、PDF のいずれかにし、映像資料は JPEG にする。手書不可。

- 4) 映像作品の場合
 - a) DVテープにDV形式で書き出して提出。HD(High Definition) 作品の場合は HD 形式のオリジナルテープとダウンコンバートした DV 形式テープを双方提出。フィルム作品の場合はテレシネ（ビデオ変換）して DV フォーマットに収録すること。補足的にデータで提出する場合は DVD-R に収録して提出する。
 - b) 分析レポート A4 サイズ紙、縦位置横書き。文字サイズは 10pt ないしは 14Q 以上にする。同じものをデータで提出
- 5) シナリオの場合
 - ・ 横位置縦書き。シナリオフォーマットに準ずる。人物表とあらすじ（400～800 字程度）を添えること。文字サイズは 12pt ないしは 16Q 以上に設定する。同じものをデータでも提出。完成尺は 90 分以上を想定する。
- 6) 研究論文の場合
 - ・ A4 サイズ紙、縦位置横書き。文字サイズは 10pt ないしは 14Q 以上にする。論文の形式をふまえてまとめること。（データでも提出）

使用教科書

特にありません

自己学習の内容等アドバイス

企画、制作ともに前年度を越えようとして逡巡することが多いようだが、明確なプランがない場合はむしろ自己を対象として映像制作を考えることが必要である。また技術的な上達も思考停止状況を克服する方法となる。論文の場合は資料を的確に選択してとりかかると。資料の量ばかりでなく論理の道筋を明確にしてから読み込んでいくことで、深さを増すことが出来る。

[授業科目名] 卒業研究・制作（CG）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 瀬口 雅人・山本 努武 愛澤 伯友
[単位数] 1 2	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 当科目は3年次ゼミの延長であり、以下のCG分野を研究する。 ● 2Dキャラクターアニメーション ● 2Dアニメーションと3D背景の合成方法を研究する。 ● 3DCGキャラクターアニメーション ● 3DCGアニメーションとビデオ映像の合成方法を研究する。 ● 実験的CG映像			
授業の概要 クリエイティブでインディペンデントな作品の発展と制作に焦点を当てる。キャラクターの相互作用、背景アニメーション、表現的なカメラワーク、新しいグラフィックスタイル等のより高度な技法を含む。教員は学生の作品制作のアドバイザー的役割を果たす。各アニメーションの実例の視聴と分析を行う。			
学生に対する評価の方法 実践的な作品制作を基本に評価する。評価の基準は、出席と作品の完成と発表による。 <u>再評価は実施しない。全ての授業への出席を必須とする。</u>			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 卒業研究のOVERVIEW 実例CGの視聴（次回以降も随時）。 2D、3DCG、実験的アニメーションのためのテクニカルメソッド(次回以降も随時)。 第2回 作品コンセプトのディスカッション1 第3回 作品コンセプトのディスカッション2 第4回 ストーリーボード制作1 第5回 ストーリーボード制作2 第6回 ストーリーボード制作3 第7回 ストーリーボード制作4 第8回 第1回中間発表 第9回 CG制作1 第10回 CG制作2 第11回 CG制作3 第12回 CG制作4 第13回 CG制作5 第14回 CG制作6 第15回 第2回中間発表。			

- 第16回 CG制作7
- 第17回 CG制作8
- 第18回 CG制作9
- 第19回 CG制作10
- 第20回 CG制作11
- 第21回 CG制作12
- 第22回 CG制作13
- 第23回 CG制作14
- 第24回 CG作品完成
- 第25回 CG作品制作のまとめ(論文)
- 第26回 CG作品制作のまとめ(論文)
- 第27回 卒業制作作品の講評
- 第28回 卒業制作展準備・アーカイブDVD制作1
- 第29回 卒業制作展準備・アーカイブDVD制作2
- 第30回 卒業制作展準備・アーカイブDVD制作3

使用教科書

授業の中で適宜提示する。

自己学習の内容等アドバイス

CGの映像表現はたかだか20年の歴史である。CG映像表現や未来のCGの在り方をつねに考える習慣を身につけたい。未だ見たことのない未来の世界をCGの視点から展開してほしい。そのためには、歴史的CGの分析、現状のCGの在り方、未来の社会の在り方などを様々な視点から分析し、そして考え、行動してほしい。

[授業科目名] 卒業研究・制作（サウンド）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 佐近田 展康・森 幸長 中上 淳二・周防 義和
[単位数] 1 2	[開講期] 4 年次	[必修・選択] 必修	備考
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>■ 佐近田担当ゼミ ■ 4年間の総決算として「研究」の名に値する総合的な卒業制作を行う。作品制作について、より高度で専門的な知識と技術を追求することはもちろん、テーマに関わる幅広い調査研究を通じて総合的な「知」の獲得を到達目標とする。</p> <p>■ 森担当ゼミ ■ 4年次は各自の自主的な研究をテーマとし、制作に関わる指導を中心とする。3年間での経験から成り立つ、より高度なアイデアを活かした実験的な要素が感じられる作品制作を行い、さらなるレベルアップを目的とします。</p> <p>■ 中上担当ゼミ ■ 個人制作では、研究テーマに沿った作品制作を行いつつ、言語化した研究レポートをプレゼンテーションの際に提出すること。プロジェクトの目標は企画展自体が作品と呼べるような内容にすることです。ゼミとしての最終目標は卒業展覧会での作品発表であり、その制作過程において発表形式からマテリアルに至るまでのあらゆる可能性を探り、形に囚われない自由な思考と技術を強化していくことを一つのテーマとする。</p> <p>■ 作曲特別演習（周防） ■ 作曲特別演習（周防）については、上記3ゼミのいずれかに所属したうえで、特にみずからの制作テーマとして作曲・編曲を志す者についてガイダンスと面談のうえ選択することができ、音楽理論と課題制作の両面から段階的に本格的な作曲法・編曲法を学ぶ。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>■ 佐近田担当ゼミ ■ 卒業研究テーマに関わる幅広い調査研究を通じて総合的な「知」の獲得を到達目標とする。内外のコンペティション参加、学外での展覧会・コンサート開催等、対外発表を積極的に行う。評価については卒業作品制作と研究レポートにより行う。</p> <p>■ 森担当ゼミ ■ 4年次は各自の自主的な研究をテーマとし、制作に関わる指導を中心とする。3年間での経験から成り立つ、より高度なアイデアを活かした実験的な要素が感じられる作品制作を行い、さらなるレベルアップを目的とします。</p> <p>■ 中上担当ゼミ ■ コンピュータやデジタル楽器に限らずあらゆる物や声を使用し、オリジナルの音源／音楽を制作することを目的とします。前期は、「卒業制作作品個人制作」と「プロジェクト」という2本の柱を中心にゼミを展開していきます。「卒業制作作品個人制作」は各自まず1年間かけて個人研究するテーマを決定し、そのテーマに応じて個人面談を行いながら卒業制作展へ向けての作品制作を強化していきます。プレゼンテーション能力を高めるために年に何度かゼミ生全員に対し、途中経過を発表してもらいます。「プロジェクト」は学生全員による音楽をテーマとした企画展を制作することです。内容は教員と相談しながら練り上げていき、最終的に「企画展」そのものが作品となるように学外で発表を行います。後期は卒業制作展へ向けての各個人制作作業と個人面談を主とし、卒業制作展までに何度もブラッシュアップを行います。</p> <p>■ 作曲特別演習（周防） ■ 音楽理論と課題制作の両面から段階的に本格的な作曲法・編曲法を学ぶ。受講に際しては、Logicの基本操作をマスターしていることと初歩的な譜面読解力が求められる。また何らかの楽器演奏を経験していることが望ましい。</p>			

学生に対する評価の方法

出席状況および授業態度（30%）、制作内容およびレポートやドキュメント等提出物（70%）で総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

【佐近田担当ゼミ】	
第1回	イントロダクション、卒業制作にかか、研究計画プレゼン
第2回	研究の進め方
第3回	作品批評演習
第4回	作品批評演習
第5回	作品批評演習
第6回	作品批評演習
第7回	作品批評演習
第8回	3年・4年合同プレゼン（研究レポート、自主プロジェクト）
第9回	自主プロジェクト演習1
第10回	自主プロジェクト演習2
第11回	自主プロジェクト演習3
第12回	自主プロジェクト演習4
第13回	自主プロジェクト演習5
第14回	自主プロジェクト演習6
第15回	自主プロジェクト演習成果発表
第16回	後期当初プレゼン、研究レポート提出
第17回	研究レポート講評
第18回	個人制作指導
第19回	個人制作指導
第20回	個人制作指導
第21回	個人制作指導
第22回	ZEMI 展の応援
第23回	個人制作指導
第24回	個人制作指導
第25回	個人制作指導
第26回	個人制作指導
第27回	個人制作指導
第28回	卒業制作締め切り、ゼミ内講評
第29回	最終調整
第30回	卒業制作展

【森担当ゼミ】

第 1 回	録音講義演習 1 (音響編集室に 楽器の収録ドラム篇)
第 2 回	録音講義演習 2 (音響編集室に 楽器の収録ピアノ篇)
第 3 回	録音講義演習 3 (音響編集室にて声の収録 一カル篇)
第 4 回	録音講義演習 4 (音響編集室にて楽器の収録アコースティック&G アンプ篇)
第 5 回	(第 1 回～第 4 回までから抜粋し小テストを行う)
第 6 回	コンペ参加、(制作チーム決め、役割分担 09 年度はギャツビー学生 CM 大賞へ参加、公共広告機構学生コンペ参加、今年度のコンペ参加はさらに検討)
第 7 回	コンペ用制作
第 8 回	コンペ用制作
第 9 回	コンペ用制作
第 10 回	コンペ用制作
第 11 回	コンペ用作品 提出期限 (6/23 日)
第 12 回	卒業制作展に向けたレジュメ提出 個人面談
第 13 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 14 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 15 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 16 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 17 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 18 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 19 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 20 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 21 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 2 回	ゼミ展 学。レポート提出
第 23 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 24 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 25 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 26 回	レジュメに従って制作指導 個人面談
第 27 回	講評 1 2 / 1 4
第 28 回	最終調整
第 29 回	卒業制作展
第 30 回	レポート提出。

【中上担当ゼミ】	
第1回	卒業制作作品のためのテーマを各自発表
第2回	(講義) 音楽をテーマとした企画展とは? (プロジェクト) 音楽をテーマとした企画展のアイディ を練る (演習) 個人制作
第3回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第4回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第5回	個人研究途中経過のプレゼンテーション。
第6回	(演習) エフェクターを多用してシンプルな音源を音楽的にする
第7回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第8回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第9回	個人研究途中経過のプレゼンテーション
第10回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧 会に向けて (習) 個人制
第11回	(プロジェクト) ゼミ自 企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第12回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第13回	個人研究途中経過のプレゼンテーション
第14回	(プロジェクト) ゼミ自主企画展覧会に向けて (演習) 個人制作
第15回	ゼミ自主企画展覧会発表
第16回	個人制作及び個人面談
第17回	個人制作及び個人面談
第18回	個 制作及び個人面談
第19回	個人制作及び個人面談
第20回	個人制作及び個人面談
第 1 回	ZEMI 展への協力
第22回	個人制作及び個人面談
第23回	個人制作及び個人面談
第24回	個人制作及び個人面談
第25回	ゼミ内事前講評
第26回	個人制作及び個人面談
第27回	個人制作及び個人面談
第28回	個人制作及び個人面談
第29回	個人制作及び個人面談
第30回	卒業制作展

【作曲特別演習（周防）】

コードスケール、ダイアトニックコード、テンションノート、ドミナントモーション等基本的なコードプログレッションの学習を通じて基本的な和声に対する解釈を養うことを目的とする。

和声に対する理解力を向上させる為にリハーモナイズに於ける課題を与え演習を行う。それを通じて和声理論の応用力を養うことを目的とする。

主旋律に対してオブリガートを構築する課題を与え、演習を行う。それを通じて対旋律の入った上級レベルの楽曲の編曲能力を養うことを目的とする。

ポップミュージックの楽曲分析に於いてはペンタトニックスケール、ブルーノート、シンコペーション、リズムのグルーブ感(ドラム&ベースによるリズムのボトムを構築する)などの学習により、西欧古典音楽にはない現代ポピュラー音楽の重要素を追求する。それによって現代感覚のポップな作曲編曲の独自性を身につけ養うことを目的とする。

それらのプロセスを経て、年度末には例えば「恐怖」「HOME」といったテーマによる作曲課題を与える。それらを通して理論的に学習した各ファクターを抽象的なテーマに置き換えて、または発展的に解釈して客観的な作曲編曲能力を養うことを目的とする。

これらを経て4年クラスでは自由な課題による作品制作を最終目的とする。

また理論の講義は講師周防義和自らの作品での実際例を提示してリアリティある解説にしていくことで机上の理論事象を具体的に説明していく。

第1回	和声をヴォイスングに導く・解説
第2回	和声をヴォイスングに導く演習1
第3回	和声をヴォイスングに導く演習2
第4回	応用レベルのコード進行演習1
第5回	応用レベルのコード進行演習2
第6回	応用レベルのコード進行演習3
第7回	発表と講評
第8回	ブルーノートとブルース形式解説
第9回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習1
第10回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習2
第11回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習3
第12回	ブルーノートとブルースを用いた作曲演習4
第13回	発表と講評
第14回	アッパーストラクチャートライアド解説
第15回	アッパーストラクチャートライアド作曲演習1
第16回	アッパーストラクチャートライアド作曲演習2
第17回	アッパーストラクチャートライアド作曲演習3
第18回	発表と講評
第19回	モード手法、4度堆積和声の分析1
第20回	モード手法、4度堆積和声の分析2
第21回	テーマによる作曲演習―応用編―(A)1
第22回	テーマによる作曲演習―応用編―(A)2
第23回	テーマによる作曲演習―応用編―(A)3
第24回	発表と講評
第25回	自由なテーマによる作曲演習(B)1
第26回	自由なテーマによる作曲演習(B)2
第27回	自由なテーマによる作曲演習(B)3
第28回	自由なテーマによる作曲演習(B)4
第29回	発表と総評
第30回	発表と総評

使用教科書

別途授業中に指示する

自己学習の内容等アドバイス

(佐近田)

(森) 自分のやるべき事を明解にし、その関連事項において専門書等を読み研究する。映画作品の観賞を多く行い、音響効果的な探求する事。制作においてスケジュール管理を徹底する事。

(中上) 発表形態に囚われず様々な作品を鑑賞し幅広い視野で数多くの作品を1年間の内に観ること。

(周防) 例えば授業では基本的に Cmajor での説明したものを 12key すべてで把握できるように自己学習すること。

それらは感覚的なことではなく合理的に完成されたものなので、技術として単純な訓練により身に付けるべくものである。

授業中に質問できなかったことを、改めて確認し、もしどうしても理解していなければ次に質問できるような、問題意識をもっておくこと。

理論など新たに学習した事柄は頭でわかったとしても音楽という実践の中で真に身体に入って理解するまでは時間がかかる場合があるので、学んだことを即自らの作品の中で生かすように作曲編曲してみることが一番理解力を深めることになる。

自分の作品制作に関しては自己学習の段階でどこまで客観的になれるかが問題なので、自分で論理的に聴ける段階まで、ボリュームを小さく聴きバランスよく聴いたり、逆に大きく聴いて音質のチェックをするなど、作品を聴き直し、冷静に作品を判断することがことが望まれる。

[授業科目名] 卒業研究・制作（TV）		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 加藤 和郎・吉野 まり子
[単位数] 1 2	[開講期] 4 年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 卒業研究・制作は、3年次の進級作品の制作プロセスの学習に基づき、さらに高度に、概念的・技術的な進化を目標にすることや、新たなジャンルの研究や作品制作に取り組むことを到達目標とする。ゼミ時間内に限らず、個別指導を加え、卒業作品としての評価基準を超える成果物につながるよう制作活動を総合的に指導する。			
授業の概要 卒業研究・制作においては、その立案から完成に至る計画全般を、学生の自主性や自己管理を尊重することを重視しながら、TVゼミ指導教員に限らず、他のゼミ教員からの助言や協働をも実現できるよう働きかけ、総合的に高度な学術的完成度を追及していく。			
学生に対する評価の方法 授業内容の理解度と自主性・自己管理（30%）、出席数（30%）、卒業研究・制作の完成度（40%）を総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1～4 「目を肥やす」「センスを磨く」という点から優れた映像作品や話題作を素材に、表現論、映像論を展開させる。また、技術研修として、カメラワーク、照明、音響、編集などの基礎的映像技術を確認できる実践指導を行う。特に3年生の作品制作においては、先輩として取材・リサーチの助言や技術指導に当たらせ、「教えることで学ぶ」ことを実践させる。 5～6 前期前半の時点で、ゼミ展の経験を踏まえ、卒業作品に対する関心のあるフォーム、スタイル、内容等について、あるいは卒業研究のテーマについての暫定的プレゼンテーションを行う。 7～13 卒業作品の制作に関しては、メッセージ（主題）、目的、構成、調査内容、撮影計画、編集計画などが確定した学生から制作を進める。 また、3年生との合同ゼミという特質から、先輩プロジェクトを引き継ぐという点を重視し、大学以外の組織や団体との協力による多様なテーマの映像化や研究など取材プロジェクトを組ませて、近い将来社会人として参画する映像研究ならびに制作の実践とともに社会性を強めたい。 14～15 前期最終の段階における、卒業作品、研究についてのプレゼンテーションを行う。 16～17 後期最初の段階における、卒業作品、研究についての最終プレゼンテーションを行う。 18～23 すでにプレゼンテーションにて制作方針が定まっている卒業作品制作、卒業研究をすすめる。 24～25 卒業作品制作、研究の中間報告（プレゼンテーション）の実施 26～28 卒業作品制作、研究のゼミ内講評 制作過程においては、メッセージ（主題）、目的、構成、調査内容、撮影計画、編集計画、自己評価など、制作にかかわる文書化した資料等の提出を義務付ける。 29～30 ゼミ内講評を受け、制作、研究の最終段階をへて、卒業作品、卒業研究を完成させる。			
使用教科書 特になし			
自己学習の内容等アドバイス 大学の最終学年という自覚に基づき、将来に関わる様々な活動を積極に行う中から、卒業研究・制作に最適なメッセージが見えてくる機会を逃さず、その研究や映像化の挑戦を躊躇しない努力の能力を開花してほしい。			

[授業科目名] 卒業研究・制作 (インスタレーション)		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 小笠原 則彰
[単位数] 1 2	[開講期] 4年次	[必修・選択] 必修	備考
授業の到達目標及びテーマ 無意味になってきた<テキスト>や概念に意味を与える新しい<画像>が、今出現してきている。それは、すでに十九世紀に始まりを見せた写真、映画であり、二十一世紀に爆発的な進展を見せているデジタル・テクノロジー(装置としてのカメラ、コンピュータなど)が可能とするイメージである。このイメージを新しい<記号>である<テクノ画像>としてとらえ、これからどのように意味ある仕方でも発展させていけるか、具体的に時空間を扱った一つの作品として研究し、発表することを目標とする。 また、社会への切り込みのひとつとして、この成果を自らの力により外部で展示・発表する体験も必要不可欠であり、その計画・実践もできるだけ本研究に組み込んでいく。			
授業の概要 三年次の制作テーマを更に発展させより深く追究する制作実践と、自ら表現する内容を明確に伝達できるテキスト作成を行う。			
学生に対する評価の方法 自らの表現内容・方法の追及の深さが、明確に伝達される作品・テキストであるかを評価とする。			
授業計画 (回数ごとの内容等) <前期> 個人制作において表現主題の徹底追究を行なう 第1回 「自らの表現主題と現代との関係を明確にする」 個人の制作内容提示 第2回 「個人研究の方向性の決定」 具体的制作内容を決定させる 第3~10回 「リサーチ」 個人制作内容よりリサーチすべきものの提案 個人制作面談、資料作り、モデリング 第11~13回 「プロトタイプ制作」 第14回 「プロトタイプ発表」 ディスカッション 第15回 卒業制作展への具体的作品構想について <後期> 卒業制作展の作品研究の内容の深さと細部に渡る技術の向上をめざす 第16回 「卒業制作展作品コンセプトとイメージ」 プレゼンテーション 個人の作品内容とシステム具体的手法について、最終討議を行なう 第17~28回 「個人制作面談と制作支援」 徹底した個人制作 第29回 「卒業制作シミュレーション設定・相互批評会」 第30回 「ドキュメント制作」 作品のアーカイブ			
使用教科書 特に使用しない			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業内容を把握し、事前に資料(撮影などをし)を具体的に提案できるように準備すること。			

[授業科目名] 教職入門		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 1 年次後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：教職の意義、教師の仕事、必要とされる資質・能力を理解し、教師としての資質・能力を身に付ける。一般社会生活の中にあっても、リーダーとして尊敬される人材であること。 テーマ ：①教員の使命・職務・責任・教育的愛情の理解、②社会人・教員としての対人間関係を理解、③生徒理解と学級経営法理解、④自己の教員としての適性を知る。			
授業の概要 教職の意義は何か、教師とはどんな職業か、自分は教師としての適性や資質があるか、社会人としての教師の在り方は何か。教師になるなら、何をどの時期にどのように身に付けたいか等を知る。これらを概念的に捉えたあと、子どもの実態把握から学校の管理・運営にいたるまで、項目別に体系的に掘り下げて教職の意義を理解する。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観 (知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度) に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容 (約 30%)、定期考査 (約 70%) で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。この講座では再評価を実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1回 子供の生活実態－1 : 教職課程で学ぶ概要、最近の子供の一日の過ごし方、心と体の変化などを把握する。 2回 子供の生活実態－2、教師の仕事－1 : 学校での実態 (授業、部活動、いじめ、など)、学習指導と教育課程の意味 3回 教師の仕事－2 : 教育課程の構成原理、新学習指導要領の特色、学習指導の考え方と方法 (指導法と形態、レディネス、動機付け) 4回 生徒指導・教育相談・進路指導 : 生徒理解、生徒指導 (意義、組織、計画、運営、指導の実例)、教育相談 (意義、基本原理)、進路指導 (意義と計画、進路相談) 5回 学級経営－1 : 学級と学級経営 (経営の基本とあり方、学校経営との係わり)、道徳教育 (目標と内容、実践の仕方)、学級経営と特別活動 (目標と内容)、学級担任の心構え 6回 教師に求められる資質と能力－1 : 戦前・戦後における教師像、現在の教師に求められるもの (中教審答申・教育職員養成審議会答申の求めるもの) 7回 教師に求められる資質と能力－2 教員の養成と採用－1 : 学ぶものの姿勢、教えるものの姿勢、戦前・戦後における教員養成制度の比較 8回 中間考査を実施する 9回 教員の養成と採用－2 : 教職課程の仕組みと内容 (教育職員免許法、教職課程で学ぶ科目と単位数、免許状の種類)、教員の選考と採用 10回 教員の養成と採用－3 教員の地位と身分－1 : 教員の採用 (教職員定数、教職員の構成、教員採用選考の変遷、私立学校での採用)、教員の地位と身分 (身分とは、国・公立学校教員の身分、私立学校教員の身分、教職の専門性) 11回 教員の地位と身分－2 : 待遇と勤務条件 (給与、勤務、人事、福利厚生)、研修 (初任者研修、校内研修、長期・短期研修) 12回 学校の管理・運営－1 : 学校制度 (1 条校、専修および各種学校等、文部科学省所管外の学校、わが国の学校制度の変遷) 13回 学校の管理・運営－2 : 管理・運営体制 (教育課程、教職員、生徒、施設・設備)、経営と組織 (職員会議、学校評議員)、管理職の役割 14回 学校の管理・運営－3 : 校務分掌 (分掌とは、校務の範囲、編成上の配慮、分掌組織図と分掌業務の概要、公立学校の学校経営案の構成) 15回 最終考査を実施する			
使用教科書 教職入門 (教師への道)「2009年改訂版」 吉田 辰雄、大森 正 編著 図書文化			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを理解することである。理解のためには予習 3 割・復習 7 割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名] 教育原論		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 「教育とは」「学校とは」「教師とは」「生徒指導とは」等、教育の本質、学校の歴史、社会教育、教育改革の現状など、今日の教育課題について学習し、実践的な課題解決能力・指導力を養うことを目的とする。			
授業の概要 本授業は、教職を志す学生にとって必要な教育に関する基礎的・基本的事項を学習することを通して、少子高齢化の進行、価値観の多様化など、急激に変貌する社会の中にあつて、教育に関する新たな課題を家庭や地域社会との連携のもとで解決していくために必要な知識を身に付けることを目標としている。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、教育推進の基本的方向 教職課程の意義、生涯学習のねらいと概念規定、自己実現力の育成 2回 人間の発達と教育 人間の発達と環境の関係、人間の成長と発達環境、家庭の教育機能の充実に向けて 3回 教育方法の基礎 教育の方法原理、授業の言語と準備、学習の形態、その他の教育手法 4回 教育課程 1 わが国の教育課程編成の基本的視点、教育課程編成の基礎としての学習指導要領 5回 教育課程 2 学文における教育課程編成の過程、教育課程改訂の動向 6回 進路指導と生徒指導 進路指導の基本的とらえ方、生徒指導の基本的とらえ方、進路指導と生徒指導の推進体制 7回 特別活動 特別活動の目標、特別活動の内容とその基本的性格、特別活動の指導画と評価 8回 教師の職務と責任 教師としての職業、教師の養成、教師教育、教師の採用と構成 9回 学級運営 学級運営と学文、学級運営の組織、学級運営の過程、学文の危機管理・安全管理 10回 学文制度とその特色 学文制度の形成と教育学会の発展、初等学文制度とその動向、中等学文制度とその動向 11回 社会教育 社会教育とは、生涯期の社会教育、現代社会教育とその充実 12回 教育政 1 憲法、教育基本法、教育政の基本原理、国の教育政制度 13回 教育政 2 全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）、地方の教育政制度 14回 新しい教育課題 選択と学文、環境の重視、保護される情報、「ゆとり教育」の見直し 15回 定期試験			
使用教科書 「新しい教育の原理」 田代直人・佐々木司 編著（ミネルヴァ書房）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育心理		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 橘 春菜
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 基本的な学習過程、発達過程を理解し、児童生徒（障がいのある児童生徒を含む）の心身発達に応じた教育のあり方について考えを深める。			
授業の概要 効果的に学習を促すには、学習者の発達における心理的特性を理解し、発達に応じた適切な学習指導を行う必要がある。この授業では、発達、学習、人格などの観点から人間の基本的な理解を深めたうえで、学級集団の指導、子どもたちへの心理教育的援助、教育評価などについて学ぶ。受講者は授業を通じてこれからの学校教育のあり方に関して積極的に考え、自分の意見を持つように心がけてほしい。			
学生に対する評価の方法 平常の授業態度および授業中の提出物（50%）、最終に実施する試験（50%）により総合的に評価する。 なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 授業のガイダンス（授業の目的と講義内容の概要、履修上の注意）・教育心理学とは 第2回 学習理論 学習成立のメカニズム 第3回 学習過程の理解 知識獲得と学習の転移 第4回 学習意欲 動機づけと原因帰属 第5回 授業における教授・学習過程 第6回 発達過程の理解1 人格の形成 第7回 発達過程の理解2 子どもの思考の発達 第8回 発達過程の理解3 対人関係の発達 第9回 発達過程の理解4 教育と発達 第10回 学級集団 教師と児童生徒関係 第11回 適応と障害1 学校臨床 第12回 適応と障害2 障がいのある児童生徒への理解 第13回 知能と学力 知的発達と学力の測定 第14回 教育評価 教育評価の機能、方法、解釈 第15回 まとめと筆記試験			
使用教科書 必要な資料をその都度配布する。			
自己学習の内容等アドバイス 事後学習により、講義内容をよく理解し、自分の考えを整理しておくことが望ましい。			

[授業科目名] 教育行政学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 藤原 善行
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 文部科学省行政、教育委員会制度など 21 世紀の初等中等教育行政及び社会教育行政等を全般にわたって学習し、教育行政の意義と目的、基本原理等を具体的に理解することを目的とする。			
授業の概要 教育行政とは、教育を対象として、教育政策の実現、教育のための条件整備、憲法・教育基本法に示されている学習権の実現を図るための行政である。本授業では、わが国の公教育制度、教育行政の概念等を学習し、教職に携わる者に必要な教育行政に関する知識を身に付けることを目標としている。			
学生に対する評価の方法 平生の受講態度、課題への対応状況、定期試験等を総合的に判断して評価を行う。なお、この授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1回 オリエンテーション、わが国の公教育制度 1 教職課程を学ぶ意義、公教育の概念とその制度的原理 2回 わが国の公教育制度 2 わが国の学校体系 3回 わが国の公教育制度 3 現代の学校制度の課題 4回 教育法制の構造と機能 1 教育法規の体系、教育権の構造 5回 教育法制の構造と機能 2 憲法、教育基本法 6回 教育行政の概念と基本理念 1 教育行政の成立と展開、教育行政の概念 7回 教育行政の概念と基本理念 2 教育行政の構造と一般原則、今後の課題 8回 教育行政の構造と機能 文部科学省、教育委員会制度 9回 教育行政の諸領域 1 学校経営 10回 教育行政の諸領域 2 教育課程行政、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト） 11回 教育行政の諸領域 3 教職員の職務と人事考課 12回 教育行政の諸領域 4 社会教育行政、教育財政 13回 諸外国の教育行政制度 アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア など 14回 わが国教育行政の課題 学校評議員制度、学校運営協議会制度、学校評価制度、教員人事評価制度、「民間人校長」登用 15回 まとめと定期試験			
使用教科書 教育行政学 河野和清 編著（ミネレガ書房）			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育課程		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 学習指導要領に基づく各教科・教科外の教育課程編成法及び特質が理解できること。「評価の観点」に配慮した授業計画、学習指導案が書けること。基本的学習指導法にしたがった授業実践ができること。 テーマ： 教育課程及び指導法に関する学修。教育課程の基礎理論の理解。教育基本法等の法律やこれに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた指導法の習得。			
授業の概要 教育課程の基礎理論とその類型を学ぶ。教育の法治主義に基づく教育基本法をはじめとする法律や、これに関わる諸規則等を踏まえ、学校教育の意義、目的・目標に合わせた教育課程の編成及び教育の内容・方法に関連する事項を系統的・体系的に学ぶ。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 1、2回 教育課程論 ― 教育課程の基本原則 教育課程の概念、カリキュラムの類型、カリキュラムと教育課程の包含関係 3回 学習指導要領 教育課程に関する法規、学習指導要領の性格、歴史的変遷、新学習指導要領の特質 4回 教育課程と学習内容 人間形成と教育内容の関わり、教材の役割、教科書の教材化、生きる力と個性伸長の関連 5回 学習指導要領が定める学校教育活動の構成 各教科と特別活動・道徳教育の関連、道徳教育・特別活動の意義 6回 教育方法論 ― 学習指導の原理 問題解決学習と系統学習、発見学習と動機付け、初等・中等教育時代の自己の体験発表と協議 7回 学習指導案の役割： 学習指導から学習支援への推移、授業の三角形と教材・発問、授業計画と学習指導案の作成、マルチメディアの活用 8回 中間考査を実施 9回 道徳教育の理念と実践： 道徳教育の理念、道徳教育の指導法、実践例の研究と協議 10回 特別活動の指導法 学級活動（ホームルーム活動）の指導法、児童会（生徒会）活動の指導法、学校行事の指導法 11回 教育評価 学力論の変遷、新学力観、観点別評価、指導と評価の一体化、指導要録の内容、通知票の意義と内容 12回 教育実践論 ― 授業実践の例示 問題解決学習型の例、系統学習型の例、例について研究と討議 13回 総合的な学習の時間について 創設の意義、学習の内容、実践例の研究と協議、学習指導案の課題提示 14回 教育実践 観点別評価に配慮した学習指導案の作成、研究と討議 グループ別に研究と討議をした後、全体発表 15回 まとめと最終考査を実施			
使用教科書 実践に活かす 教育課程論・教育方法論 山口 満、唐澤 勇 監修 学事出版			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。効率的な学習は、まず授業でメモを取ること、そしてなぜそのような結論になるかを常に考えることである。理解のためには予習3割・復習7割の時間配分が良いとされる。			

[授業科目名] 美術科教育法 I		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2 年次前期	[必修・選択] 選択 (教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育は人間教育 到達目標：発達各段階における造形の意味の理解 ① 発達段階によって表現が異なることの意味の理解 ② 各発達段階における表現の特徴と課題の理解 ③ 発達段階ごとにおける教育の方針の理解			
授業の概要 美術科教育は、芸術家育成教育ではなく、幼児期から生涯を通じて、一貫して持続されていく人間教育の重要な教育領域であることを、幼児期から思春期にかけての造形発達を事例を確認しながら理解する。			
学生に対する評価の方法 1. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 2. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 3. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 4. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：「講義のオリエンテーション」 美術科教育 I～IVの概要説明 講師紹介、受講生アンケート等 第2回：「幼児の造形体験」 幼児画を模写することによって、幼児の造形について体験的にアプローチする。 第3回：「発達ということ①」 人間成長を発達という視点から捉え、発達の概念を理解する 第4回：「発達ということ②」 造形における発達を「美術による教育 (ピクター・ローエンフェルト)」などの著作を資料として概説する 第5回：「造形発達① 幼児期の平面造形 1」 幼児期の造形についての説明 幼児期全体の位置づけ 第6回：「造形発達② 幼児期の平面造形 2」 幼児期の造形についての説明 幼児期における描画の特徴説明 (発達段階的、環境的に特徴のある幼児の描画を教材に、描画の特徴を理解する) 第7回：「造形発達③ 幼児期の立体造形」 幼児期の立体表現の事例を通して、造形的認識を理解する。 第8回：「造形発達④ 児童期の造形 1」 児童期 (小学生) の造形の特徴についての説明 幼児期における描画との違いを、両段階の描画を比較対照することによって明確化する 第9回：「造形発達⑤ 児童期の造形 2」 児童期における全体的発達に関する知見をもとに、児童期における造形の意義と課題を示す。 第10回：「造形発達⑥ 児童期の造形 3」 児童期における造形教育のあり方について、基本方針と手法を理解する。 第11回：「思春期の造形 1」 思春期 (中学生) の造形の特徴についての説明 前、二段階の描画等との違いを、それぞれの描画等の特徴差から理解する。 第12回：「思春期の造形 2」 思春期の発達課題についての概説から、思春期における描画と発達の関係を理解する。 第13回：「思春期の造形 3」 思春期における美術教育の意義とそのあり方についての基本概念を理解する。 第14回：「造形発達と美術教育 1」 前講までの内容をまとめ、造形の発達についての全体理解を確認する。 第15回：「造形発達と美術教育 2」 全員参加の討議によって美術教育と造形発達の関係について理解を深めるとともに、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場への資料ノートの持込は禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と教育方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の法的理解 ③ 関連法律（日本国憲法、教育基本法、学校教育法）の概要理解 ④ 美術科教育の領域、工芸・デザインの理解 ③ 学習指導要領の理解			
授業の概要 前講（Ⅰ）における美術科教育の目的理解を前提に、美術教育を構成する各領域における目的と教育内容について理解する。			
学生に対する評価の方法 5. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度（20%） 6. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度（20%） 7. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度（20%） 8. 試験における成績（40%） ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回：「法律と美術科教育①」 日本国憲法・教育基本法と美術科教育の関係理解。 第2回：「法律と美術科教育②」 学校教育法、学習指導要領と美術科教育の関係理解。学習指導要領については、美術科教育の構成を理解。 第3回：「法律と美術科教育③」 学習指導要領の詳細理解。 第4回：「美術科教育の領域①」 工芸・デザイン、立体・平面の違いについてのディスカッションと領域設定内容の理解。 第5回：「美術科教育の領域②」 鑑賞領域の意義 鑑賞の視点と価値共有の意義 第6回：「美術科教育の領域③」 デザインの歴史的理解と今日的意義の理解（消費者視点からの教育） 第7回：「美術科教育の領域④」 デザイン教育と学習指導要領 第8回：「美術科教育の領域⑤」 デザイン領域の基礎知識演習 学習すべき内容の概説と、知識の確認 第9回：「美術科教育の領域⑥」 デザイン領域の基礎知識演習 回転落下体作成によるプロセスの確認。 第10回：「美術科教育の領域⑦」 工芸領域の歴史的理解 第11回：「美術科教育の領域⑧」 工芸領域と環境問題との関連から工芸領域の今日的意義を理解。 第12回：「美術科教育の領域⑨」 工芸領域と学習指導要領。 第13回：「美術科教育の領域⑩」 工芸領域の基礎知識演習 工芸領域教育で必要となる基礎知識の概説。 第14回：「美術科教育法Ⅱのまとめ」 美術科教育法Ⅱの内容を整理し、学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題について討論。 第15回：「美術科教育法Ⅱのまとめと確認」 学習指導要領の位置づけ、デザイン・工芸領域の今日的教育課題についてとりまとめを行い、本講の学習成果の確認（「択一問題」「論述問題」による達成度確認）を行う。（試験会場への資料ノートの持込は禁止する）			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅲ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術教育の領域と学習指導方法 到達目標：各領域における教育の目的と内容の理解および学校教育としての美術教育の基本的手法の理解 ⑤ 美術科教育の領域、平面・立体の理解 ⑥ 授業計画手法の理解 ③ 評価の意義と手法の理解			
授業の概要 前講(Ⅱ)に引き続き、領域別学習を行うとともに、学校教育で広く用いられている「授業計画」の手法を示し、その作成の基礎を学ぶ。また、美術教育における評価の意義について学ぶ。			
学生に対する評価の方法 9. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 10. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 11. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 12. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 第1回：「美術科教育の領域①」 平面領域の歴史的理解と今日的意義の理解。 第2回：「美術科教育の領域②」 平面領域と学習指導要領の理解。 第3回：「美術科教育の領域③」 平面領域の基礎知識演習。 第4回：「美術科教育の領域④」 立体領域の歴史的理解と今日的意義の理解。 第5回：「美術科教育の領域⑤」 立体領域と学習指導要領の理解。 第6回：「美術科教育の領域⑥」 立体領域の基礎知識演習 第7回：「授業計画①」 授業計画のうち、指導計画案を資料に、その実例と構成の基本を理解する。 第8回：「授業計画②」 授業計画のうち、指導計画案を資料に、その実例と構成の基本を理解する。 第9回：「授業計画策定の目的と方法」 教育成果を上げるための手法としての計画作成の意義と、計画作成の手法について理解。 第10回：「授業計画③」 授業計画基礎演習 授業計画を簡略化して作成し、策定のポイントを理解する。 第11回：「美術科教育の評価①」 教育における評価の対象、目的について理解する。 第12回：「美術科教育の評価②」 教育における評価の手法について理解する。 第13回：「美術科教育の評価③」 美術科教育の特殊性に配慮した評価の方法について基本的な理解を得る。 第14回：「美術科教育の領域と評価のまとめ」 前講の内容も含め、領域の意味と評価のあり方について内容を整理する。 第15回：試験による本講の学習成果の確認 今年度の講義全体のとりまとめを行い、「択一問題」「論述問題」によって、本講の学習達成度についての確認を行う。(試験会場への資料ノートの持込は禁止する)			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 授業終了時に提示された発展的学習のテーマについて発展的に復習すること。 次回授業の概略説明における必要な関連内容について予習しておくこと。			

[授業科目名] 美術科教育法Ⅳ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 西脇 正倫
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：美術科教育の方法と目的 到達目標：人間教育としての美術科教育の重要性を認識し、自らの問題意識に立脚した目的概念をもつ ⑦ 美術科教育の人間教育としての重要性認識の共有 ⑧ 授業計画手法の基本的作成能力の獲得 ③ 自らの視点からの美術科教育観の確立			
授業の概要 学習指導計画の策定を通して、美術科教育法Ⅰ～Ⅲの内容を学生諸子の中で再構築するとともに、美術科教育の目的についての合意形成と個別の認識深化を行う。			
学生に対する評価の方法 1 3. 各講義時における集中度、私語等の有無などの態度 (20%) 1 4. 各講義時における質疑に対する応答、授業内レポートによる理解度 (20%) 1 5. 各講義時における予習・復習に関する質問に対する達成度 (20%) 1 6. 試験における成績 (40%) ※本授業は教員養成を目的とする科目であるところから、再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 第1回：「学習指導計画立案①」 年間計画の確認、学習指導計画の再確認 グループ編成 第2回：「学習指導計画立案②」 学習指導計画のテーマ設定 対象生徒のシチュエーションづくり。 第3回：「学習指導計画立案③」 目標および全体計画の策定の情報収集 第4回：「学習指導計画立案④」 全体計画策定チェック① 第5回：「学習指導計画立案⑤」 全体計画策定情報収集 第6回：「学習指導計画立案⑥」 全体計画策定チェック② 第7回：「学習指導計画立案⑦」 全体計画の発表① 第8回：「学習指導計画立案⑧」 全体計画の発表② 第9回：「学習指導計画立案⑨」 本時の計画の策定方法 第10回：「学習指導計画立案⑩」 本時の計画の策定チェック① 第11回：「学習指導計画立案⑪」 本時の計画の策定 第12回：「学習指導計画立案⑫」 本字の計画の策定チェック② 第13回：「学習指導計画立案⑬」 本字の計画の発表① 第14回：「学習指導計画立案⑭」 本時の計画の発表② 第15回：学習指導計画策定をテーマにした小論文(評価テスト) および学習指導計画案の製本・提出。			
使用教科書 使用せず。			
自己学習の内容等アドバイス 指導案作成に当たっては、インターネット情報等を含め、周辺関連情報の収集を十分に行うこと。			

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
情報科教育法 I		講義	黒澤 宣輝
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	3 年次前期	選択 (教職必修・情報)	
授業の到達目標及びテーマ 到達目標：高等学校の教科「情報」で使用する教科書の内容を確実に消化し、生徒の力に応じた授業法を学ぶ。 また、生涯にわたり社会教育等においても情報科教育を推進する指導者としての素養を身につける テーマ：教科書「情報C」の裏付けとなっている「情報」に関する知識・技術をさらに高める			
授業の概要 情報のデジタル化及び情報通信ネットワークの特性を高校生にどのように理解させるか。その特性を活かした表現法やコミュニケーションはどのように教えたら高校生に定着させられるか。 情報化が社会に及ぼす光と影をどのように教えるか。情報社会に参加する態度はどのようなものでなければならないか。その理由を考えさせる授業法は何か。			
学生に対する評価の方法 P I S A 型学力観 (知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度) に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容 (約 30%)、定期考査 (約 70%) で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度が評価に占めるウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 1 回 教科「情報」の構成：教科「情報」新設の経緯と趣旨、普通教科「情報」が扱う内容、 2 回 専門教科「情報」が扱う内容、高校での情報教育について 3 回 情報のデジタル化の仕組み：文字、数値、画像、音などのデジタル化について 4 回 情報機器の種類と特性：家庭、学校、企業、社会で扱う情報機器について 5 回 多種の情報機器を活用した表現方法 多様な形態の情報を統合する情報機器による表現 6 回 情報通信ネットワークの仕組み：仕組みとセキュリティ確保について 7 回 情報通信の効率的な方法：通信速度や容量、正確な伝達法について 8 回 コミュニケーションにおける情報通信ネットワークの活用 電子メールや電子会議などの効果的な活用法について 9 回 情報の公開・保護と個人の責任 情報の保護の必要性、収集・発信に伴う問題と個人の責任について 1 0 回 情報通信ネットワークを活用した情報の収集・発信 情報を適切に収集・分析・発信する方法について 1 1 回 社会で利用されている情報システム 種類と特性、システムの信頼性向上について 1 2 回 情報化が社会に及ぼす影響：多面的に影響を認識し、望ましい情報社会の在り方を考える 1 3 回 観点別評価の内容と指導と評価の一体化について 1 4 回 1 3 回の考えを基礎とした学習指導案の作成 指導計画の例、学習指導案の例を提示し、作成上の留意点を説明し 5 0 分授業の学習指導案を作る。 この指導案を使って、別講座「教育実習指導」で 5 0 分の模擬授業を行う。 1 5 回 まとめと考査を実施する			
使用教科書 講義ノートの配布、高等学校教科「情報」教科書 (情報 c)。 参考資料：高等学校学習指導要領 (情報)			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。考えさせる発問の仕方を工夫する。そしてなぜそのような結論になるかを理解させることに心掛ける。常に高校生の立場で教科書や参考書を読むよう心掛ける。そして教える者として関連事項を調べておく。			

[授業科目名] 情報科教育法Ⅱ		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択(教職必修・情報)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 「基本情報技術者」国家試験問題レベルの学習を行い、教科書の内容をより深く理解できる力をつける。学校における情報システム全般につき、ある程度維持・管理に携われる力をつける。 テーマ： 教科書「情報C」の裏付けとなっている「情報」に関する知識・技術をさらに高める			
授業の概要 2進数を中心とした情報の基礎理論。コンピュータの動作原理と論理回路、主記憶装置や補助記憶装置、ICなどハードウェアの構成。 OSやプログラム言語などのソフトウェアについて。ネットワークシステムの原理とメンテナンスについて。システム開発法について。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観(知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度)に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と提出課題の内容(約30%)、定期考査(約70%)で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度が評価に占めるウェイトは高い。 この講座では再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 情報の基礎理論—1 : 奇数変換、2進数の加減算、固定小数点と浮動小数点 2回 情報の基礎理論—2 精度と誤差、10進数と2進数表現、文字データの2進コード化 3回 ハードウェア—1 : コンピュータの動作原理、プログラムの構成とアドレス指定方式、高速化技術 4回 ハードウェア—2 論理演算と論理回路、加算回路と順序回路、半導体素子と集積回路 5回 ハードウェア—3 : 主記憶装置と補助記憶装置の種類・特性 6回 ソフトウェア—1 : オペレーティングシステム、ジョブ管理とタスク管理 7回 ソフトウェア—2 プログラム言語、言語処理プログラム、流れ図の書き方とBASICによるプログラミング練習 8回 ファイルとデータベース : ファイル構造、ディレクトリ構造、データベース 9回 通信の仕組み : 通信機器と通信回線、データ伝送の仕組み、回線接続方式と通信方式、誤り制御 10回 ネットワークシステム—1 ネットワークアーキテクチャ、LANの構成と接続方式、LANの標準化 11回 ネットワークシステム—2 LANのアクセス制御方式、インターネットの機能と応用利用 12回 システム開発—1 システム開発手順、プログラム設計、プログラミング、プログラムテスト 13回 システム開発—2 : 保守と作業管理 14回 情報システムと社会 セキュリティと標準化、企業の情報化と経営、流通システム、品質管理法、経営分析法 15回 まとめと考査を実施する			
使用教科書 講義ノートの配布、高等学校教科「情報」教科書(情報C) 参考書 : 基本情報技術者試験問題解説書			
自己学習の内容等アドバイス 学習を含めた生活全体の行動計画表を作成する。考えさせる発問の仕方を工夫する。そしてなぜそのような結論になるかを理解させることに心掛ける。常に高校生の立場で教科書や参考書を読むよう心掛ける。そして教える者として関連事項を調べておく。			

[授業科目名] 道徳教育の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択(教職必修・美術)	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育の果たす大きな役割は人格教育であり、道徳教育はその中核をなすものである。良き社会人、市民を育成するために、道徳教育の充実を目指して実践的指導法を身に付けることを到達目標とする。さらに、指導者としての道徳的な資質を高めることも目標とする。			
授業の概要 この講座では、学校・家庭・社会が協働して道徳教育を充実させるために、学習指導要領や具体的な実践事例などをもとに研究を進める。特に、児童生徒や青少年および大人の現状や実態を把握し、自己統制力と規範意識の育成にもふれながら、具体的な実践事例を多く取り入れた授業を行う。また、具体的な指導方法についてのプレゼンテーション・ロールプレイを行い、理解を深める。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲(約20%)、課題・発表(約30%)、試験の結果(50%)などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画(回数ごとの内容等) 1回 ガイダンス(授業の進め方、青少年の規範意識と道徳観、教育改革) 2回 家庭における道徳教育 家庭環境の変化と課題、家庭教育の機能 3回 学校における道徳教育 生徒のモラル意識、日米比較でみる道徳教育の現状 4回 社会における道徳教育 学校再生のための道徳教育、社会における道徳、学校と地域社会との協働 5回 教育の概念と道徳教育(道徳とは、道徳律と道徳性、道徳的価値) 6回 道徳性の発達 道徳的価値、道徳的实践力、道徳性発達理論と道徳教育の今日的課題 7回 道徳性の一般的な発達段階 乳幼児期、幼児期、児童期、思春期、青年期 8回 戦後日本の道徳教育のあゆみ 先人に学ぶ道徳、道徳教育年表 9回 「学習指導要領」のなかの道徳教育 学習指導要領の改訂と特設「道徳の時間」 10回 道徳教育の指導法の具体的な考察 道徳の時間、総合的な学習の時間等 11回 「道徳の時間」の学習指導案の作成 主題・授業資料の選定、内容の学校・学年段階の設定 12回 「道徳指導」の実践のための研究① 13回 「道徳指導」の実践のための研究② 14回 「道徳教育の研究」のまとめとテスト 15回 道徳教育の研究及び授業実践の課題とまとめ			
使用教科書 小学校学習指導要領解説 道徳編 文部科学省 東洋館出版社			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 特別活動の研究		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校教育においては、児童・生徒の個性の伸長と心豊かな人間性ならびに在り方生き方の育成が重要な課題である。そのため、これらの課題に応える基礎的な知識・技能の修得をテーマとし、それに基づき各自の教育に対する考え方、あるいは生徒指導上の諸問題を主体的に考え、判断し、解決する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 「特別活動の意義」、「学級会活動（ホームルーム活動）」、「児童会活動（生徒会活動）」、「学校行事」を中心に実践例を挙げながら講義を進める。また、各自の体験発表、討論等を通して理論と実践の深化を図るとともに、生徒指導上の諸課題を解決する力や実践力を養うことを目的とする。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業の内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 学校教育と特別活動の意義（今後の学校教育の目標、特別活動の役割、児童・生徒の生活実態、人間としての生き方教育） 第2回 特別活動の変遷（戦前の課外活動、戦後の特別活動、昭和期における特別活動、平成期に入ってから特別活動） 第3回 特別活動の特質と目標・内容（学習指導要領のうたう目標、特質と指導法、内容と特質、生徒指導、総合的学習との関連） 第4回 指導計画・指導案の作成（学校の教育計画との調和、3領域ごとの指導計画と指導法、指導案の役割と指導案の作り方） 第5回 学級（ホームルーム）活動（目標と性格及び問題点、活動の内容、指導計画の作成と指導方法） 第6回 児童会（生徒会）活動（目標と性格及び問題点、活動内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第7回 クラブ活動・部活動の指導①（目標と教育的意義、実態と指導及び課題） 第8回 クラブ活動・部活動の指導②（指導計画の作成と評価）・中間試験日 第9回 学校行事の指導（目標と性格及び問題点、内容とその指導、指導計画の作成と評価） 第10回 特別活動の評価（意義と観点、評価の方法と事例、人間としての在り方生き方教育） 第11回 特別活動と学級・学年・学校経営（特別活動の組織・運営、特別活動と学校事故、学級経営の内容、学級・学年・学校経営との関連） 第12回 完全学校週5日制時代の学校・家庭・地域の関わり（学校・家庭での対応上の留意点、地域の教育力への期待、学校・家庭・地域の協力、地域での特別活動） 第13回 これからの特別活動の展望と課題（在り方についての組織図、社会教育との関連、教育課題との関連、国・地方教育団体との関係） 第14回 試験日 第15回 事例研究：県立学校経営案に見る特別活動の位置づけと活動内容（事例を見て研究協議をする）			
使用教科書 現代の特別活動 ―理論と実践― <第2版> 中野目直明・小川一郎編 酒井書店・育英堂			
自己学習の内容等アドバイス 今回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育実践学		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 山田 敏子
[単位数] 2	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 学校における教育活動は、各学校において工夫をこらし計画的に組織されている。内容は、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等である。それらを教授するのは教師であり、学習するのは児童生徒である。 本講座では、実際の教育活動に活かす指導方法について研究し、具体的な学習指導方法を学び、教師に必要とされる実践力の基礎を身に付けることを到達目標とする。また、研究成果の実戦への還元を確認する。			
授業の概要 この講座では、内容プリントを配布し授業を進める。学習指導の実際については実習的な内容で授業を行う。学習指導要領が目指す人間像・学力観・教育方法観を概観しながら教育の方法・技術を通して教育活動を構築する。教授メディアの効果的な活用も図る。			
学生に対する評価の方法 受講態度・関心意欲（約20%）、課題・発表（約30%）、試験の結果（50%）などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は認めないので注意すること。不合格者は再試験を実施するが、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス(授業の進め方・教育実践学を学ぶ意義・教育実践学に必要な理論) 第2回 教育実践学の構造（学習指導要領との関連・教育実践学の領域及びその内容と方法） 第3回 教育実践学と学習指導要領（幼稚園教育要領）の理念との関連（趣旨の実現のための実践・要領の変遷・生涯学習の理念と施策） 第4回 教育における理論と実践との関わり（実践体験による教育実践学の構築） 第5回 授業設計の方法論(体験活動等の活動を中心とした学習指導形態) 第6回 授業設計の方法論(一斉・小人数・習熟度・グループ活動等の学習指導形態) 第7回 教科教育実践方法の具体例の研究（教材研究と教材開発・補助教材づくりの教育実践事例研究） 第8回 教科外教育実践方法の具体例の研究（特別教育活動・道徳・総合的な学習の時間の教育実践事例研究） 第9回 教育実践の学習方法（情報機器及び教材の活用・マルチメディアと授業構成・シミュレーション・ディベート等と授業構成） 第10回 教育方法と教育評価（指導と評価の一体化・相対評価と絶対評価）・P-D-C-Aサイクル) 第11回 観点別評価・学習指導案・評価（考査）問題の作成法 第12回 観点別評価の内容と模擬授業（観点別評価を組み込んだ学習指導案・補助教材・考査問題づくり） 第13回 学習する立場と教授する立場のロールプレイング（模擬授業の実践） 第14回 教育実践学のまとめ及びテスト（理論・資質能力・実践力の評価） 第15回 教育実践学の課題とまとめ			
使用教科書 必要に応じてそのつどレジュメを配付する。(参考書 実践に活かす「教育課程論・教育方法論」学事出版)			
自己学習の内容等アドバイス 各授業のまとめと課題ワークを指示するので、予習・復習をしておくこと。特に、提出を指示するワークシートは、期日までに提出すること。			

[授業科目名] 生徒及び進路指導		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 筒井 仁平
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ 生徒指導及び進路指導は特定の教師のみが行うのではなく、すべての教師が学校教育全体を通じて行うものである。そのため、生徒指導及び進路指導について教育的な概念や教育方法について、基礎的な知識・基本的な理論、技能の修得をテーマとし、児童・生徒が学校を含めた社会の中で自己を生かした活動ができるよう成長するのを援助する力を身につけることを到達目標とする。			
授業の概要 生徒指導では、「生徒指導の意義」、「学業指導」、「適応指導」、「社会性の指導」、「自己を生かす指導」を中心に事例を挙げながら講義を進める。また、進路指導では、生徒が主体的に進路選択や社会に適応するための能力の伸長を図るよう教育する方法を研究する。			
学生に対する評価の方法 授業時の課題、研究発表を合わせて20%、授業内容全体を範囲とした定期考査を80%で評価する。課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。定期考査については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。本授業は再評価を実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 生徒指導・進路指導の意義と課題（生徒指導とは、生徒指導の実践原理と課題） 第2回 生徒指導の原理と理論（生徒指導・実践の原理、生徒指導と領域） 第3回 児童・生徒理解の進め方（児童・生徒理解の意義と目的、理解の方法、支援・指導につなぐ児童・生徒理解、児童・生徒理解を左右する教師の見方） 第4回 学級経営の進め方（生徒指導からみた学級経営の意味、学級集団の力学、学級経営の方法） 第5回 教科指導と生徒指導（生徒指導と教科指導の関係、実践例の研究、生徒指導からみた教科指導の課題と解決策） 第6回 生徒指導実践における教師像と研修（生徒指導の実践上必要となる教師の資質と技能、生徒指導の実践力を育成するための研修のあり方） 第7回 学校の指導体制と家庭・地域との連携①（学校の生徒指導実践における課題・指導体制の確立） 第8回 学校の指導体制と家庭・地域との連携②（生徒指導における学校・家庭・地域社会の連携） 中間試験日 第9回 進路指導の意義と課題（進路指導の教育的意義と目的、課題、進路指導理論） 第10回 自己発見と自我同一性の確立（自己の発達、同一性の確立、自己理解と進路指導） 第11回 就労観・職業観の形成と変容（現代青年の就労観・職業観、就労観・職業観の形成と変容、就労観・職業観の形成を促す進路指導のあり方） 第12回 進路指導実践の学校体制（学校教育における新指導の位置づけ、体制づくり） 第13回 学校教育における進路指導の実践展開（「学校の教育活動全体を通じて」の進路指導、進路指導における「ガイダンス機能の充実」） 第14回 試験日 第15回 現実の高校における進路指導の手引きの研究・協議（事例を見て研究・協議をする）			
使用教科書 生徒指導・進路指導 高橋 超・石井眞治・熊谷信順 編著 ミネルブア書房			
自己学習の内容等アドバイス 次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。			

[授業科目名] 教育相談とカウンセリング		[授業方法] 講義	[授業担当者名] 加藤 純一
[単位数] 2	[開講期] 2年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考
授業の到達目標及びテーマ テーマ：教師が行う教育相談活動の「心」と「構え」 授業の到達目標：自分の個性にふさわしい、自分自身の教育相談の方法を構築するための「基礎的知識」を身につける。			
授業の概要 不登校及びいじめ問題への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省は学校教育相談の充実を目指してきた。この授業において、学校現場できちんと応用できる「学校教育相談の基礎」及び「有効な教育相談・カウンセリングを行うための基本的な姿勢」について学習する。			
学生に対する評価の方法 授業への参加状況（15%）、レポート（20%）、試験の結果（65%）等を総合的に判断して評価を行う。教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 ガイダンス 第2回 学校教育相談の歴史 第3回 学校と専門機関の相談の違い、母性原理と父性原理、学校と家庭の役割 第4回 コンサルテーション 第5回 ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性 第6回 相談の目標と終結 第7回 人が人を変えるということ 第8回 不登校 第9回 いじめ 第10回 ノイローゼ等病的事例 第11回 特別支援教育 第12回 クライシスセオリー 第13回 思春期の理解 第14回 教育相談を行うときの注意事項 第15回 まとめと試験			
使用教科書 『親面接のポイント』 加藤純一著 ほんの森出版 [参考図書] 『学校教育相談学 ハンドブック』ほんの森出版			
自己学習の内容等アドバイス 毎時間の授業資料プリントを配布する。資料プリントに、関連事項の書かれている教科書のページ数が記されているときには、前もって教科書のその部分を読んでおくこと。			

[授業科目名] 総合演習		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 立川 義政・小笠原 昭夫
[単位数] 2	[開講期] 4年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 DVDを活用
授業の到達目標及びテーマ 二つのテーマ、「国際理解教育」及び「生活環境」について、前半・後半に分かれて実施する。 「国際理解教育」の目標は、総合的な学習の時間（国際理解教育）の具体的な学習活動を、どのように教科・道徳・特別活動等との関連を図りながら構成していくか、そして、いくつかの実践事例をもとに、学習活動をどのように計画し、実践化、評価していくかという一連の手順について学生相互に論じ合うとともに、学習活動案を作成し、それを発表するという授業を通して、学習活動を設定していくための基礎的な能力を養うこととする。 また、「生活環境」については、テーマとして生活環境問題から何か一つを取り上げ、そのテーマに沿って調査・研究を深めた上、いかにまとめ解りやすく発表するか、その手腕の向上を目標とする。			
授業の概要 「国際理解教育」の主たるねらいは、子供たちに、地球上に暮らす様々な文化的背景を有する人々と平和で友好的な関係を形成し、発展させる資質と能力を育成していくことである。そこで、それらを育むための教育活動を設定するには、子どもたちの発達段階を踏まえ、国際比較という観点に立って、どのように教材を構成し、学習活動を構築していくという一連の方法を身につけることが、本授業の概要である。 また、「生活環境」は、環境の時代と言われながら、ともすれば授業の主題から遠ざけられがちな生活環境を身近で切実な問題と捉え、それらを具体的に追及することにより、より健全な人間社会を構築するきっかけを作る。予め小学校低学年・中学生など対象者を設定し、対象者により深く理解してもらうにはどうすればよいか、発表・説明の方法を工夫し実践する。			
学生に対する評価の方法 「国際理解教育」では、授業への態度(30%)、数回実施する小レポート(30%)、国際理解教育に関する学習活動計画案(40%)等で総合的に評価する。 「生活環境」では、授業への参加の積極性(20%)テーマの掘り下げ方と発表にあたっての創意工夫(40%)、発表の成果(30%)小レポート(10%)などで総合的に評価する。本授業は、再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） 第1回 教職総合演習として国際理解教育を学ぶにあたっての目的と講義内容、授業の進め方について 第2回 総合学習の歴史、現行学習指導要領に示された総合的な学習の時間と国際理解教育とは・・・ 第3回 国際化への流れと理念・国際理解のための基本姿勢、国際理解教育の実践の目標と内容及び学習方法、国際比較研究（課題研究）について 第4回～5回 国際理解教育の具体的に実践化する手順とは・・・ 国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）別に実践例をもとに研究 ①人間理解のための学習 ②生活や文化に着目した学習 ③世界の現実理解のための学習 第6回～7回 個々に設定した国際比較研究のための具体的なテーマ（課題）に関し、教育的意義や発達段階を踏まえて発表し、意見交換する。 第8回 個々に設定したテーマ（課題）を具体化した実践活動（総合的な学習）について評価方法を踏まえて発表する。			

ここから「生活環境」

第9回 生活環境に関する話題提供(1)及びグループ分け。

第10回 生活環境に関する話題提供(2)及び研究・発表のテーマ設定並びに良い話し方のヒント。

第11回～14回 グループ発表(毎回2～3グループずつ)。

第15回 全員による反省と討論。小レポート。

使用教科書

参考図書「国際理解教育」(多田孝志著、東洋出版社)

(国際理解教育に関する理論や具体的な実践例等について、資料を配布して授業を進める)

「生活環境」では教科書は使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

「国際理解教育」の授業に臨むにあたり、現在、日本や世界で論点や争点になっていることに関し、日頃から興味関心を持ち、メディアや関連する書物等から情報を得よう努力しておくこと。

「生活環境」の授業については、日頃から新聞・テレビなどで報道される環境問題に注意し、人類を含めた私物の生活環境として、現在の地球がどのような状態にあるのかを考え、勉強する習慣を身につけておく。併せて、アナウンサーや落語家の話し方に注意し、話術の向上を志す。

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 3年次後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 ※2012年前期まで継続履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 教育実習の効果を上げるための留意点を身につける。生徒を引きつける授業が出来ること。観点別評価・指導と評価の一体化について理解した授業が出来ること。教師としての基本的な生活態度定着化。 テーマ： 教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての実践力を身に付けさせる。			
授業の概要 教育実習全体の概要、教育実習の意義、実習効果を上げるための留意点を知る。観点別評価・指導と評価の一体化について理解し、これに基づいた学習指導案を作成する。この指導案をもとに全員が交代で50分の模擬授業を行い、研究協議する。また、受け入れ校の教職員や生徒に迷惑をかけることのないよう基本的な生活態度の在り方について協議する。			
学生に対する評価の方法 PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。本講座での評価内容は授業・討論等への参画態度と模擬授業発表者に対する評価の内容（約30%）、定期考査（約70%）で総合的に行う。教員養成の趣旨からして授業態度・参画態度についての評価のウェイトは高い。この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <3年次後期> 1回 教育実習の意義と課題、教育実習の範囲と実習内容 教員養成課程と教育実習、教育実習の意義、課題および実習生としての自覚 学習指導、学級経営、校務分掌、部活動指導 2回 全般的留意事項、実習過程での留意点 勤務・服務などについて、実習前（事前指導、実習校の決め、実習校との打ち合わせ） 実習中（観察、参加、研究授業）、実習後（反省会への準備、実習校との関連事務、大学との関連事務） 3回 良い授業のための工夫 生徒理解、自作教材、授業参観、教材研究、板書の工夫。観点別評価・指導と評価の一体化。 4回 以降 観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。 各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 この模擬授業は4年生の前期、教育実習に出る直前まで継続して行う。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 全員が交替で発表し研究協議した模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成することを心掛ける。自己の模擬授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習指導		[授業方法] 演習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 1	[開講期] 4年次前期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 ※2010年度から継続履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： 単元計画から日案作成までを体系化し教育実習直前の総仕上げが出来ること。実習先との綿密な事前打ち合わせが出来ること。実習校での実践結果をまとめ上げ実践の自信を確実にする。 テーマ： 教育実習の事前・事後指導を実施し、教員としての実践力を確かなものにする。			
授業の概要 4年次の前期は、3年次の後期に学んだ内容を教育実習で実践し、教師として理論と実践の融合に必要な力量を磨く。教育実習終了後、実習校の研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして実践結果を発表しあい、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究する。			
学生に対する評価の方法 実習直前の指導、実習校での評価、事後指導結果を総合し、PISA型学力観（知識・理解、思考力・判断力・表現力、汎用的技能、意欲・態度）に照らして到達度を評価する。この講座では再評価は実施しない。			
授業計画（回数ごとの内容等） <4年次前期> 1回～5回（4月～5月） 3年次後期に引き続いて観点別評価・指導と評価の一体化を踏まえた学習指導案を作成し、全員が交代で50分の模擬授業を行う。 残りの40分は、この模擬授業について各人が評価報告書を作成し、発表するとともに研究協議する。各人の評価報告書は毎回指導教官が回収する。 6回 教育実習に出る直前の指導 3年次後期、1～3回で指導した内容の再確認と総仕上げ。特に勤務・服務、実習生としての心構えを重視。 （6月第1～3週、教育実習） 7回以降 教育実習を終えた後、実習中全日の行動を簡潔にまとめた報告書の作成、この報告書と研究授業で使用した学習指導案、及び実習校の指導教官の指導内容等をもとにして体験を発表しあい、自己評価、相互評価を通して、理論の理解を深めるとともに実践力の更なる向上策を研究協議する。			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 実習校の指導教官と綿密な打ち合わせを行い、大学での模擬授業学んだ内容を踏まえて、生徒を引きつける自作教材を作る。板書計画と授業のし易い学習指導案を作成する。実習校での研究授業の前に何度も自作教材と指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			

[授業科目名] 教育実習 I		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4 年次前期又は後期	[必修・選択] 選択 (教職必修)	備考
授業の到達目標及びテーマ 到達目標 ：これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ ：教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画 (回数ごとの内容等) 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話 (オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について)、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施 (実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する)、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3 年次後期から 4 年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみる事。			

[授業科目名] 教育実習Ⅱ		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 黒澤 宣輝
[単位数] 2	[開講期] 4年次前期又は後期	[必修・選択] 選択（教職必修）	備考 中学免許も希望する時、実習Ⅰに続けて履修
授業の到達目標及びテーマ 到達目標： これまでに修得した教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目を、教育実践に生かせること。さらに充足すべきことは何かを明らかにすること。 テーマ： 教育に関わる基礎知識を、実習を通して教育実践に生かす訓練をする			
授業の概要 これまでに修得した教育原理や教育心理、教育行政、教育課程、教科教育法など教職に関わる全ての科目、並びに一般教養科目、教科の専門科目からなる基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす事を学ぶ。実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにする。			
学生に対する評価の方法 実習校での勤務状況、実習態度、巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の大学における報告会用資料、自己評価・相互評価をもとに総合的に評価する。			
授業計画（回数ごとの内容等） 実習直前に特に次の点を徹底させる。 「実習を受け入れてくれる学校では、後継者育成という使命感から寸暇を惜しんで指導に当たってくれるのであるから、この点を肝に銘じて実のある実習とすること」。 実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。 登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話（オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について）、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施（実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する）、指導者とのチームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導			
使用教科書 適宜プリントを配布する			
自己学習の内容等アドバイス 3年次後期から4年次前期にかけて、全員が交替で発表し研究協議してきた模擬授業での評価内容を踏まえて、分りやすく授業のし易い学習指導案を作成する。研究授業の前に何度もこの指導案にしたがって自宅でシミュレーションをしてみること。			